

# 二之宮洗橋遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

《本文編》

1994

建設省  
群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第166集

# 二之宮洗橋遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

《本 文 編》

1 9 9 4

建 設 省  
群 馬 県 教 育 委 員 会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和61年11月より昭和62年11月にかけて発掘調査をしました前橋市二之宮町所在の二之宮洗橋遺跡の報告書ですが、奈良・平安時代の勢多郡の芳賀郷の所在地を推定する上で有力な資料となる、「芳郷」と記された墨書土器3点の他「厨」「大椽」等200点以上の墨書土器が報告されており、地域の歴史を解明するための新しい資料が追加されました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之



## 例 言

1. この報告書は、一般国道17号線（上武道路）改築工事に先行して行われた二之宮洗橋遺跡の発掘調査の記録である。
2. 二之宮洗橋遺跡は、群馬県前橋市二之宮町洗橋に所在し、現状は上武道路となっている。
3. 事業主体は建設省関東地方建設局高崎工事事務所である。
4. 発掘調査および整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。
5. 調査および整理の期間と体制は次のとおりである。

（発掘調査）

試掘調査 昭和61年2月1日～昭和61年2月28日

担当 桜場一寿 岩崎泰一

第1年度調査 昭和61年11月4日～昭和62年2月25日

担当 原 雅信・金井 武・岩崎泰一

第2年度調査 昭和62年4月2日～昭和62年8月14日 および 昭和62年11月1日～昭和62年11月30日

担当 飯田陽一 関根慎二 丸山公夫

（整理事業） 平成4年10月1日～平成5年8月31日

担当 飯田陽一

市田武子 金子ミツ子 須田はつ江 高橋裕美 新平美津子 萩原由美子 羽鳥望東子

遺物写真 佐藤元彦

保存処理 関 邦一 小材浩一 樋口一之 土橋まり子

木製品実測 伊藤博子 五十嵐由美子 鈴木加津枝 高橋節子 高橋真樹子

機械実測 伊藤淳子 尾田正子 佐子昭子 筑井弘子 千代谷和子 戸神晴美

（事務局） 白石保三郎 邊見長雄 中村英一 井上唯雄 松本浩一 近藤 功 上原啓己 神保侑史

大沢秋良 田口紀雄 佐藤 勉 桜場一寿 能登 健 定方隆史 岩丸大作 齊藤俊一 国定 均

笠原秀樹 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂 高橋定義 松下 登 今井あや子

今井もと子 大澤美佐保 大島啓子 塩浦ひろみ 角田みづほ 野島のぶ江 松井美智代

6. 本書の編集は飯田が現場担当者の協議のもとに行った。

本文の執筆は第1章1, 2を田村公夫が、第2章7を関根慎二が、他を飯田が行い、第4章の分析については文頭に執筆者名を記した。

なお、墨書の釈文には高島英之 松田 猛の指導を得ている。

7. 石材の同定は飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。

8. 肥前陶磁器については、大橋康二氏（九州陶磁文化館）の御教示を受けた。

9. 調査記録、出土遺物などの資料は群馬県埋蔵文化財調査センターが保管し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理している。

# 凡 例

1. 遺構図・遺物図の縮小は以下のとおりとした。

遺構 竪穴住居 1/60 掘立柱建物 1/80

土坑 1/40 ただし13号土坑は1/30

溝 1→1/150、2→1/100、3・4・5・6・10→1/200、7・8・9→1/400

水田 1/300

遺物 1/3を基本としたが次のような例外がある。

石鏃 1/1.5

土錘 1/2 船載陶磁 1/2

流路跡の窪地出土土器のうち344~350 縄文土器のうち1 木製品 1/4

2. 遺構図中の方位は座標北を示し、本文中の方位は座標北からの計測値を示した。  
3. 竪穴住居の床面積は、1/20原図上でデジタルプランメーターによる3回測定の平均値を示した。  
4. 遺物番号は、遺構内・遺物図・写真図版とも一致させている。  
5. 報告書内で使用したテフラの略称は以下のとおりである。

浅間B軽石 → As-B

榛名二ツ岳火山灰 → FA

浅間C軽石 → As-C

6. 遺物ドット図には次のような記号を使用した。

○ 土師器杯    □ 土師器甕    ● 須恵器杯    ■ 須恵器甕    ▲ 須恵器瓶

7. 遺構図中のスクリーンパターンは次のとおりである。



攪乱



As-B



FA

8. 遺物図中のスクリーンパターンは次のとおりである。



灰釉



内黒



漆

9. 観察表と写真図版の凡例については、第2分冊中に記した。

10. 本文中に遺構小見出し(PL・表)は、第2分冊中における写真プレート番号と遺物観察表の頁を示した。



# 目 次

序	3・4・5号溝	96
例 言	6号溝	97
凡 例	7号溝	98
目 次	8号溝	99
第1章 調査の経緯	9号溝	101
1 発掘調査に至る経緯	10号溝	102
2 調査の方法	5 土 坑	103
3 調査日誌抄	1～4号土坑	103
4 整理作業の経過	5～8号土坑	104
第2章 地理的・歴史的環境	9～11号土坑	105
1 遺跡の位置と地質・地形	12号土坑	106
2 周辺の遺跡	6 水 田	107
第3章 検出した遺構と遺物	7 縄文時代の遺構と遺物	110
1 竪穴住居	13号土坑	110
1号住居跡	遺構外の出土土器	111
2号住居跡	遺構外の出土石器	112
3号住居跡	8 遺構外出土の遺物	117
4号住居跡	舶載磁器	117
5号住居跡	流路跡窪地出土の木製品	117
6号住居跡	その他の土器	117
7号住居跡	第4章 分 析	121
8号住居跡	1 プラント・オパール分析調査報告	121
9号住居跡	2 採取粘土と出土土器の蛍光X線分析	124
10号住居跡	3 出土土器胎土分析鑑定報告	125
11号住居跡	4 二之宮洗橋遺跡出土の樹種同定	130
12号住居跡	5 土器底部に付着した 漆様物質の顕微鏡観察	132
2 掘立柱建物	6 二之宮洗橋遺跡の花粉・珪藻分析	134
1号掘立柱建物	第5章 成果と問題点	139
2号掘立柱建物	報告書抄録	
3号掘立柱建物		
3 流路跡の窪地		
窪地出土の墨書土器		
4 溝		
1号溝		
2号溝		

# 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	1	第 59 図	窪地出土遺物(18)	65
第 2 図	区およびグリッド配置図	2	第 60 図	窪地出土遺物(19)	66
第 3 図	遺跡付近の地質図	5	第 61 図	窪地出土遺物(20)	67
第 4 図	遺跡付近の地形と隣接遺跡	6	第 62 図	窪地出土遺物(21)	68
第 5 図	周辺の遺跡	7	第 63 図	窪地出土遺物(22)	69
第 6 図	主な遺構の位置図	11	第 64 図	窪地出土遺物(23)	70
第 7 図	1号住居および出土遺物	12	第 65 図	窪地出土遺物(24)	71
第 8 図	2号住居	13	第 66 図	墨書土器出土状態分布図	72
第 9 図	2号住居およびカマド遺物出土状態	14	第 67 図	窪地出土の墨書土器(1)	73
第 10 図	2号住居出土遺物(1)	14	第 68 図	窪地出土の墨書土器(2)	74
第 11 図	2号住居出土遺物(2)	15	第 69 図	窪地出土の墨書土器(3)	75
第 12 図	2号住居出土遺物(3)	16	第 70 図	窪地出土の墨書土器(4)	76
第 13 図	3号住居および遺物出土状態	17	第 71 図	窪地出土の墨書土器(5)	77
第 14 図	3号住居出土遺物(1)	18	第 72 図	窪地出土の墨書土器(6)	78
第 15 図	3号住居出土遺物(2)	19	第 73 図	窪地出土の墨書土器(7)	79
第 16 図	4号住居および遺物出土状態	20	第 74 図	窪地出土の墨書土器(8)	80
第 17 図	4号住居カマドおよび出土遺物	21	第 75 図	窪地出土の墨書土器(9)	81
第 18 図	5号住居および出土遺物	22	第 76 図	窪地出土の墨書土器(10)	82
第 19 図	6号住居	23	第 77 図	窪地出土の墨書土器(11)	83
第 20 図	6号住居遺物出土状態およびカマド	24	第 78 図	窪地出土の墨書土器(12)	84
第 21 図	6号住居出土遺物	25	第 79 図	溝配置図	85
第 22 図	7号住居および遺物出土状態	26	第 80 図	1号溝	86
第 23 図	7号住居カマドおよび出土遺物	27	第 81 図	1号溝遺物出土状態	87
第 24 図	8号住居および遺物出土状態	28	第 82 図	1号溝出土遺物(1)	88
第 25 図	8号住居カマドおよび出土遺物	29	第 83 図	1号溝出土遺物(2)	89
第 26 図	9号住居およびカマドと遺物出土状態	30	第 84 図	1号溝出土遺物(3)	90
第 27 図	9号住居出土遺物	31	第 85 図	1号溝出土遺物(4)	91
第 28 図	10号住居	32	第 86 図	1号溝出土遺物(5)	92
第 29 図	10号住居遺物出土状態およびカマド	33	第 87 図	1号溝出土遺物(6)	93
第 30 図	10号住居出土遺物(1)	34	第 88 図	2号溝	94
第 31 図	10号住居出土遺物(2)	35	第 89 図	2号溝出土遺物	95
第 32 図	11号住居および遺物出土状態	36	第 90 図	3・4・5号溝	96
第 33 図	11号住居出土遺物	37	第 91 図	6号溝および出土遺物	97
第 34 図	12号住居およびカマドと出土遺物	38	第 92 図	7号溝	98
第 35 図	掘立柱建物配置図	39	第 93 図	8号溝	99
第 36 図	1号掘立柱建物	41	第 94 図	8号溝出土遺物	100
第 37 図	2号掘立柱建物	42	第 95 図	9号溝および出土遺物	101
第 38 図	3号掘立柱建物	43	第 96 図	10号溝および出土遺物	102
第 39 図	窪地全体図	44	第 97 図	1・2・3・4号土坑	103
第 40 図	窪地・区分割図	45	第 98 図	5・6・7・8号土坑	104
第 41 図	窪地遺物出土状態分布図	46	第 99 図	9・10・11号土坑	105
第 42 図	窪地出土遺物(1)	48	第100図	12号土坑および出土遺物	106
第 43 図	窪地出土遺物(2)	49	第101図	C区第1面水田(右)と第2面水田(左)	108
第 44 図	窪地出土遺物(3)	50	第102図	A区水田および出土遺物	109
第 45 図	窪地出土遺物(4)	51	第103図	13号土坑と伏甕	110
第 46 図	窪地出土遺物(5)	52	第104図	遺構外出土の縄文土器	111
第 47 図	窪地出土遺物(6)	53	第105図	遺構外出土の石器(1)	113
第 48 図	窪地出土遺物(7)	54	第106図	遺構外出土の石器(2)	114
第 49 図	窪地出土遺物(8)	55	第107図	遺構外出土の石器(3)	115
第 50 図	窪地出土遺物(9)	56	第108図	遺構外出土の石器(4)	116
第 51 図	窪地出土遺物(10)	57	第109図	遺構外出土の舶載磁器	117
第 52 図	窪地出土遺物(11)	58	第110図	遺構外出土の木製品(1)	118
第 53 図	窪地出土遺物(12)	59	第111図	遺構外出土の木製品(2)	119
第 54 図	窪地出土遺物(13)	60	第112図	遺構外出土遺物	120
第 55 図	窪地出土遺物(14)	61	第113図	イネのブランド・オパールの検出状況	123
第 56 図	窪地出土遺物(15)	62	第114図	おもな植物の推定生産量と変遷	123
第 57 図	窪地出土遺物(16)	63	第115図	Rb-SrとK-Caの対比グラフ	124
第 58 図	窪地出土遺物(17)	64	第116図	県内の主要窯跡	124

第117図	Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム	127
第118図	Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム	127
第119図	二之宮洗橋遺跡のQt-P1相関グラフ	128
第120図	周辺遺跡のQt-P1相関グラフ	128
第121図	X線回折試験チャート	129
第122図	旧流路跡の窪地出土漆付着の土器	133

第123図	北壁における模式柱状図	134
第124図	分析試料採取地点土層模式柱状図	134
第125図	二之宮洗橋遺跡試料珪藻化石群衆変遷図	135
第126図	(B地点)洪水層下泥炭質シルト層における 花粉化石群衆の変遷	137

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	9	第6表	分析結果	124
第2表	出土石器一覧	112	第7表	胎土性状表	128
第3表	各植物の換算係数	121	第8表	出土木製品とその樹種	131
第4表	稲粍の生産総量と稲作期間の推定	122	第9表	墨書土器一覧	137
第5表	プラント・オパール分析結果	122			

## 分冊目次 (遺物観察表)

### 凡 例

1号住居出土遺物	1	12号土坑出土遺物	51
2号住居出土遺物	1	水田出土遺物	51
3号住居出土遺物	2	舶載磁器	51
4号住居出土遺物	4	遺構外出土木製品	52
5号住居出土遺物	4	遺構外出土遺物	53
6号住居出土遺物	4	旧流路跡の窪地出土漆付着の土器	54
7号住居出土遺物	5	住居出土こも編石	54
8号住居出土遺物	6		
9号住居出土遺物	6		
10号住居出土遺物	7		
11号住居出土遺物	8		
12号住居出土遺物	9		
窪地出土遺物	10		
窪地出土の墨書土器	29		
1号溝出土遺物	44		
2号溝出土遺物	48		
6号溝出土遺物	49		
8号溝出土遺物	49		
9号溝出土遺物	50		
10号溝出土遺物	50		

## 分冊写真図版目次

- PL-1 二之宮洗橋遺跡出土の特殊遺物
- PL-2 漆様物質の顕微鏡写真
- PL-3 遺跡付近の航空写真
- PL-4 1号住居
- PL-5 2・3号住居
- PL-6 4号住居
- PL-7 5・6号住居
- PL-8 7・8号住居
- PL-9 9・10号住居
- PL-10 11・12号住居
- PL-11 掘立柱建物
- PL-12 1～4号土坑
- PL-13 4～7号土坑
- PL-14 8～12号土坑
- PL-15 流路跡の窪地(1)
- PL-16 流路跡の窪地(2)・溝
- PL-17 溝
- PL-18 C区の水田
- PL-19 A区の水田
- PL-20 竪穴住居出土遺物(2～8号住居)
- PL-21 竪穴住居出土遺物(9～12号住居)
- PL-22 流路跡の窪地出土遺物(1～72)
- PL-23 流路跡の窪地出土遺物(73～156)
- PL-24 流路跡の窪地出土遺物(164～254)
- PL-25 流路跡の窪地出土遺物(255～335)
- PL-26 流路跡の窪地出土遺物(312～352)
- PL-27 窪地出土の墨書土器(1～24)
- PL-28 窪地出土の墨書土器(25～57)
- PL-29 窪地出土の墨書土器(58～83)
- PL-30 窪地出土の墨書土器(84～121)
- PL-31 窪地出土の墨書土器(122～151)
- PL-32 窪地出土の墨書土器(150～194)
- PL-33 窪地出土の墨書土器(193～237)
- PL-34 1号溝出土遺物
- PL-35 溝・土坑出土遺物および縄文時代遺物
- PL-36 縄文時代の石器
- PL-37 木製品および遺構外出土遺物
- PL-38 こも編石および漆付着の土器
- PL-39 胎土分析電子顕微鏡写真(1)
- PL-40 胎土分析電子顕微鏡写真(2)
- PL-41 木製品の樹種顕微鏡写真(1)
- PL-42 木製品の樹種顕微鏡写真(2)
- PL-43 珪藻化石・花粉化石顕微鏡写真

# 第1章 調査の経緯

## 1 発掘調査に至る経緯

昭和46年、建設省は一般国道17号の交通混雑緩和のため、大規模バイパス（上武道路）建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川を架橋して群馬県新田郡尾島町に入り、新田町・佐波郡境町・東村・赤堀町・伊勢崎市・前橋市・勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号に接続する全長41.4kmの道路である。

この計画を受けて、群馬県教育委員会は、計画路線における文化財保護と開発諸事情との調整をはかる資料を作成する目的で、埋蔵文化財の分布調査を行った。調査は昭和45年5月から昭和46年3月にかけて実施され、遺跡総数472カ所を確認した。

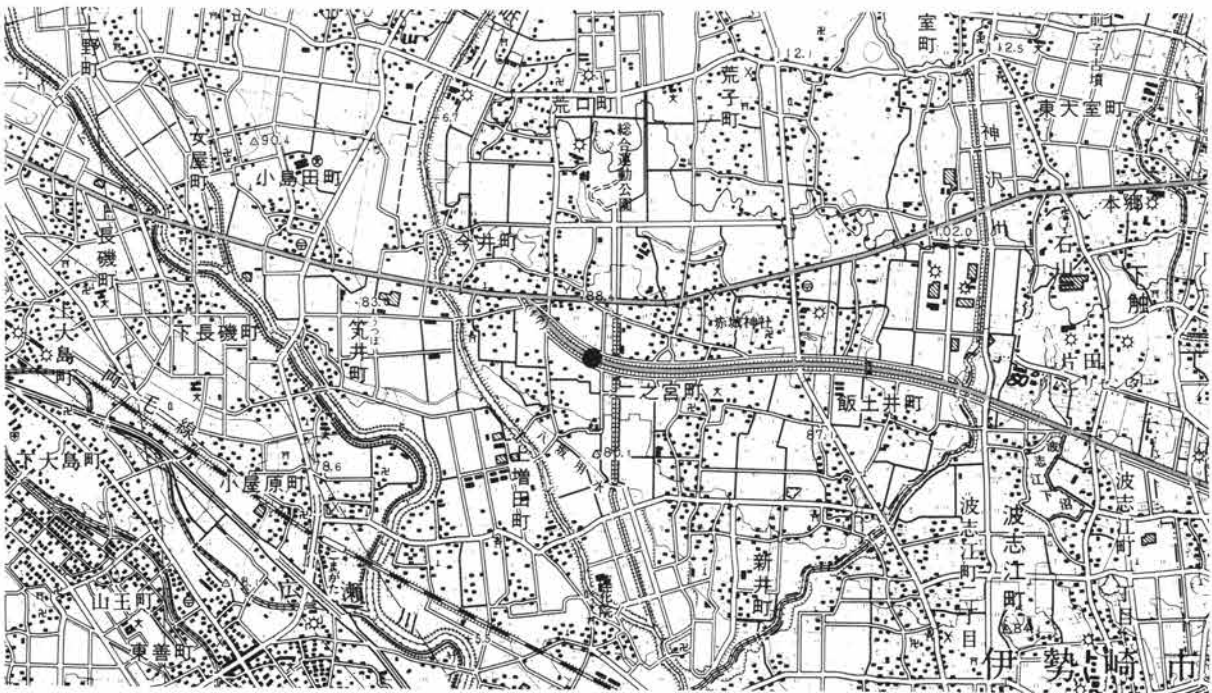
その後、県教育委員会と建設省の間で協議が行われ昭和46年11月に、正式路線決定が行われた。

昭和47年度、尾島町から前橋市二之宮町の国道50号間の遺跡について協議が行われ、昭和48年4月1日付で、「一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締

結された。この協定書に基づいて調査体制、用地問題などの準備期間を経て、昭和49年1月より1班体制で調査は開始された。昭和53年、増大する埋蔵文化財の調査に対し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立され、県内各地の調査の他、上武道路に伴う調査が引き継がれた。

発掘調査は、工事の進捗に対応して、昭和59年から3班、60年から4班体制で取り組み、昭和63年度までに国道50号までの調査を完了した。

宮川右岸にある二之宮洗橋遺跡は昭和61年2月に行われた試掘調査の結果、砂壤土性微高地と微高地を挟む沖積地に区分されることが分かった。また、沖積地ではAs-B層が確認され、水田遺構の可能性と、その下位の砂壤土中にある黒色土の堆積に対する調査の必要性が示唆された。砂壤土性微高地上位では、奈良・平安時代の竪穴住居跡と、時代不明の溝等が確認された。本遺跡周辺には、荒砥島原・荒砥大日塚・荒砥洗橋及び二之宮千足・二之宮谷地遺



第1図 遺跡位置図

跡等、多くの農耕集落、生産跡が確認されており、

本遺跡に於いても同様の遺跡の存在が期待された。

## 2 調査の方法

遺跡の調査対象範囲は、宮川右岸から二之宮谷地遺跡間の約250m、総面積11,000m<sup>2</sup>で、上武道路センター杭No.1039～No.1052間である。この部分は桑畑や水田に利用されていたが、上武道路建設用地となつてからは未耕地となっていた。しかし、上武道路が東西に横切ることから現農道が数本存在し、調査中も生活道として常に確保される必要性があった。調査においては、この現道を利用し、西側よりA区～C区に分割し設定した。

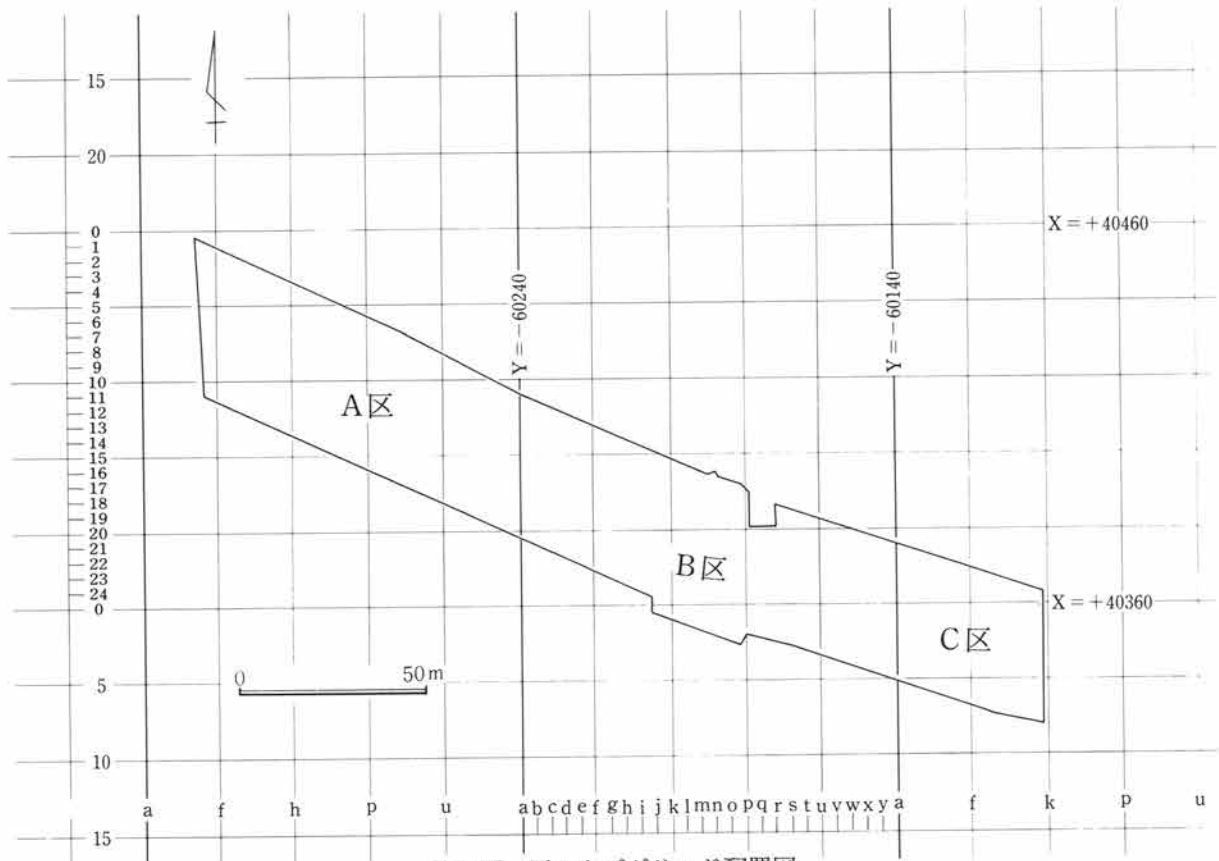
調査は、昭和61年11月より工事の進捗に合わせ橋脚建設予定地部分約1,700m<sup>2</sup>（センター杭No.1039～No.1042）から実施し、途中二度の中断をはさんで昭和62年11月に全面調査を終了した。

グリッドの設定は国家座標を基準に、4×4mを1単位とした。グリッドの名称は南から北に0・1～24、西から東にa・b～yとし、4×4mの西北

の交点を読んだ。またaからyの大きな1単位を西からA・B・C区とした

遺構図面は1/20を基本に平板測量を中心に、一部1/10のやり方測量を加えながら作成した。遺構写真は現場担当者が撮影し、カメラは6×9版モノクロを中心に、35mmモノクロ、同リバーサルの3種類を使用した。遺構の全景撮影に際してはローリングタワーの他に、試行のためモニタリング撮影機を使用した。

調査に当たっては、調査区A・C区の沖積地では、表土下、As-B層上まで重機で除去し、水田跡調査を行った。C区沖積地では、2面の水田が確認された。また水田西側の溝や旧流路の埋没土層中より多くの土器・石器・木器片が出土した。特に旧流路からは「芳郷」「郷」「舟人」等の墨書土器が230点以上出土した。A区沖積地では、大きな区割りの溝とAs



第2図 区およびグリッド配置図

一B層下の水田が確認された。これは西側に接している二之宮谷地遺跡の水田につながるものであった。

調査区中央の微高地は、耕作や土地改良事業等によりAs—B層下まで削平されていたが、竪穴住居や掘立柱建物・土坑等を調査した。竪穴住居は十字方向に2本のセクションベルトを残して土層断面実測することを基本としたが、遺存状態の悪い遺構につ

### 3 調査日誌抄

昭和61年11月 道路ボックス工事部分や河川橋脚部分を先行調査するという方針から、二之宮谷地遺跡の調査班がC区東側の宮川右岸の調査に着手した。重機により、宮川縁から西側75mの農道までの間の表土除去を行ない、沖積地部分の水田と微高地部分の集落および溝を確認した。このうち東側半分にあたる水田と溝の発掘調査を行った。また、測量用の基本杭を打設した。

12月 2面の水田と5条の溝の調査を終了し、旧宮川の流路範囲を確認し、未調査の集落部分をシートで覆い、撤収した。水田部分についてはプラントオパール分析を実施した。

昭和62年4月 新班体制による調査を開始した。昨年度に表土剥ぎの終わっている宮川の西側から遺構の再確認を、現場作業開始の15日より行った。同時に重機により、農道と二之宮谷地遺跡の間をAs—B層上面まで掘削した。3号住居までの掘り下げに着手した。また、流路跡のAs—B層下に水田跡の存在を想定し、セクションベルトを残して掘り下げた。

5月 4～11号住居の調査に着手した。また、A区西側の水田の検出を終えた。20日、高所作業車による遺跡全景写真撮影を行った。流路跡からは水田の痕跡は確認できず、多量の土器が出土した。

6月 1日(月曜)朝、流路跡の遺物約10点が盗難にあっていることに気付き、写真撮影と遺物取り上げを急ぐ。11号住居までの調査がほぼ終了した。17日、高所作業車による遺跡全景写真撮影を行った。溝の調査を開始し、月末よりA区水田下の遺構検出のた

いては省略したものもある。

この後、砂礫層下の黒色土上面まで重機により10×10mの調査坑を掘削し、黒色土層の精査の結果、縄文土器の小破片が出土したが、遺構は確認できなかった。また、泥炭にはC<sup>14</sup>分析を加えた。

旧流路跡の窪地は農道部分が未調査であったため、農閑期の11月に仮設道路を確保し、調査を行い全調査を終了した。

めグリッド調査を開始した。

7月 水田下の黒色土内から縄文土器・石器が出土するが、遺構は確認できなかった。12号住居の掘り下げおよび、土坑、ピット群の調査を開始した。ピット群と流路跡を掘り広げるため、調査区南側の農道の切り回しを行い、2棟の掘立柱建物を確認した。また、基盤層の調査のため、重機による深掘りを実施し、柱状図作成、粘土サンプル採取、泥炭層のC<sup>14</sup>分析を行った。

8月 屋外の調査を終了し、重機による埋め戻しを行い、その間、遺物洗浄・注記等の作業を行った。また、「芳郷」墨書の出土を新聞発表した。10日、次の調査地である新田郡尾島町内の上武道路計画路線内へ移動を開始した。

11月 農道下を調査するため、尾島町内で調査中の班の一部を割いて、1週間道路を閉鎖して発掘を行い、路線内のほぼ全域の流路部分と3号住居の未調査部分の追加調査を行い、現場作業の総てを終了した。

## 第1章 調査の経緯

### 4 整理作業の経過

二之宮洗橋遺跡の整理作業は、平成4年10月より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団において着手した。遺物は流路跡の窪地出土の土師器・須恵器が大半であり、特に墨書土器の量が多く、これらの接合作業に4カ月以上を費やした。

遺物の接合・復元から実測・トレース、版組および遺構図の修正からトレース、版組まで整理作業の大半を整理班のメンバーが行ったが、遺物写真撮影を写真室が、土器実測の一部をスリースペース班が、木製品の実測とプレパラート作成を木器班が分担した。また遺構トレースの一部を業者発注した。また、陶磁器の分類に大西雅広、墨書土器の釈文に高島英之の協力を得ている。

木製品の樹種鑑定、石器類の材質鑑定、土器と採取粘土の蛍光X線分析と胎土分析、土器に付着した漆の分析、近世国産陶磁器の鑑定を整理作業期間中に依頼・委託している。

実測遺物総点数は956点、写真撮影遺物カット数は817点で、このうち報告書に掲載した実測遺物数は942点、写真撮影遺物626個体である。

平成5年9月で基本的な作業を終了し、原稿執筆・写真や図面等のチェックの後、12月8日の入札を経て印刷・刊行に至った。

整理作業の過程で掘立柱建物を新たに1棟発見し、3号掘立柱建物とした。また縄文時代の土坑を13号土坑とした。6～10号溝は、調査時にA区1～5号溝としたものを、遺跡内で通し番号にするため改称したものである。

なお、本遺跡の発掘調査から整理作業終了までの間に、下記のような資料紹介や論考が加えられている。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『年報5』

同 1987『年報6』

同 1988『年報7』

早田 勉・能登 健

1990「赤城山麓の地形発達史・新世の地形変化」

『群馬県史 通史編 1』

井上唯雄・松田 猛

1992「出土文字資料と文字の普及」

『群馬県下出土の墨書・刻書土器集成 2』



## 第2章 地理的・歴史的環境

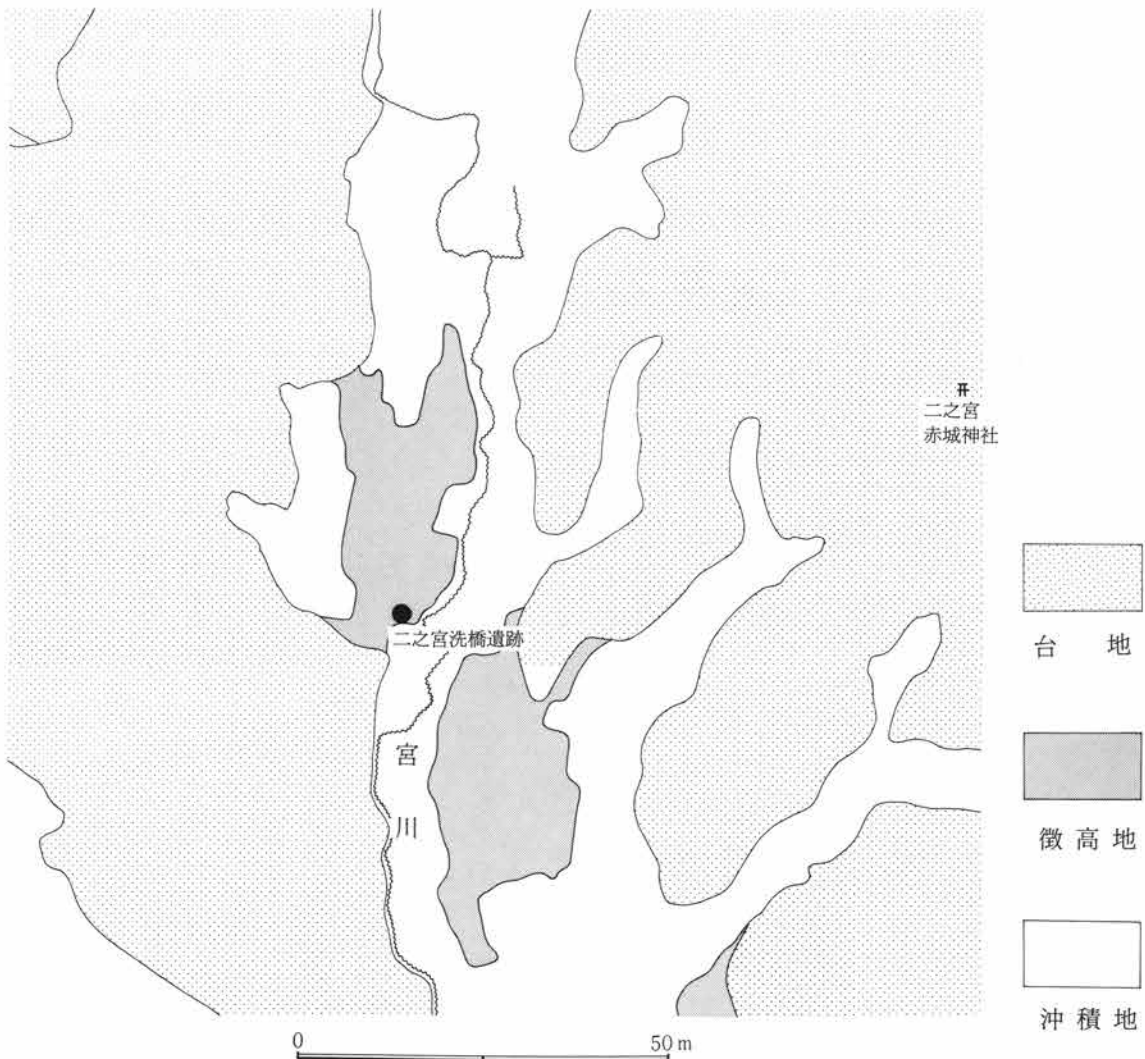
### 1 遺跡の位置と地質・地形

二之宮洗橋遺跡は群馬県前橋市二之宮町字洗橋に所在する。前橋市街地の東方約8km、JR両毛線駒形駅の北東約2kmの位置にある。

遺跡付近は、複合成層火山赤城山の広大な裾野の南麓端部にあたる。赤城山山体を源とする荒砥川、粕川が南流し、途中、数多くの小河川と合流しながら旧利根川筋の桃ノ木川に流下しているが、宮川は荒砥川に合流する延長約5kmの旧利根川第三次支川である。調査地域は河川改修後の宮川右岸にあるが、旧流路が調査範囲に含まれている。

発掘調査時に、A区・B区で1箇所ずつ重機により、地表面からの深さ約3.8mの深掘り地質調査を行った。結果についてはすでに公表されているが、要点を転載すると下記のとおりである。

『荒砥川の支流である宮川の下流部には、古期火山麓扇状地を切った谷の中には河岸段丘が発達している。段丘面と現河床との比高は数mである。二之宮洗橋遺跡では、この段丘の地質横断面が見られた。段丘堆積物は、完新世に堆積した砂と泥炭の互層を切ってきた谷を埋積する砂礫層で、その厚さは約



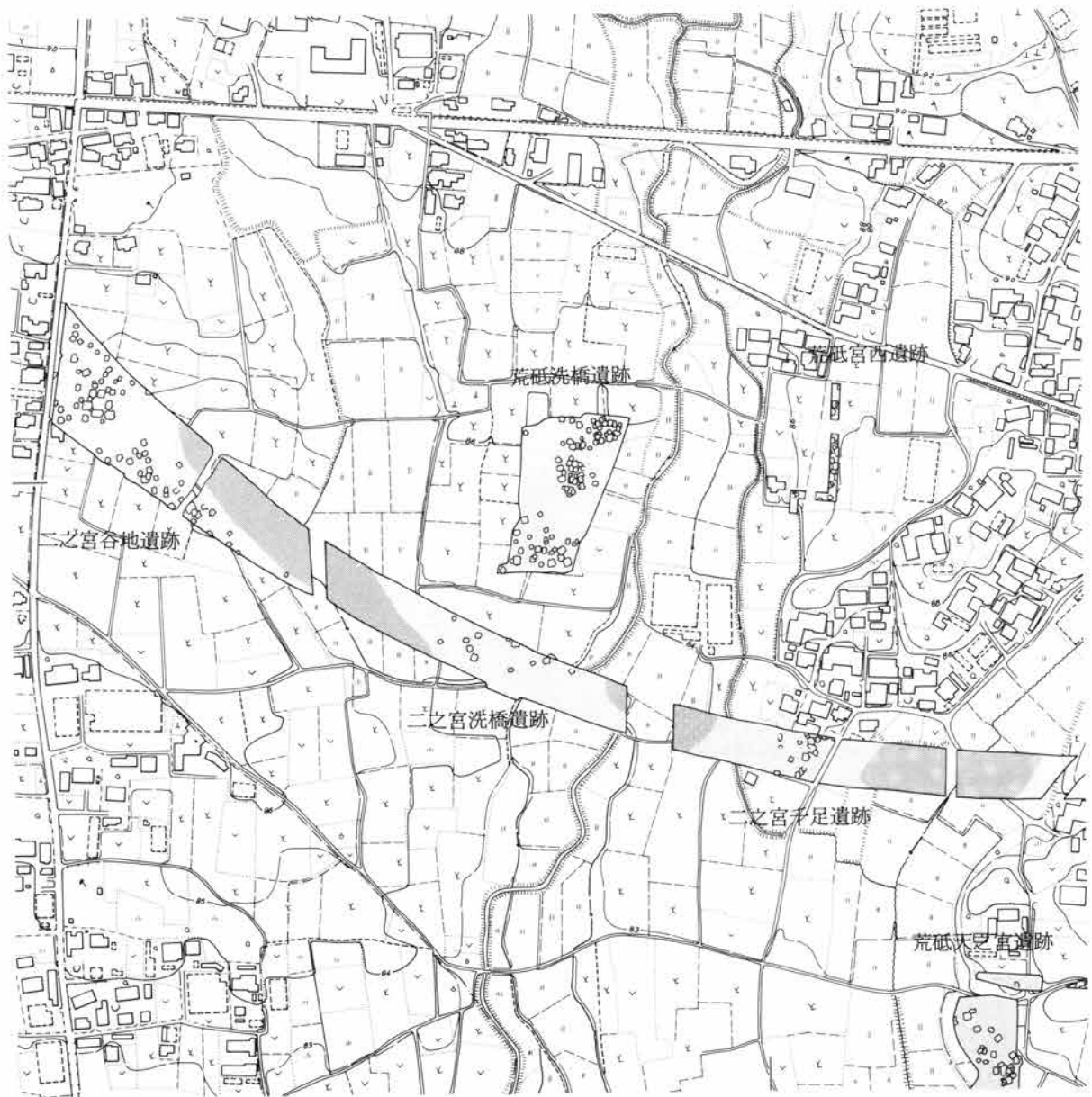
第3図 遺跡付近の地質図

1.7mである。泥炭層の中からは石器が検出されている。泥炭層の最下部からは6170±150YBP、最上部からは5890±110YBPのC<sup>14</sup>年代が得られている。

一方、段丘堆積物の上位の腐植質黒色粘土層中からは、縄文時代後期初頭の堀之内式土器（約3000年前）が発見された。その上部には、浅間C軽石が堆積している。以上のようなことから宮川では、約6000年前以降堆積作用が卓越して河床が上昇し、それまでに存在していた谷が埋積されたといえる。その後、ある時期から約3000年前までの間には侵食作用が卓

越し、河床は再び低下傾向に変わって現在の谷が形成されたことが推定される。このような縄文時代にできたと考えられる段丘は、赤城山南麓の多くの河川沿いに認められる。』

この段丘面は微高地と低地部分とに別れている。二之宮洗橋遺跡や北側に隣接している荒砥洗橋遺跡では、段丘内の微高地上に古墳時代後期以降の集落がある。遺跡の東西にある狭い低地部分はAs—B層下で水田が調査されている。古墳時代以降、地形によって土地利用は異なっている。



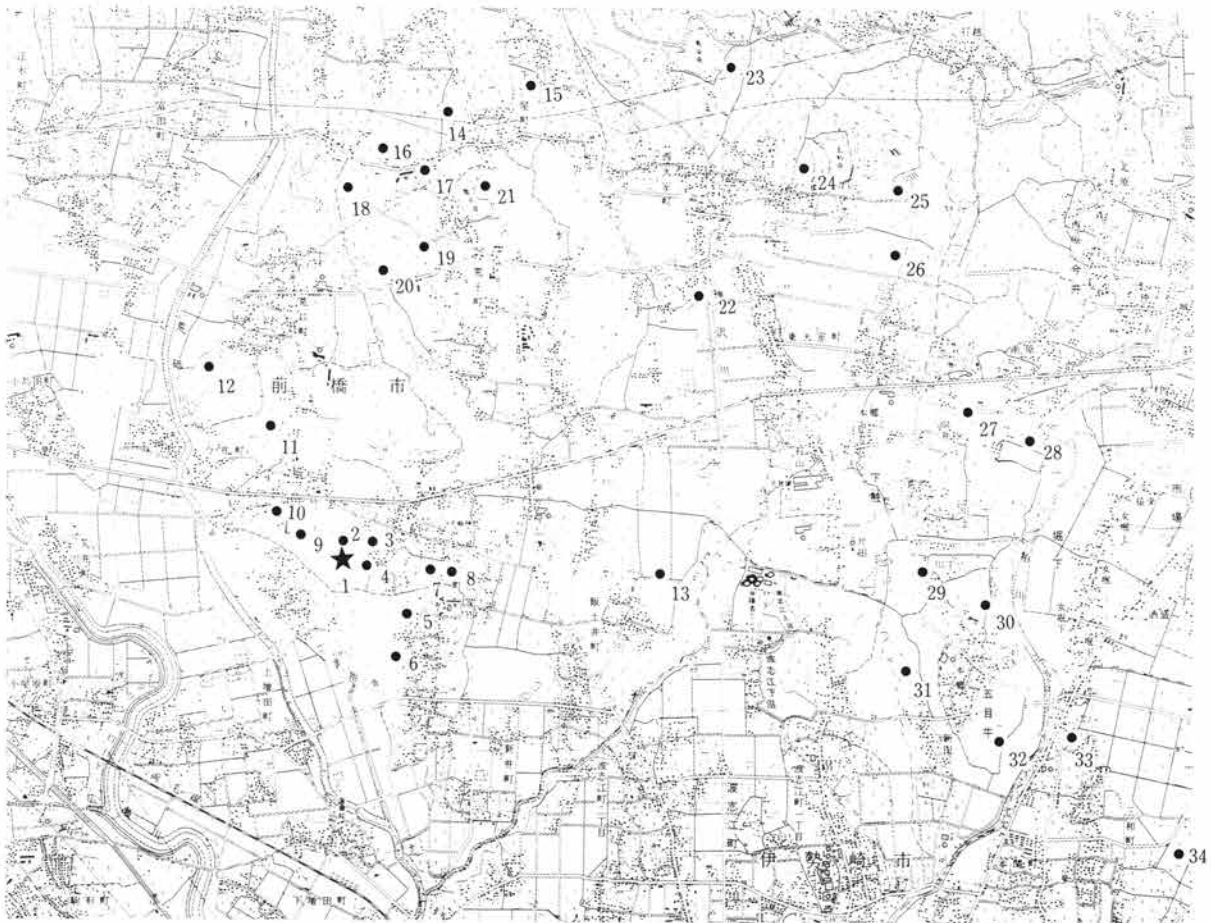
第4図 遺跡付近の地形と隣接遺跡

## 2 周辺の遺跡

二之宮地区の含まれる旧荒砥村(昭和32年まで)・旧城南村(昭和42年まで)付近は上武道路建設の他にも、荒砥南部・北部ほ場整備事業に伴う発掘調査、工業団地・住宅団地造成による発掘調査など資料の蓄積のきわめて多い地域である。また旧石器時代から近世に至るまで、遺跡の種類・量ともに豊富である。特に古墳時代の墳墓や豪族居館といわれる濠の巡る居住域や、平安末の用水路「女堀」など、全国

的にも注目される遺跡も多い。

この地域に近年増大している水田や島の調査例を加えれば、遺跡の位置図は黒く塗り潰されたようなものができるであろう。また、これらの調査報告書ではそれぞれ周辺遺跡に対する分析が行われてきた。ここでは、これまでの分析との重複を避け、本遺跡の特徴である墨書土器の出土遺跡と関連遺跡を中心に地図上にプロットしてみた。



- |             |            |             |             |                  |           |
|-------------|------------|-------------|-------------|------------------|-----------|
| 1 二之宮洗橋遺跡   | 2 荒砥洗橋遺跡   | 3 荒砥宮西遺跡    | 4 二之宮千足遺跡   | 5 荒砥天之宮遺跡        | 6 荒砥島原遺跡  |
| 7 二之宮宮下西遺跡  | 8 二之宮宮下東遺跡 | 9 二之宮谷地遺跡   | 10 今井道上道下遺跡 | 11 荒砥北三木堂遺跡      | 12 荒砥北原遺跡 |
| 13 飯土井二本松遺跡 | 14 上西原遺跡   | 15 中畑遺跡     | 16 前山II遺跡   | 17 荒子小校庭II・III遺跡 |           |
| 18 柳久保遺跡    | 19 中鶴谷遺跡   | 20 柳久保水田址   | 21 提東遺跡     | 22 荒砥東原遺跡        | 23 富田遺跡群  |
| 24 内堀遺跡群    | 25 梅木遺跡    | 26 荒砥上川久保遺跡 | 27 下触向井遺跡   | 28 今井南原遺跡        | 29 鷹の巣遺跡  |
| 30 北通遺跡     | 31 堀下八幡遺跡  | 32 五目牛東遺跡   | 33 上植木光仙房遺跡 | 34 書上本山遺跡        |           |

第5図 周辺の遺跡

## 第2章 地理的・歴史的環境

墨書土器は奈良・平安時代の集落調査では一般的な出土遺物と言えるほど、近年の出土例は多くなっている。墨書土器出土遺跡のドットは発掘調査地点の粗密や古代の集落のドットを示すものになってしまいが、文字の種類や集中する傾向から遺跡の性格を多少は反映するものであろう。

第5図に示すとおり、2ヶ所の墨書集中箇所が看取できよう。1つは勢多郡衙またはそれに付随する寺院と想定されている上西原遺跡とその周辺の遺跡である。上西原遺跡では、9世紀代と思われる溝で画された方形区画と、区画内から礎石を持つ基壇建物が調査されており、瓦、瓦塔等が出土している。墨書土器は約100点あるが「寺」「経」などの文字とともに、本遺跡と同じ「大掾」の文字の出土が目される。周辺の遺跡からも重要な発見が相次いでおり、墨書土器では柳久保遺跡・中鶴谷遺跡などで50点を超える出土がある。また、前山II遺跡の銅印や柳久保水田跡の墨絵土器が著名であるが、現在調査中の遺跡や報告書作成中の遺跡も多く、ドットの数は年を追って増加している。

二之宮洗橋遺跡周辺はそれにも増してドットの数は多い。この付近は荒砥南部ほ場整備事業と上武道路の建設の伴う発掘調査が集中した地区である。そのため同一の遺跡とするべきものに複数の遺跡名が付けられている場合もあるが、現在整理事業が進められている二之宮宮下西遺跡、荒砥宮川遺跡などから、墨書例が追加されるはずだ。この地域は推定東山道駅路の群馬駅と佐井駅間にあり通過ルートにあたる。二之宮洗橋遺跡の西方0.5kmにある今井道上道下遺跡では二重の堀で画された8世紀代の方形区画の一部が調査されている。全容は明らかでないが、上西原遺跡に匹敵するような区画となる可能性もある。また、二之宮谷地遺跡では瓦塔が出土しており、二之宮洗橋遺跡を分析する上で、この方形区画の性格はキーポイントとなるものであろう。

伊勢崎市の上植木光仙房遺跡では、住居跡を中心に200点を越える墨書土器が出土している。本遺跡のように一地点からまとめて出土するのではなく、60軒

以上の住居から分散して出土したのが特徴的である。遺跡の性格を示すような積文はない。風字硯の出土が目され、瓦の出土も多い。ここは群馬県を代表する白鳳寺院である上植木廃寺の北方約1.3kmの位置にある。付近の調査例は少ないが、瓦塔の出土した書上本山遺跡の南東に隣接している上武道路線内の書上上原之城遺跡からも墨書土器とともに円面硯の出土が報告されている。寺院や官衙に関連した特殊な遺構が発見され、墨書土器の多量に出土する地域となるはずである。

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	墨書点数	積文	備考	文献No
2	荒砥洗橋遺跡	23	大上, 蓮吉, 大口, 丈部, 大郷長	烙印	3
3	荒砥宮西遺跡	2	長, 真		3
4	二之宮千足遺跡	30	大, 正, 下		4
5	荒砥天の宮遺跡	13	平, 太		5
6	荒砥島原遺跡	2			6
7	二之宮宮下西遺跡			瓦塔	整理作業中
8	二之宮宮下東遺跡				7
9	二之宮谷地遺跡			瓦塔	8
10	今井道上道下遺跡			方形区画	整理作業中
11	荒砥北三木堂遺跡	11	寺, 當, 木		9
12	荒砥北原遺跡	6			10
13	飯土井二本松遺跡	18	人, ⊗, 八, 中, 矢西, 一矢西		11
14	上西原遺跡	99	大, ⊗, 寺, 上寺, 大象, 経, 田, 部, 泰, 見, 守, 小林, 北井, 臣, 仲, 福聖	方形区画 基壇建物 瓦塔 刻書に東ほか	12
15	中畑遺跡	2	泉, 伴		13
16	前山II遺跡	8	車, 東院, 火, 川		14
17	荒子小校庭II・III遺跡	18	院, 千, 車, 前, 酒	銅印	15
18	柳久保遺跡	56	泰, 田, 田部, 大田, 下田, 若公, 乙公, 乙呂, 徳, 目, 木, 二		16
19	中鶴谷遺跡	54	田部仁, 田部, 田阿, 存, 泰, 田, 山部, 田郎, 木, 大田, 下田, 上田		17
20	柳久保水田址	9		墨画土器	18
21	提東遺跡	12	平, 閃, 企		19
22	荒砥東原遺跡	1			20
23	富田遺跡群				21
24	内堀遺跡群	1	土		22
25	梅木遺跡	1			23
26	荒砥上川久保遺跡	17	井, 吳	陶硯	24
27	下触向井遺跡	13	中, 升, 中臣		25
28	今井南原遺跡	4			26
29	鷹の巣遺跡	8	中, 川部		27
30	北通遺跡	4	大門		27
31	堀下八幡遺跡	24	十王, 井, 南, 仲, 至		28
32	五目牛東遺跡		太, 日, 赤		29
33	上植木光仙房遺跡	212	田, 知, 主, 須, 了, 人, 夫, 子, 大, 刀, 真, 依, 己, 吉, 阿, △, 大田, 車, 子前, 酒師, 前, 至, 太, 林, 有, 枉, 人人, 千, 願山	風字硯 瓦の出土多い	30
34	書上本山遺跡	1	丸	瓦塔	31

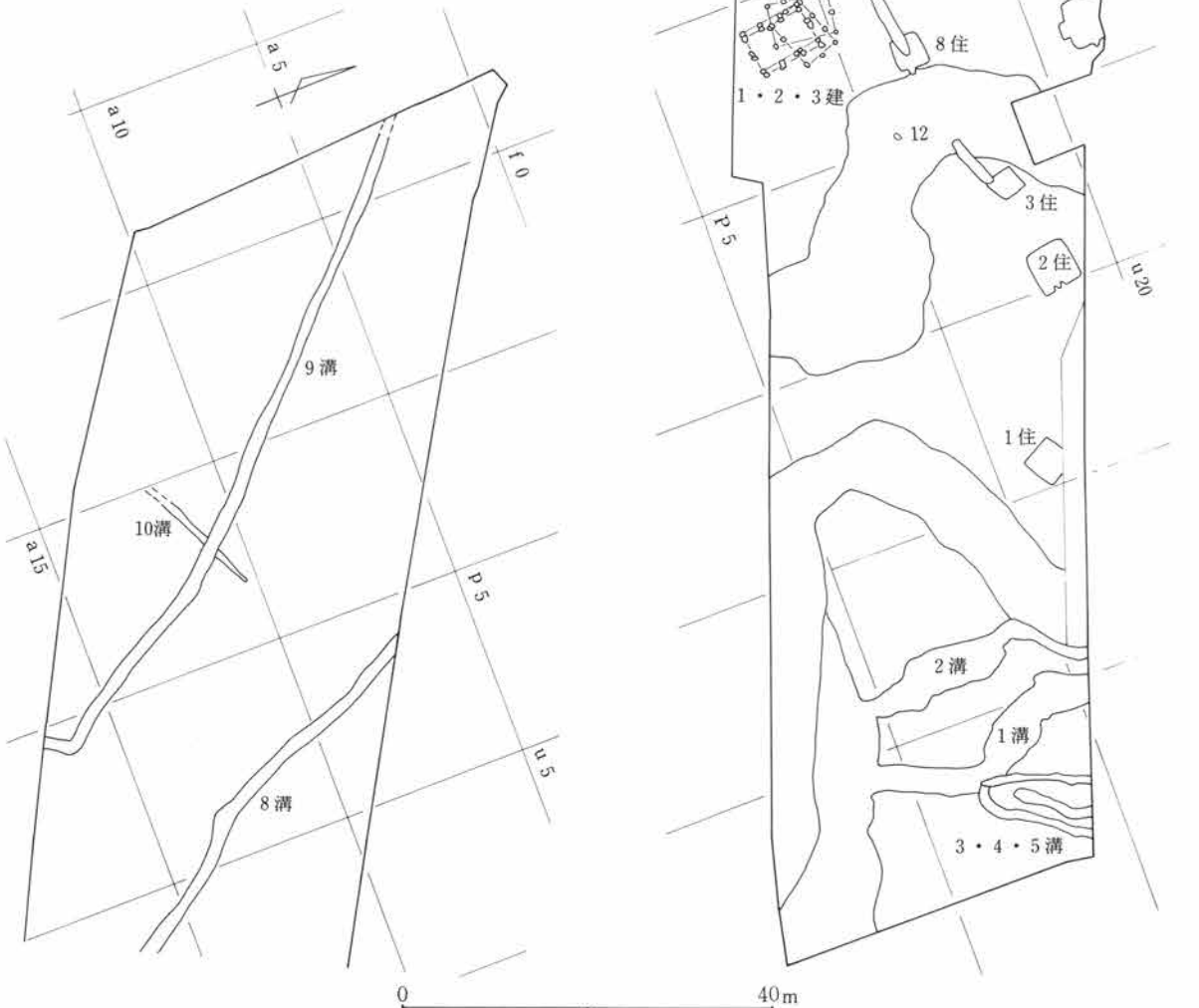
## 参考文献

文献No	報 告 書 名	発行年	発 行
1	『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(1)』	1989	群馬県教育委員会
2	『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2)』	1992	群馬県教育委員会
3	『荒砥洗橋遺跡 荒砥宮西遺跡』	1991	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
4	『二之宮千足遺跡』	1992	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
5	『荒砥天之宮遺跡』	1988	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
6	『荒砥島原遺跡』	1984	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	『二之宮宮下東遺跡』	1994予	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
8	『二之宮谷地遺跡』	1994予	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
9	『荒砥北三木堂遺跡』	1991	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
10	『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』	1986	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
11	『飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡』	1991	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
12	『上西原・向原・谷津』	1986	群馬県教育委員会
13	『丸山・北田下・中畑・村主・中山B』	1988	群馬県教育委員会
14	『前山II遺跡』	1990	前橋市教育委員会
15	『荒子小学校校庭II・III遺跡』	1990	前橋市教育委員会
16	『柳久保遺跡群VI』	1988	前橋市教育委員会
17	『鶴谷遺跡群』	1981	前橋市教育委員会
18	『柳久保遺跡群I』	1985	群馬県教育委員会
19	『提東遺跡』	1985	群馬県教育委員会
20	『荒砥東原遺跡』	1979	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
21	『富田遺跡群・西大室遺跡群』	1979	前橋市教育委員会
22	『内堀遺跡群III』	1990	前橋市教育委員会
23	『梅木遺跡』	1986	前橋市教育委員会
24	『荒砥上川久保遺跡』	1982	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
25	『下触向井遺跡発掘調査概報』	1980	赤堀村教育委員会
26	『今井南原遺跡発掘調査概報』	1981	赤堀村教育委員会
27	『洞山古墳群及び北通鷹巣遺跡発掘調査概報』	1983	赤堀村教育委員会
28	『堀下八幡遺跡』	1990	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
29	『五日牛東遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査概報』	1980	赤堀村教育委員会
30	『上植木光仙房遺跡』	1989	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他
31	『書上本山遺跡 波志江六反田遺跡 波志江天神山遺跡』	1992	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団他

### 第3章 検出した遺構と遺物

本遺跡では竪穴住居12軒、掘立柱建物3棟、土坑13基、溝10条をはじめ、As—B層下の水田や多数の土器の廃棄された流路跡の窪地等を調査した。

主な遺構はB区の微高地に集中している。地山は灰黄褐色のシルト質土であった。竪穴住居は流路跡の窪地を挟んだ両側に点在している。古墳時代後半を中心に平安時代まで続くが、重複は1例もない。カマドのないものや床面の明確でないものが多く、全てを住居とは扱えないようだ。掘立柱建物はすべて一カ所で重複している。水田はA区西側とC区東隅にあり、それぞれ隣接する二之宮谷地遺跡、二之宮千足遺跡と連続している。



第6図 主な遺構の位置図

1 竪穴住居

1号住居跡(PL-4 表1)

**位置** B区x・y-23・24グリッド。調査区西側で他の住居から離れて検出した。遺構の北東コーナー付近は試掘トレンチで壊されている。

**重複** 時期不明(近世以降か)の、平面楕円形の小土坑2基が本住居を切っている。

**主軸方向** N-55°-E

**床面積** 残存11.89m<sup>2</sup> 推定12.95m<sup>2</sup>

**平面形態** 一辺3.7mのほぼ正方形と思われる。東側は残存していなかったものを、発掘調査中に、地山の色の違いより推定した。

**壁** 最も残存状態の良い西壁で18cmの高さがある。東壁は全く残っていない。

**カマド** 当初、北壁下の焼土分布域をカマドと想定してセクションを残して調査したが、住居に後行す

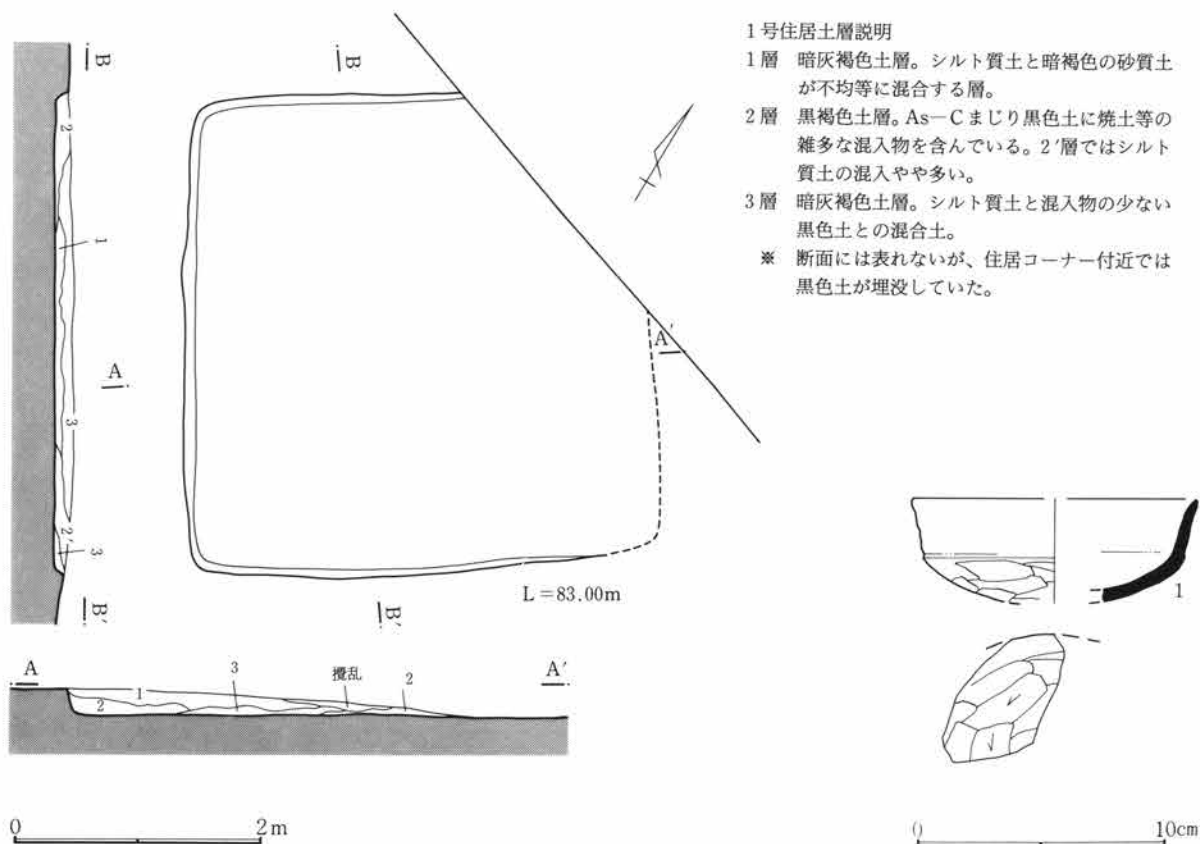
る土坑であった。東側も残っていないため、カマドの有無は不明である。焼土や掘り方などの痕跡も見付かっていない。

**内部施設** 柱穴・壁溝・貯蔵穴など、いっさい検出できなかった。

**床** シルト質地山を直接床としていて、掘り方は認められない。凹凸は少なく平坦であるが、踏み固めの弱い不明瞭な床であった。

**遺物の出土状態** 遺物の出土量は少なく、総数20片の古墳時代の土師器小破片のみで、いずれも床面から5~15cm浮いた状態で検出した。図示した杯は、南コーナー付近の床上6cmでの出土である。

**時期** 7世紀か。遺物が少ないうえ、埋没土内の出土であるため、確定することはできないが、8世紀以降の遺物の出土はない。



第7図 1号住居および出土遺物



2号住居跡(PL-5・20 表1)

位置 B区t-21・22グリッド

主軸方向 N-85°-E 床面積 19.18㎡

平面形態 東西4.7m、南北4.4~4.8mの、南辺の歪んだ不整な方形を呈している。

壁 30~40cmの高さで残存している。

カマド 東壁下南寄りにある。燃烧部は住居内にあり、床面より15cm低く皿底状に掘り下げてある。煙道部の立ち上りには高さ10cmの段が生じていて、先端は壁外に40cm張り出している。

内部施設 柱穴は4主柱穴を検出した。住居プランの歪みに沿って、東側に開いている。壁溝は深さ3

~8cmで東壁北側を除いて全周している。

床 平坦で比較的明瞭な床であった。

掘り方 住居全体に10~20cmの掘り方があり、地山と同じシルト質の土で埋め戻している。

遺物の出土状態 住居内全域から多量の土器を出土している。厚手の土師器甕の破片が8割を占め、その他の破片は約200片ある。埋没土内の礫の出土も多い。図示した遺物はカマド周辺の出土が中心で、13・14・15が北脇、5・16が南脇、9・12がカマド内の出土である。10は南壁直下で、20は北壁直下で、11・19は南東コーナー付近でまとまって出土した。須恵器1・2は床面から30cm以上高い埋没土内の出土で

ある。図示した以外にも、土師丸胴甕底部2個体分がある。

時期 7世紀。

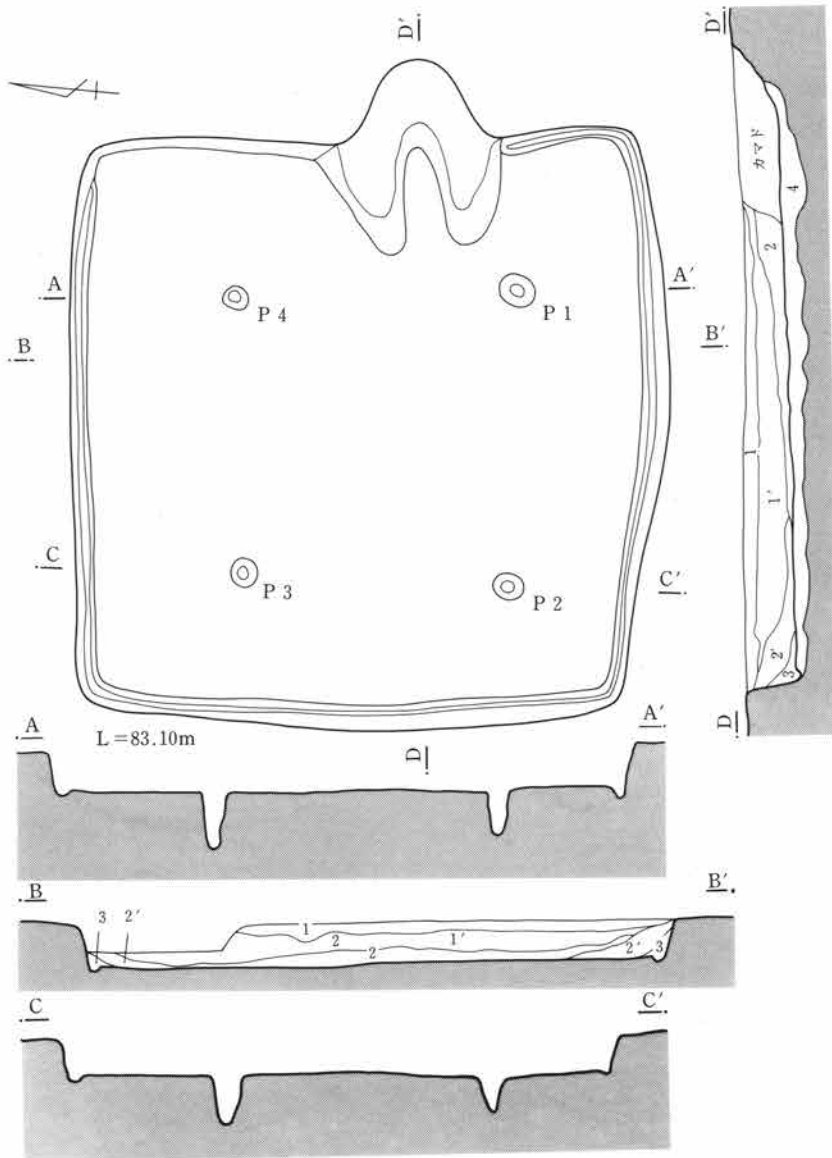
2号住居土層説明

- 1層 暗灰褐色土層。As-Cまじり黒色土とシルト質土との混土層。1'層は黒色土の割合が高い。
- 2層 黒褐色土層。粘性のやや強い黒褐色土中に焼土、パミス等を霜降状に含んでいる。2'層は混入物の量が多い。
- 3層 暗褐色土層。2層土とシルト質土との混合土。
- 4層 暗(灰)褐色土層。貼り床土。ブロック状のシルト質土中に黒褐色土が混入している。

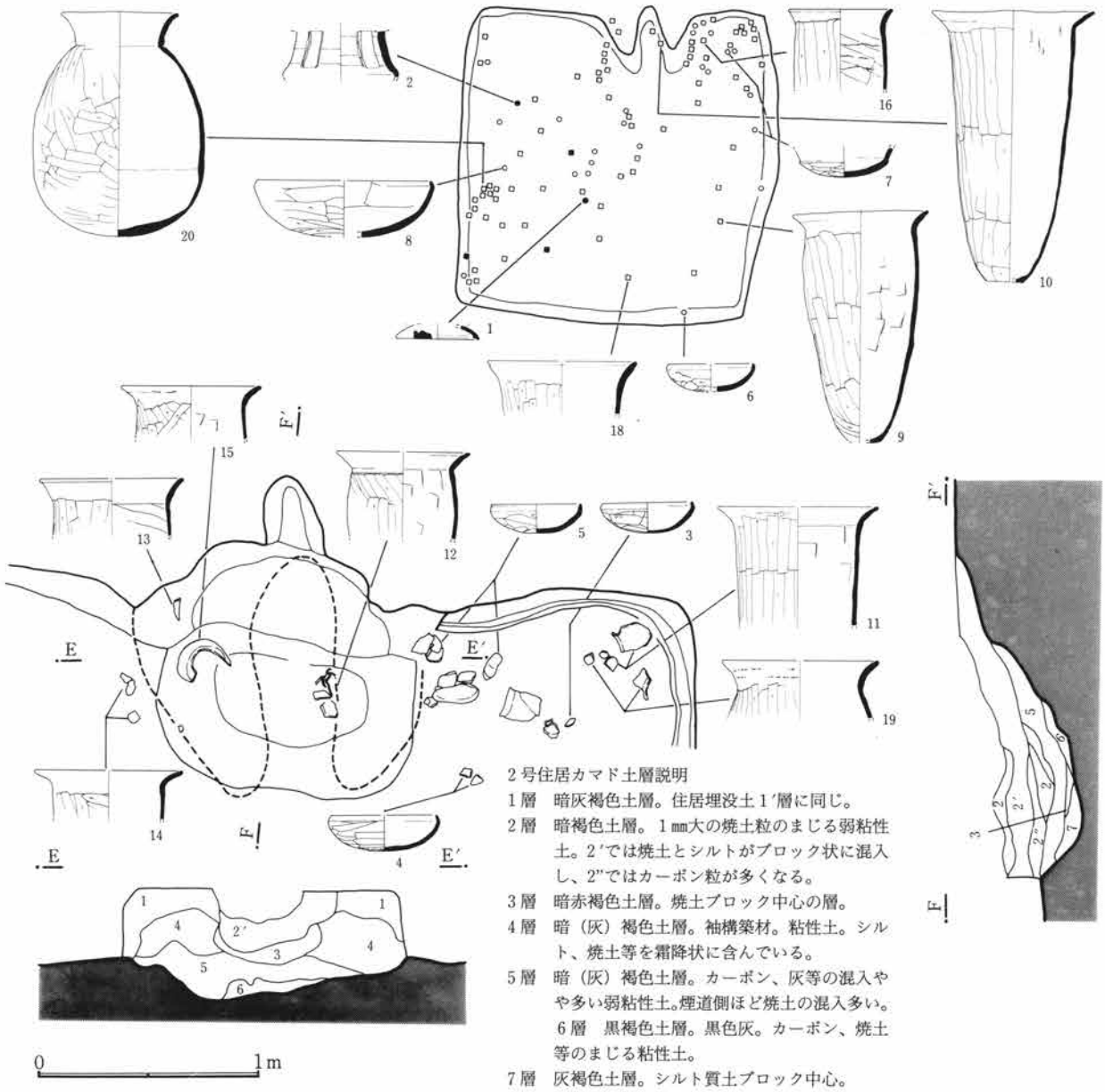
ピット計測表 (cm)

	上面径	深さ
P 1	28×23	34
P 2	23×21	27
P 3	22×19	37
P 4	19×17	46

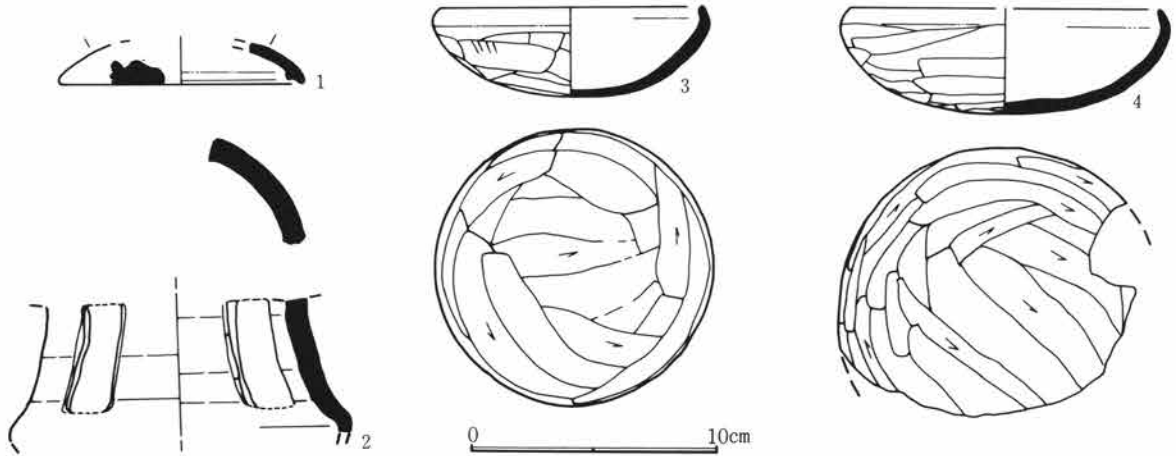
0 2m



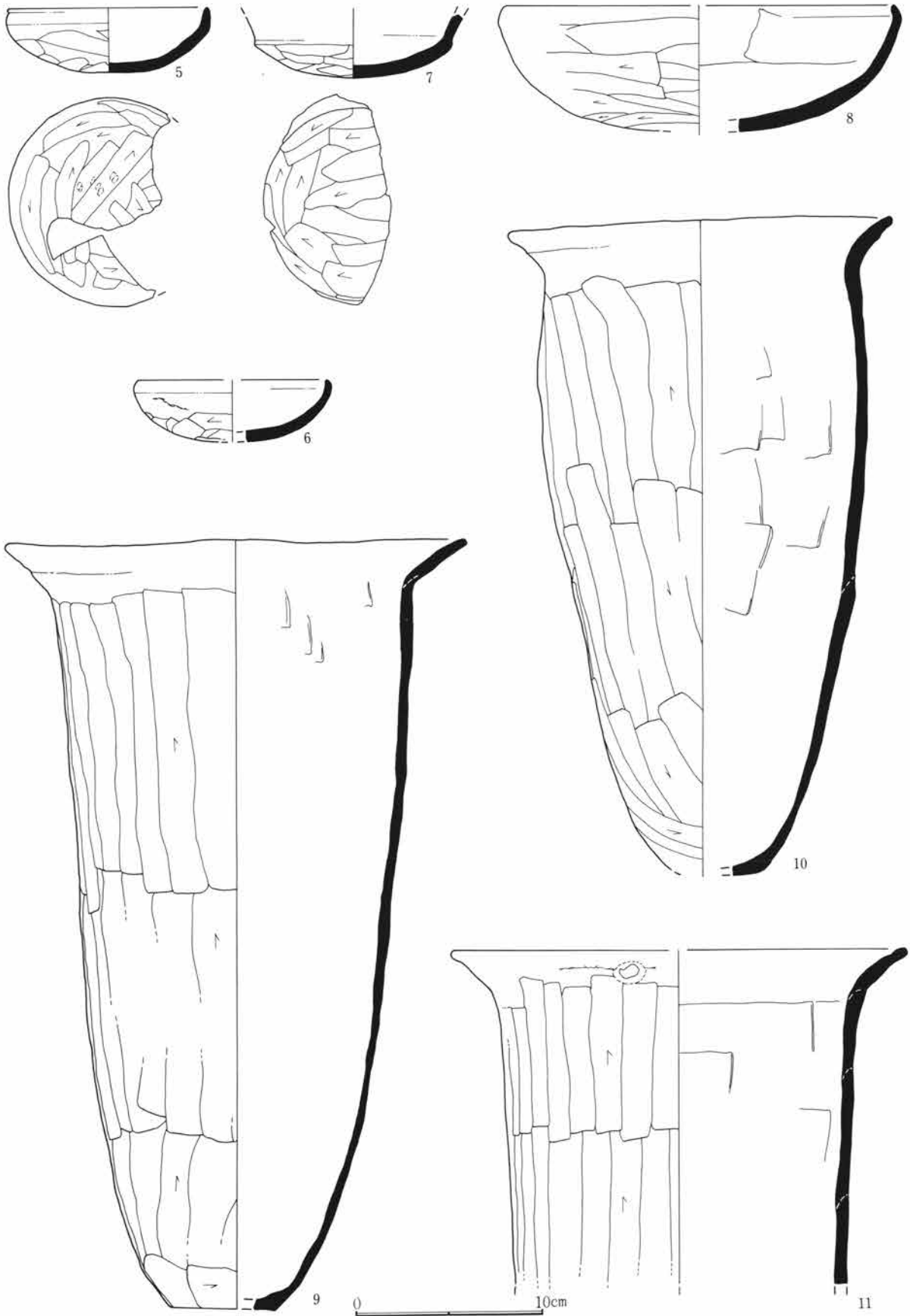
第8図 2号住居



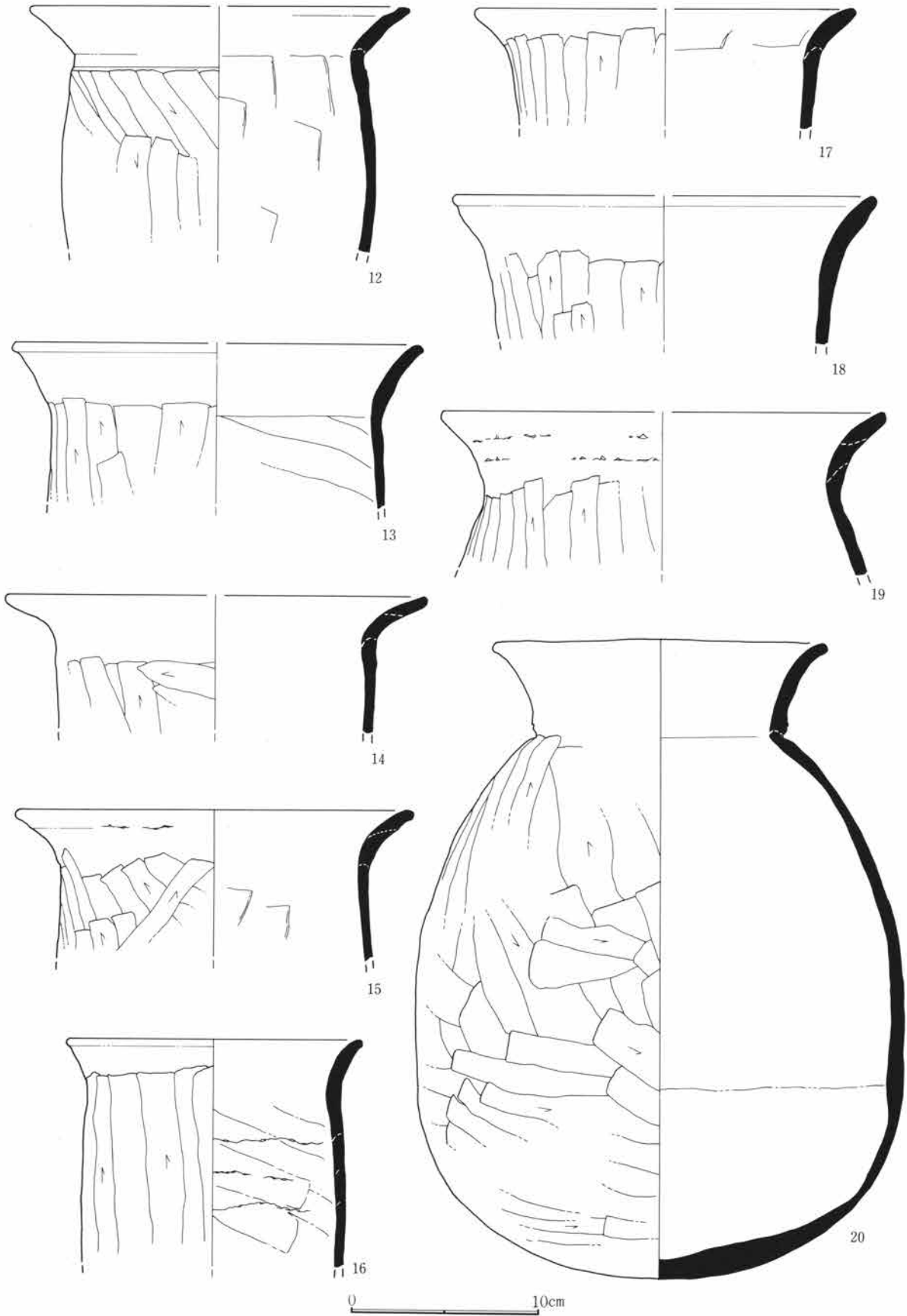
第9図 2号住居およびカマド遺物出土状態



第10図 2号住居出土遺物(1)



第11图 2号住居出土遺物(2)



第12図 2号住居出土遺物(3)

3号住居跡(PL-5・20 表2)

**位置** B区9-21・22グリッド。B区を南北に切断している農道に切られていた住居で、本調査終了後の農閑期11月に追加調査して図上で復元した。竖穴住居とするには問題の残る遺構である。

**主軸方向** N-16°-W **床面積** 15.4m<sup>2</sup>

**平面形態** 南辺と北辺が2.7m、東辺と西辺が2.9~3.1mの不整な長方形を呈すと思われる。

**壁** 20~30cmの高さで残存している。

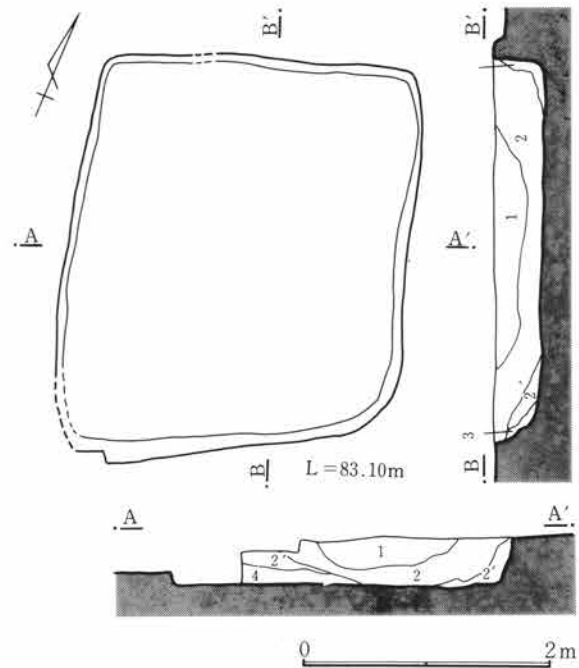
**カマド** 確認できなかった。掘り方や焼土等の痕跡も確認できず、甕類が壁際に集中するようなこともない。当初からカマドのない遺構と思われる。

**内部施設** 柱穴・壁溝・貯蔵穴等、いっさい検出できなかった。

**床** シルト質の地山をそのまま床面としている。細かな凹凸が多く、壁側に向かって若干レベルが下がる傾向がある。

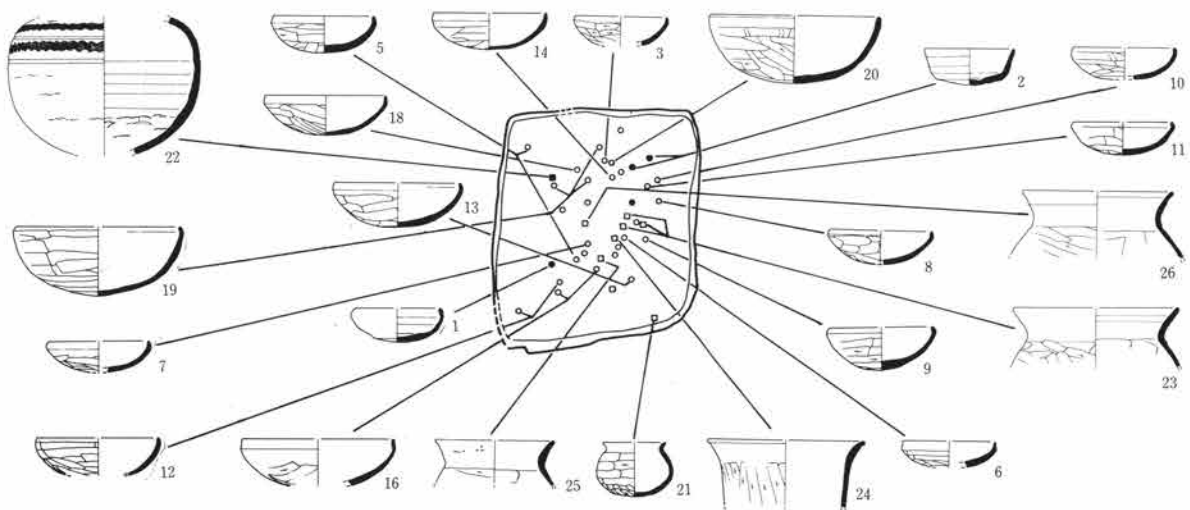
**遺物の出土状態** 小型の住居であるが遺物量は多く、総数で450点になる。特に杯類の出土が顕著で半数以上が土師器の杯であり、図示した以外にも杯類の大破片の出土は多い。1層と2層上層内での出土が目立ち、壁際の遺物が少ないことが特徴的である。2・12・24が床面より10cm浮いた状態での出土で、他の土器はそれ以上高いレベルからの出土であった。

**時期** 7世紀代の遺物であるが、遺構に直接伴うものかは不明である。



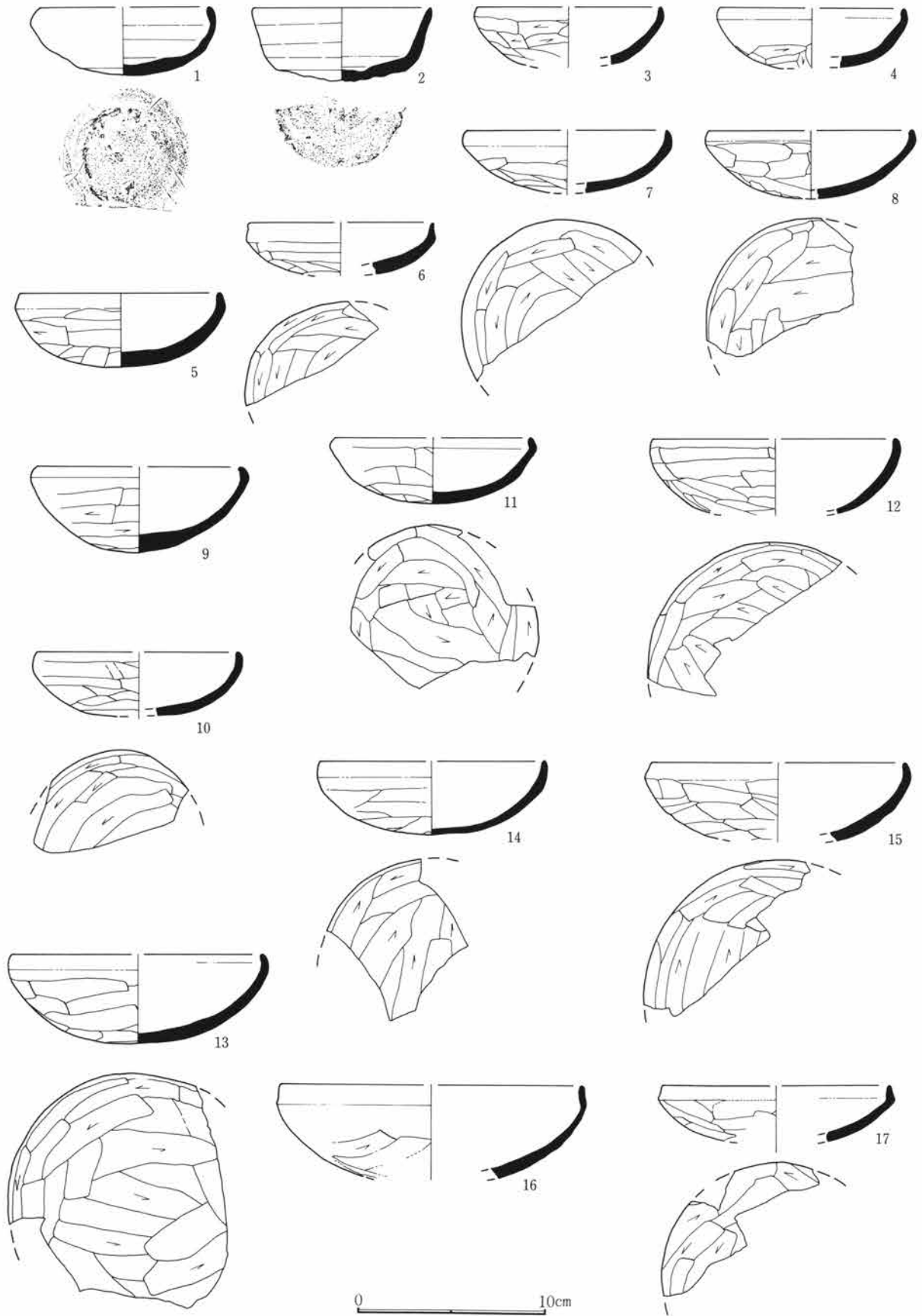
3号住居土層説明

- 1層 灰褐色土層。しまりの強いシルト質土層。礫の混入多い。攪乱層の可能性もある。
- 2層 暗褐色土層。粘性の強い粒子の細かな層。2'はシルト質土の混入がやや多い。
- 3層 暗灰褐色土層。壁崩落のシルト質土中心。
- 4層 暗褐色土層。混入物の少ない、粘性の強い土層。

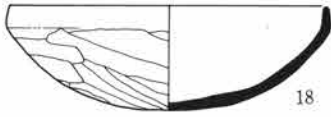


第13図 3号住居および遺物出土状態

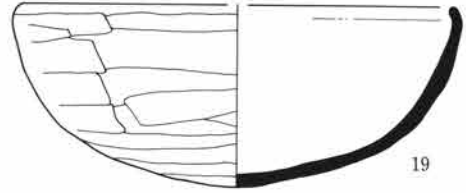
第3章 検出した遺構と遺物



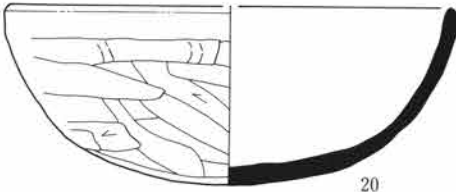
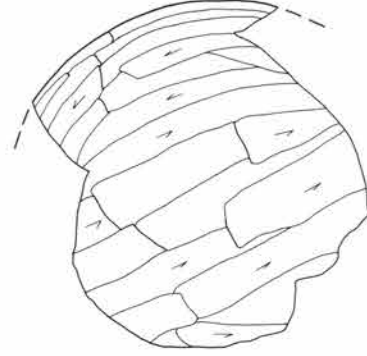
第14図 3号住居出土遺物(1)



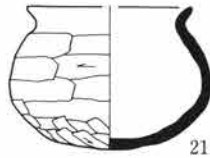
18



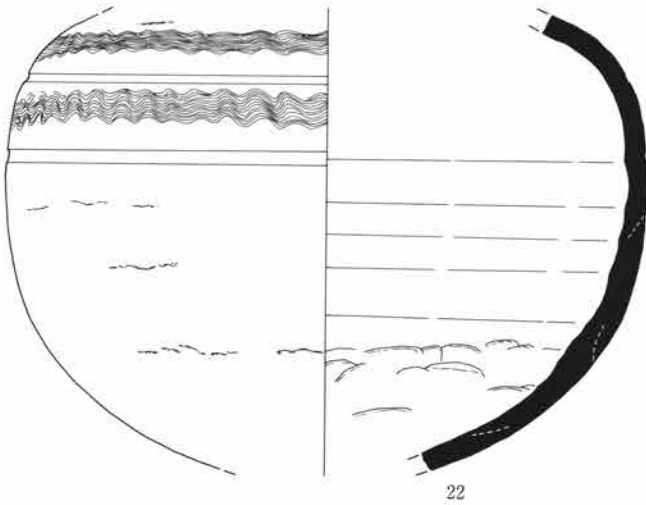
19



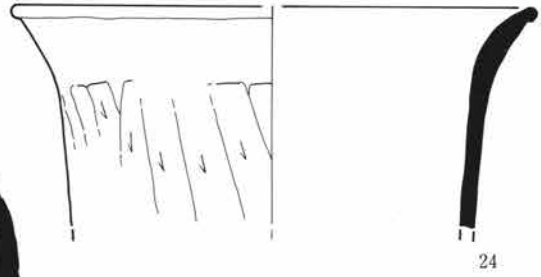
20



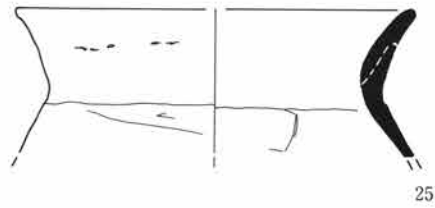
21



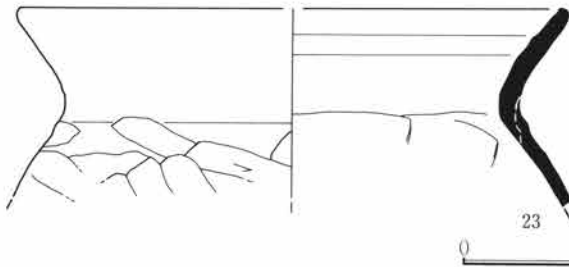
22



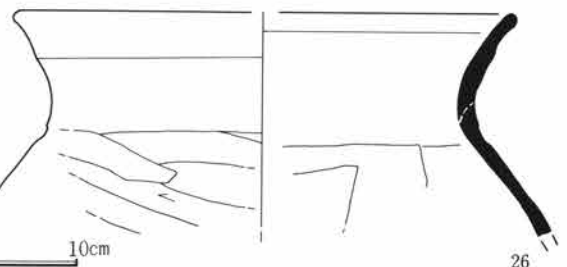
24



25



23



26

0 10cm

第15図 3号住居出土遺物(2)

第3章 検出した遺構と遺物

4号住居跡(PL-6・20 表4)

位置 B区f-19グリッド。

主軸方向 N-64°-E 床面積 14.89㎡

平面形態 北辺が短い台形を呈している。

壁 地山の高い北側で25cm、南側で16~20cmの高さで残存している。

カマド 東壁下南寄りにある。燃焼部は住居内にあり、約20cmの掘り方があるが、火床は床面とあまり変わらないレベルにある。煙道の張り出しは短く、15cmである。南袖前面の床直上に、焼土・カーボンまじりの黒色灰が見られた。

内部施設 壁溝は深さ2~5cmで北壁下では途切れ

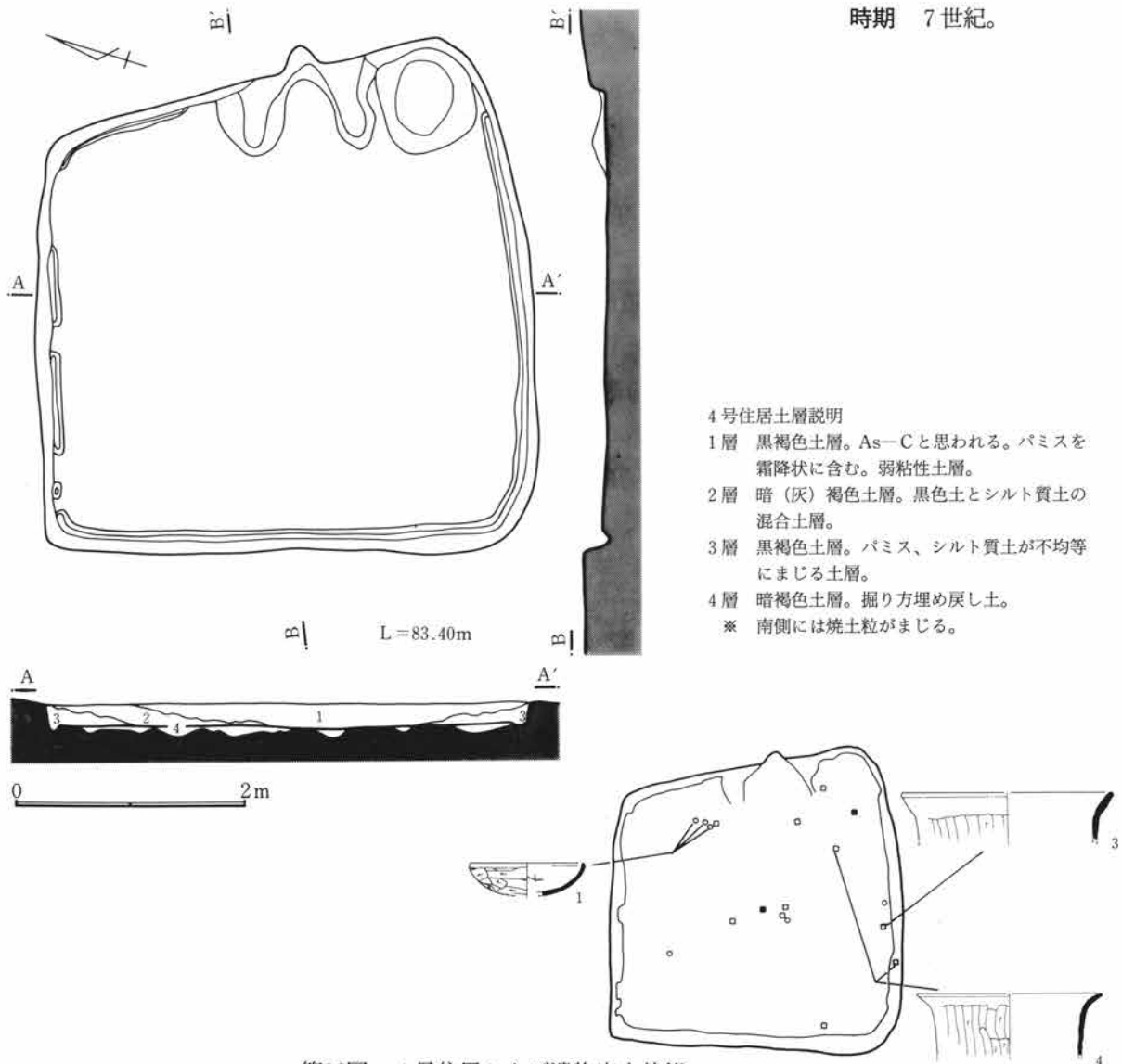
る部分が多い。南東コーナー直下の竈脇で通常貯蔵穴のある位置から、床からの深さが3cmのきわめて不明瞭な窪みを検出した。

床 比較的平坦な、分かり易い床であった。

掘り方 床下には深さ4~8cmの不明瞭な凹凸がある。住居掘削時の窪みを埋め、平坦な床面を作る程度の貼り床であろう。

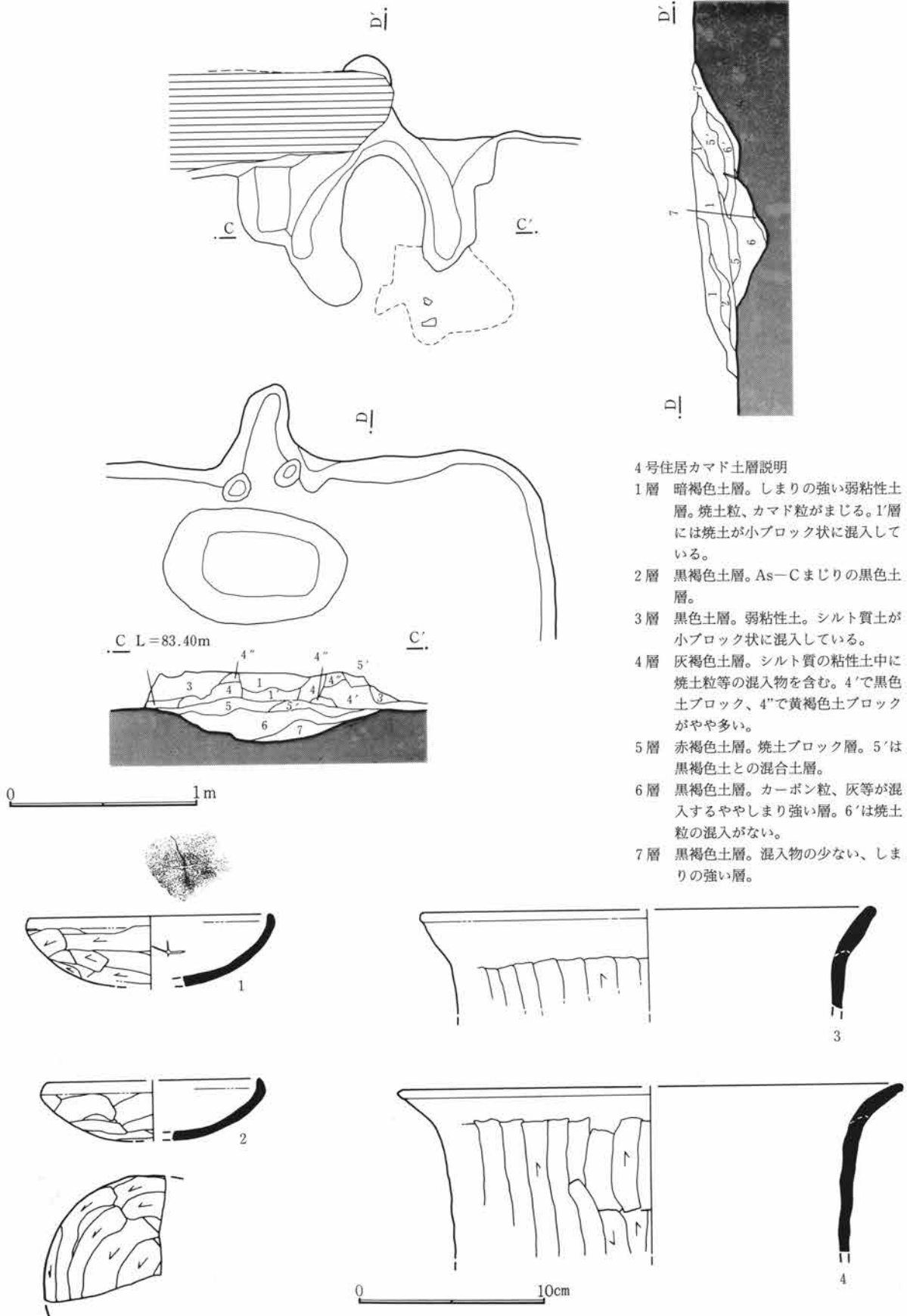
遺物の出土状態 遺物量は少なく土師甕を中心に総数60点ほどである。カマド周辺での出土は少ない。図示した遺物はいずれも床直上で検出したものである。図示した以外では土師丸胴甕底部の大破片がある。他の遺物も床直上から出土しているが、小破片が中心である。

時期 7世紀。



第16図 4号住居および遺物出土状態





第17図 4号住居カマドおよび出土遺物

5号住居跡(P L-6・7 表4)

**位置** B区g・h-16グリッド。南側をトレンチと攪乱によって大きく壊されている。

**主軸方向** N-105°-E **床面積** 13.79㎡

**平面形態** 南辺が北辺に比べ70cm短く、南西コーナーが鈍角になる台形状を呈している。

**壁** 西壁で30cm、東壁で20cmの高さが残存している。垂直に近い壁である。

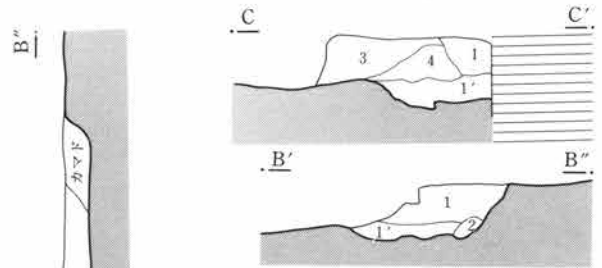
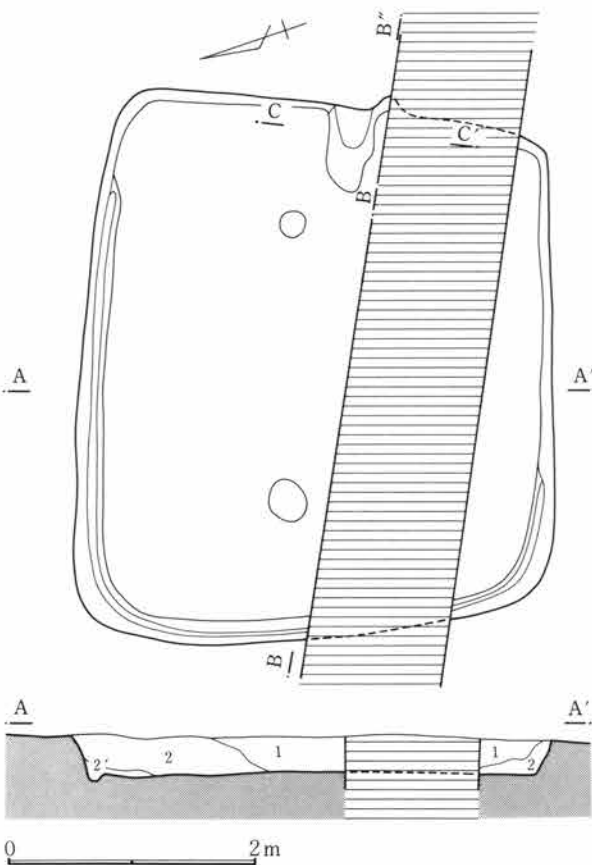
**カマド** 東壁下南寄りにある。南側半分が壊されている。住居床面より5cm低い掘り込みがある。火床ははっきりしない。残存部分では煙道も短い。

**内部施設** 住居の北西側の半分に壁溝が巡っている。深さは2~6cmで底面は細い。

**床** シルト質土の地山をそのまま床面としている。西側が高く、東へ傾斜していて10cm近い比高差がある。焼土が2ヶ所で見られた。

**遺物の出土状態** 遺物量は少なく、土師甕の小破片を中心に総数約70点がカマド周辺に集中して出土した。1と3は床から10cm浮いた状態だったが、他は床直上での出土である。図示したもの以外には大破片の出土はない。

**時期** 7世紀代か。

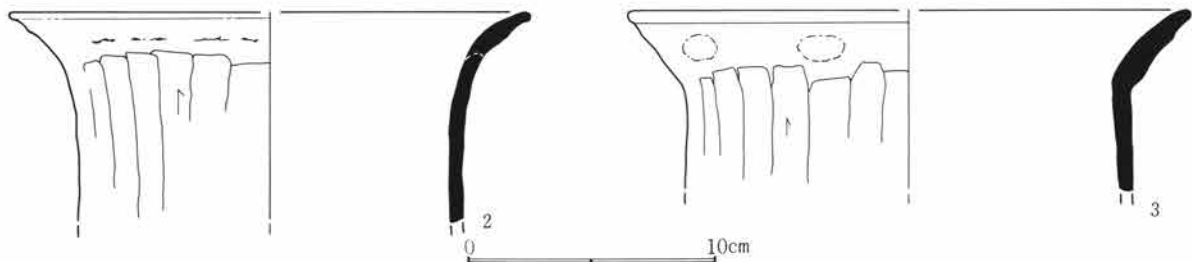


5号住居土層説明

- 1層 黒褐色土層。弱粘性の黒色土、シルト質土の混合土層。パミスも不均等に含んでいる。
- 2層 暗褐色土層。ややしまり欠く弱粘性土層。2'層ではシルト質土、小ブロックが混入する。

カマド土層説明

- 1層 暗褐色土層。黒色粘性土とシルト質土の混合土。焼土ブロックの混入ない。1'では混入物少ない。
- 2層 黒褐色土層。しまりの強い土層。
- 3層 黒(褐)色土層。As-Cのまじる黒色土にシルト、焼土等を少量含む。
- 4層 暗(灰)褐色土層。袖構築材。焼土小ブロックを不均等に含む。



第18図 5号住居および出土遺物

6号住居跡(PL-6・7・20 表4)

位置 B区h-20・21グリッド

主軸方向 N-104°-E 床面積 20.66㎡

平面形態 1辺約4.3mで、コーナーの丸みのある正方形を呈している。

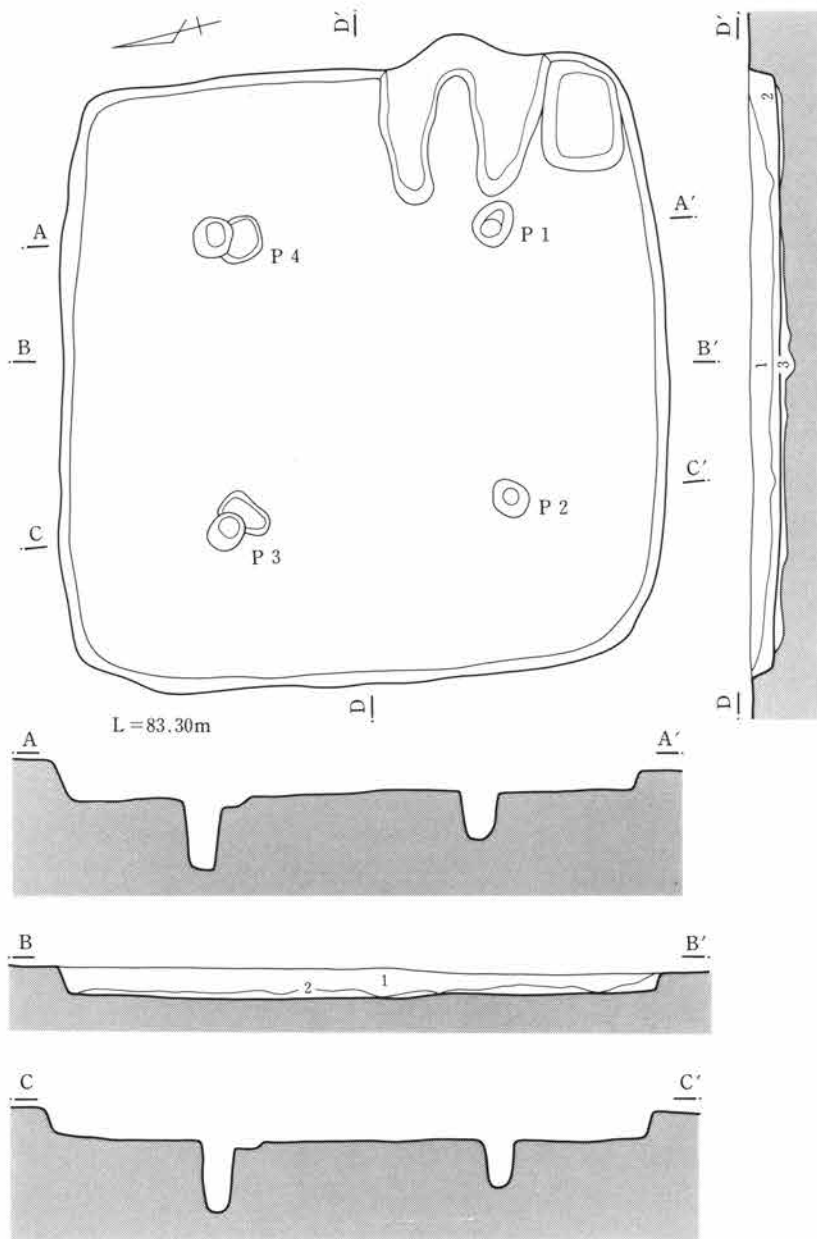
壁 遺存状態の良い北壁で28cm、南西コーナー付近では12cm残存している。

カマド 東壁下南寄りで検出した。燃焼部は住居内

にあり、煙道の張り出しは僅かである。燃焼部下と北袖下に深さ10cmの掘り込みがある。

内部施設 4支柱穴を調査した。P2はカマド正面の位置にある。P3・P4南側に小さな窪みが重複しているが、柱穴かどうかは不明である。南東コーナー下からは、平面形が長方形の貯蔵穴を検出した。床面からの深さは15cmある。

床 ほぼ平坦な床であるが、西側がやや高く、東側



ピット計測表 (cm)

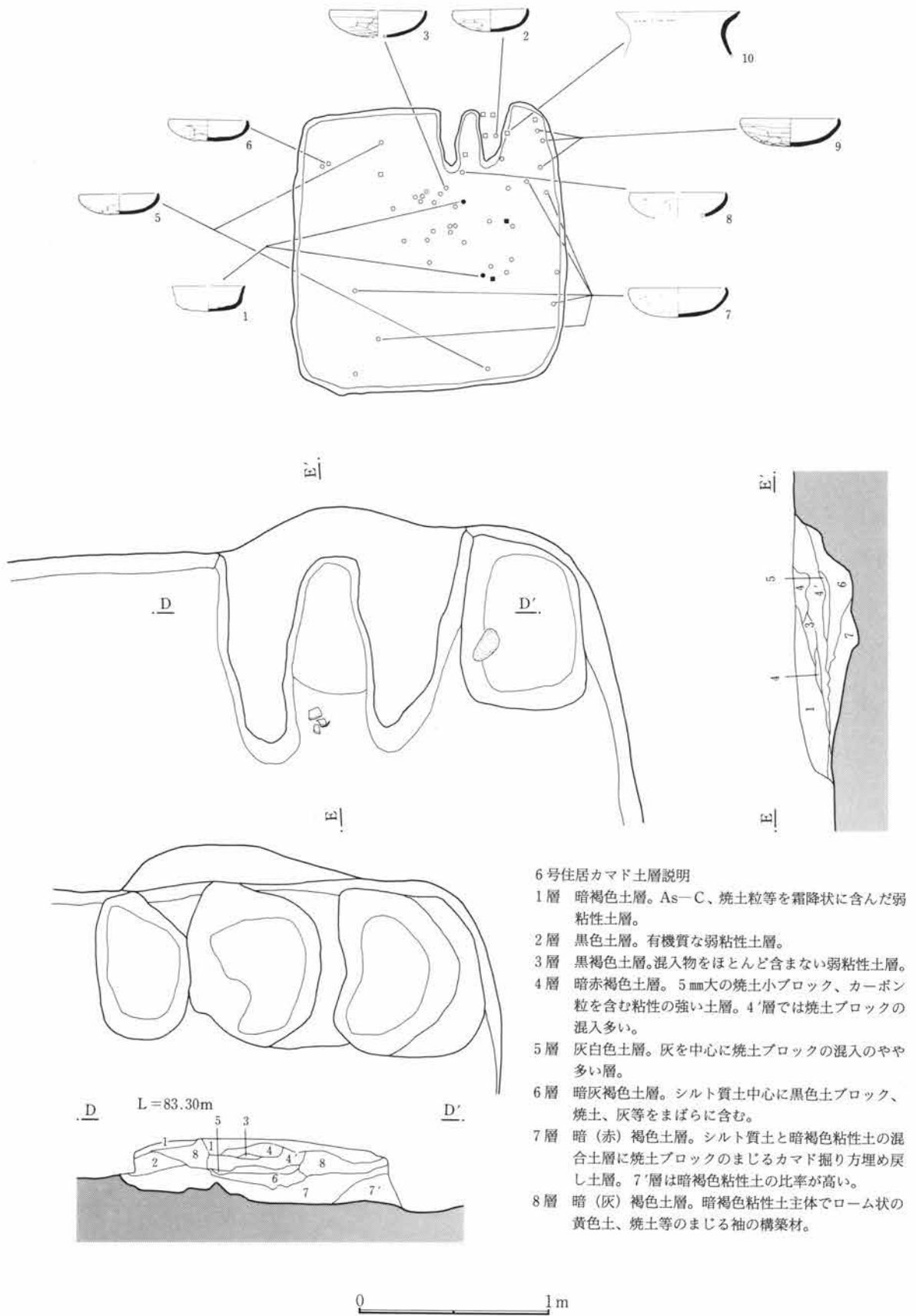
	上面径	深さ
P 1	38×30	38
P 2	30×26	36
P 3	32×24	57
P 4	34×30	55

6号住居土層説明

- 1層 暗褐色土層。弱粘性の黒色土とシルト質土との混合土層。パミスの混入やや多い。
- 2層 黒褐色土層。しまりの強い土層。シルト質土がブロック状に混入。
- 3層 暗灰褐色土層。掘り方の埋め戻し土層。ブロック状のシルト質土が主体である。

0 2m

第19図 6号住居



第20図 6号住居遺物出土状態およびカマド

と3～5cmの比高差がある。

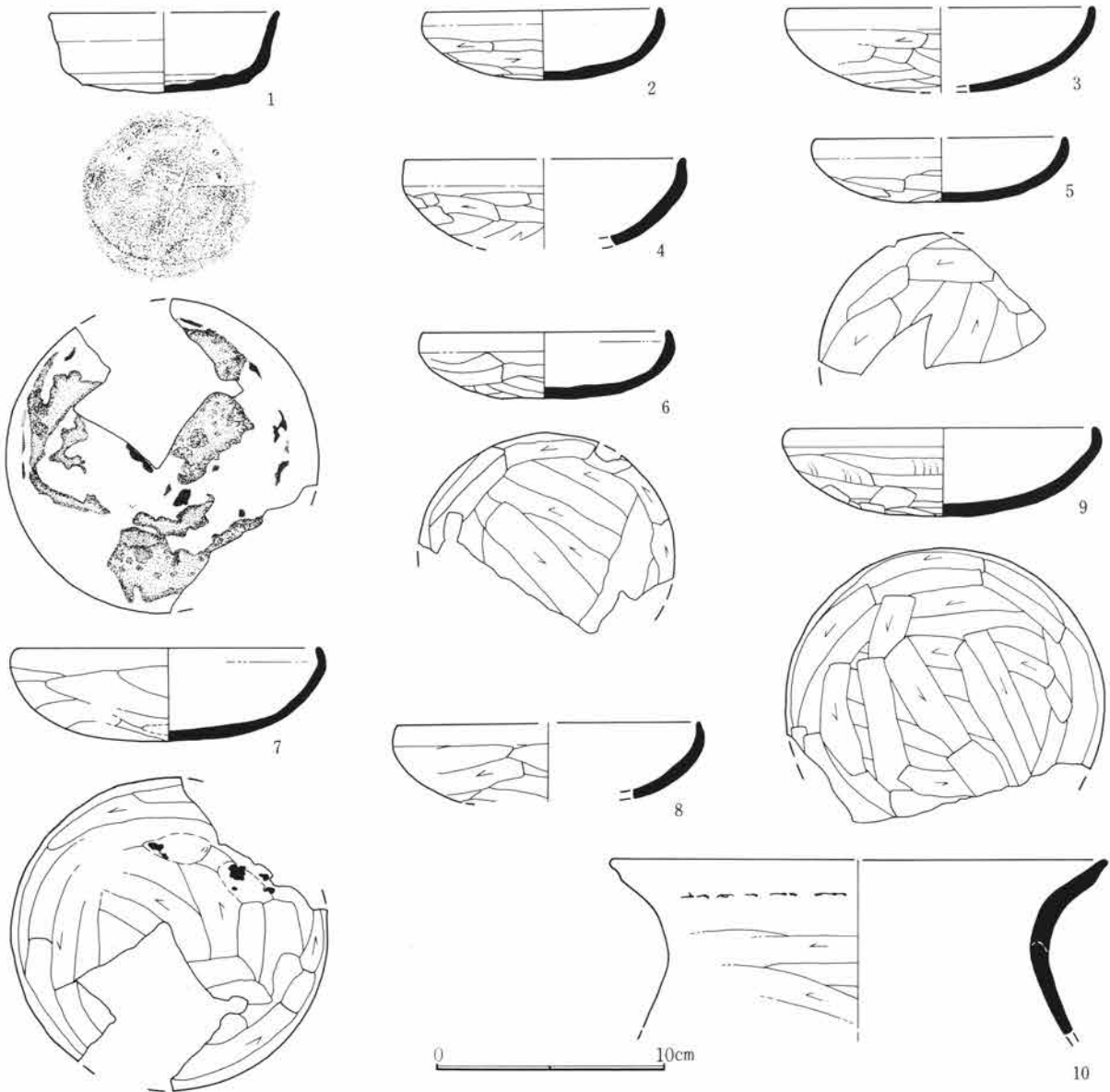
**掘り方** 部分的に2～5cmほどの掘り方が認められた。住居構築時の凹凸を埋め戻したものであろう。

**遺物の出土状態** 住居中央付近と南壁下の床面から3～10cm浮いた状態で遺物の大半を検出した。土器の破片総量はあまり多くないが、小破片中心のため総数は300点以上になる。土師杯の出土量が多く、全体の4割以上を占めている。図示した以外にも1/4個

体ほどの土師器杯の破片は数個体出土している。甕類はやや薄手の長胴甕が大半であった。

2と10はカマド南袖上の出土である。床直上から出土したのは9のみで、1・4・6は5cm前後、他は10cm以上浮いた状態で出土した。遺物は住居内に散乱した状態で、離れた位置で接合する資料が多かった。

**時期** 8世紀か。



第21図 6号住居出土遺物

7号住居跡(PL-6・8・20 表5)

位置 B区e-17・18グリッド。

主軸方向 N-105°-E 床面積 15.24㎡

平面形態 東西4.7~4.9m、南北 3.6mで、東壁の乱れた縦長長方形を呈している。

壁 最も深い北壁で50cm、浅い南西コーナー付近でも25cm残存しており、本遺跡中では深い住居の一つである。

カマド 東壁下のやや南寄りで検出した。燃烧部は壁直下であり、煙道は壁外に40cm張り出している。燃烧部下には深さ20cmの掘り込みがあった。

内部施設 深さ1~6cmのやや不明瞭な壁溝がカマ

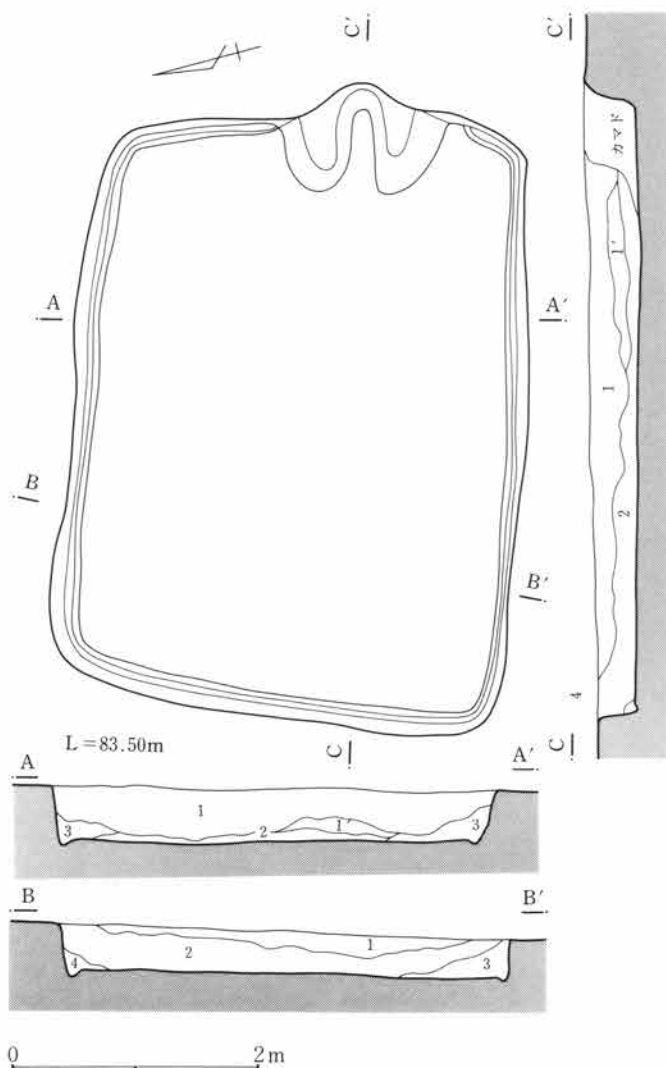
ド下を除いて全周している。

床 地山をそのまま床面としている。踏み固められて細かな凹凸のある床である。北西隅から中央にかけて床直上に灰が散っていた。

遺物の出土状態 図示した以外に約340点の破片が出土した。土師杯類の割合が極めて多く、全体の6割を占めている。

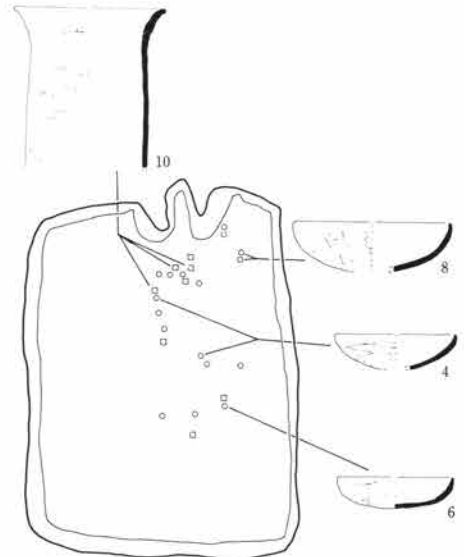
4の杯が床直上、9が掘り方内、10がカマド前面の床直上とカマド周辺の埋没土から出土した他は、床面から10cm以上浮いて出土した土器が大半であった。

時期 8世紀。



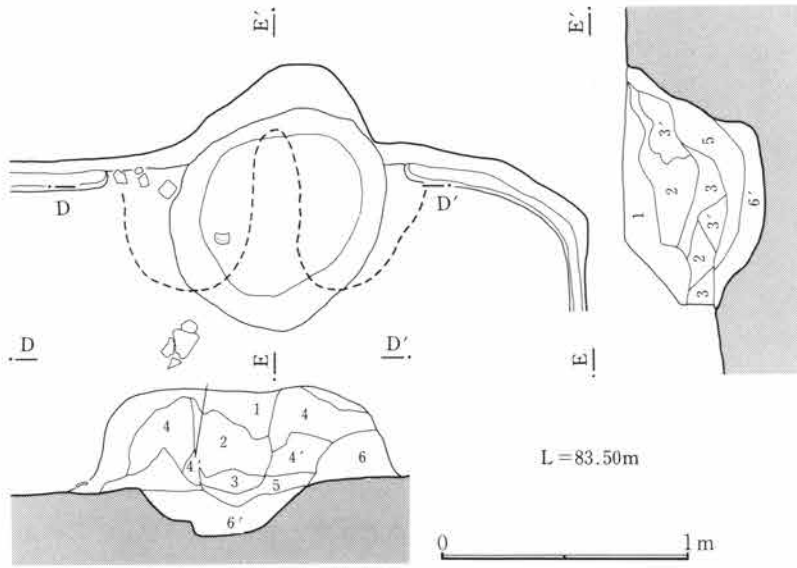
7号住居土層説明

- 1層 暗褐色土層。As-Cまじり黒色土。シルト質土、黒褐色粘性土が不均等に混合する。しまり強い土層。1'層では焼土粒、灰が混入している。
- 2層 黒褐色土層。1層に見られる黒褐色粘性土主体の土層。焼土粒を少量含んでいる。
- 3層 黒褐色土層。As-Cまじり黒色土が主体。シルト質土を小ブロック状に含んでいる。
- 4層 暗(灰黄)褐色土層。壁の崩落土層でシルト質土中心。混入物は少ない。



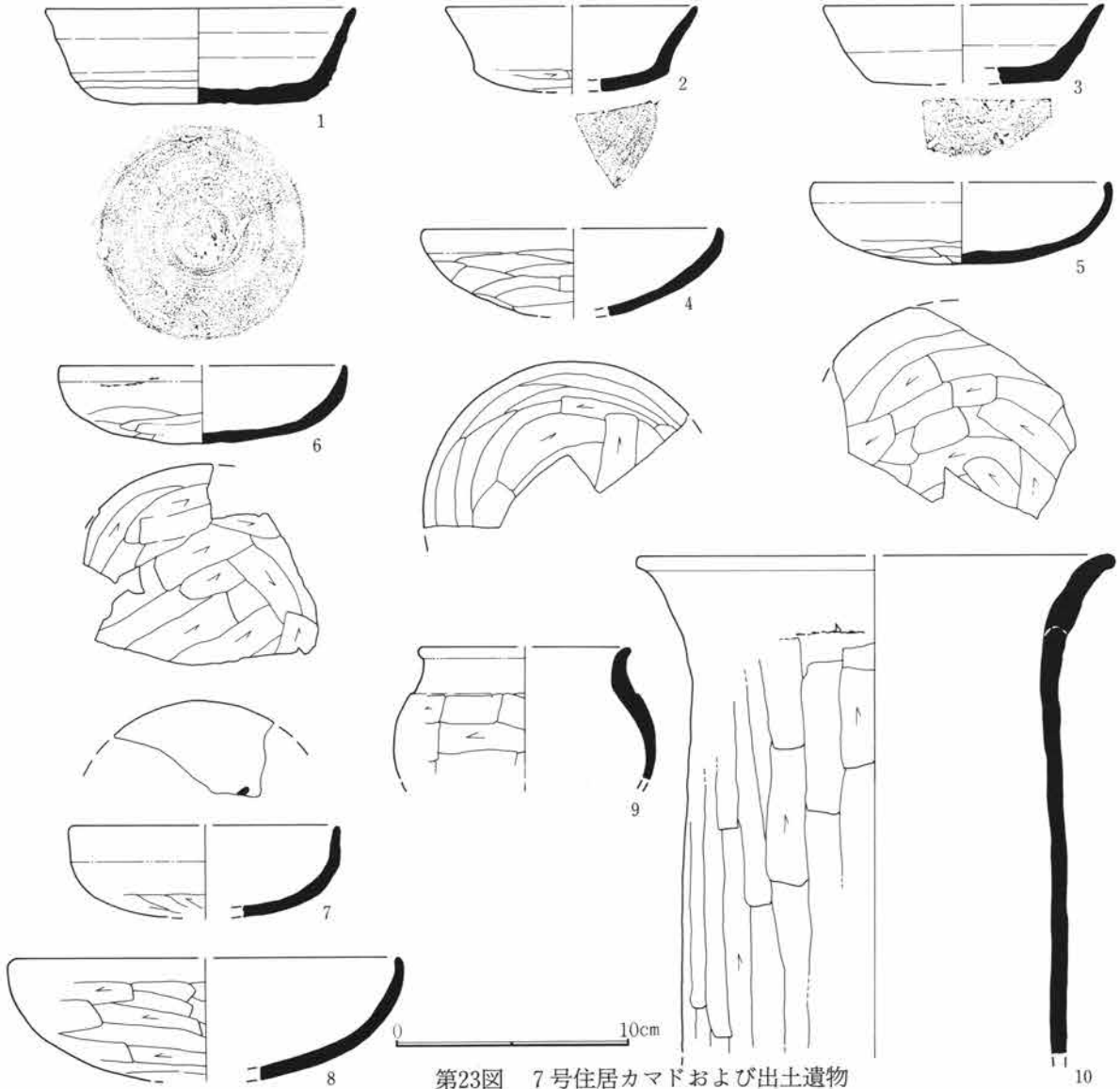
第22図 7号住居および遺物出土状態

1 竪穴住居



7号住居カマド土層説明

- 1層 暗褐色土層。住居埋没土の1層に同じ。
- 2層 黒褐色土層。やや有機質で粘性の強い黒色土にシルト質土、焼土等を少量含む。
- 3層 暗灰褐色土層。2層土とシルト質土の混合土。3'でカーボン粒の混入多い。
- 4層 黒色土層。袖構築材の粘性土層。シルト質土、パミスを霜降状に含む。4'ではシルト質土が小ブロック状に混入している。
- 5層 暗(赤)褐色土層。黒色粘性土中に多量の焼土ブロックを含んでいる。シルト質土の混入もやや多い。
- 6層 灰褐色土層。シルト質土の袖基部構築材。6'は黒色土、灰等の混入が多い。



第23図 7号住居カマドおよび出土遺物

8号住居跡(PL-8・20 表6)

**位置** B区m・n-22グリッド。倒木痕状の攪乱が多く、カマド周辺と一部の壁を頼りにかろうじて確認できた遺構である。

**重複** 7号溝に西側を切られている。

**主軸方向** N-88°-E

**床面積** 9.89m<sup>2</sup>

**平面形態** 東西と南北の軸が約3.3mだが、南壁がやや短いため台形状を呈している。

**壁** 攪乱が多く、残存部分も壁高4~11cmで遺存状態は悪い。

**カマド** 東壁下やや南寄りから検出された。遺存状態は極めて悪い。袖石と思われる倒れた河原石が南

袖の位置にあった。

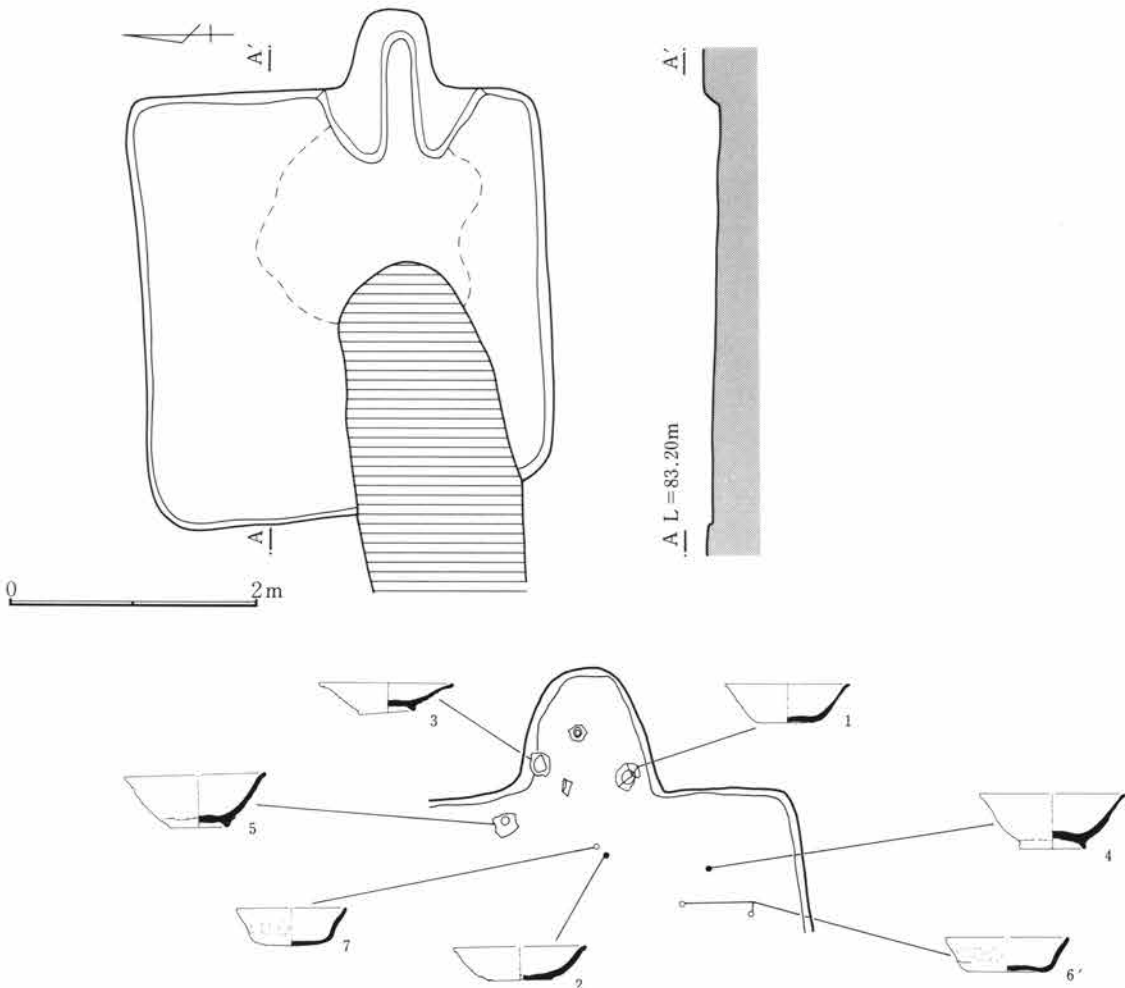
**内部施設** 柱穴・壁溝等確認できなかった。

**床** カマド前面から住居中央にかけて踏み固められた硬化面があったが、他は不明瞭な床であった。

**掘り方** 5~8cmの深さで粘性のある黒色土を埋め戻していた。

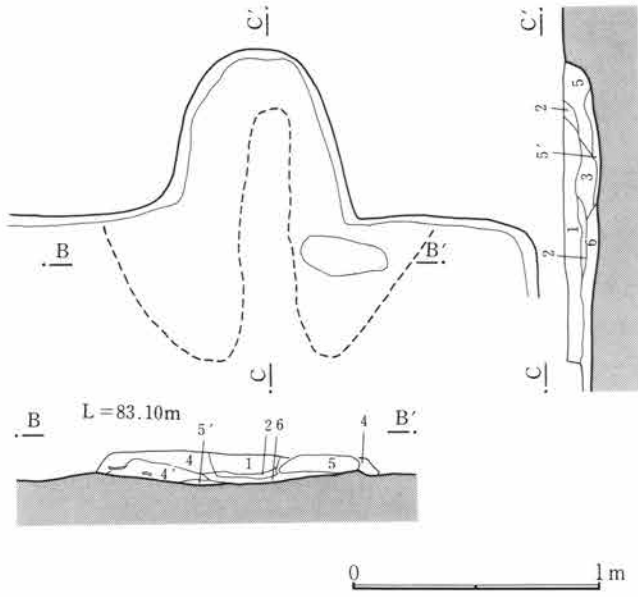
**遺物の出土状態** 接合する破片が多く、8点を図示したが、全体の遺物量は少なく、図示した以外の破片は50数片であった。そのうち須恵杯は5点、土師甕は8点でしかなく、6・7と同巧の土師杯破片が大半であった。遺物はカマド内とその周辺に集中しており、いずれも床面から5cm以内の高さである。

**時期** 9世紀。



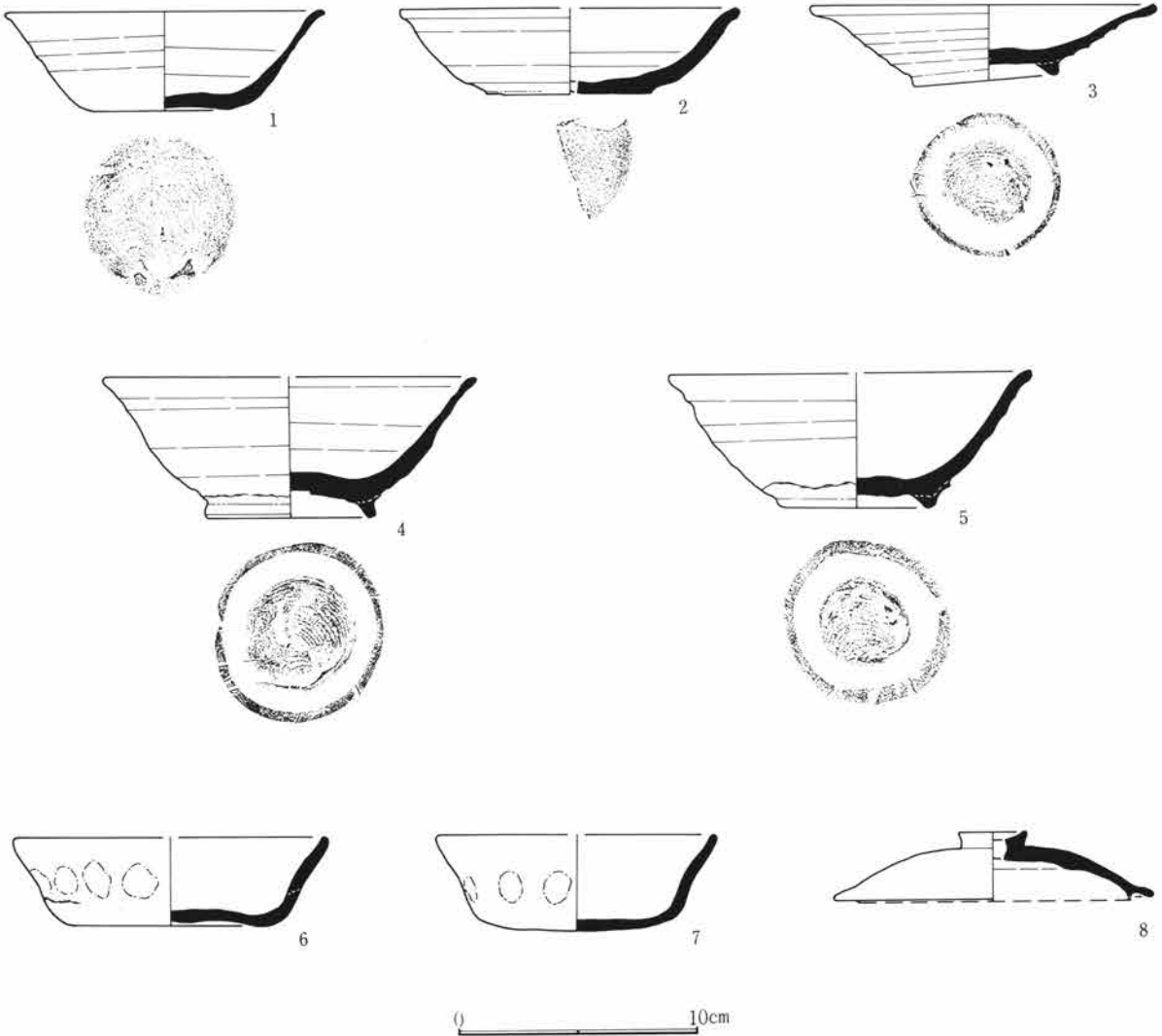
第24図 8号住居および遺物出土状態





8号住居カマド土層説明

- 1層 暗褐色土層。しまりの強い粘性土。焼土、カーボン粒等を不均等に含む。
- 2層 黒褐色土層。しまりを欠く。やや有機質な黒色土層。
- 3層 (灰) 赤褐色土層。シルト質土、焼土、白色灰等の混合土層。
- 4層 暗褐色土層。しまりの強い粘性土。4'ではカーボン粒の混入多い。
- 5層 (灰) 黄褐色土層。粒子の粗いローム土とシルト質土を混合した。カマド構築材。5'には多量の灰を含む。
- 6層 黒褐色土層。住居の掘り方埋め戻し土。カマド周辺では焼土、灰を含む。



第25図 8号住居カマドおよび出土遺物

9号住居跡(PL-9・21 表6)

位置 B区m-17グリッド。調査区北隅にかかって確認し、カマド周辺を拡張して調査した住居である。

主軸方向 N-86°-E 床面積 残存4.13m<sup>2</sup>

平面形態 唯一全体の判る南壁で2.3mしかないのに、北西コーナー付近が判らない西壁が2.2m残存しており、小型でやや横長の長方形プランと思われる。

壁 40~60cmの高さがある。

カマド 東壁のほぼ中央で検出した。燃焼部は住居内にあり、煙道部は壁外に40cm張り出している。

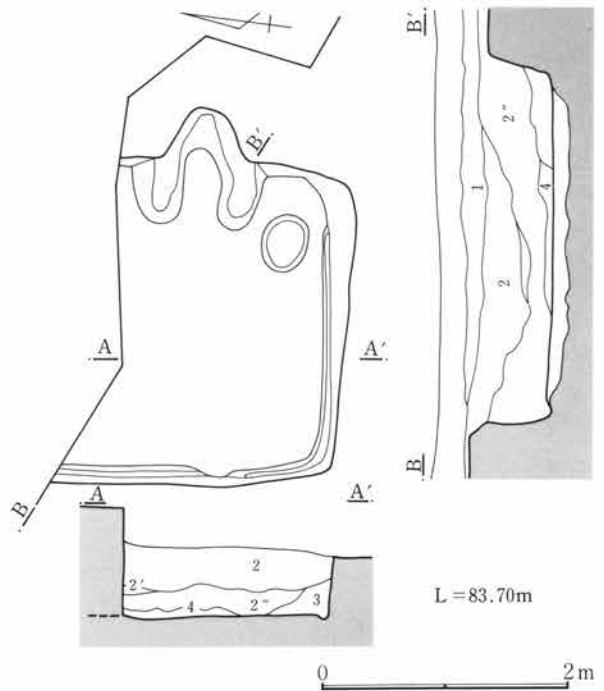
内部施設 カマド南袖脇の壁直下やや西寄りで深さ8cmの平面楕円形で、底部は平坦な落ち込みを検出した。貯蔵穴のある位置であるが不明瞭である。深さ2~4cmの壁溝があるが、全周していない。

床 平坦で明瞭な床を検出した。

掘り方 床下全体に5~10cmの埋め戻しを行っている。カマド付近の掘り方が深い。

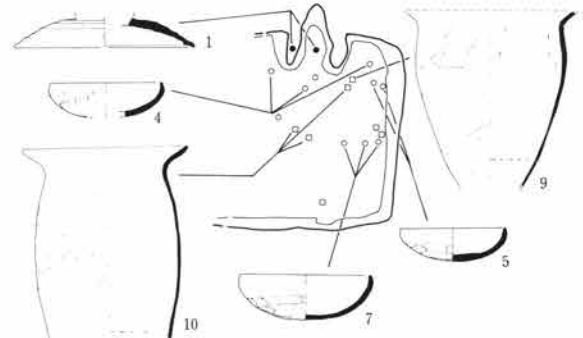
遺物の出土状態 カマド周辺を中心に、住居の全域から土器が出土している。接合するものが多く、図示した以外には60片ほどしか残っていない。1の蓋はカマド内の出土である。4・5・7の杯、9・10の甕は床直上だが、他は埋没土内の出土である。

時期 8世紀。



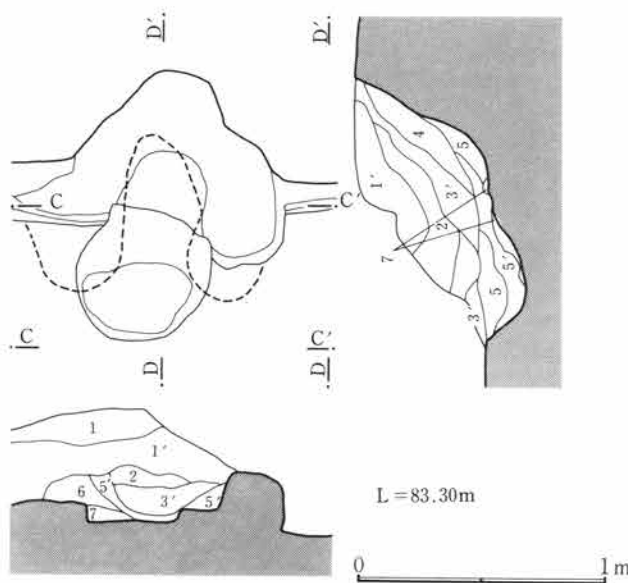
9号住居土層説明

- 1層 暗褐色土層。しまりやや欠く弱粘性土層。
- 2層 黒褐色土層。As-Cまじりの黒色土にブロック状のシルト質土を含む。2'は焼土粒が散見。2''ではカーボン粒を含む。
- 3層 黒色土層。有機質の非粘性土。パミス、シルト質土を少量含む。
- 4層 暗(灰)褐色土層。粘性の強い土層。カーボン粒を少量含む、カマド付近では焼土の混入やや多い。

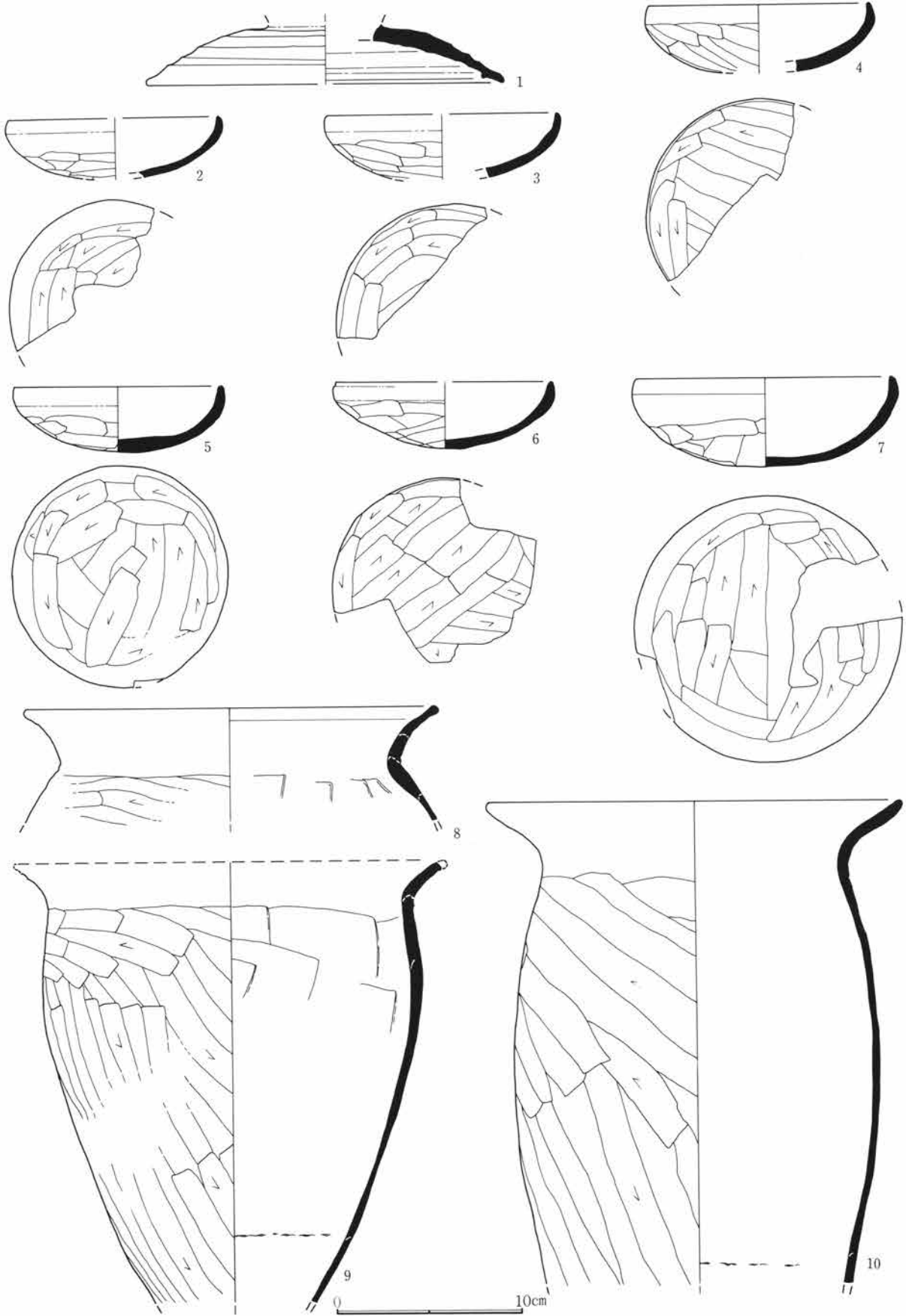


9号住居カマド土層説明

- 1層 暗(灰)褐色土層。粘性強い暗褐色土。不揃いのシルト質土ブロックを混入。1'は焼土含み、シルト質土少ない。
- 2層 黒色土層。焼土以外に混入物の少ない粘性土層。
- 3層 暗(灰)褐色土層。暗褐色の粘性土にシルト質土を霜降状に含む。3'では焼土と特に灰の混入が目立つ。
- 4層 赤褐色土層。焼土、シルト質土、暗褐色土の大粒ブロックが混合するガサガサした土層。
- 5層 暗褐色土層。小粒の焼土、灰、カーボン、シルト質土等が混合するしまり欠く層。5'では焼土、白色灰が多く暗赤褐色を呈している。
- 6層 暗(赤)褐色土層。暗褐色の粘性土に焼土が少量まじる。袖基部構築材。
- 7層 暗灰褐色土層。ブロック状のシルト質土中心の土層。



第26図 9号住居およびカマドと遺物出土状態



第27图 9号住居出土遗物

10号住居跡(P L-9・21 表7)

**位置** B区n・o-18グリッド。調査区の北隅で確認し、一部安全帯を拡張して北西隅とカマドまでを調査した住居である。

**主軸方向** N-88°-E

**床面積** 調査部分17.24m<sup>2</sup> 推定22.16m<sup>2</sup>

**平面形態** 東西5.1m、南北推定5.0mのほぼ正方形で、南側に張り出し部のある住居である。張り出し部分は当初重複する土坑と考え同時に掘り下げをしなかったため、遺構写真には不備がある。

**壁** 残存壁溝が48~58cmの高い壁が残っている。

**カマド** 東壁下南寄りで検出された。燃焼部の位置

は壁直下であり、煙道は壁外へ60cm張り出している。焚き口の上面は甕を入れ子にして補強している。

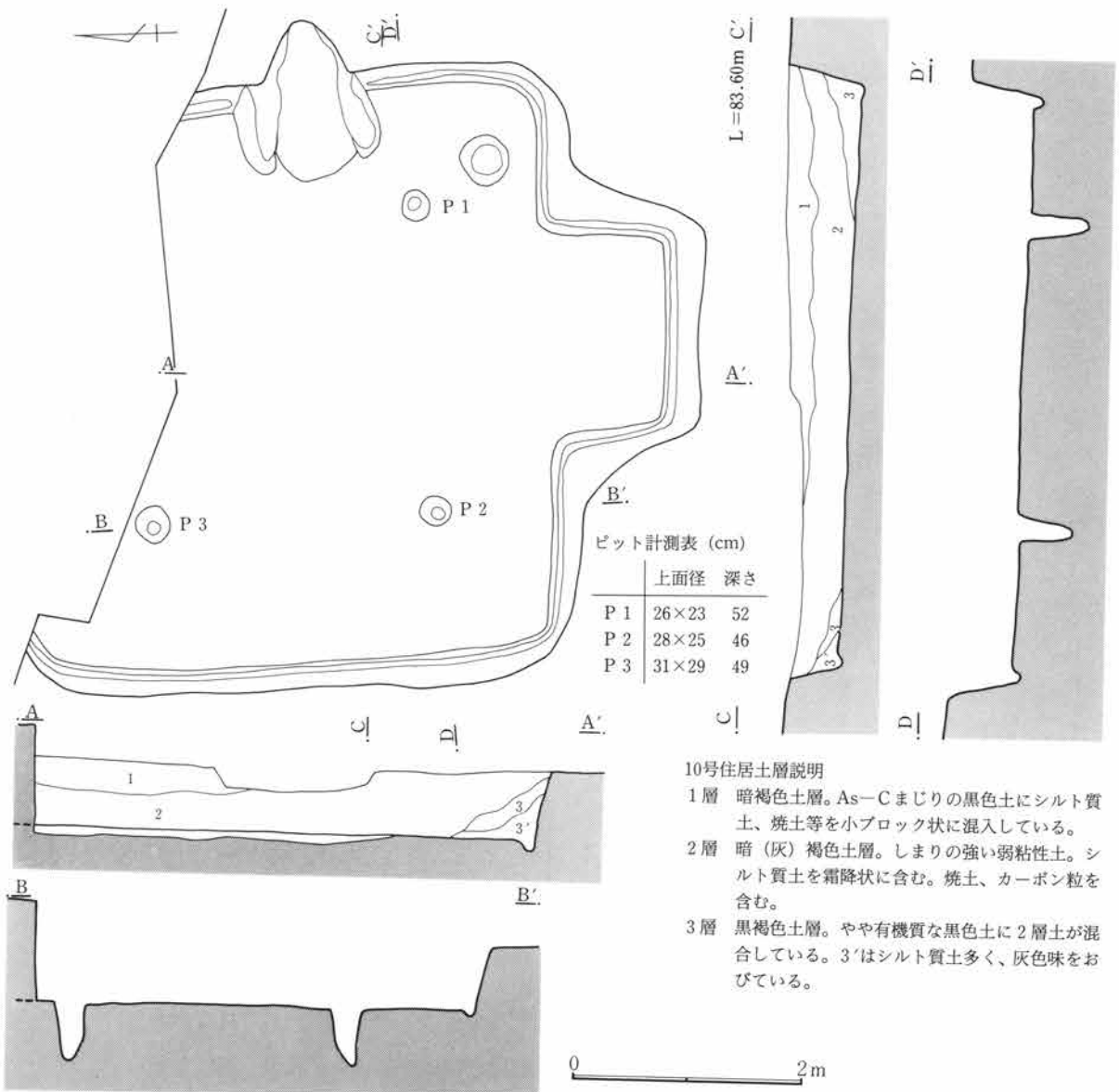
**内部施設** 壁溝がカマド下を除いて全周している。

4 支柱穴があるものと思われ、調査範囲からは3本が確認できた。南東コーナー下のやや住居中央寄り、開口部分の径42cm、床面からの深さ28cmの貯蔵穴を調査した。

**床** 南東側へ低く傾斜していて、北西隅の壁直下と10cm以上の比高差がある。

**掘り方** 深さ8~10cmで比較的平坦な掘り方がある。壁際では浅くなっている。

**遺物の出土状態** 土器の出土量はカマドと貯蔵穴周



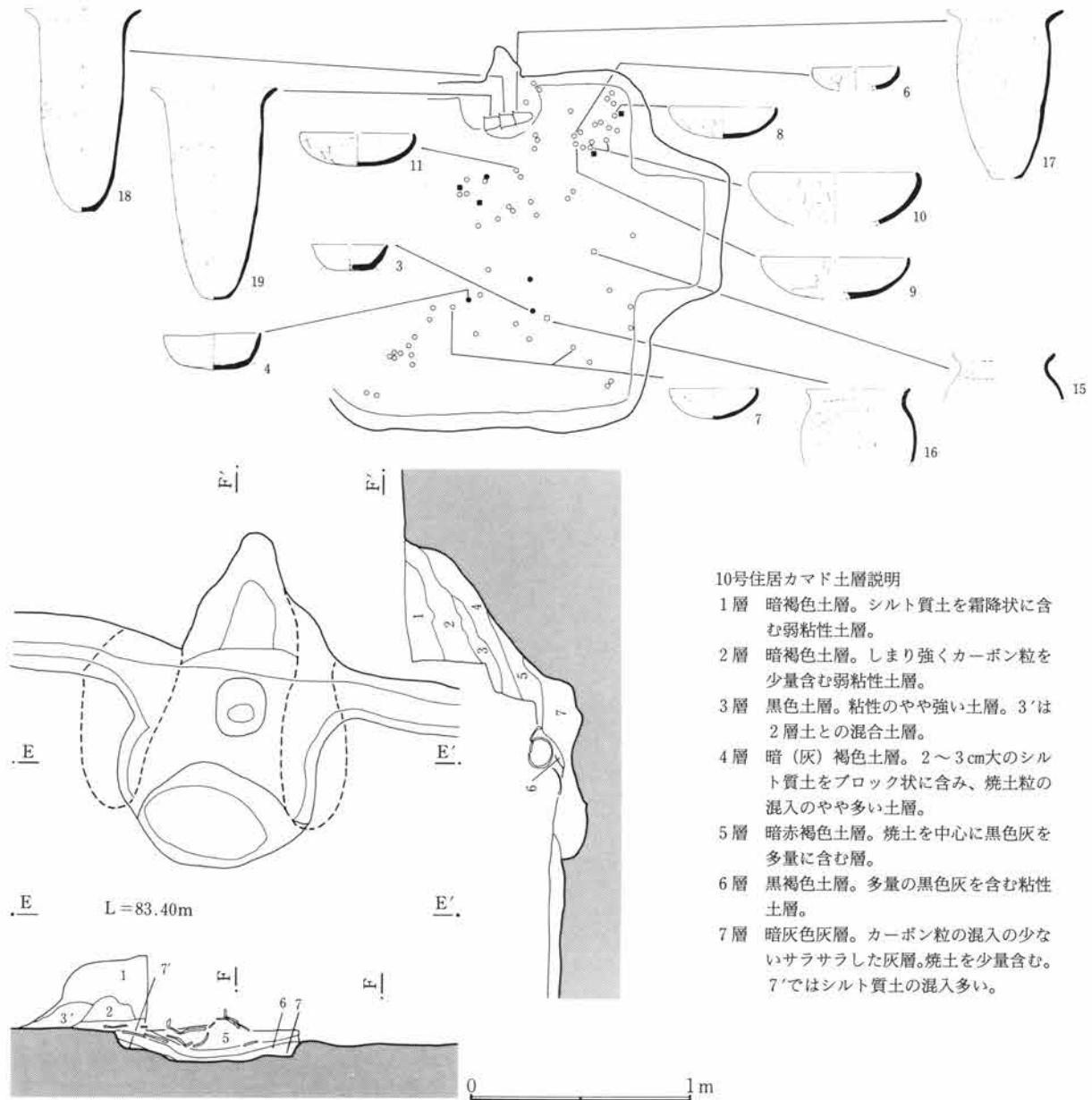
第28図 10号住居

辺を中心に極めて多い。19点を図示したが、それ以外には土師器甕を中心に、総数約430片で、大破片が多かった。図示した以外には叩きのあるやや薄手の須恵器甕の胴部破片が目立った。

19・18・17の甕は入れ子の状態にして、カマド焚き

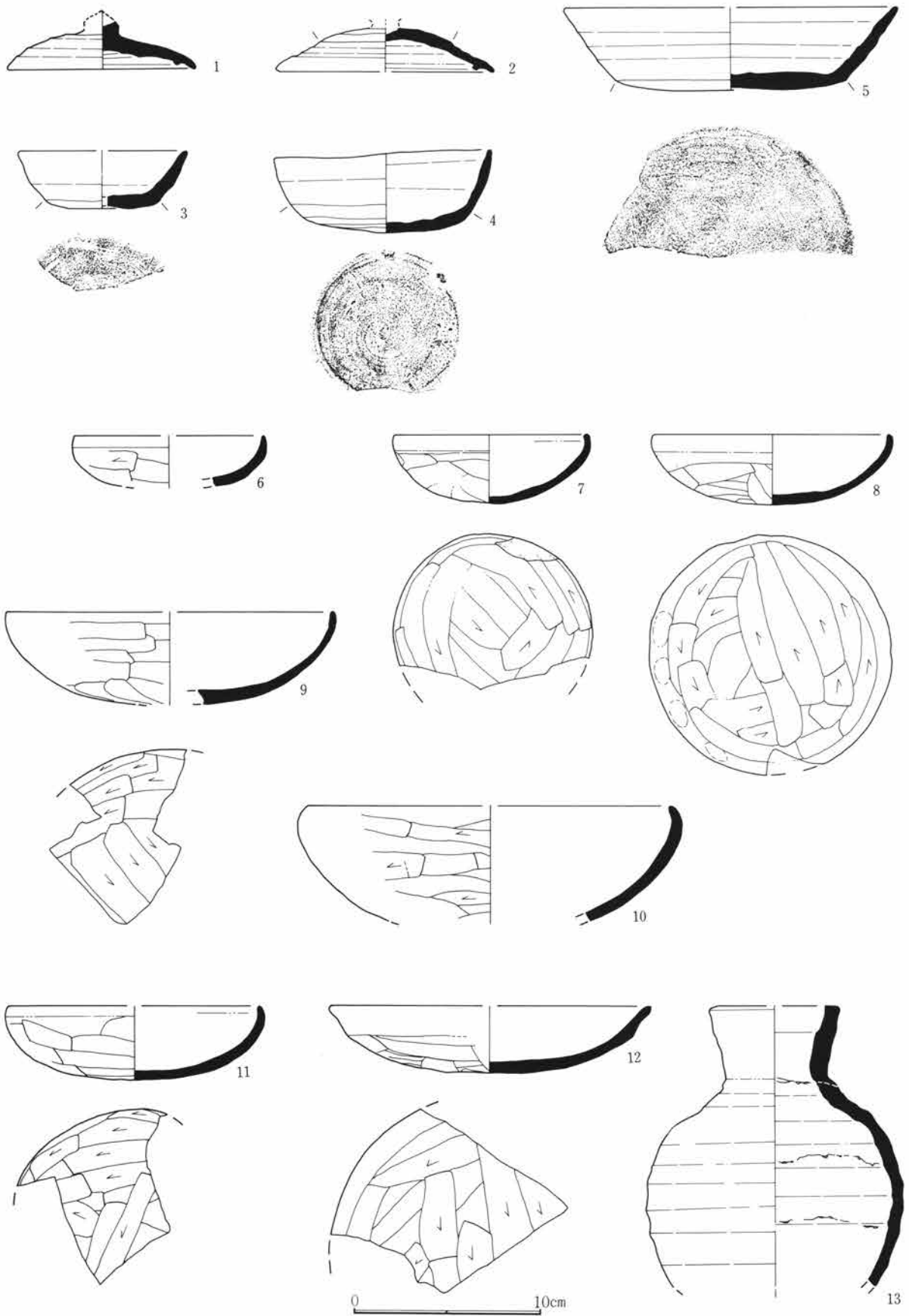
口上面の芯材としており、周辺に散乱していた破片と接合した。4・6・16は床直上だが、他の土器は床面より10cm以上浮いた状態での出土であった。

時期 古墳時代の混入品が多いが、住居に伴う遺物は8世紀のものである。

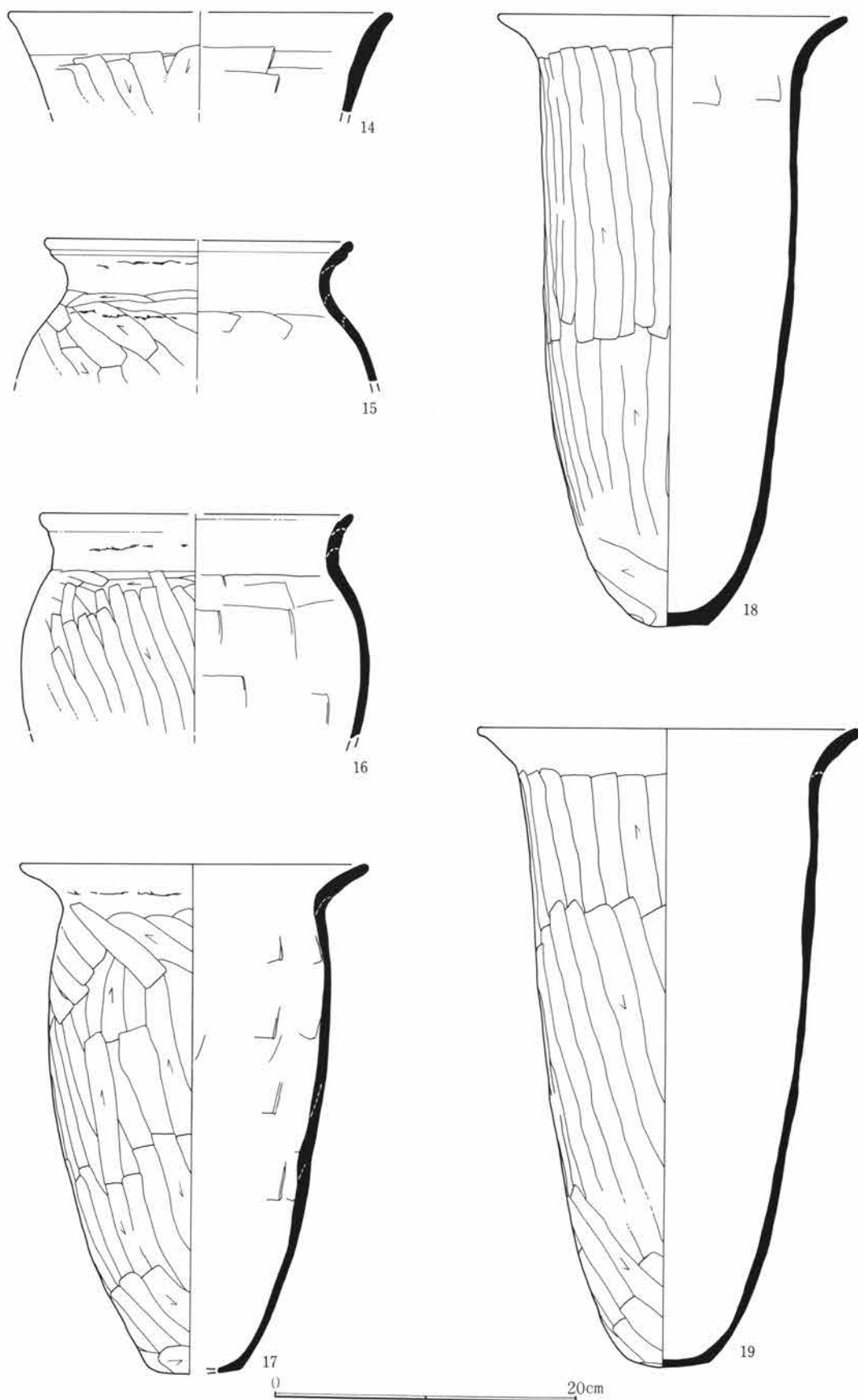


第29図 10号住居遺物出土状態およびカマド

第3章 検出した遺構と遺物



第30図 10号住居出土遺物(1)



第31図 10号住居出土遺物(2)

第3章 検出した遺構と遺物

11号住居跡(PL-10・21 表8)

位置 B区b-14・15グリッド。攪乱の多い一面の多量の遺物散布地として把握した箇所である。当初、土坑として掘り始めた遺構であったが、攪乱下から住居床状の底面と不明瞭な壁を検出し、問題が多いが住居と訂正した。そのため図面・写真等には不備な点が多い。

主軸方向 N-2°-E

床面積 18.83m<sup>2</sup>

平面形態 長辺が2.8m、短辺2.3mの南北に長い隅丸長方形を呈している。

壁 グラグラと立ち上がる不明瞭な壁である。北側で12cm前後、他は7~8cm残存している。

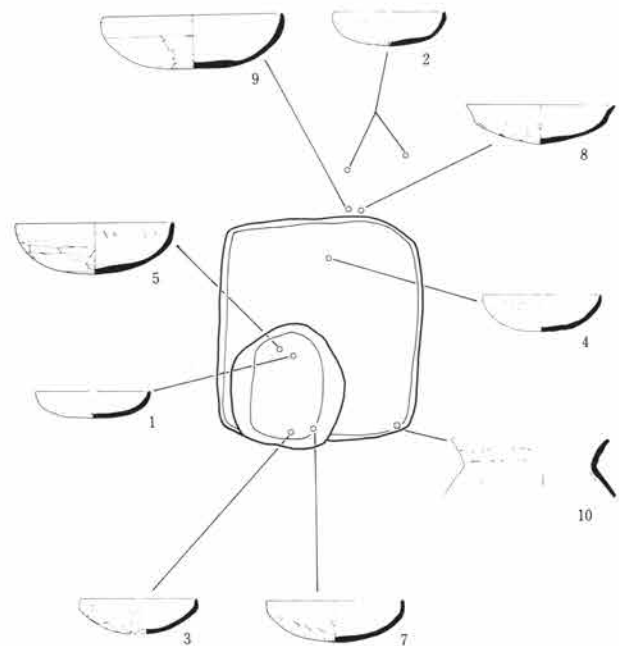
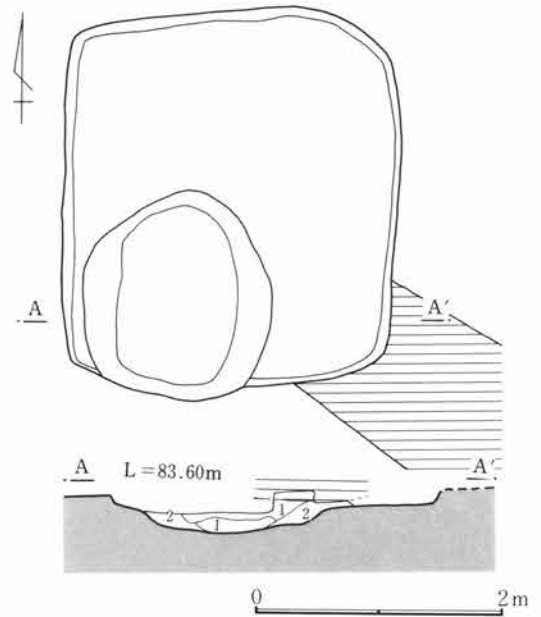
カマド 確認できなかった。

内部施設 南隅に径1.6×1.5mの楕円形を呈した、床面からの深さ20cmの掘り込みがある。住居南壁のラインを崩しているが、遺物の出土状況から住居と同時期のものと考えられる。

床 中央のやや低い、凹凸のある床である。著しい踏み固め、焼土や灰の散布等、住居床面の特徴には欠けている。掘り方は認められなかった。

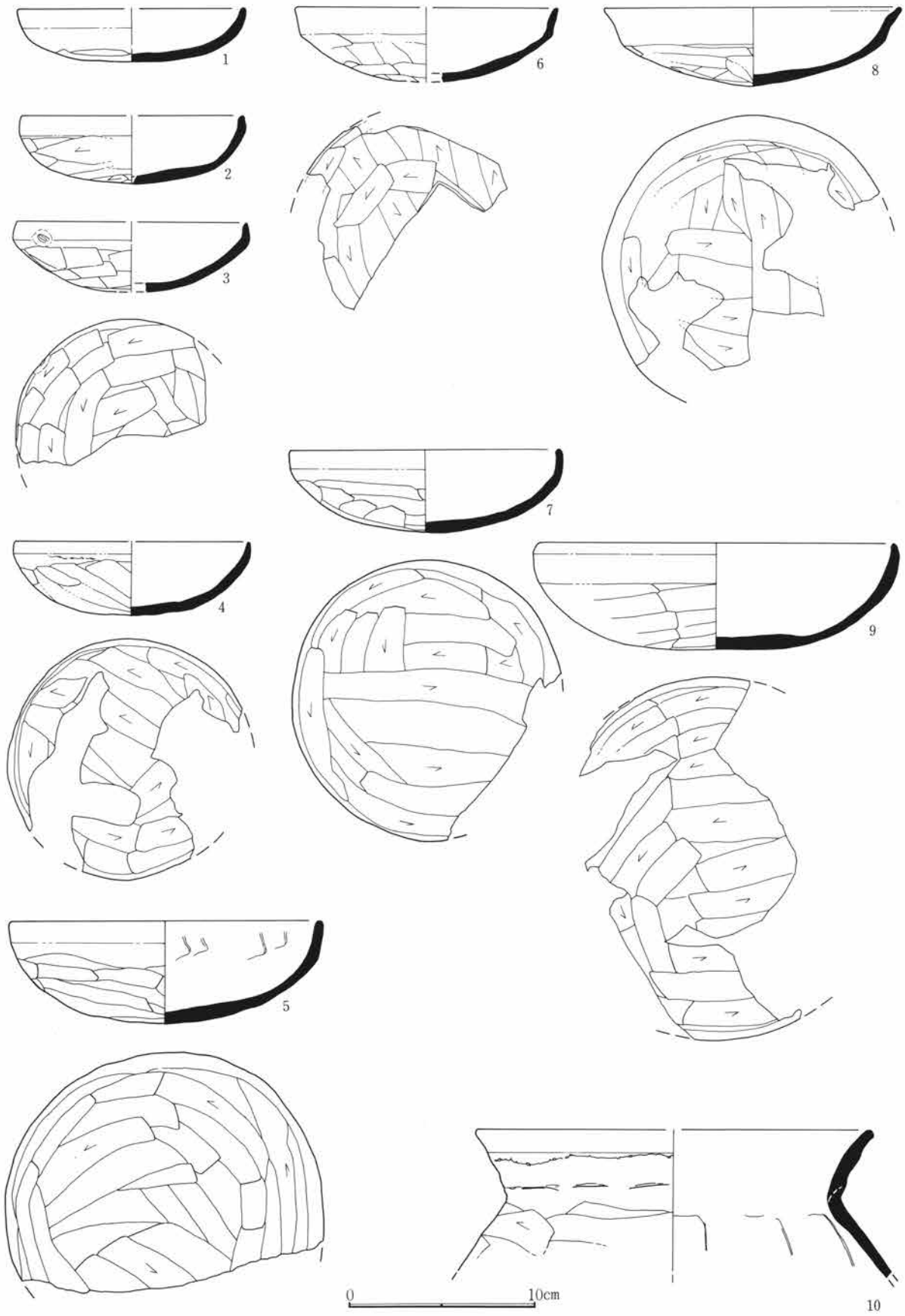
遺物の出土状態 住居床面上の遺物は、10の甕が床直上、他はいずれも10cm以上浮いた状態で出土した。住居内土坑の遺物5・8は住居床面レベル下で底面から10cm浮いた状態、7は住居床面レベルの出土である。なお本住居と同一時期の遺物が住居外の北側に広く散布しており、遺構確認面のレベルで出土した2・9を図示した。図示した以外の破片も土師杯が圧倒的に多かった。

時期 8世紀。



第32図 11号住居および遺物出土状態





第33图 11号住居出土遺物

12号住居跡(P L-10・21 表9)

**位置** A区Y・B区a-17グリッド。本遺跡の住居では最も西側で、A区にかかる唯一の住居である。

**主軸方向** N-65°-E

**床面積** 18.96㎡

**平面形態** 長辺3.3m、短辺2.6mの比較的整った長方形を呈している。

**壁** 最も残存状況の良い北壁下で26cm、他は13~20cmの高さがある。

**カマド** 東壁下のやや南寄りにある。煙道付近は攪乱により大きく壊されている。燃焼部は住居内にあり、袖には円礫を使用していた。

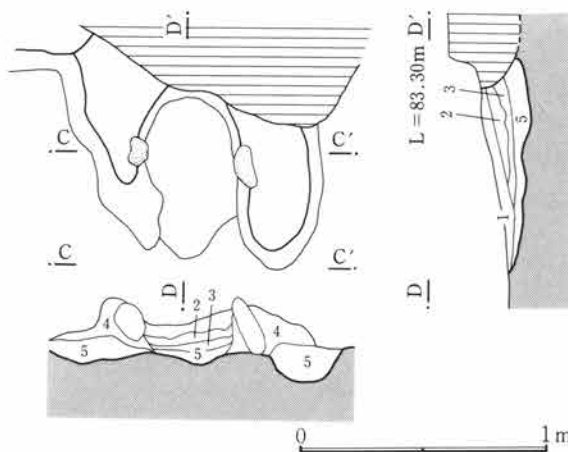
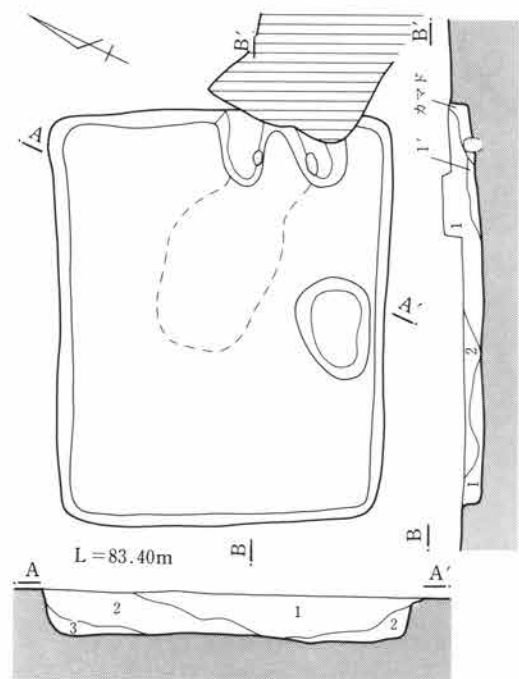
り、袖には円礫を使用していた。

**内部施設** 柱穴、壁溝等は検出されなかった。

**床** 南壁下に浅い掘り方があるが、他は地山をそのまま床面としている。カマド前面に強く踏み固められた硬化面がある。

**遺物の出土状態** 破片総数は約70片である。図示した土器2点は住居埋没土内の出土である。その他に土師丸胴甕の大破片が北西コーナー付近の床直上に集中して出土した。また、こも編み石状の河原石が5点、住居内床直上に散在して出土した。

**時期** 8世紀か。



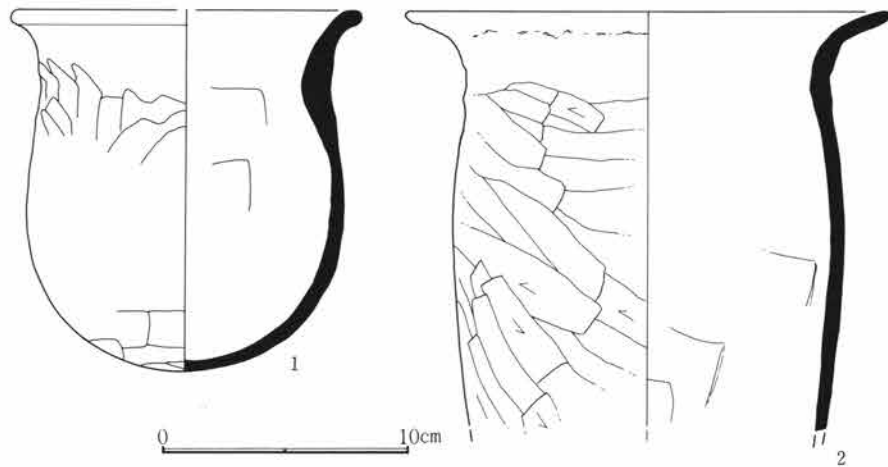
12号住居カマド土層説明

- 1層 灰褐色土層。混入物の少ない粘性土層。
- 2層 (黄)褐色土層。火熱により硬化したシルト質土層。
- 3層 黒色土層。有機質土と黒色灰の混合土層。
- 4層 暗灰褐色土層。カマド構築材の粘性土層。
- 5層 暗褐色土層。シルト質土、ロームブロック等の混合土層。



12号住居土層説明

- 1層 暗(灰)褐色土層。As-Cまじり黒色土中に多量のシルト質土ブロックを不均等に混入する土層。1'は焼土粒散見。
- 2層 暗褐色土層。
- 3層 暗褐色土層。パミスをほとんど含まない弱粘性土層。



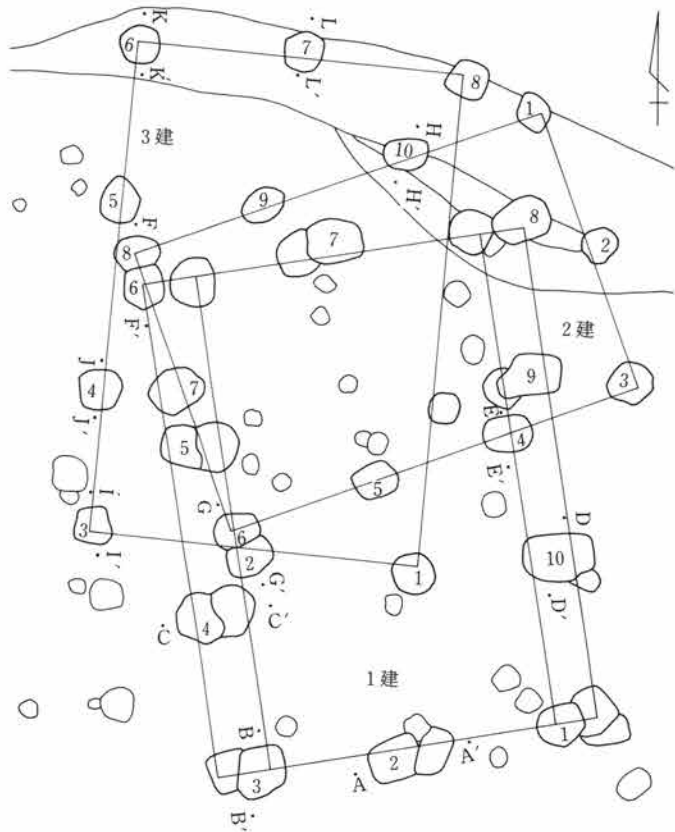
第34図 12号住居およびカマドと出土遺物

2 掘立柱建物 (P L-11)

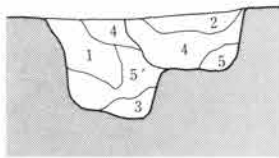
掘立柱建物を検出したのはB区中央の南側、k・1-1グリット付近である。ここは、多数の遺物が出土した流路跡の窪地蛇行部分の約10m西側で、竪穴住居からも離れている。

ここで重複する3軒の掘立柱建物を調査した。

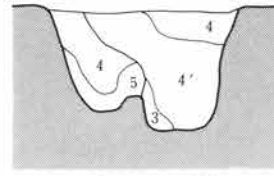
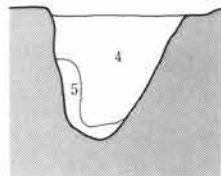
当初、径40~60cmと径・深さとも20cm前後の2種類からなるピット群として調査を開始した。このうち大型のピット群については重複する掘立柱建物であることに気付いて南隅の側道部分を一時遮断して全体を把握し、建て替えを行っていた1号掘立柱建物と、軸方向のずれるやや小型の2号掘立柱建物のプランを確認した。3号掘立柱建物については、整理作業時に気付いたものである。そのため柱穴の土層断面調査の位置に不適切な所があるが、1'号建物(古)→1号建物(新)、2号建



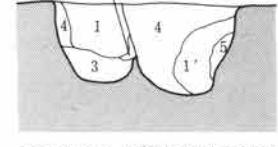
A 1号掘立・P2 A' B 1号掘立・P3 B' C 1号掘立・P4 C' G 2号掘立・P6 G'



5'のシルト質土は小粒である。

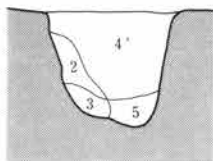


4'の黒色土、シルト質土ともに大粒。



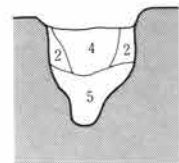
1'にはシルト質土の混入やや多い。

D 1号掘立・P10 D'

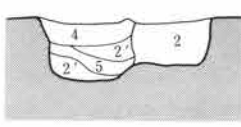


4'の黒色土、シルト質土ともに大粒。3は木の根の攪乱が入り地山との区別が難しい。

E 2号掘立・P4 E'

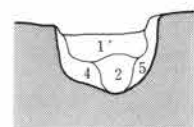


F 2号掘立・P8 F'



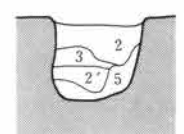
2'のパミスはきわめて少量である。

H 2号掘立・P10 H'



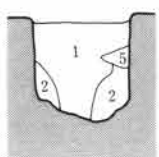
1'にはシルト質土小ブロック散見。

I 3号掘立・P3 I'

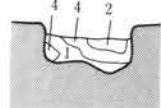


2'のパミスはきわめて少量である。

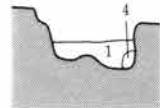
J 3号掘立・P4 J'



K 3号掘立・P6 K'



L 3号掘立・P7 L'



掘立柱建物土層説明

- 1層 As-Cと思われるパミスを霜降状に含んだ弱粘性土層。黒色~黒褐色を呈している。
- 2層 パミス少量含む以外に混入物の少ない黒色の粘性土層。
- 3層 地山のシルト質土中心の灰褐色土層。
- 4層 1、2に小ブロック状の3を含む暗褐色土層。
- 5層 ブロック状の3に1、2の混合する暗(灰)褐色土層。



第35図 掘立柱建物配置図

### 第3章 検出した遺構と遺物

物(古)→1号建物(新)、という先後関係が確認できた。3号建物と2号建物は重複部分が少なく不明瞭だが、発掘調査時に2号建物の柱穴の方が新しそうだという所見を得ている。柱痕や抜柱痕の確認できる柱穴はなかった。

3棟の建物はいずれも、束柱や庇の付かない三間×二間の規模であるが、主軸方向は異なっており、1・3号建物は南北、2号は東西が桁行方向である。建物の東側が流路跡の窪地につながることから、1・3号建物は西面する建物の可能性が高い。2号建物は南面する建物で問題なさそうである。

竪穴住居の重複の全くない遺跡で、掘立柱建物だけが、建て替えを含めて計4回同一地点に建てられ

ている。占地にあたって極めて強い規制のあったことが看取できよう。特に、一番古いと思われる3号建物の主軸方向が磁北に近いことより、調査区の南側に建物群がつながり、本遺跡の建物が北隅に位置する官衙的な配置を取る可能性も考えられる。

いずれの建物からも遺物の出土はなく、明瞭な年代は不明である。しかし、流路跡の窪地に廃棄された墨書土器を含む、杯類を中心とした多量の土器は、この建物群で使われたと考えるのが妥当であろう。一部の柱穴に方形に近いプランを持つものがあることと合わせて、8世紀を中心とする建物群の年代観が得られる。

#### 1号掘立柱建物

**位置** B区k・1・m-0・1・2グリッド

**規模** 梁行4.5m×桁行6.7m

建て替え後 梁行4.4m×桁行6.8m

P6とP6'を除くと、2基ずつ重複している柱穴からなる2棟の掘立柱建物で、西側にならぶ柱穴には番号にダッシュを付けて区別した。埋没土はいずれも暗褐色土中心で類似していた。個々のピットは円形に近いプランで一部に隅円方形に近いものが含まれている。

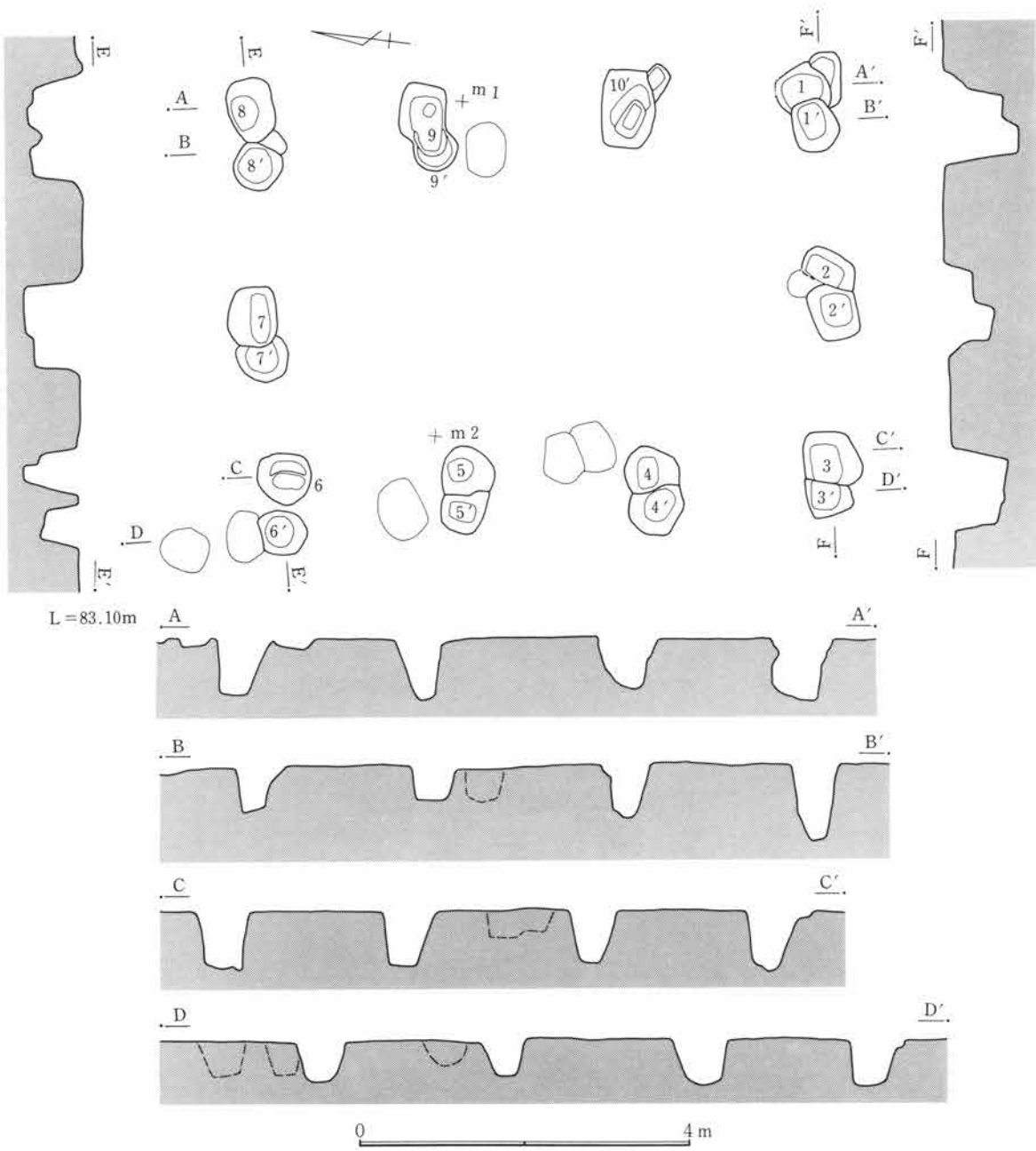
建物の規模や主軸方向は重複するどちらの建物もほぼ一致しており、同一の建物の建て替えであると判断した。P2-P2'やP4-P4'の土層断面からダッシュの付いた柱穴が切られていることが確認でき、東側へ約40~60cm移動して建て替えしていることが判る。P10は1基の隅円長方形のような平面形だが、他は2基のピットの重複の様子が明瞭である。

**重複** P6'が2号掘立柱建物のP8を切っている。

**主軸方向** N-10°-W

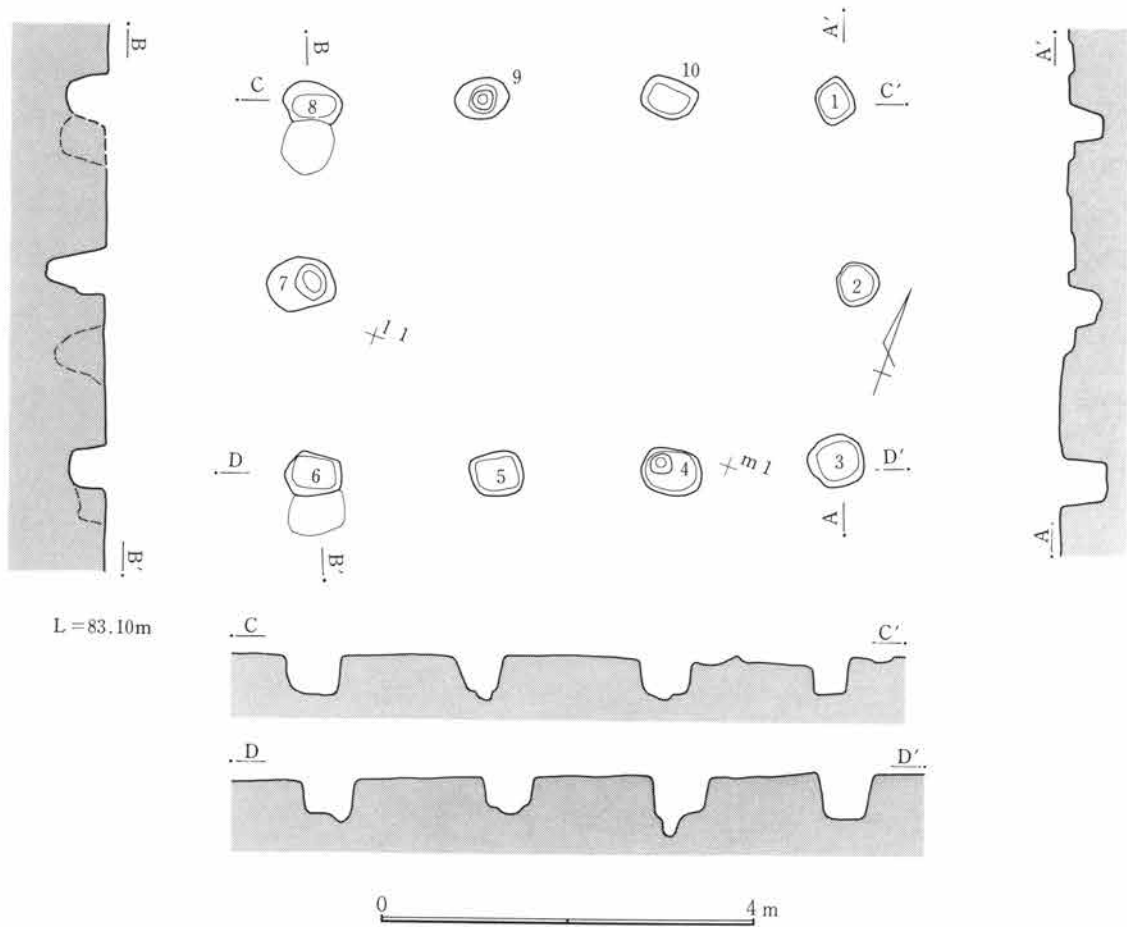
建て替え後 N-9°-W

**備考** 3棟の建物の中では最も新しい。柱間は桁行梁行の両方向とも2.3m前後で規則的である。確認面からの深さも70cm前後あり、3棟中最も深くなっている。



1号掘立柱建物			復元( )				
径(cm)	径(cm)	深さ(cm)	径(cm)	径(cm)	深さ(cm)		
東西	南北		東西	南北			
1	(66)	66	70	1'	64	56	90
2	(50)	62	32	2'	68	58	58
3	64	70	68	3'	46	54	54
4	56	68	62	4'	58	68	56
5	58	68	64	5'	48	58	42
6	64	66	70	6'	52	58	48
7	54	50	68	7'	(60)	64	46
8	78	58	66	8'	58	62	62
9	86	58	72	9'	51	56	38
				10'			62

第36図 1号掘立柱建物



第37図 2号掘立柱建物

2号掘立柱建物

位置 B区k・1・m-0・1グリッド

規模 梁行3.9m×桁行5.6m

重複 P 8が1号掘立柱建物のP 6に切られる。P 6は3号掘立柱建物のP 2を切っているようだ。

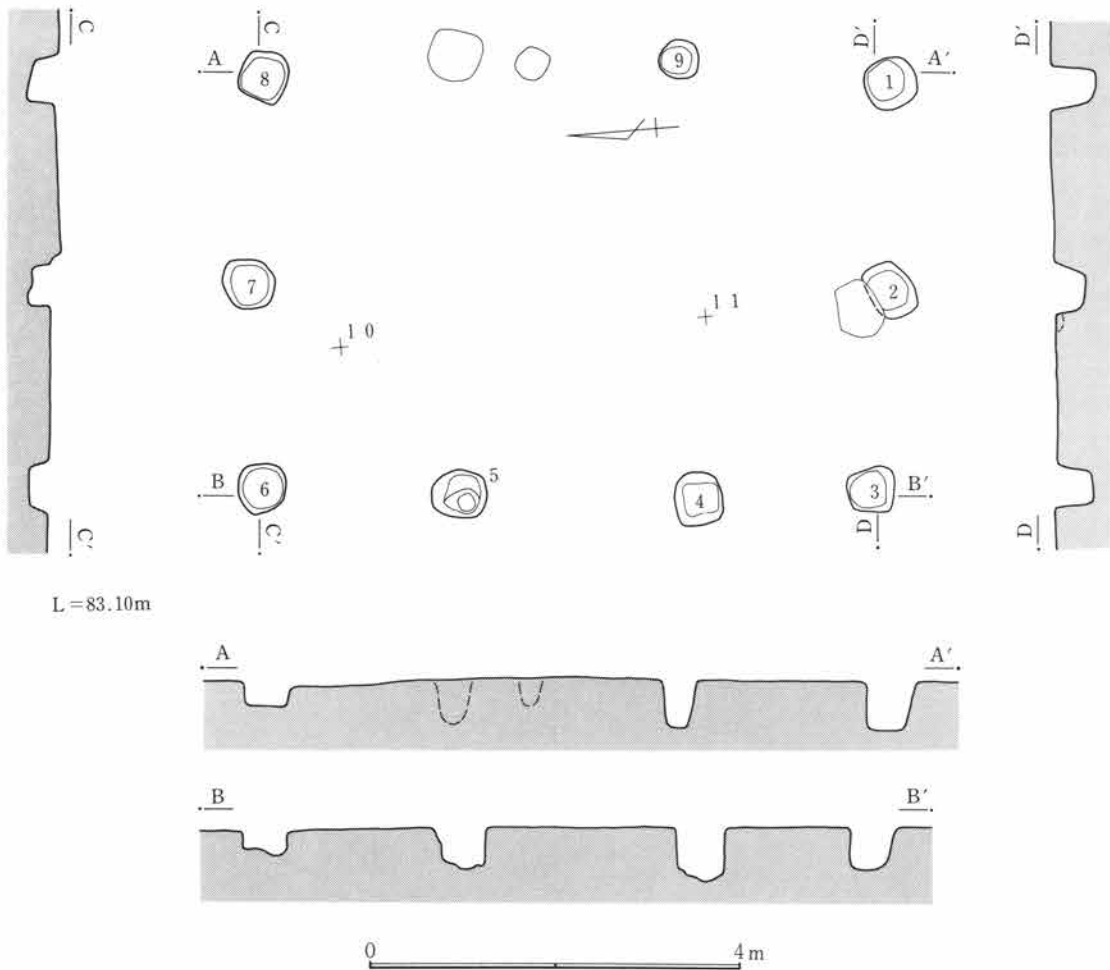
主軸方向 N-70°-E

3棟の建物中、唯一主軸が南北方向にあり、規模もやや小さい。本建物群中であっては異質である。

備考 柱間は桁行1.95m、梁行1.8mを基本とする。P 2がやや東側にそれ、P 9-P 10間が広がっている。柱穴は東側の3基を除き、梁行方向に長い方形にやや近いプランである。深さは50cm前後だがP 4・P 7・P 9には底面に柱痕状の幅狭の窪みがあり、他の柱穴より深くなっている。

2号掘立柱建物

	径(cm) 東西	径(cm) 南北	深さ (cm)
1	44	56	40
2	46	46	39
3	62	58	50
4	66	50	62
5	56	46	40
6	62	50	44
7	74	58	65
8	62	46	32
9	58	46	48
10	60	46	42



第38図 3号掘立柱建物

## 3号掘立柱建物

位置 B区k・1-0・1グリッド

規模 梁行4.3m×桁行6.5m

発掘調査中には存在に気付かず、整理作業中に建物を復元した遺構である。

重複 P2が2号掘立柱建物のP6に切られているようだ。

主軸方向 N-4°-E

備考 柱穴は概ね円形のプランである。東側の1基の柱穴が不規則な位置にあり、さらに1基が見つからないが、2間×3間の建物と思われる。P9が東にそれている。また1号掘立のP8に1基が壊されているとすれば、全柱穴の揃った建物を想定することもできそうである。確認面からの深さは30cm前後のものが多く、3棟中最も浅いものとなっている。

3号掘立柱建物

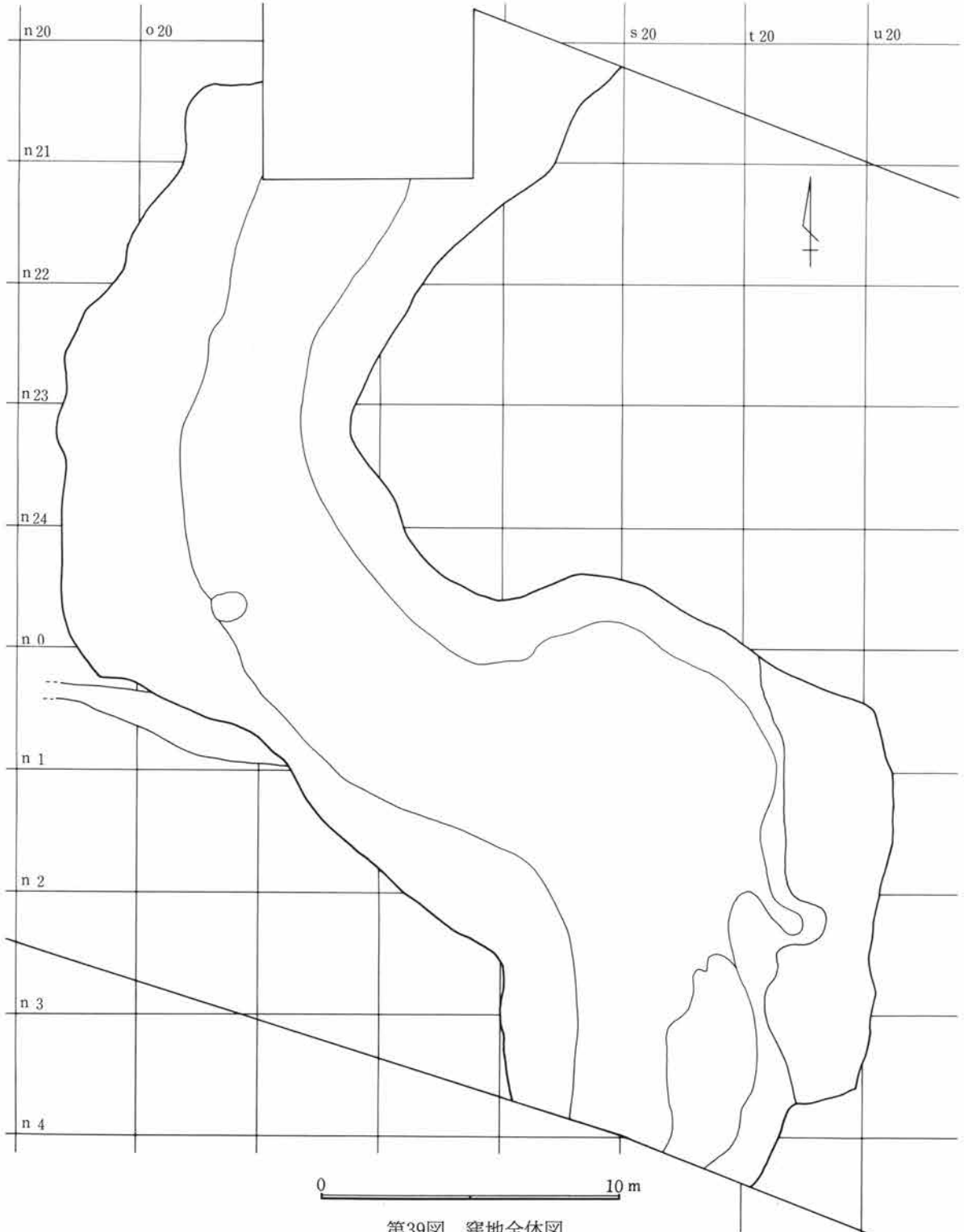
	径(cm)		深さ(cm)
	東西	南北	
1	56	56	50
2	60	(48)	34
3	48	52	42
4	58	46	58
5	50	60	44
6	46	50	26
7	52	56	26
8	56	52	32
9	46	40	49

規模は1号掘立柱建物に近い。柱間は桁行で2.2mである。梁行も同様と思われるが、P4が南側にそれているため、まちまちになっている。

3 流路跡の窪地 (P L-15・16・22~ 表10)

B区の中央q-20からs-4グリッド付近にかけては、As-Bの純層に覆われた流路状に蛇行する窪地があった。当初、水田検出に努め丁寧にテフラ層を剥いたが、畦畔状の施設や水田状の平坦面は認め

られなかった。このため、下面の水田検出のため、縦横にセクションベルトを残しながらこの地区を掘り進めたところ、蛇行部分のs-2グリッド付近を中心に多量の土器が出土し始め、遺物集積遺構の状



第39図 窪地全体図



況であった。土器は出土位置を記録しながら取り上げ、遺物のドット数は900点におよんだ。その他の埋没土内出土遺物はセクションベルトで区切った1～7区の地区毎に区分けして取り上げた。

遺物を取り除くとウォーター・ホール状の窪みとこぶし大の円礫混じりの層上面にあたり、この窪みが宮川の旧流路であることが判明した。礫層の直上まで遺物が出土しているが、ローリングを受けているものは極めて少なく、遺物は周辺から、特に南側・西側から廃棄されたものと考えられる。As-B層直下から礫層までの深さは最大で110cmほどであった。

また、農道下部分を8区として、農閑期の11月に別途調査を行ない、先の調査結果に付け加えた。

流路跡の窪地は調査区域外へ南北に続いている。北側は遺物の出土が止まり全容を把握したが、南側は調査区域外に遺物分布の広がりが続いている。しかし、調査区域内の遺物ドットの密集範囲より、中心部分を捉え、遺物の大部分を取り上げたものと考えている。

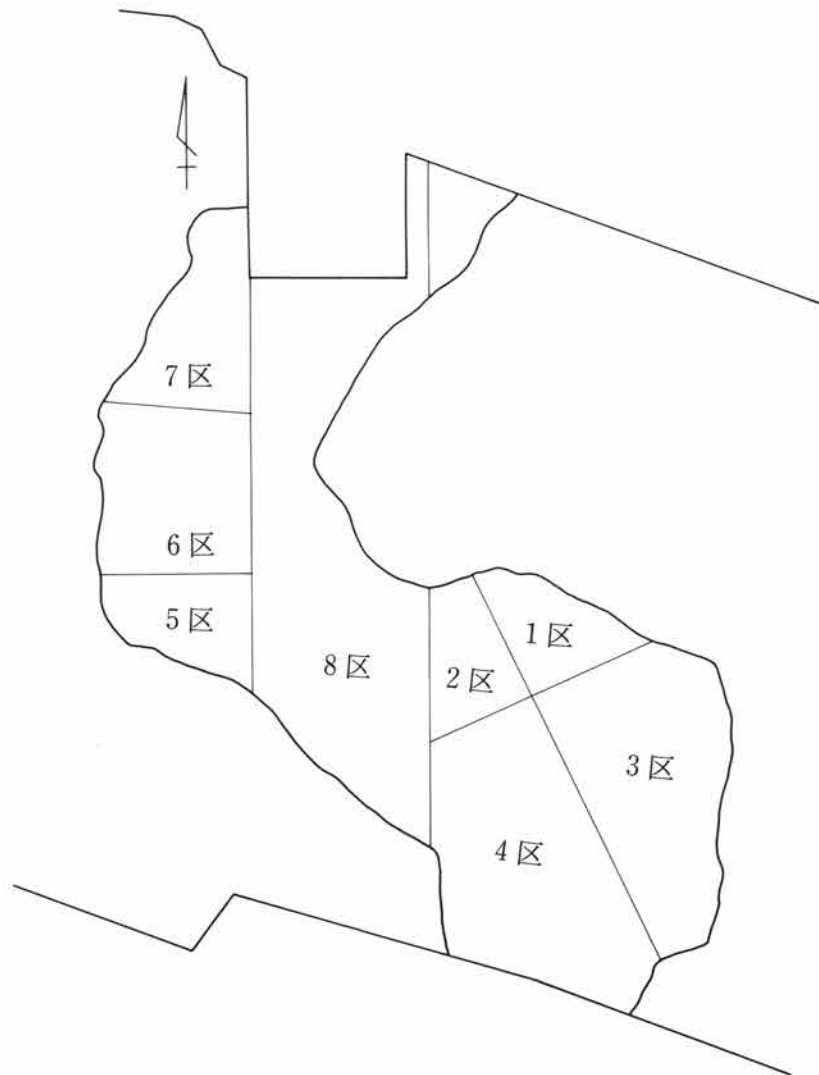
出土した遺物は大破片の占める割合が高く、とくに須恵器は遺存状態の良いものが多かった。土器は古墳時代後期のものから見られるが、点数は僅かで、8世紀初頭から9世紀にかけてのものが殆どである。10世紀以降の土器も少ない。これらのうち347点と羽

口・砥石・土錘の5点を図示した。

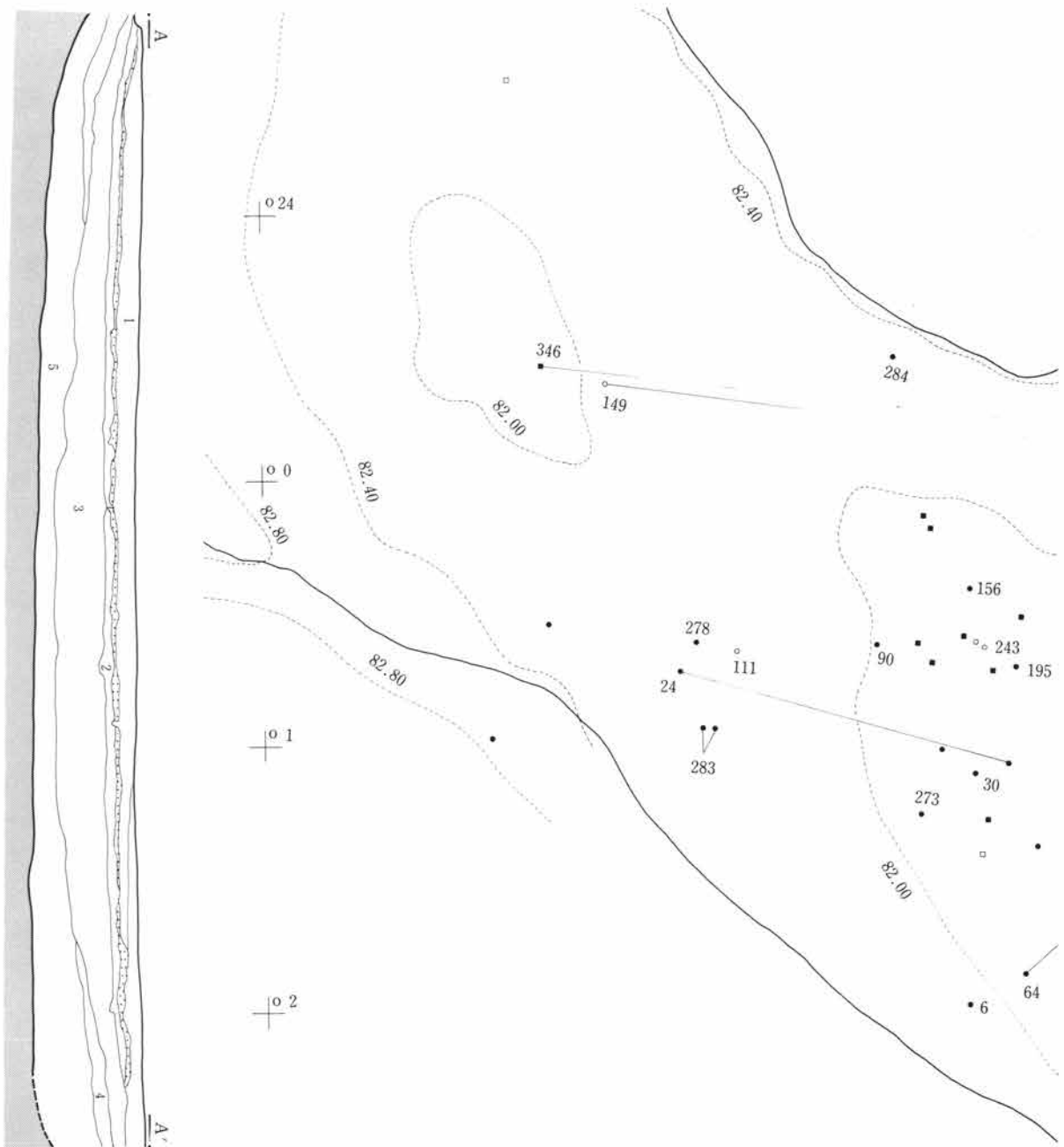
土器総量は重量で約410kgあり、集落の規模に比べて極めて多量である。杯類の占める割合が高く、全体重量の約65%におよび、集落出土遺物との違いが明瞭である。地区別では4区出土が圧倒的に多く、出土位置の明確な土器の約66%を占めている。

特筆すべきものに墨書土器が237点ある。その他に、漆の付着した土器破片、大型砥石、木製品等の出土がある。須恵器瓶類の量も多かった。

なお、発掘調査中に盗難があり、完形に近い杯類数点を失っている。



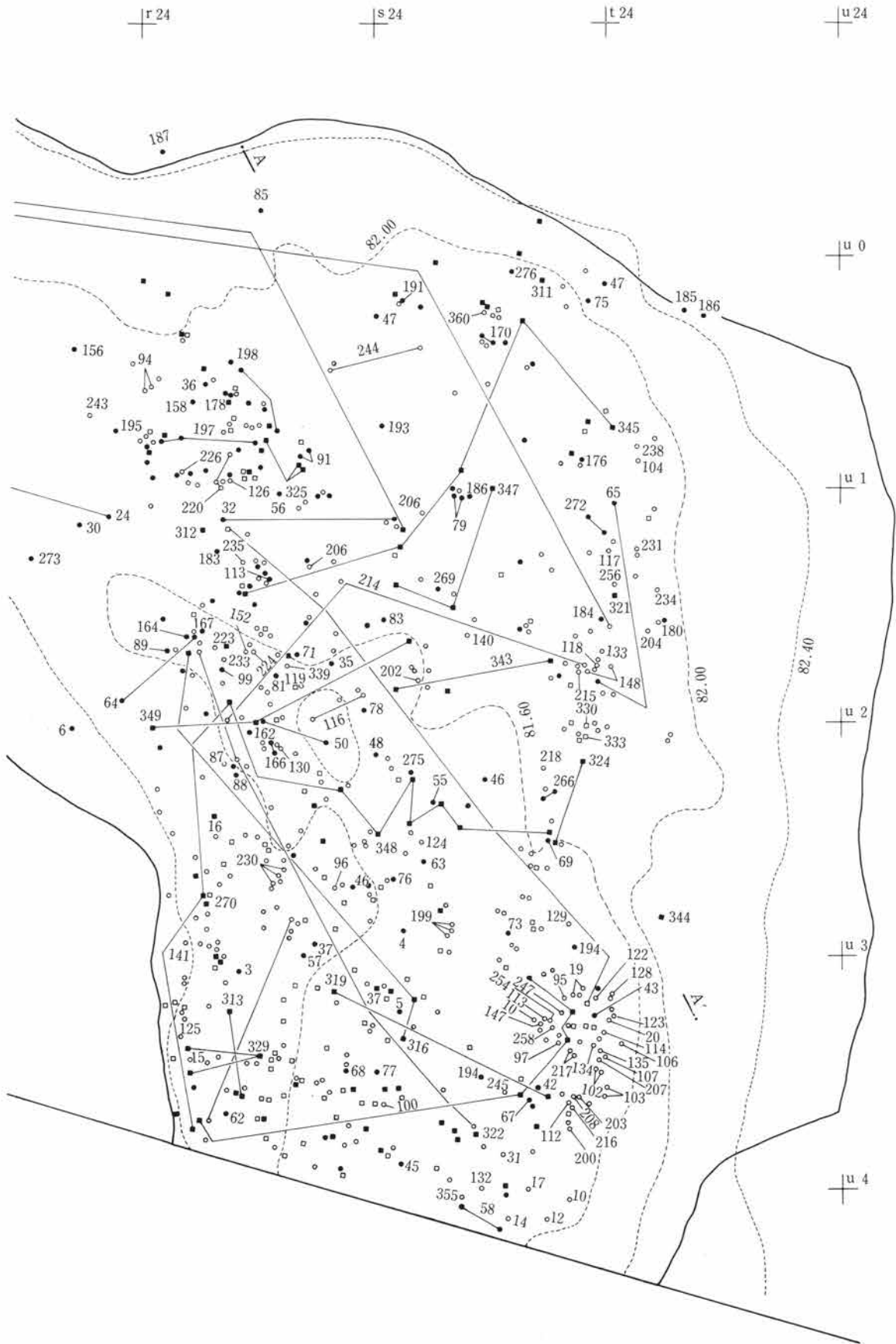
第40図 窪地・区分割図

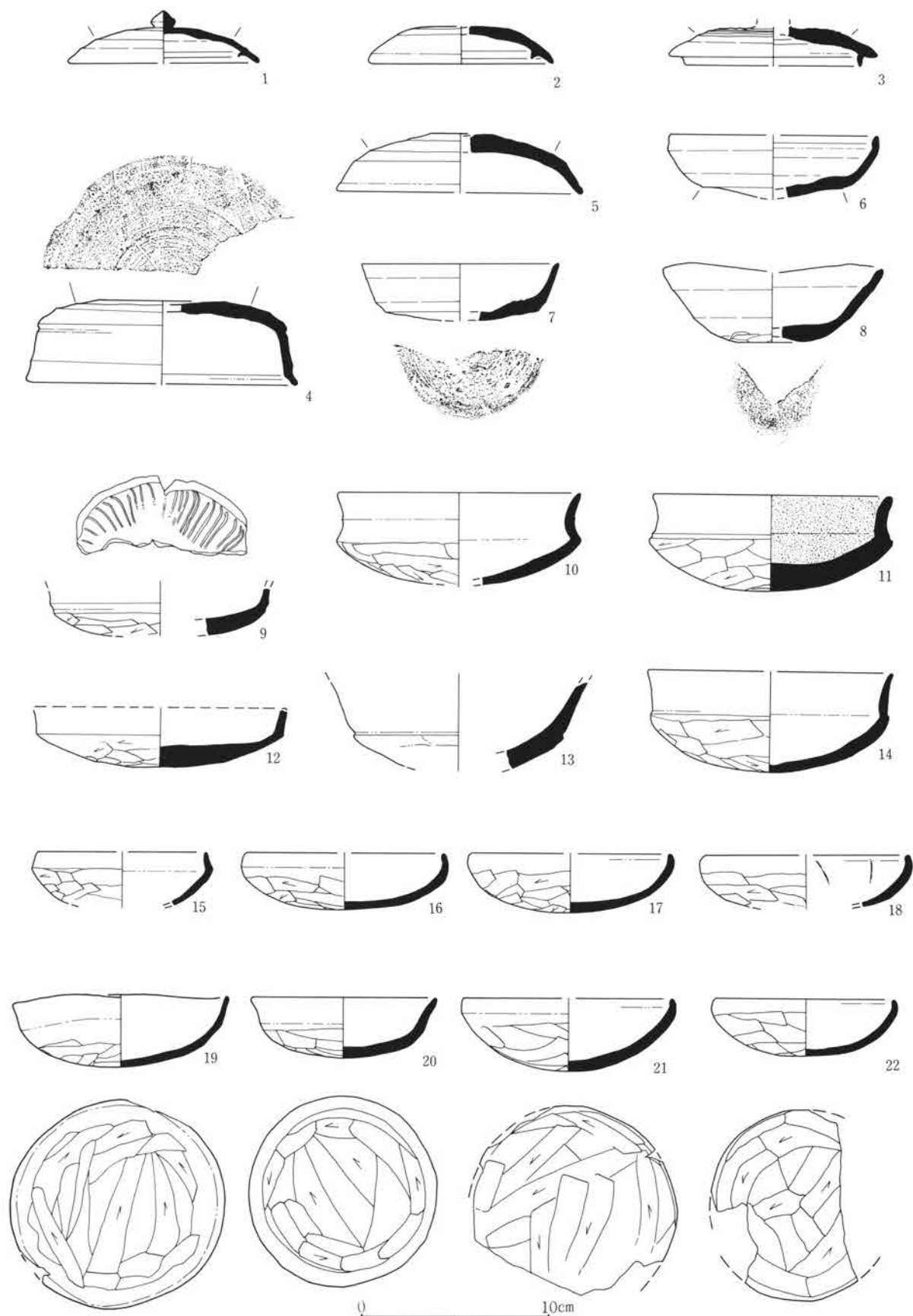


土層説明

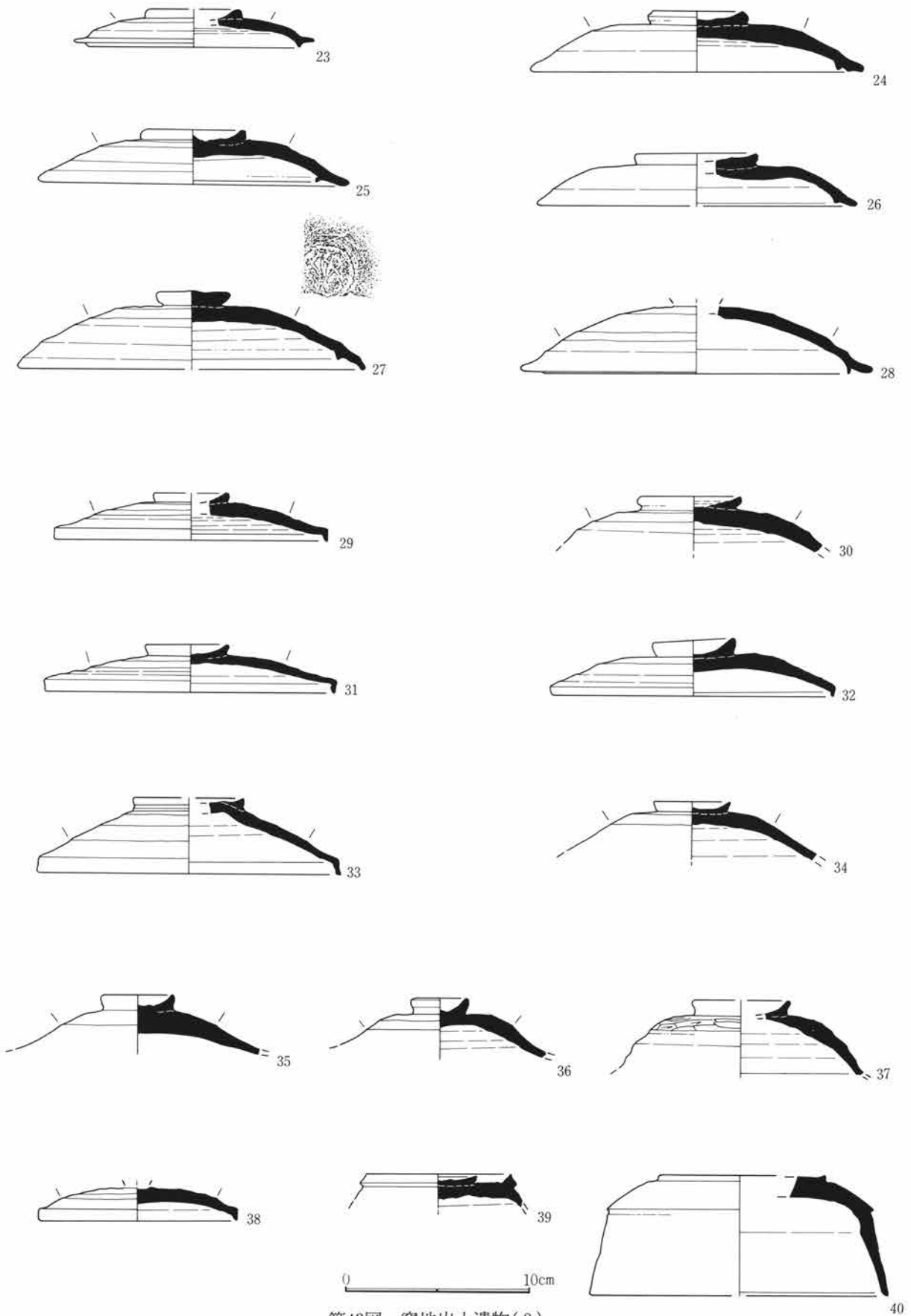
- 1層 旧耕作土層。
- 2層 黒褐色土層。粒子が細かく、しまり、粘性とも強い層。  
As-B層上から鋤き込まれた痕跡は見られない。遺物の混入はきわめて少ない。
- 3層 暗褐色土層。2層から漸移的色調が明るくなる。上半では焼土、カーボン等の混入やや多い。中層から遺物の出土が際立って多くなる。下層では礫の混入が多くなる。
- 4層 灰褐色土層。シルト質土中心で一部でシルト質土と砂質土がラミナ状に堆積している。遺物は少ない。
- 5層 暗褐色土層。3層土中に多量の礫が混入している。斑鉄が見られる。遺物はやや少ない。

第41図 窪地遺物出土状態分布図

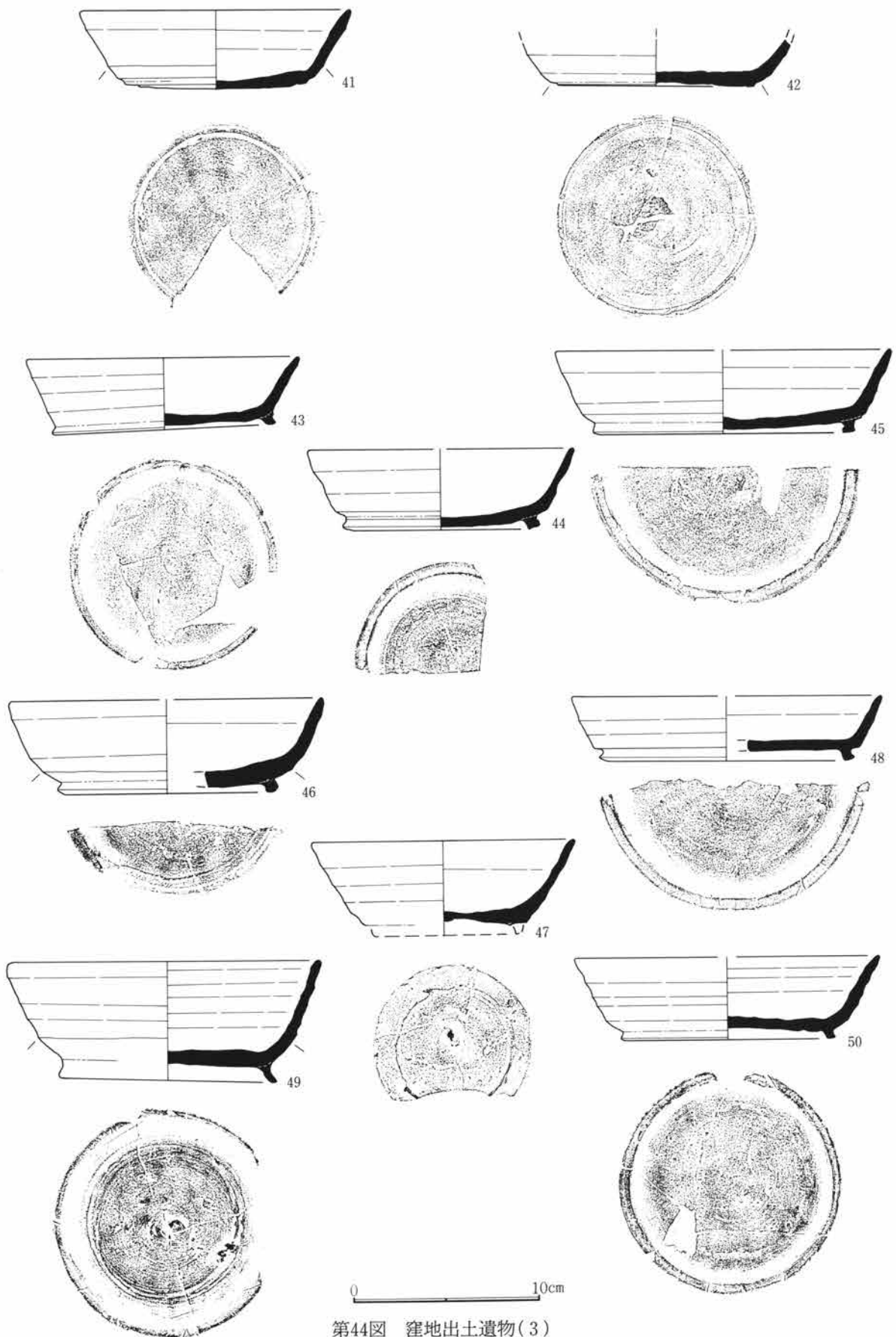




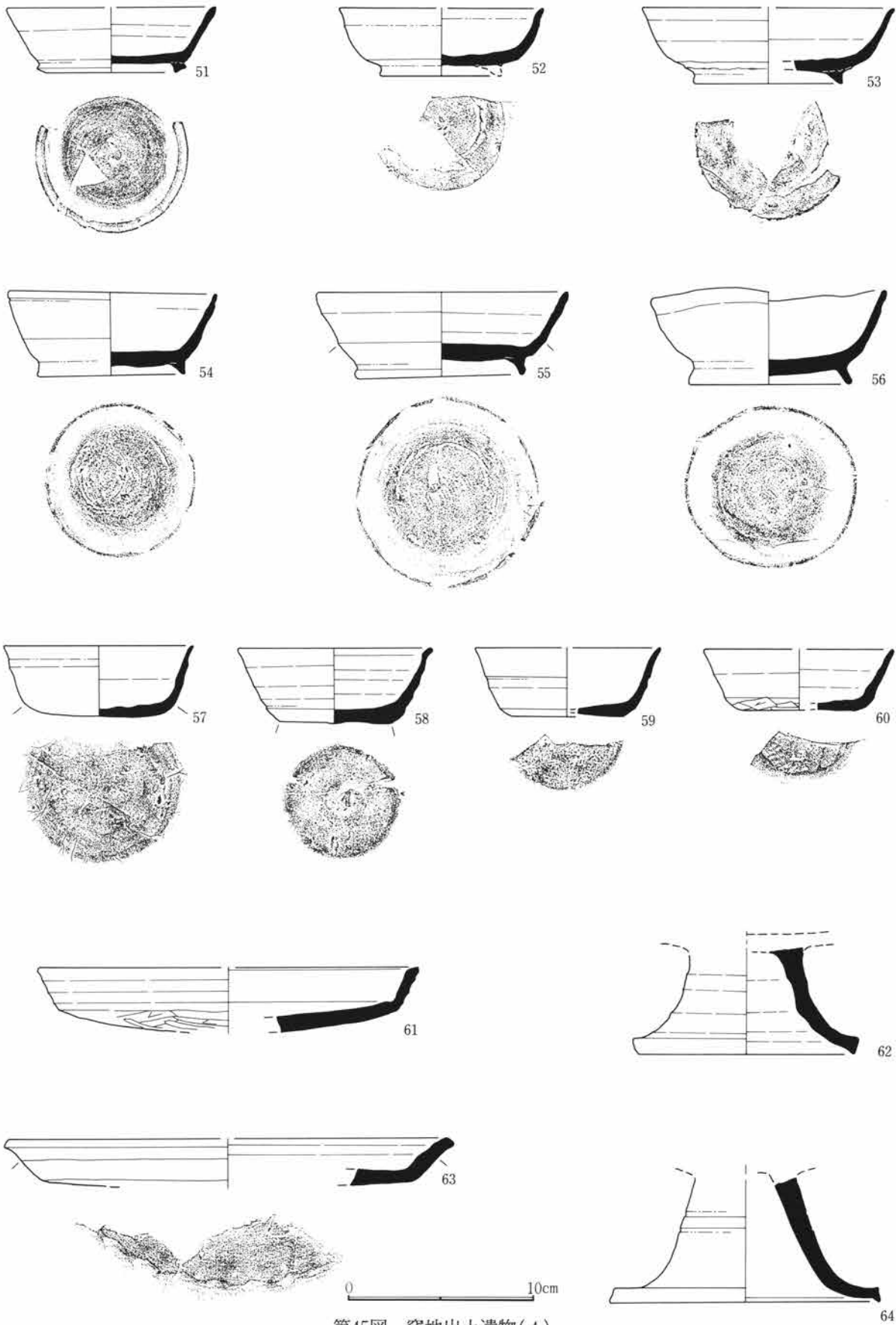
第42図 窪地出土遺物(1)



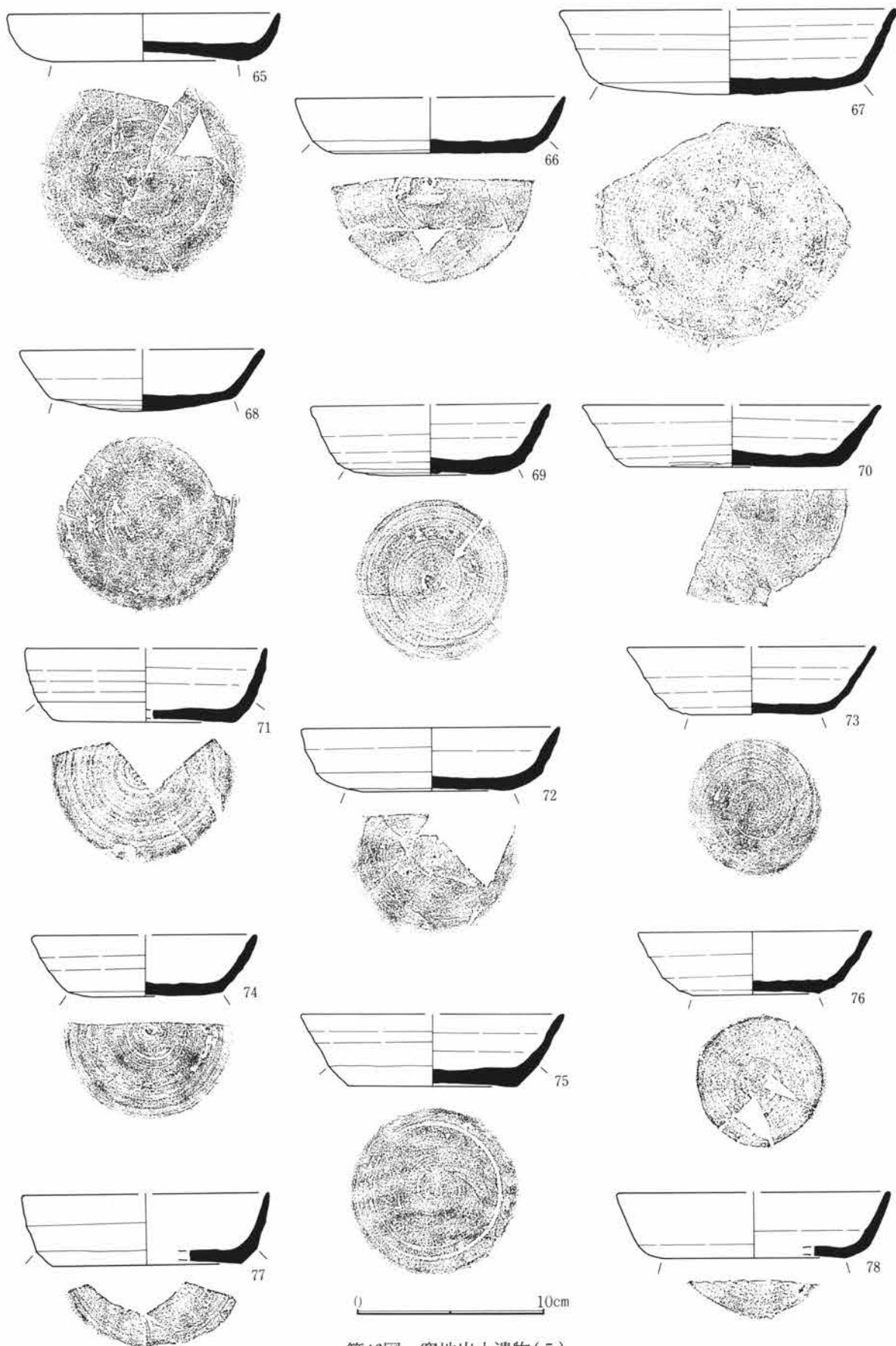
第43図 窪地出土遺物(2)



第44図 窪地出土遺物(3)

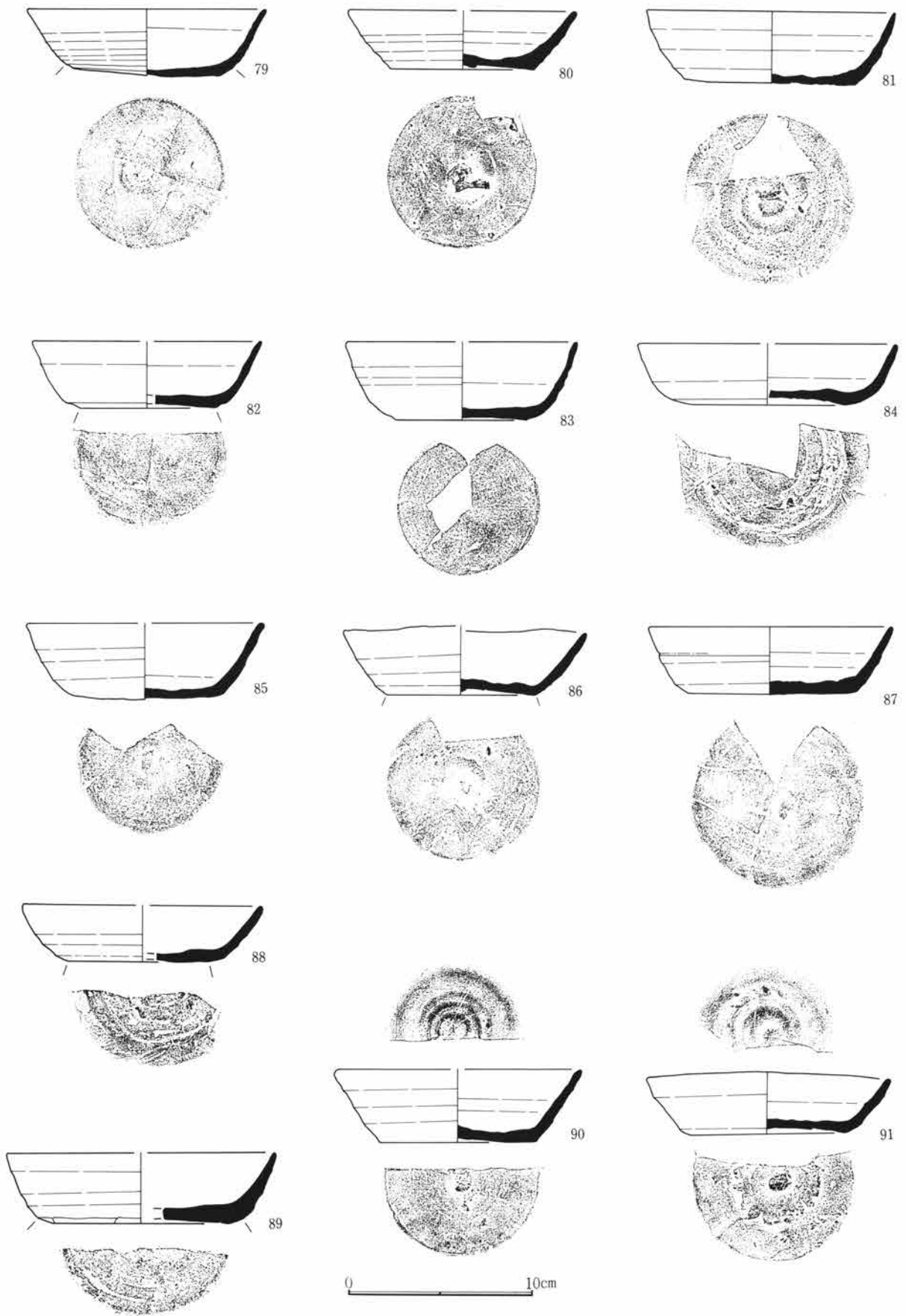


第45図 窪地出土遺物(4)



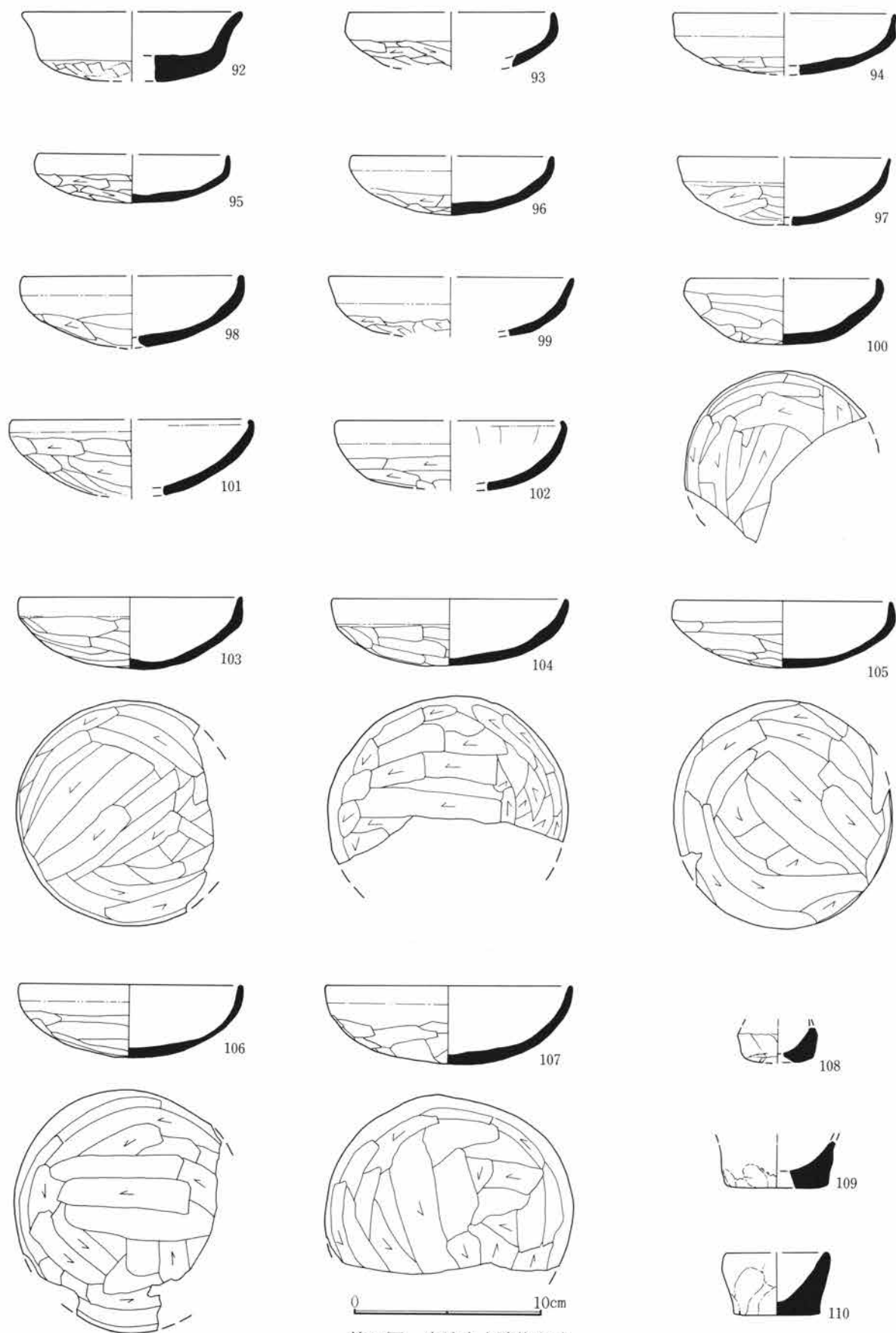
第46図 窪地出土遺物(5)



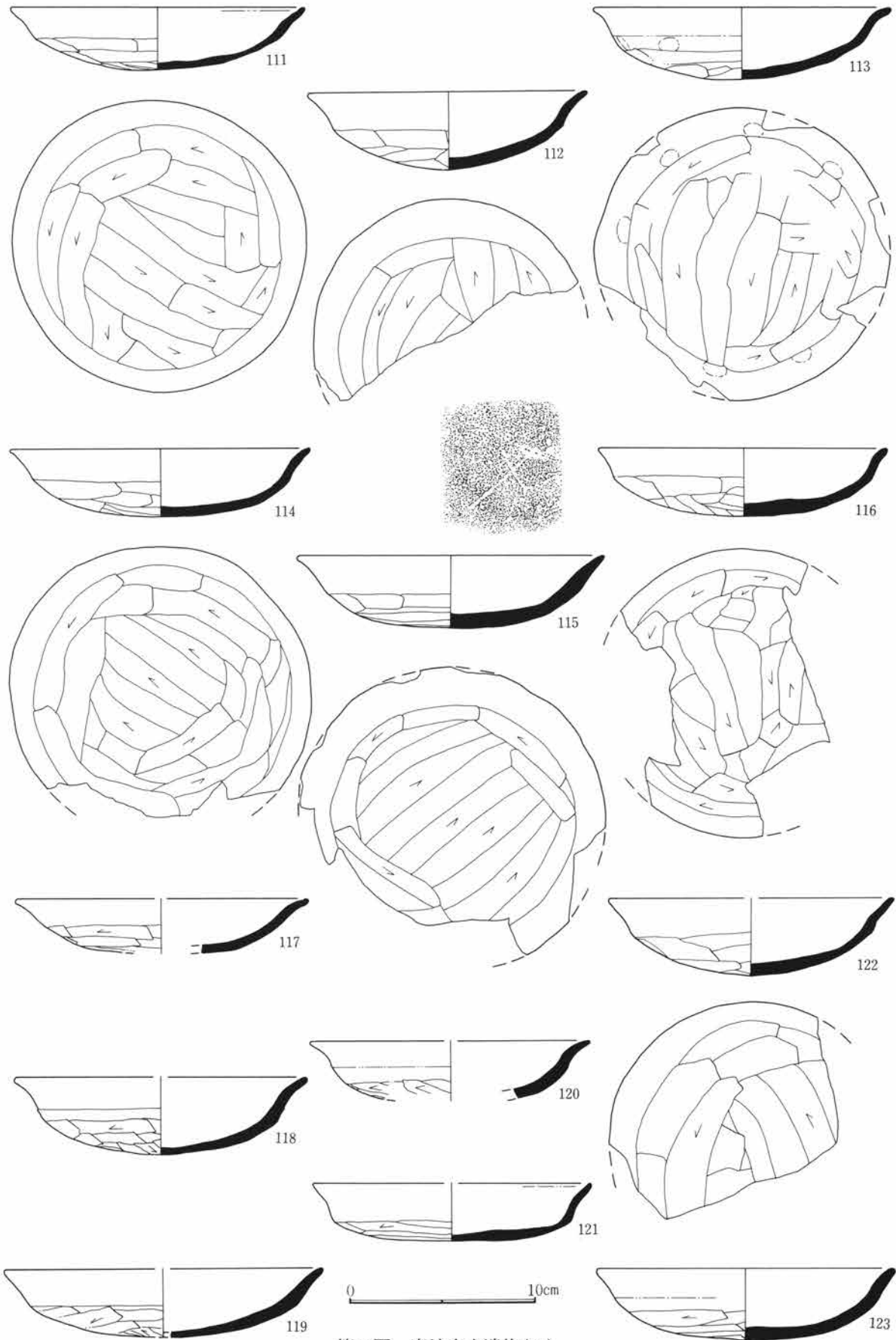


第47図 窪地出土遺物(6)

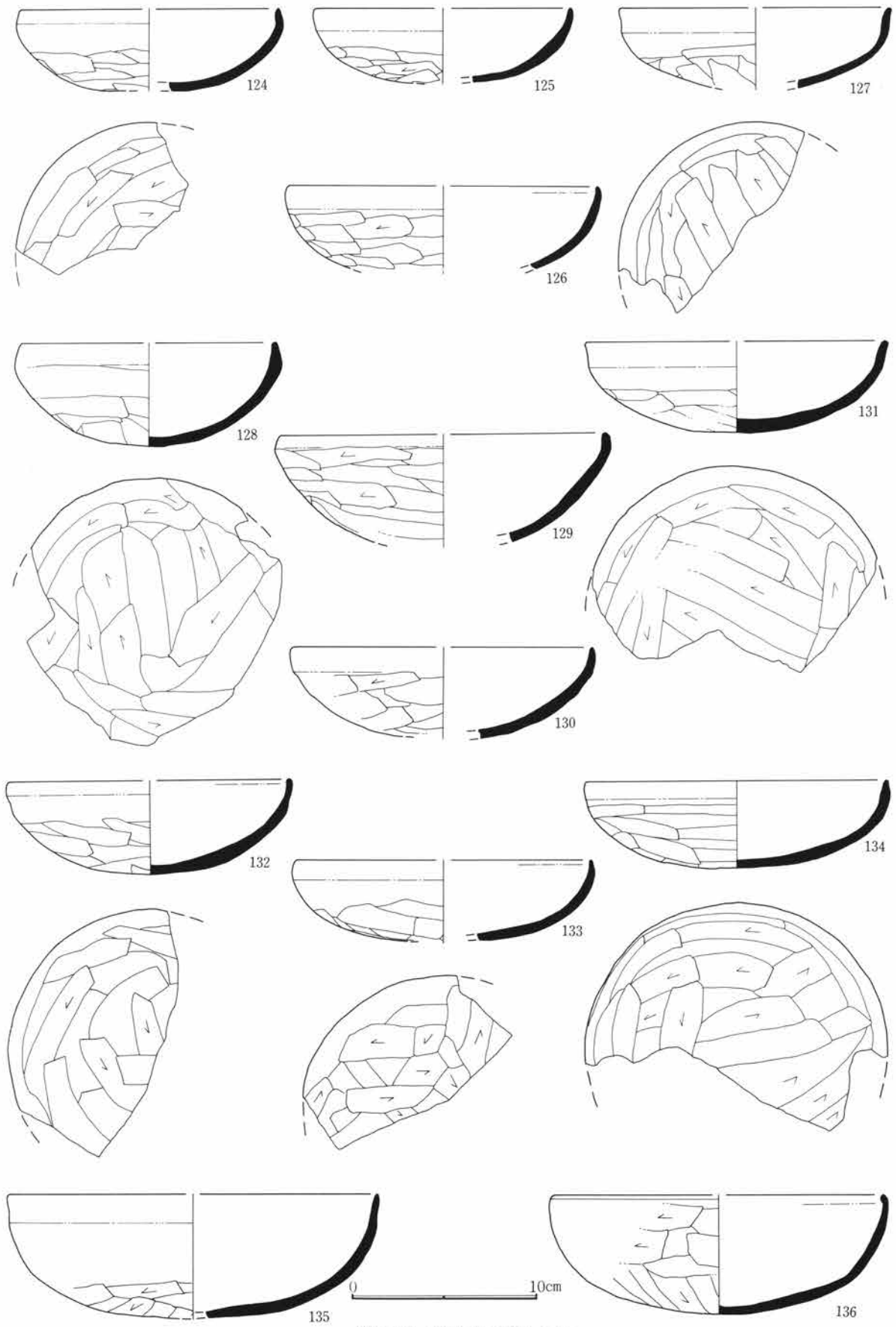
第3章 検出した遺構と遺物



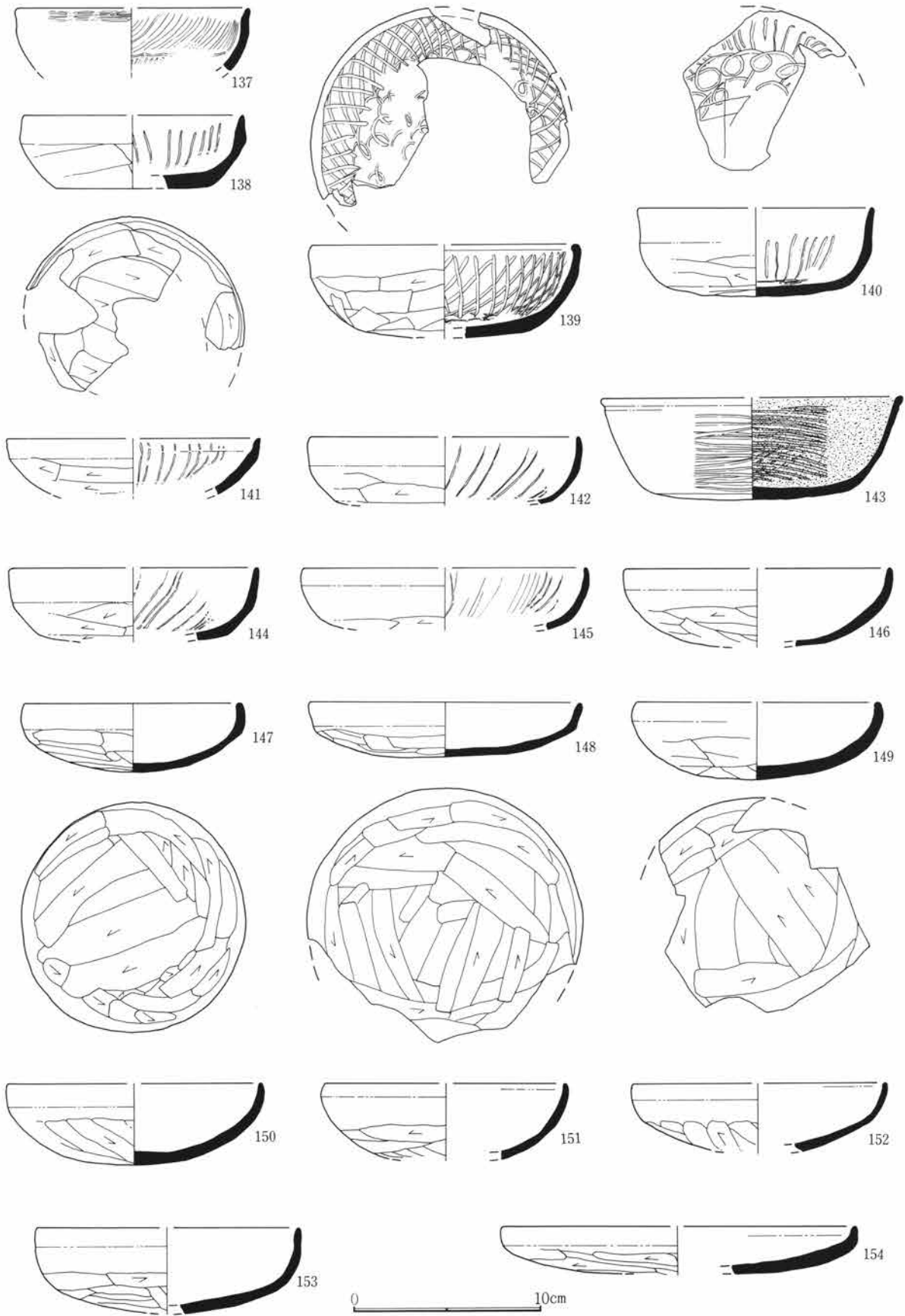
第48図 窪地出土遺物(7)



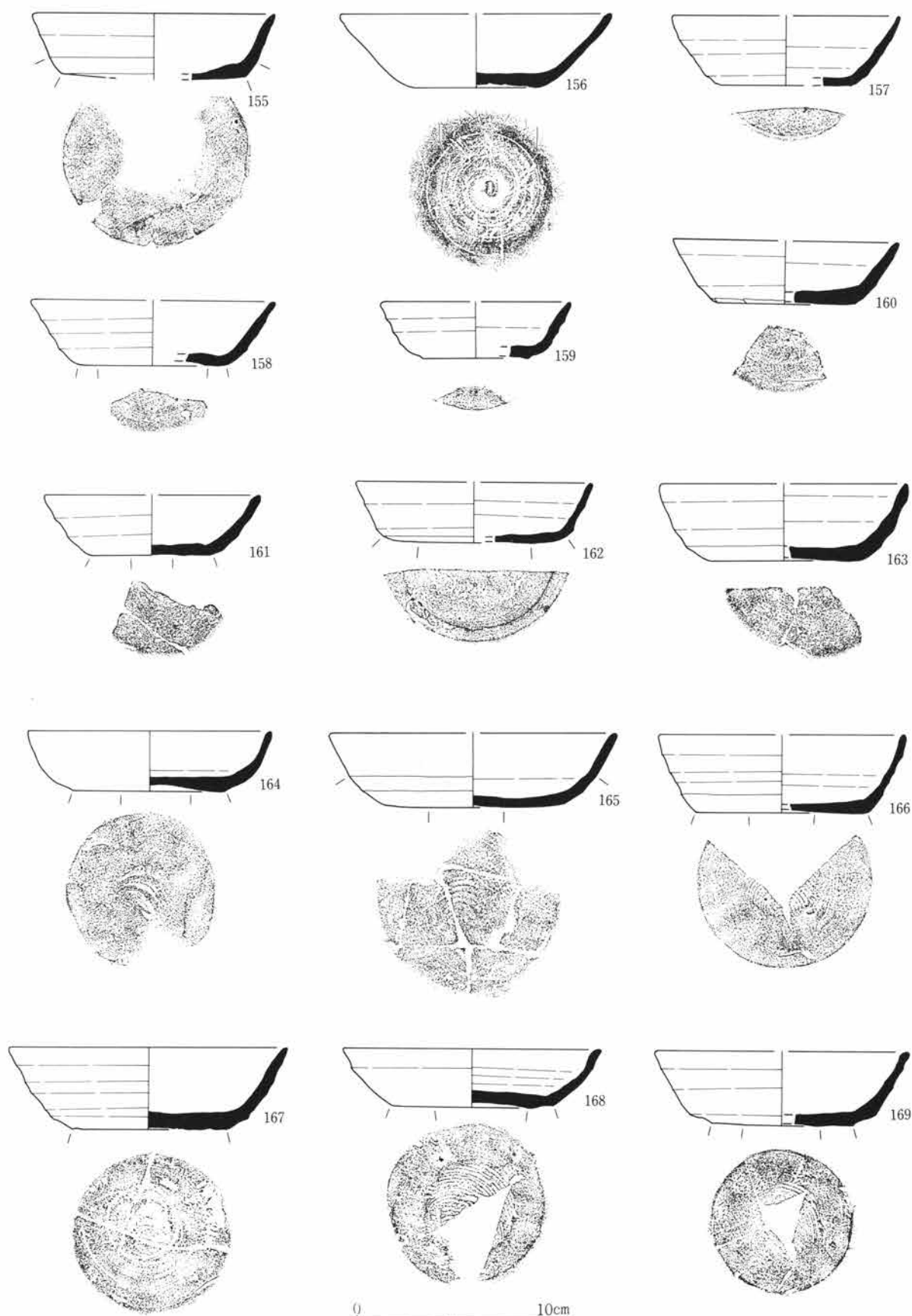
第49図 窪地出土遺物(8)



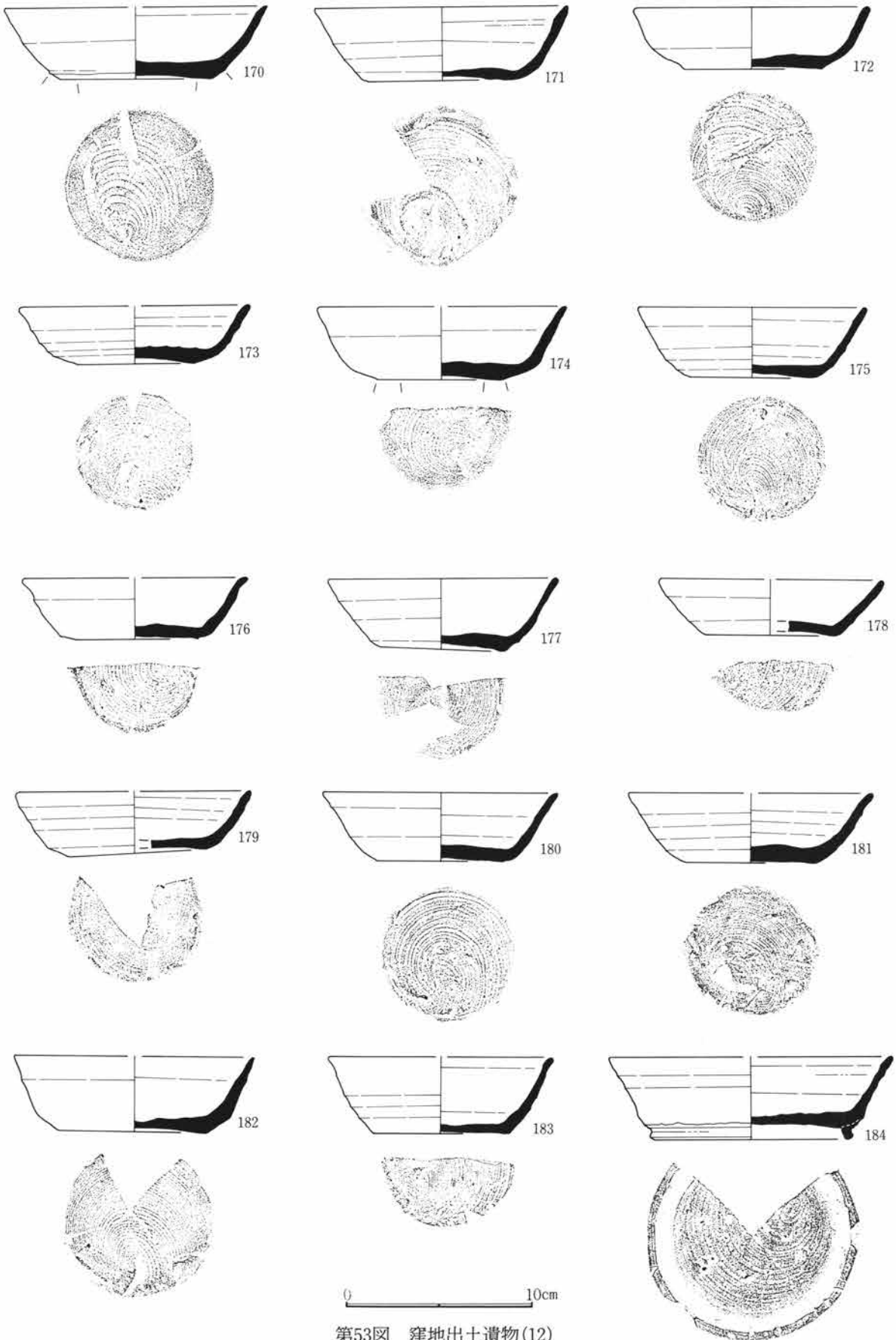
第50図 窪地出土遺物(9)



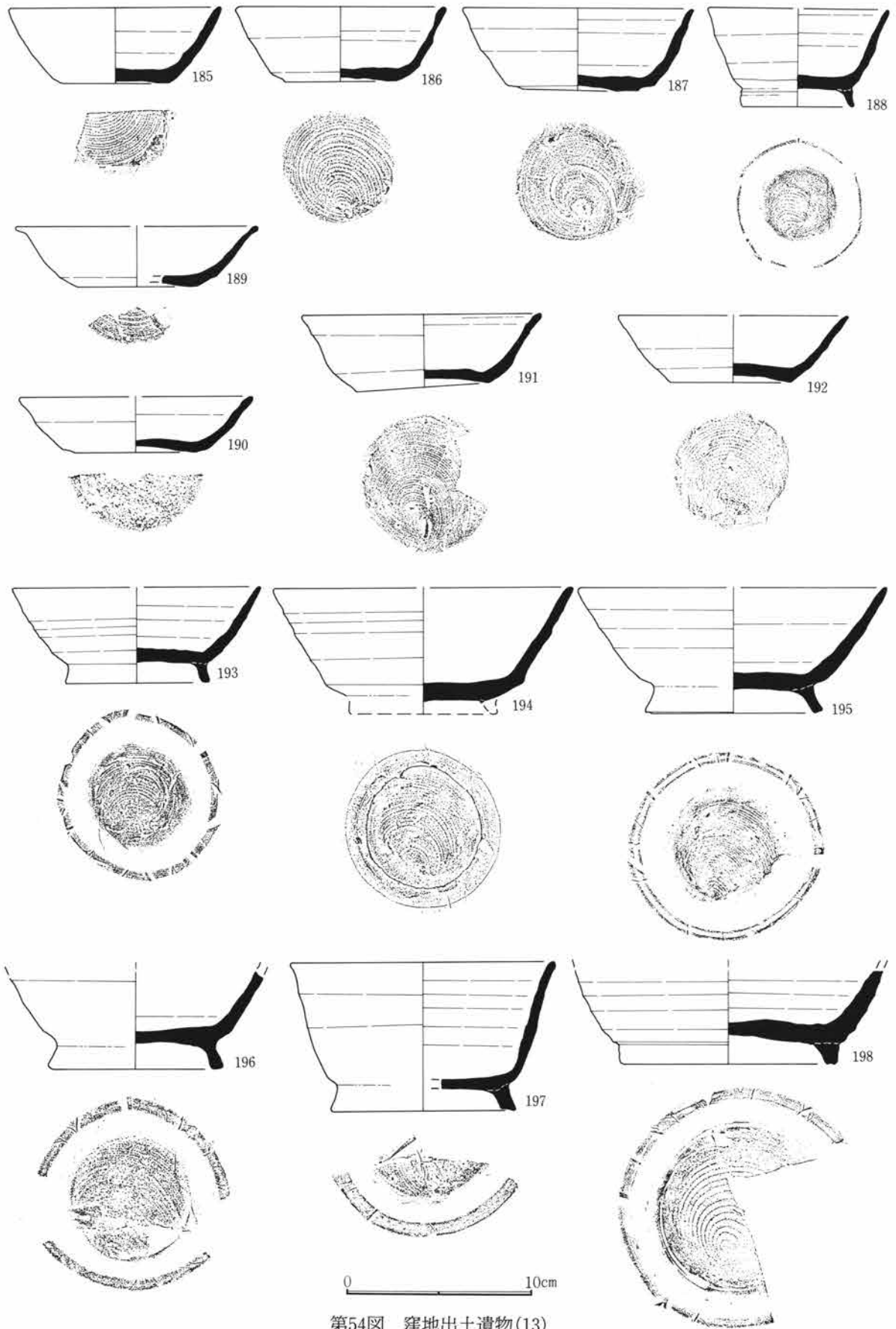
第51図 窪地出土遺物(10)



第52図 窪地出土遺物(11)

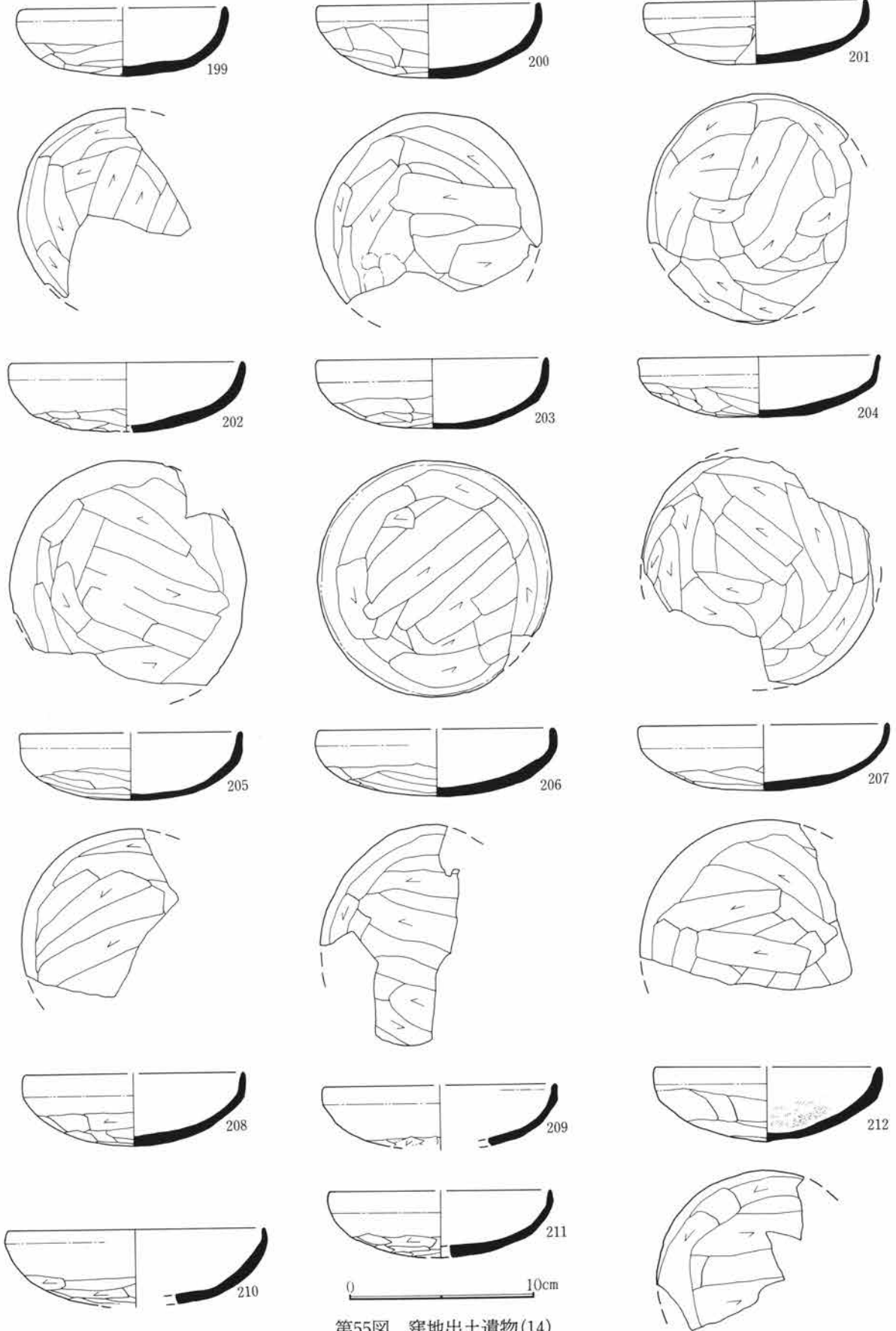


第53図 窪地出土遺物(12)



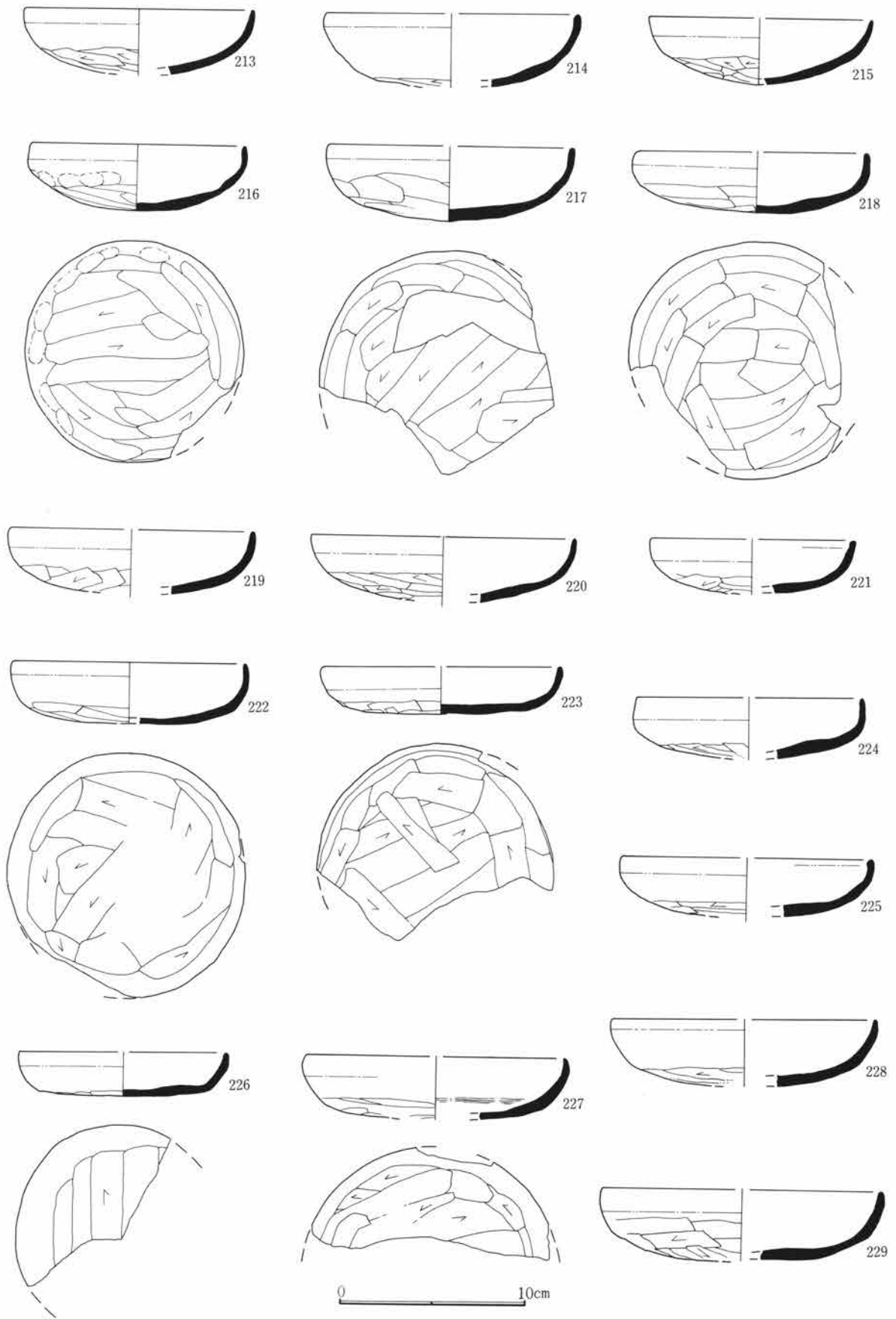
第54図 窪地出土遺物(13)



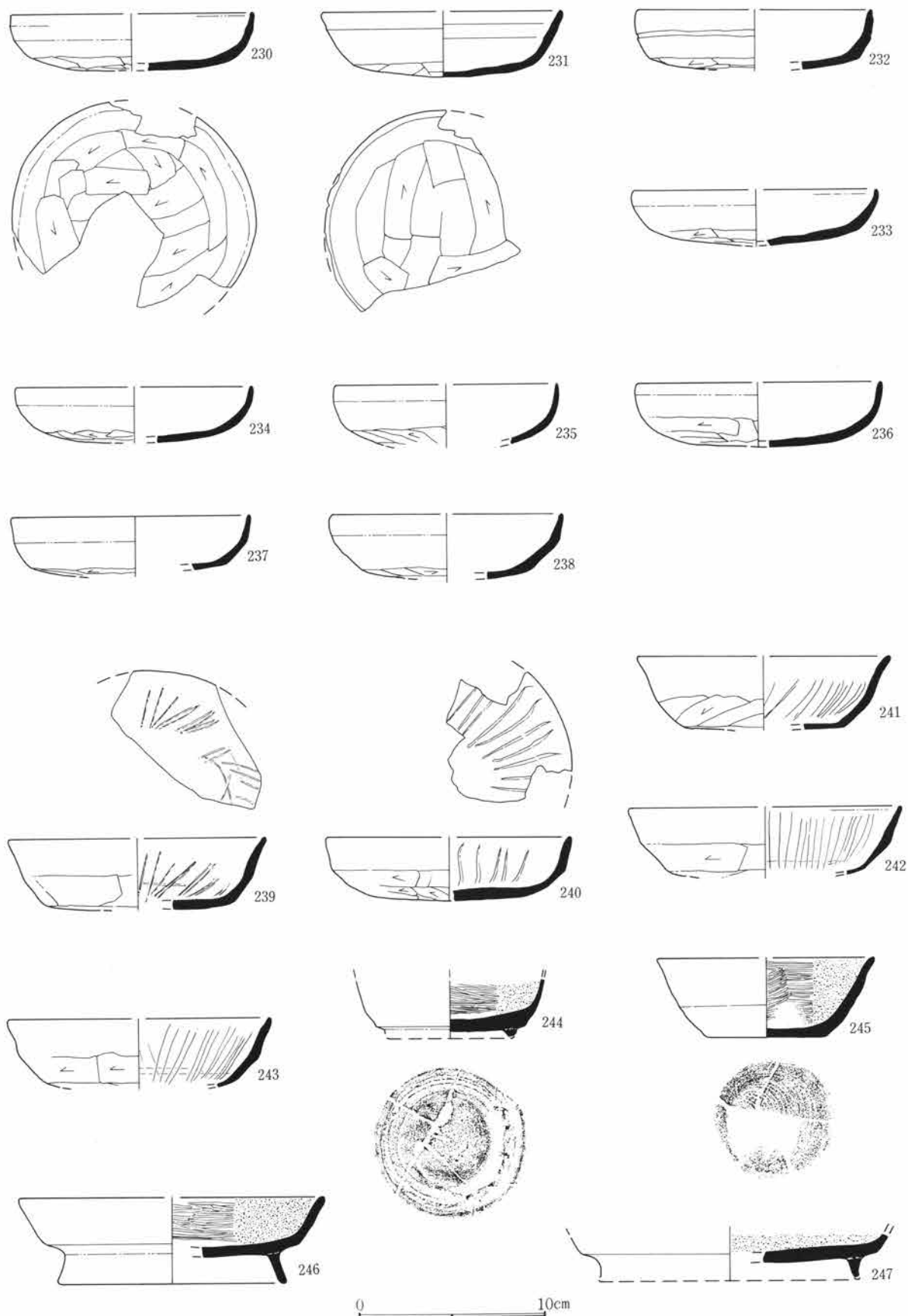


第55図 窪地出土遺物(14)

第3章 検出した遺構と遺物

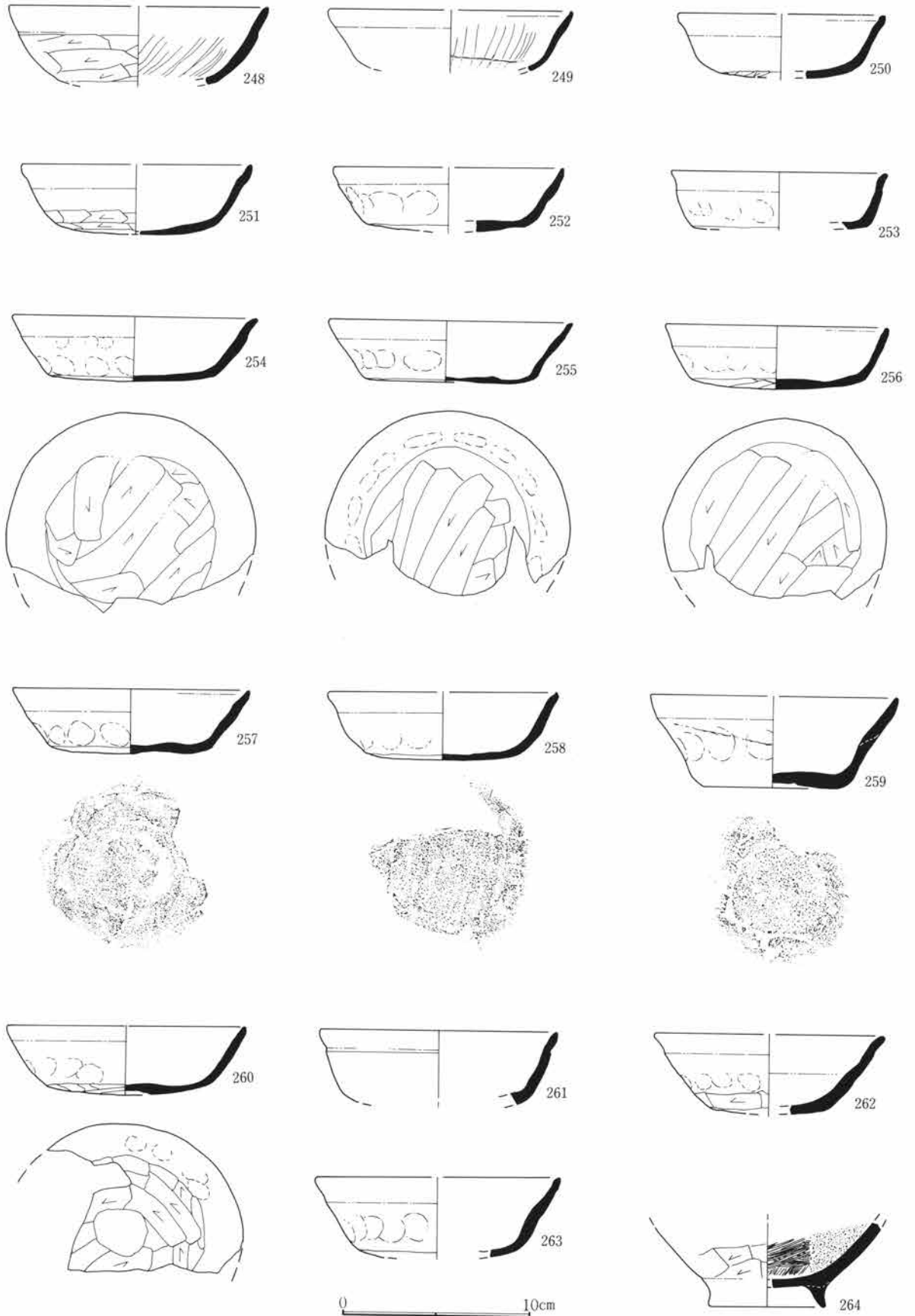


第56図 窪地出土遺物(15)

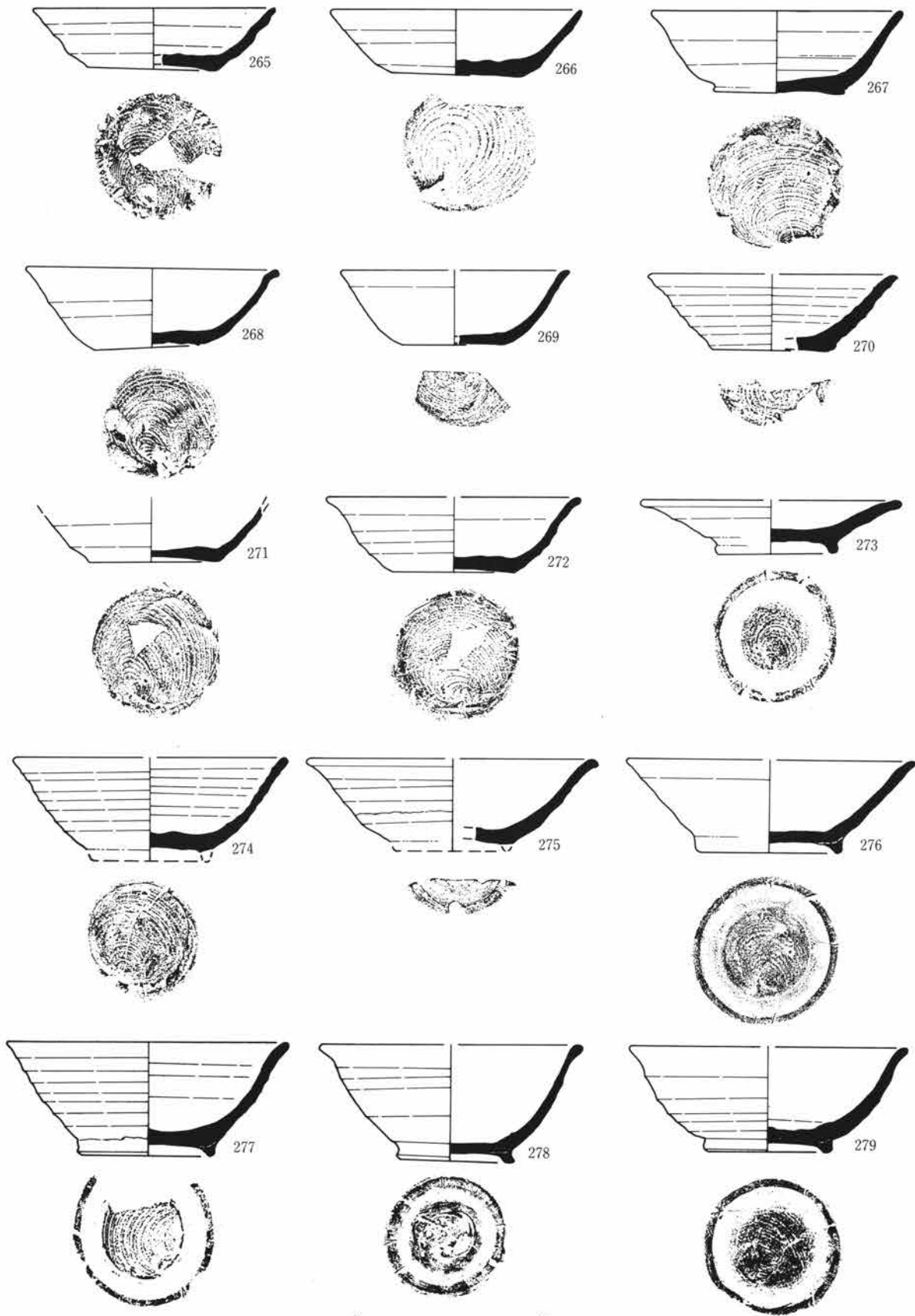


第57図 窪地出土遺物(16)

第3章 検出した遺構と遺物



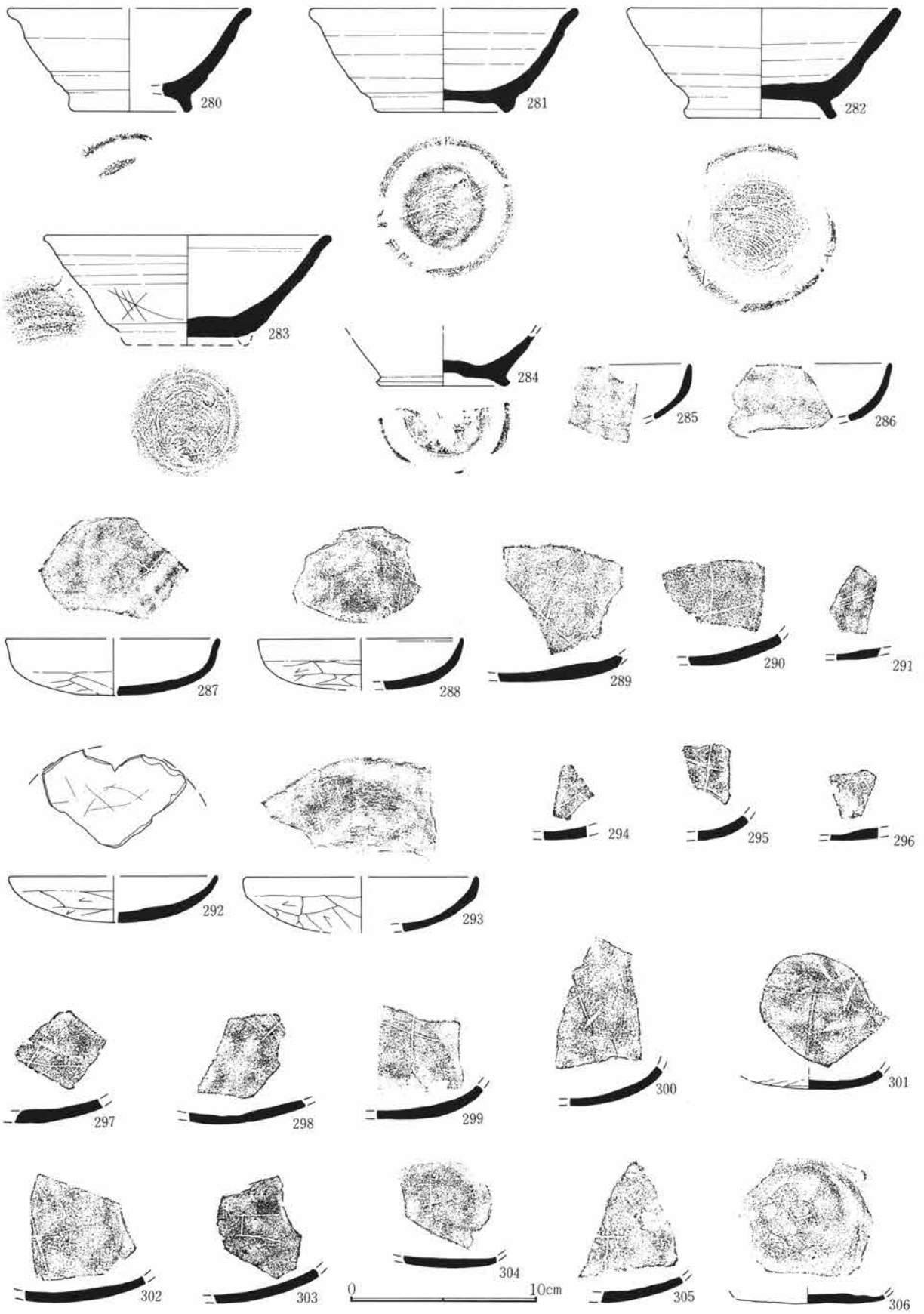
第58図 窪地出土遺物(17)



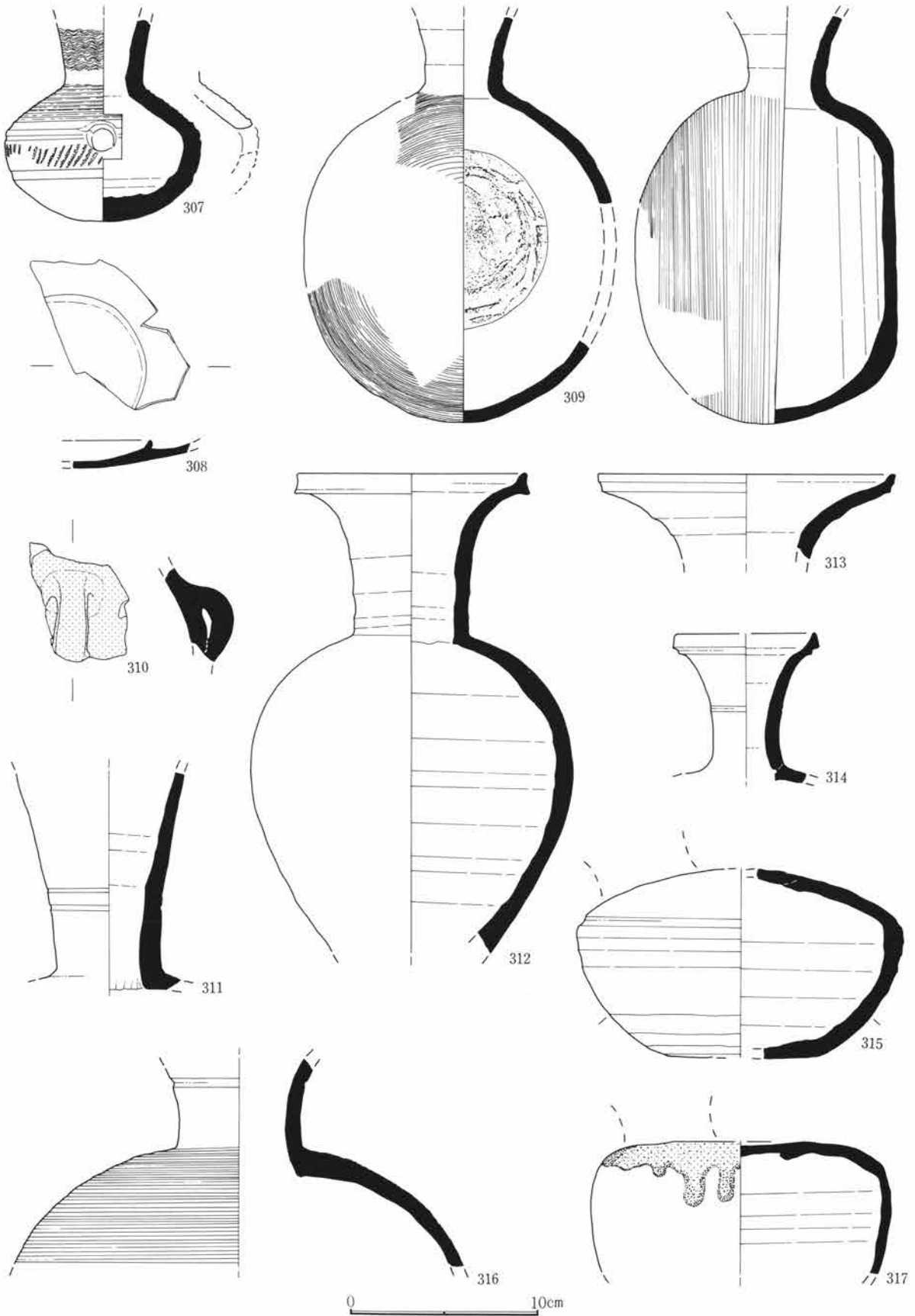
0 10cm

第59図 窪地出土遺物(18)

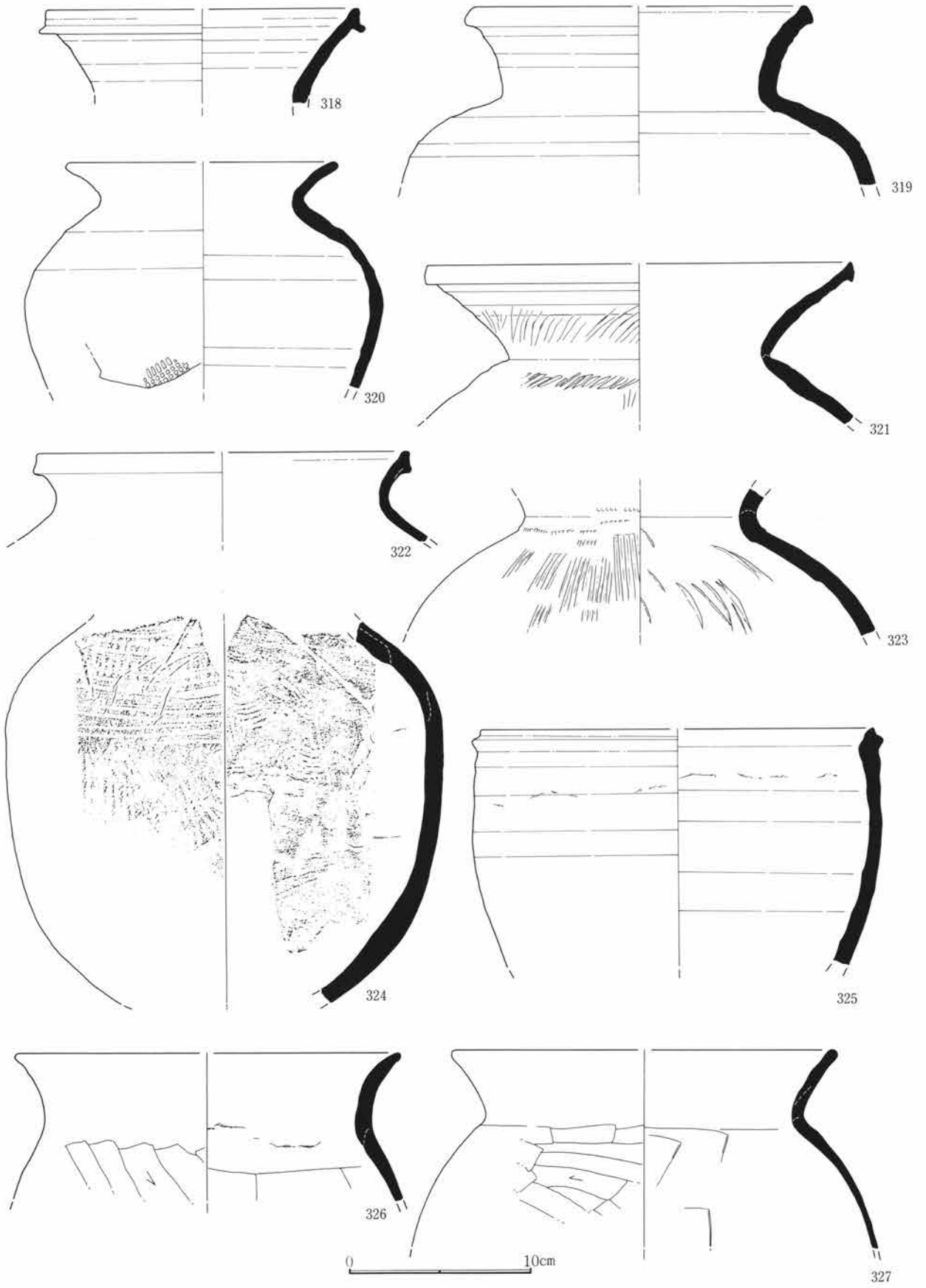
第3章 検出した遺構と遺物



第60図 窪地出土遺物(19)

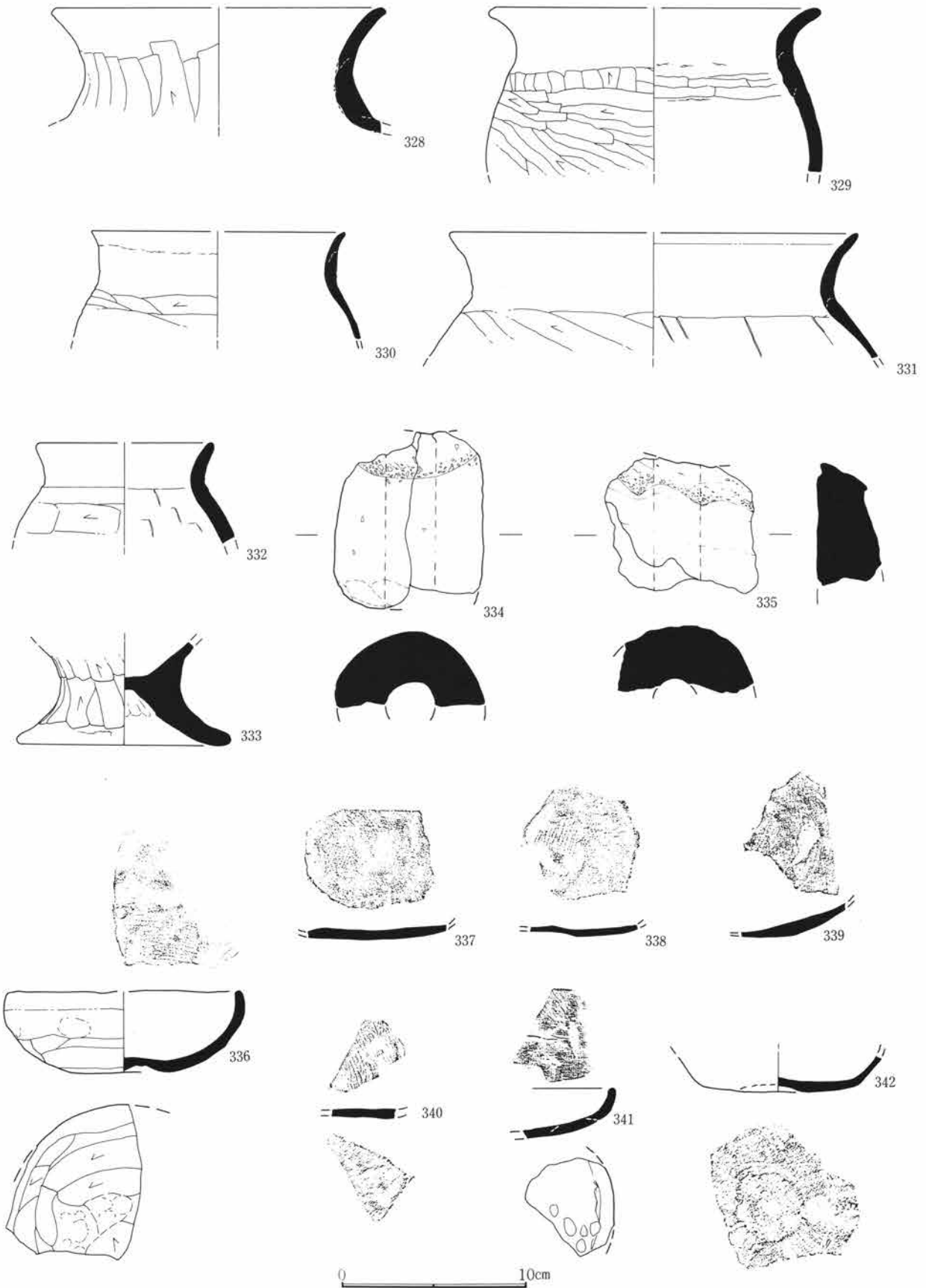


第61図 窪地出土遺物(20)

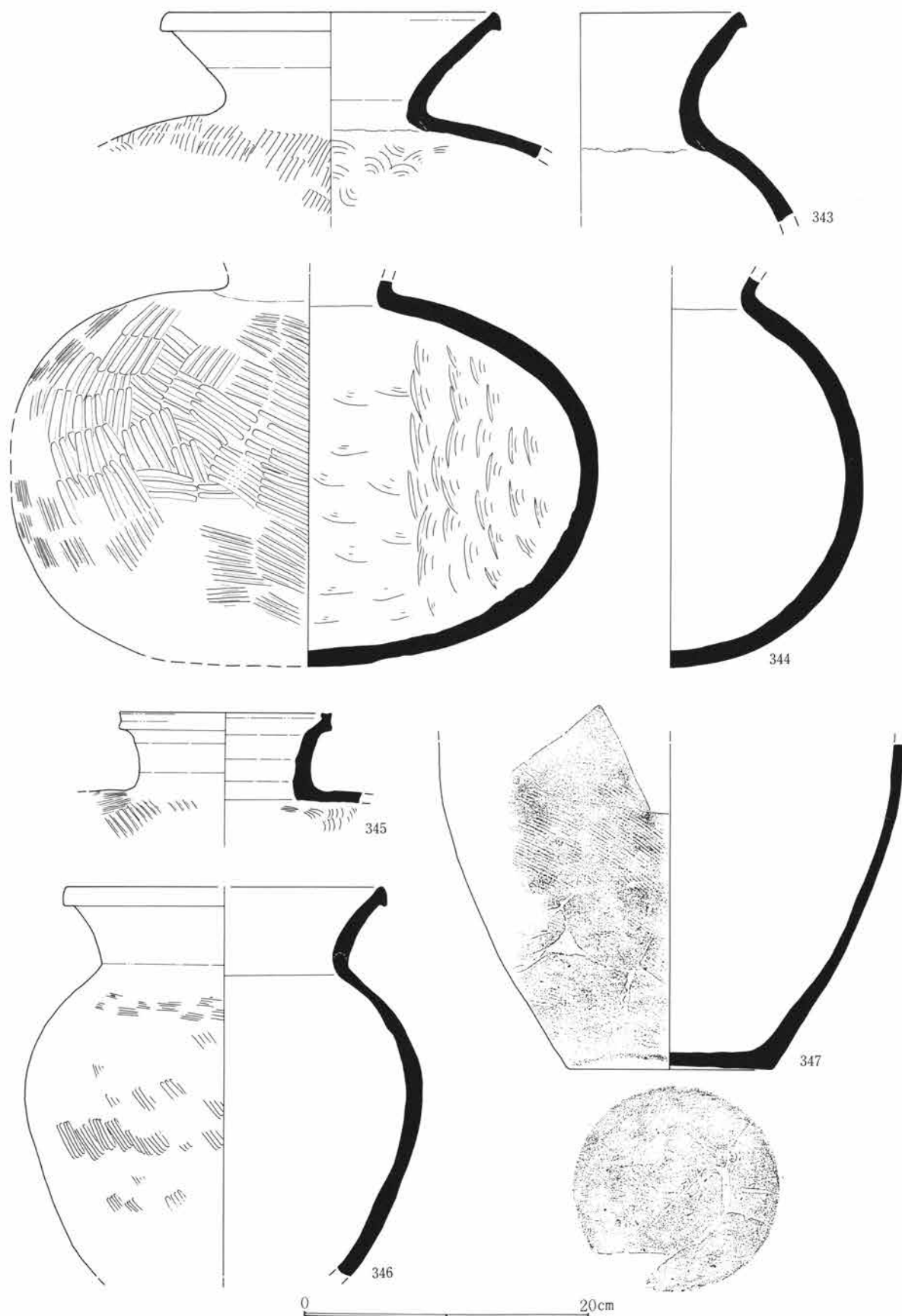


第62図 窪地出土遺物(21)

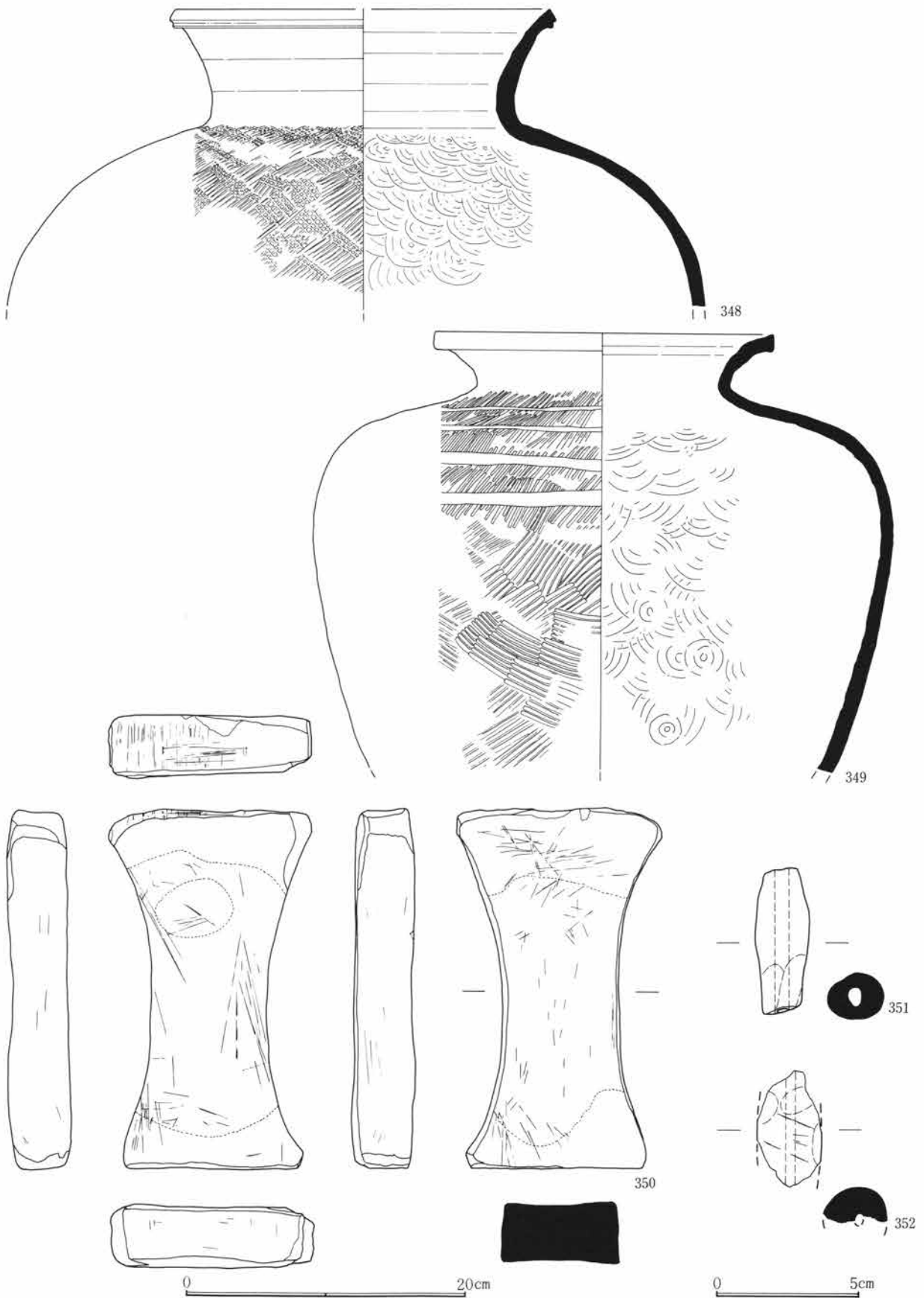




第63図 窪地出土遺物(22)



第64図 窪地出土遺物(23)



第65図 窪地出土遺物(24)

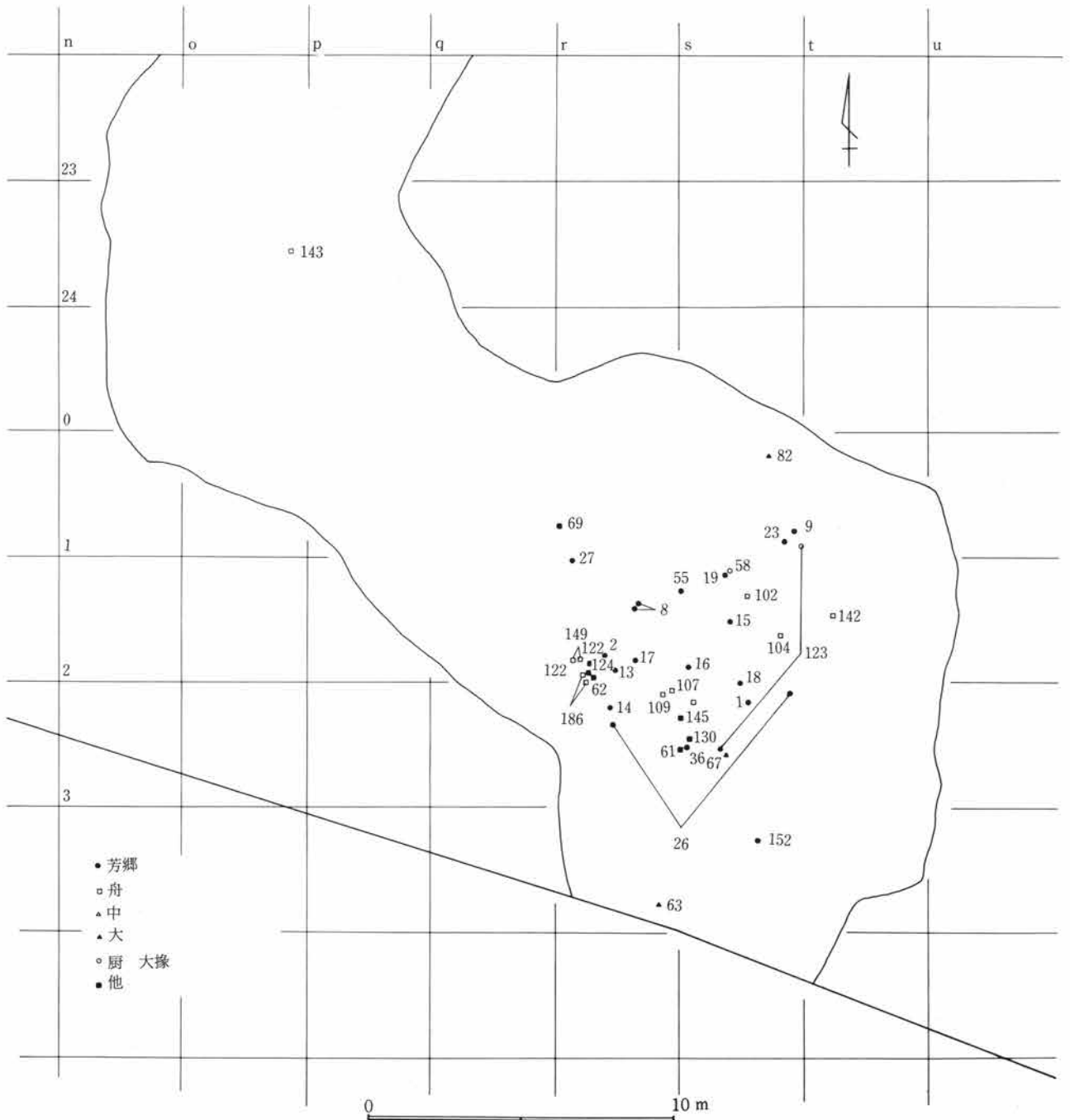
窪地出土の墨書土器

(P L-15・16・27～ 表29)

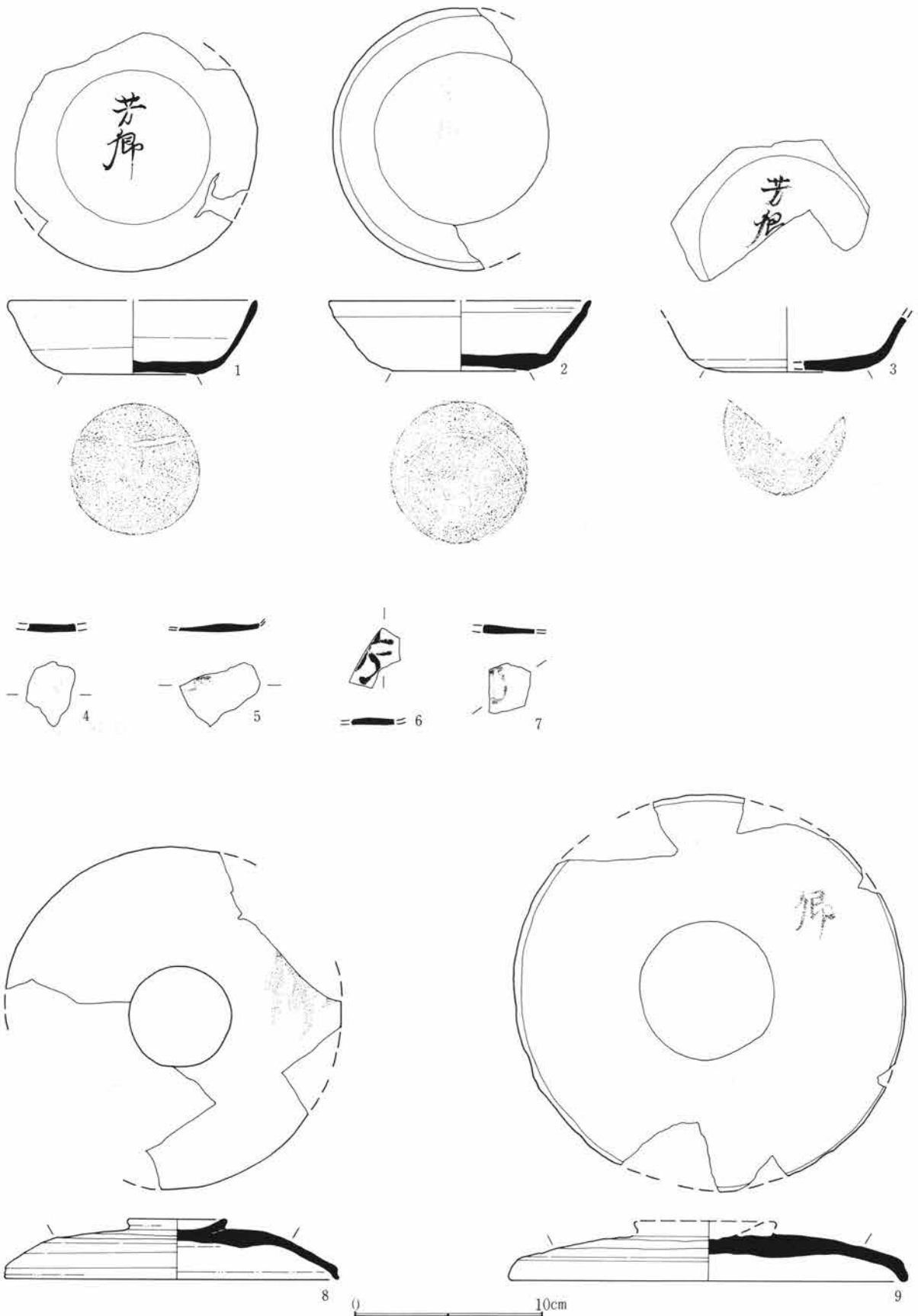
窪地出土土器のうち、墨書の記されたものを、ここで一括して掲載した。蓋6点以外は杯・椀類で、総数237個体、墨書面数である。群馬県内でも墨書土器が最も集中して出土した地点であろう。遺物のドットを第66図に示したが、墨書の文字による出土

位置の傾向などは看取できない。文字の不鮮明なものも多く、積文は大半が不明であったが、「郷」と思われるもの51点、「中」の18点、「大」の24点、「舟」または「舟人」の17点などの数の多さが特に目立っている。

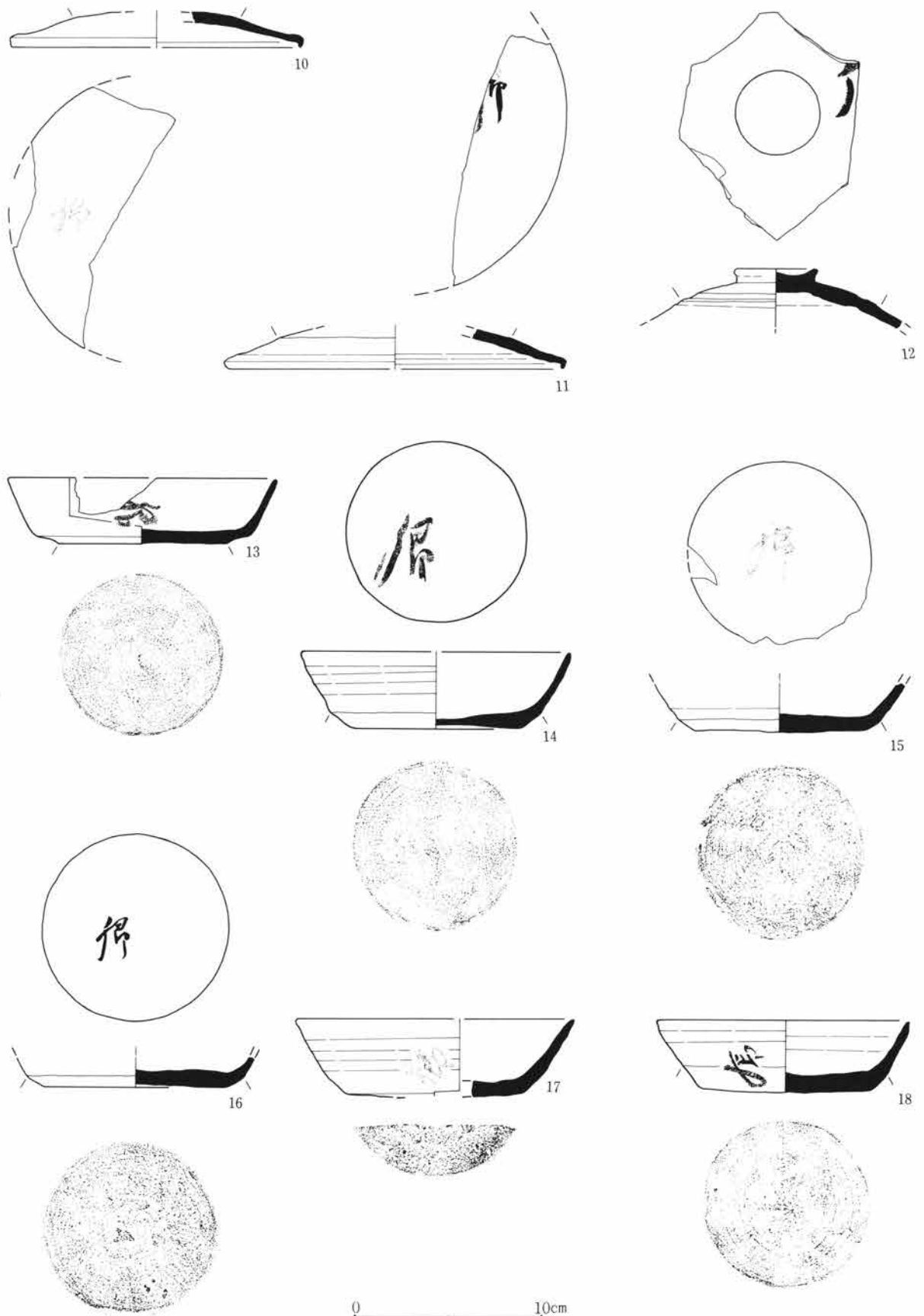
図示した以外にも、文字の記された可能性のある土器の破片が約30点出土している。



第66図 墨書土器出土状態分布図

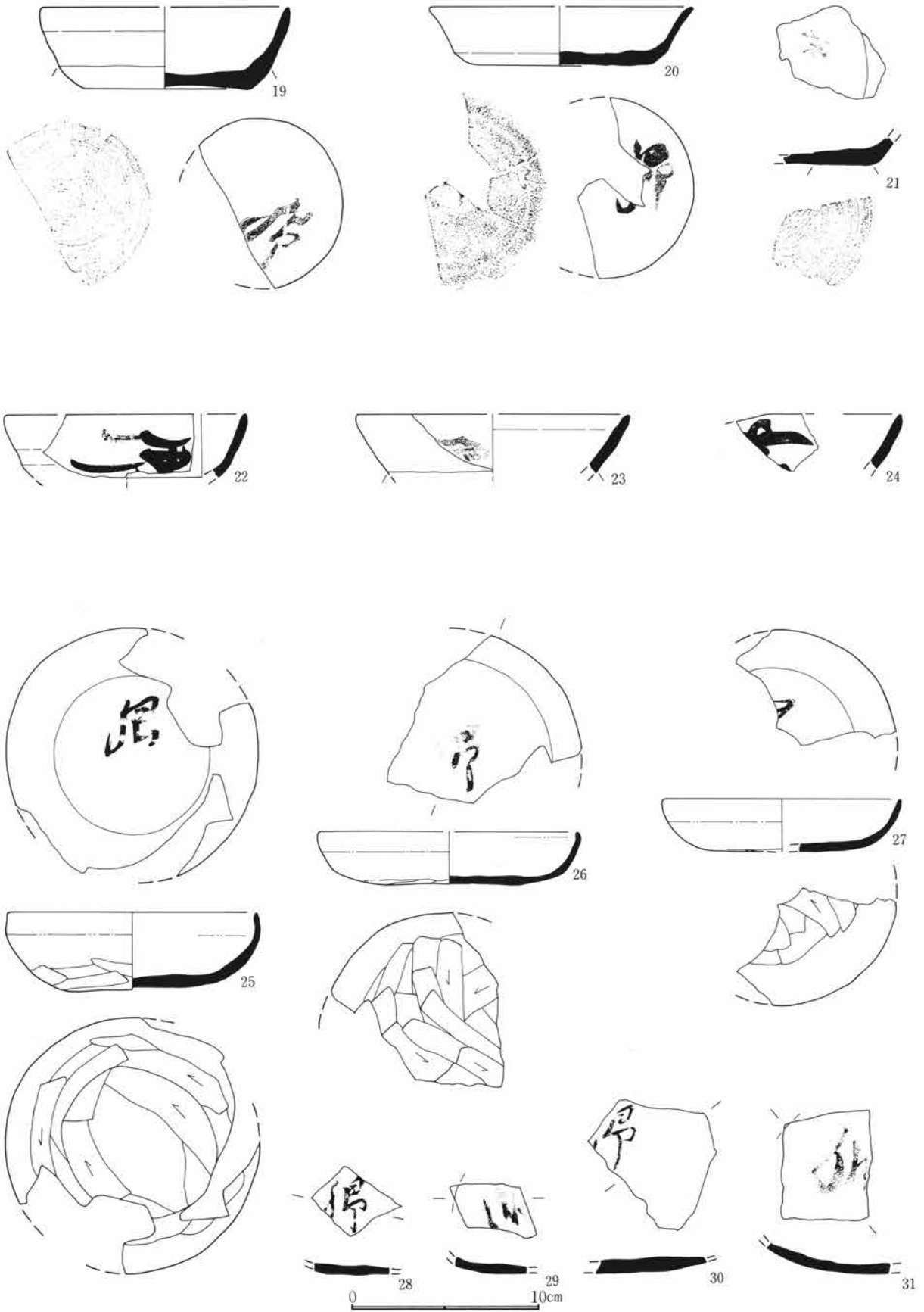


第67図 窪地出土の墨書土器(1)



第68図 窪地出土の墨書土器(2)

3 流路跡の窪地

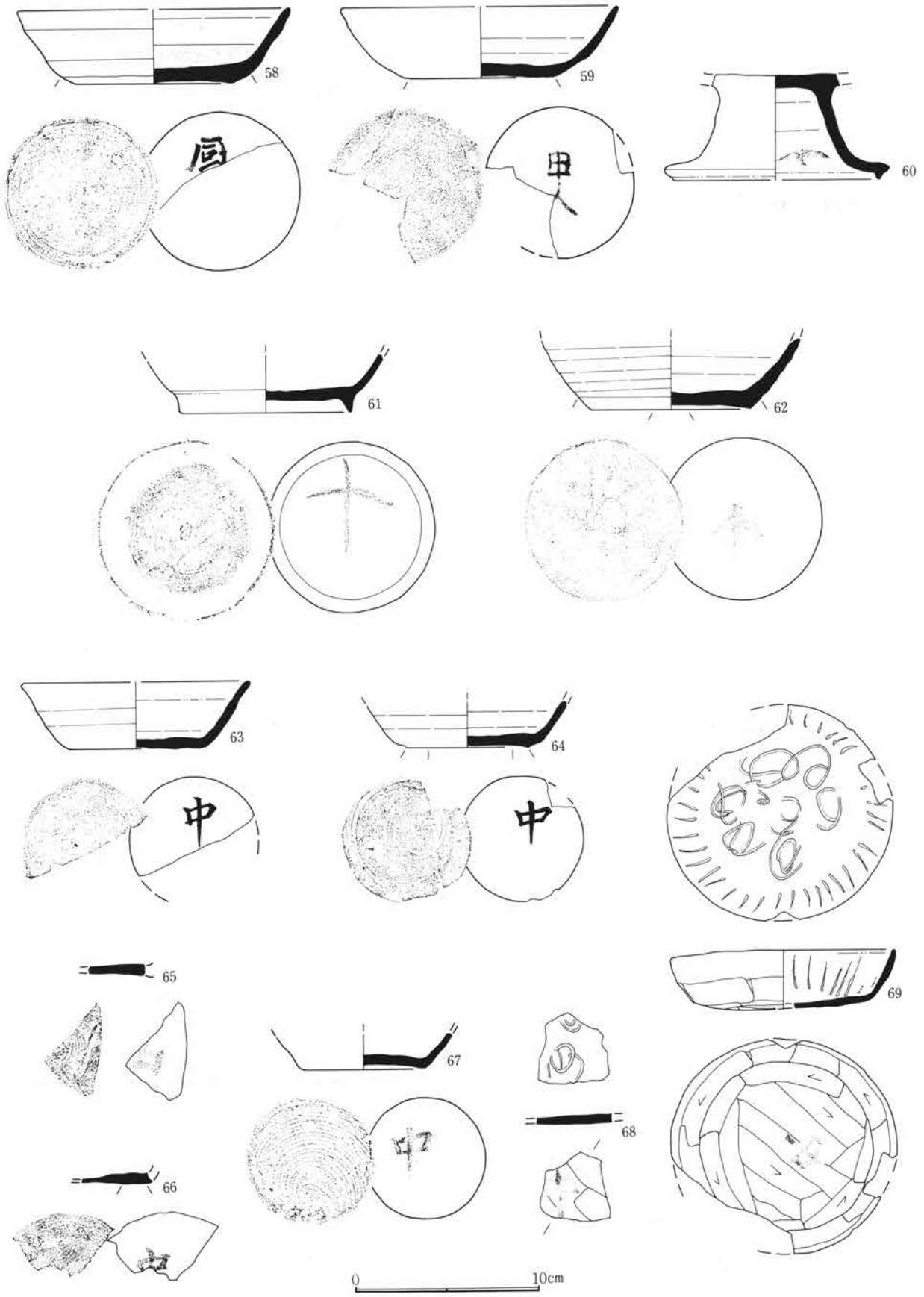


第69図 窪地出土の墨書土器(3)

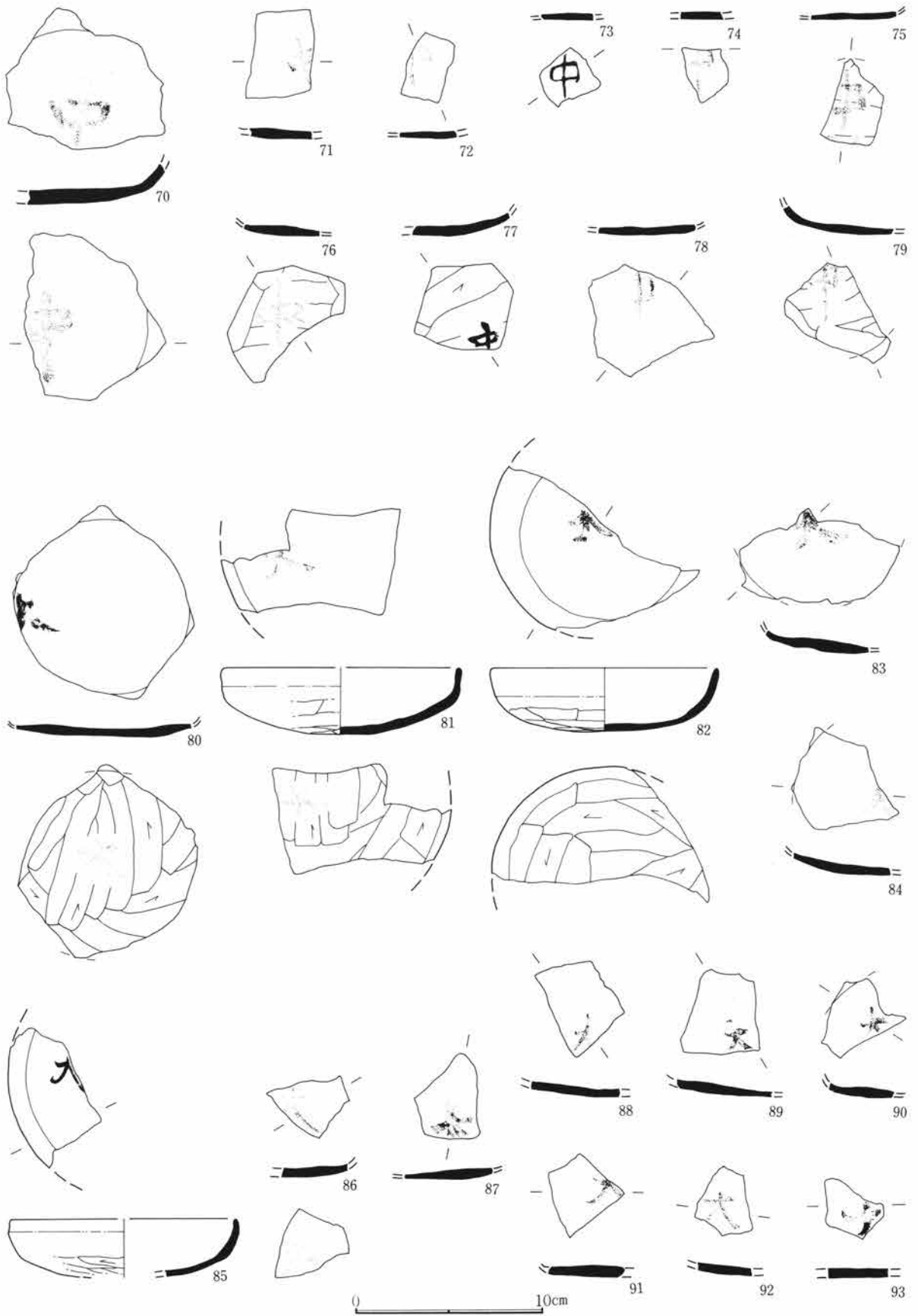


第70図 窪地出土の墨書土器(4)

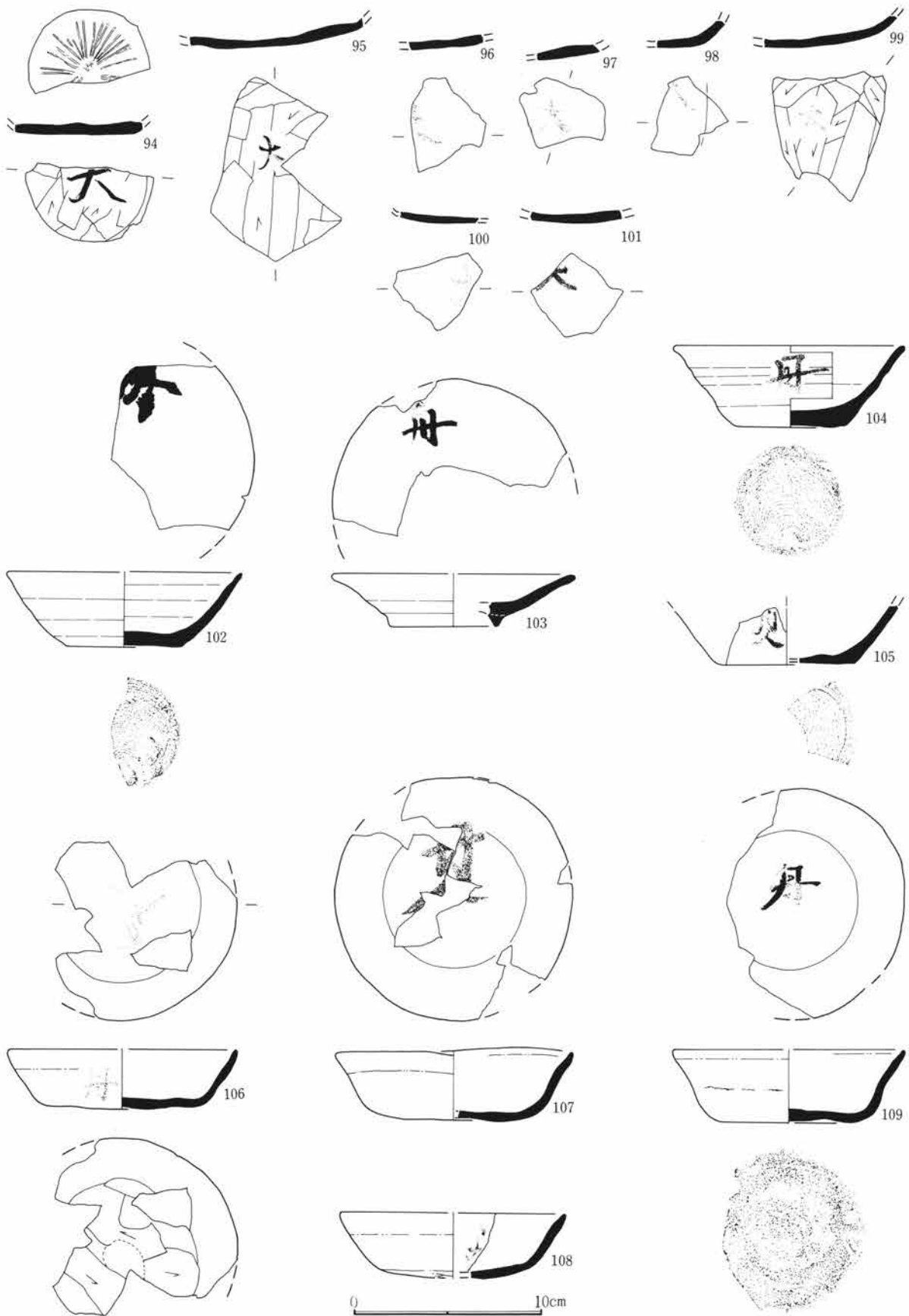




第71図 窪地出土の墨書土器(5)

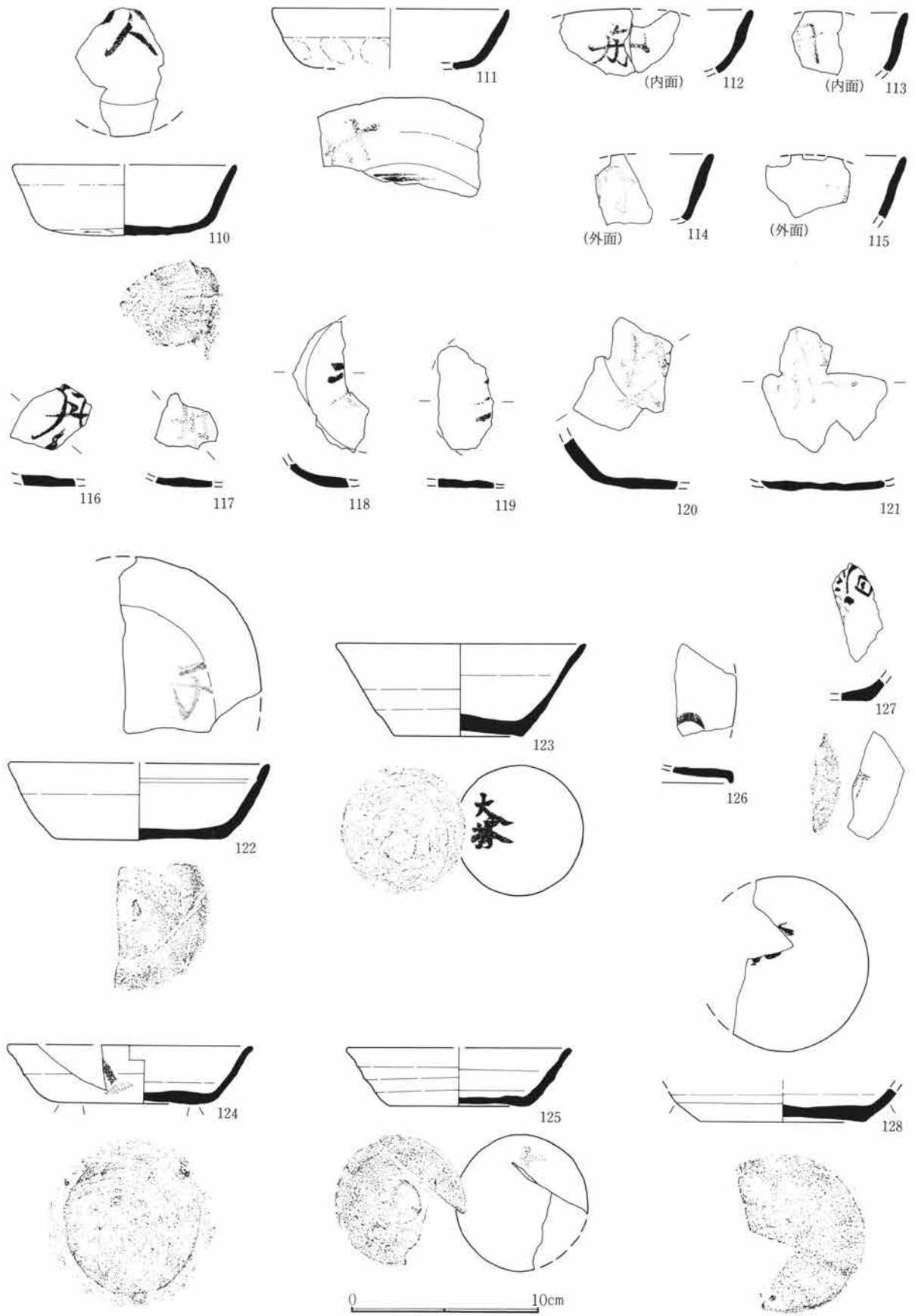


第72図 窪地出土の墨書土器(6)

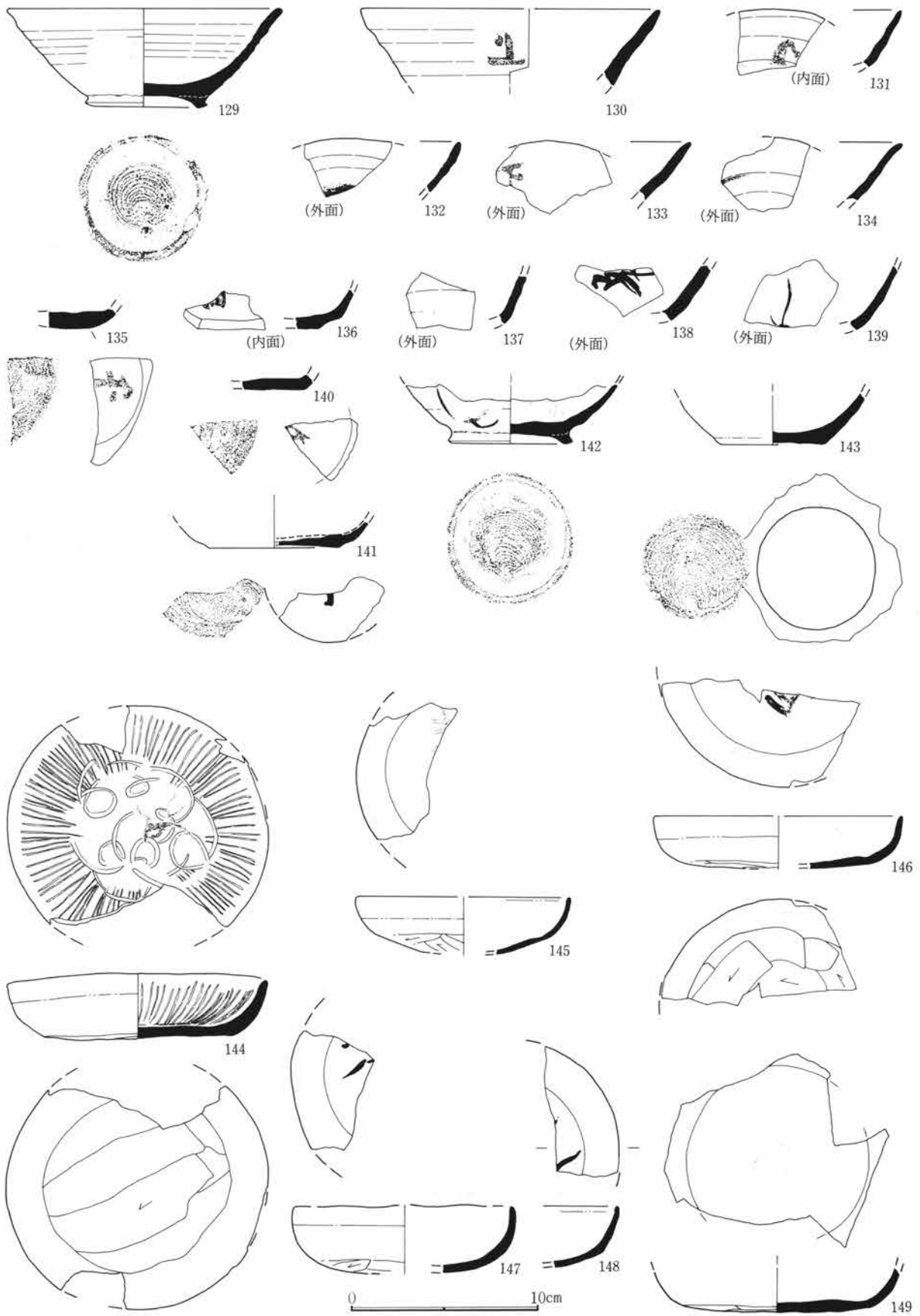


第73図 窪地出土の墨書土器(7)

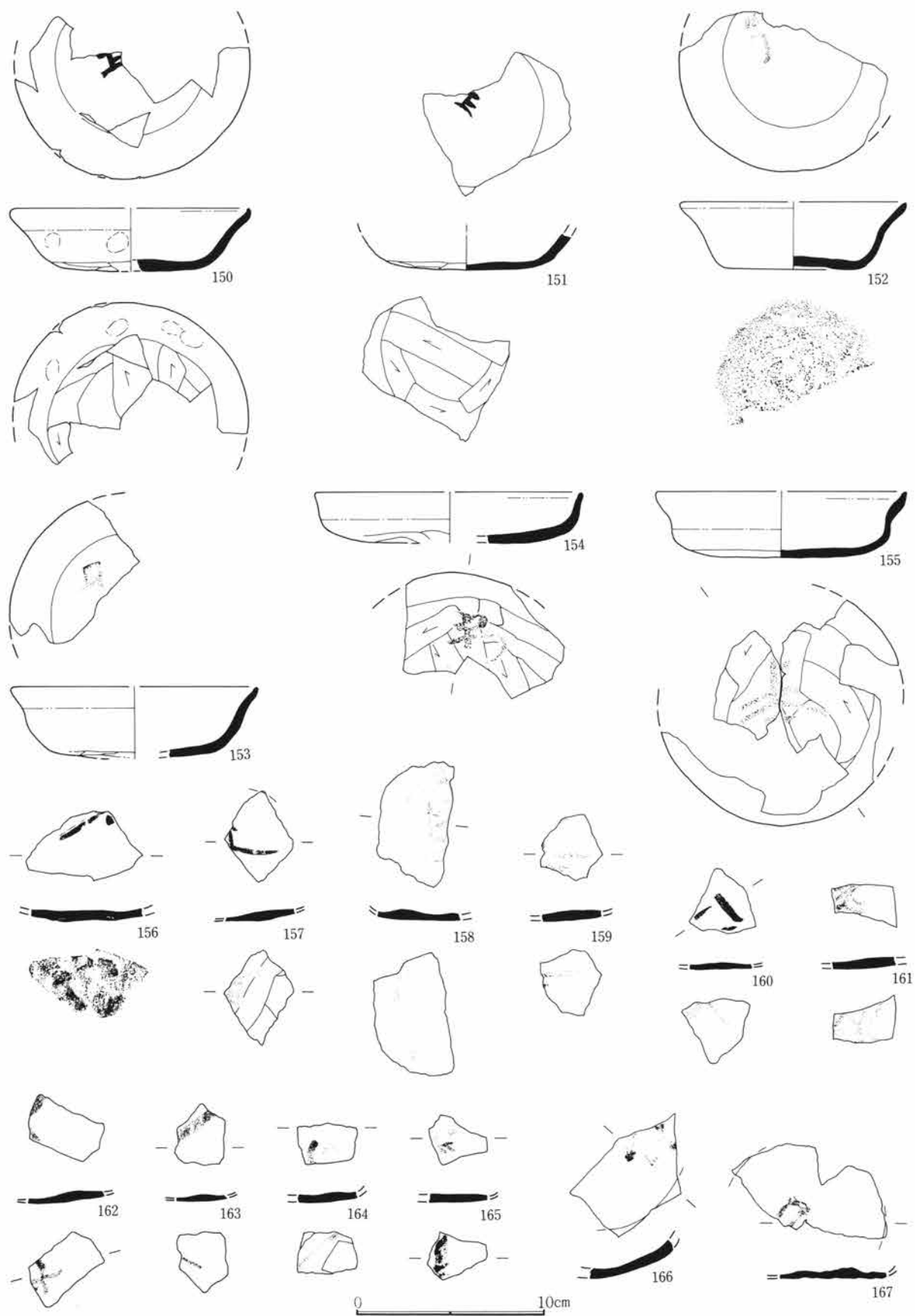
第3章 検出した遺構と遺物



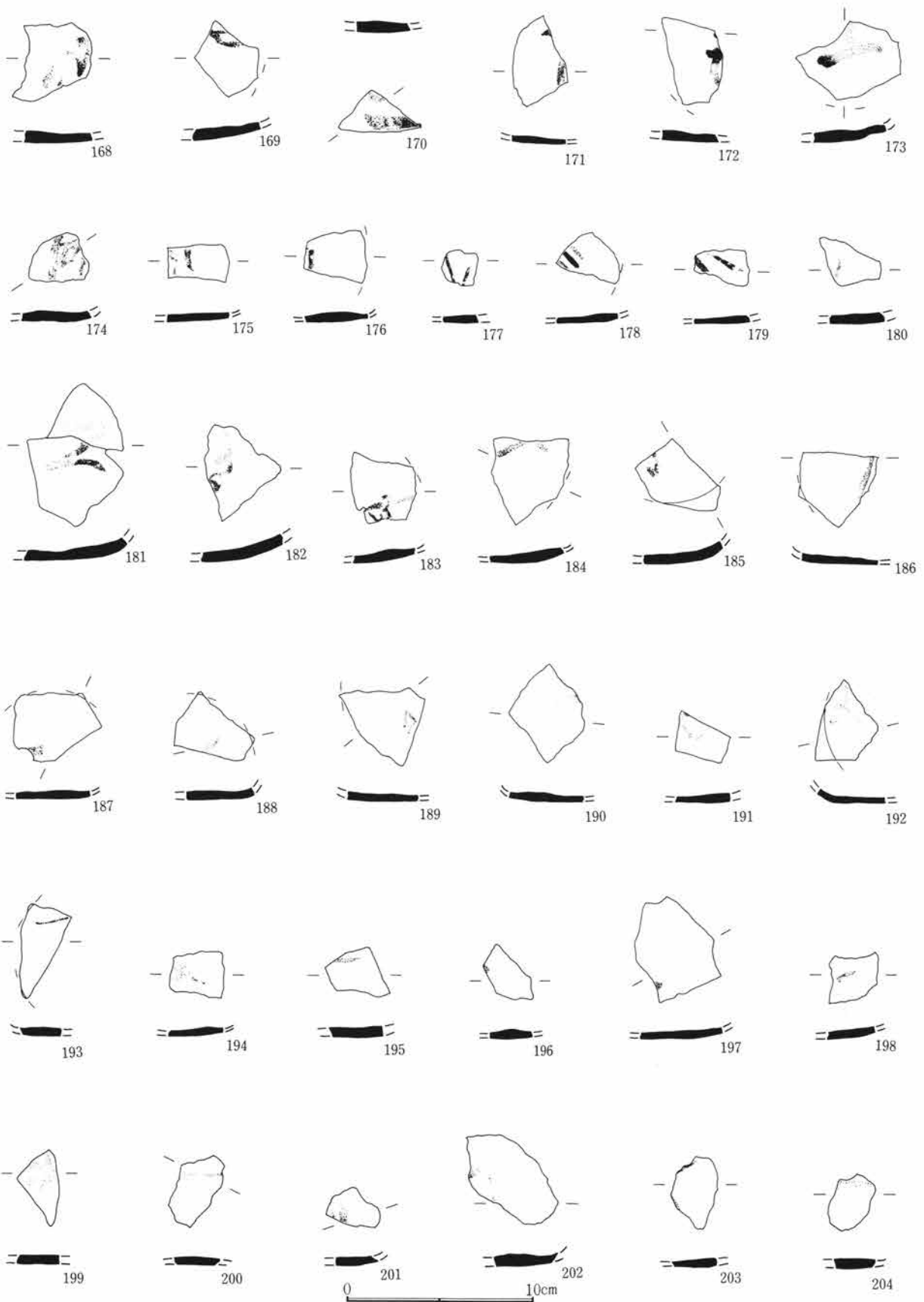
第74図 窪地出土の墨書土器(8)



第75図 窪地出土の墨書土器(9)

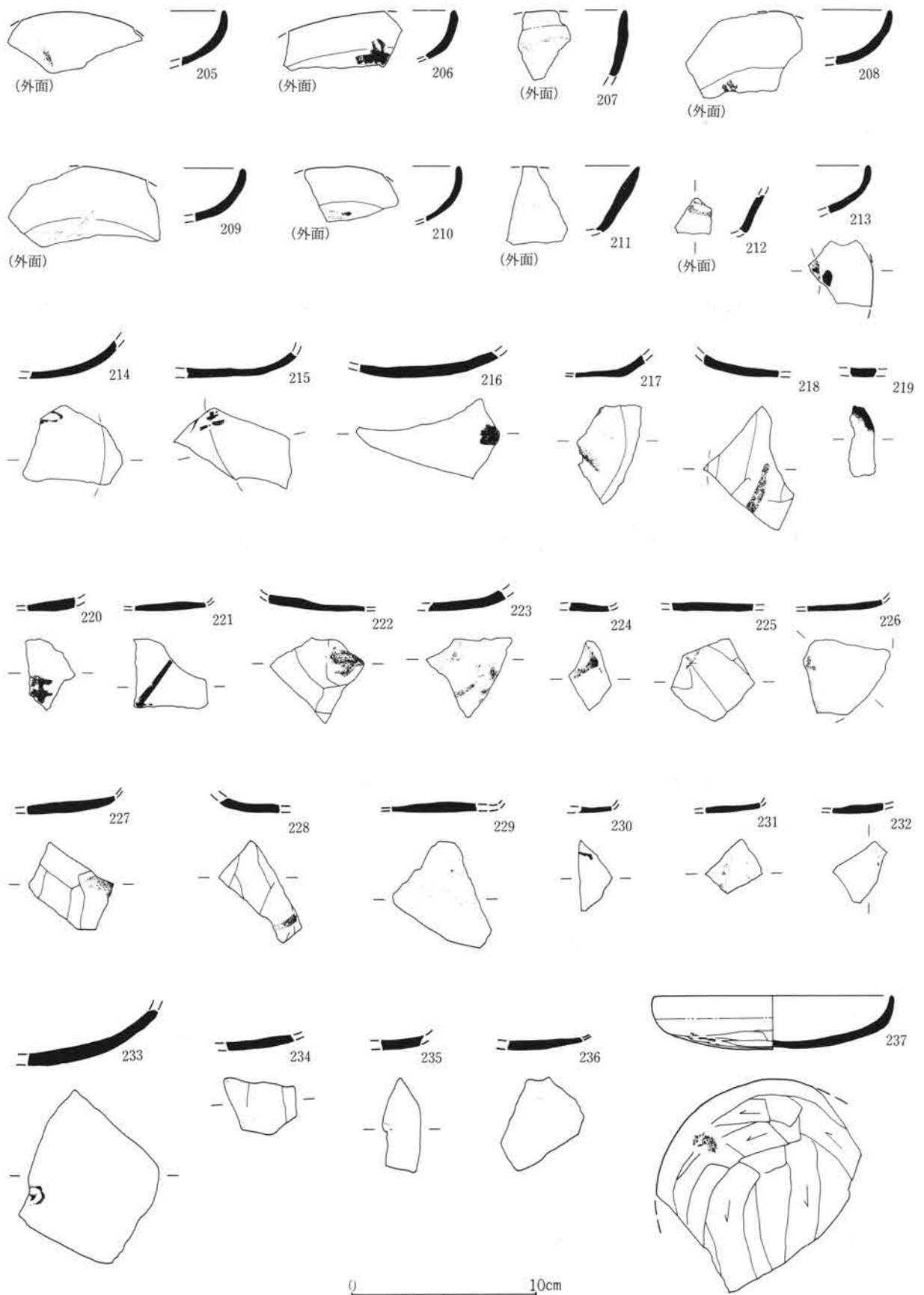


第76図 窪地出土の墨書土器(10)



第77図 窪地出土の墨書土器(11)

第3章 検出した遺構と遺物



第78図 窪地出土の墨書土器(12)

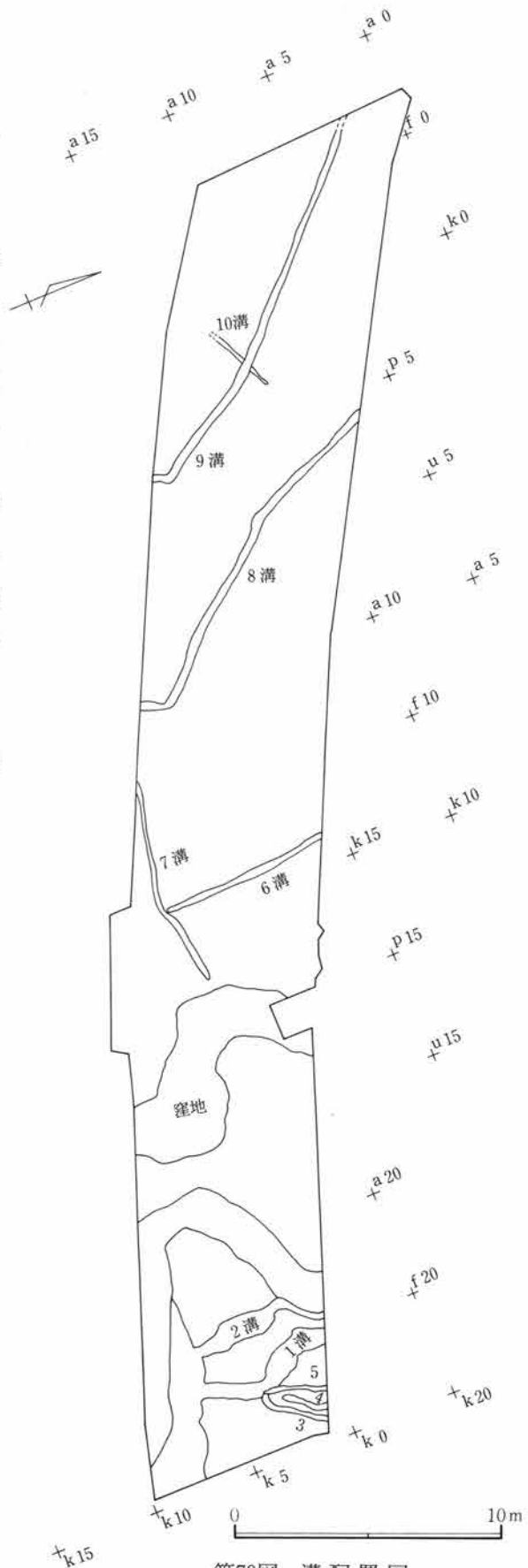


## 4 溝

本遺跡では調査区の全体で10条の溝を調査した。流路跡の窪地を挟んだA・B区とC区でそれぞれ5条づつあるが、区によって性格は大きく異なっている。

A・B区の溝（6～10号）は浅く、直線的であり、プランも明瞭である。6・7・10号溝は古代の遺構と思われるが、出土遺物が少なく明瞭でない。8・9号溝からは近世末の時期の遺物を多量に出土した。近世の水田に関連した遺構と思われるが、該期の遺物を出土する遺構は本遺跡からは検出されていない。

C区の溝（1～5号）は河川改修前の宮川の蛇行部分に南側を切られていたり、調査部分が少ないために全容は明確でない。1・2号溝からは奈良時代を中心とする遺物が多量に出土している。西側約40mにある流路跡の窪地と同一の性格のものと考えられる。3～5号溝はA s—B層下の2面の水田のさらに下で確認できた溝であるが、年代を推定する根拠に欠いている。



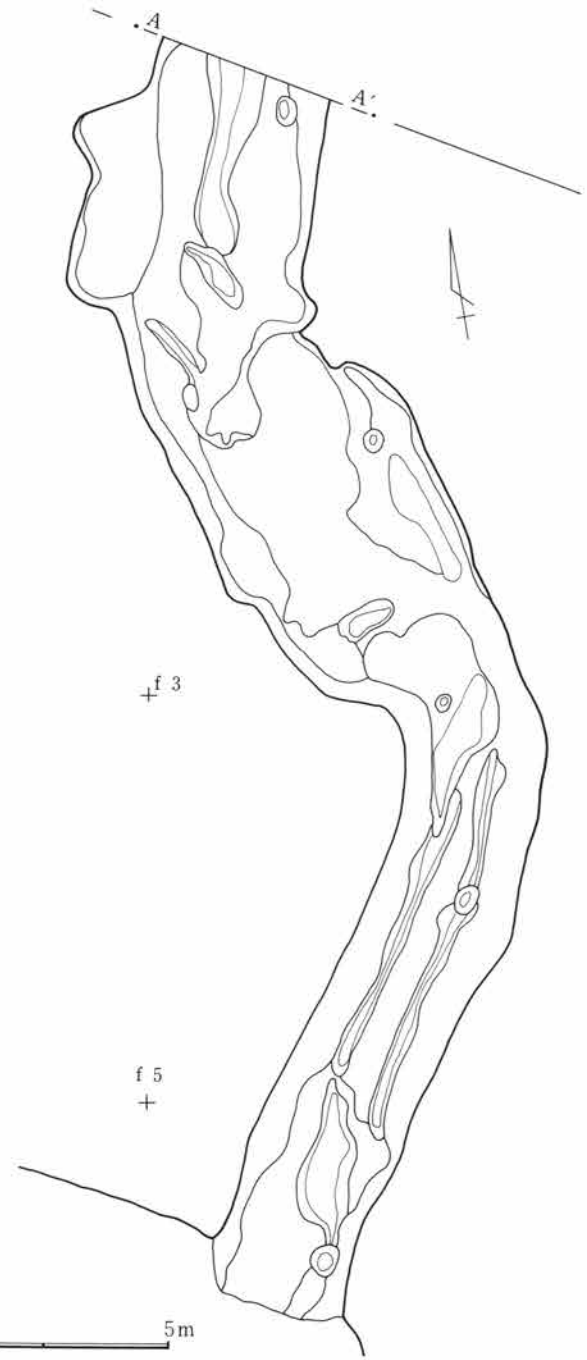
第79図 溝配置図

1号溝 (P L-16・34・35 表44)

C区 f-0 から f-6 グリッドにかけて蛇行しながら、おおよそ磁北に走向しており、延長約26mである。宮川旧流路によって南側を切られている溝である。地山は河川堆積物の硬化した砂質土であった。確認面からの深さは60cmで底面は不整で大きな凹凸があるが、底面のレベルは全体に大きな差はない。ウォーター・ホール状の窪みが所々に見られ、流路跡の一つと考えるのが妥当であろう。

全域から遺物を多量に出土しており、71点を図示した。流路跡の遺物であるが、摩滅しているものは少ない。住居出土の遺物に比べて杯類の割合が高くなっている。出土した土器破片は重量で、41.3kgあるが、このうち土師器杯類が11.8kg、須恵器杯類が2.9kgで、全体の1/3以上を占めている。また、「郷」と記された墨書が含まれるなど、流路跡の窪地遺物と同様の性格のものようだが、古墳時代と平安時代後半の遺物は少ない。また、円面硯や置き竈のような特殊遺物が含まれている。

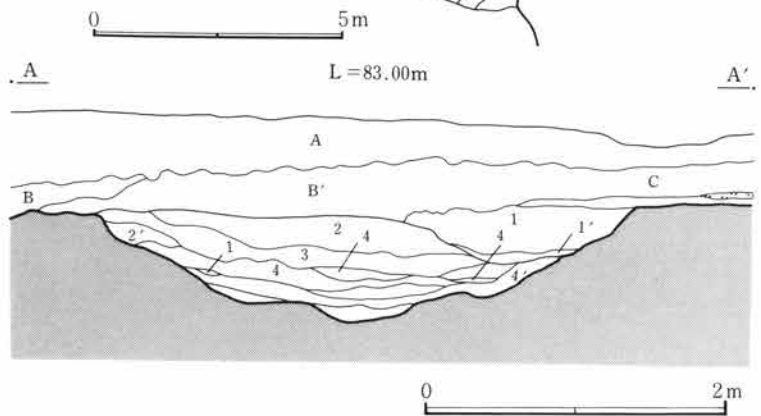
耕作痕と思われる攪乱があり、不明な点が多いが、As-B層が部分的に見られることから、年代の下限をおさえることができる。



1号溝土層説明

- A 圃場整備時の盛土。
- B 旧耕作土。B'には鉄分沈着が見られる。
- C 黒色粘性土層。As-B下の水田耕作土。

- 1層 暗褐色土層。As-Cと思われるパミスを含んだしまり強い層。1'では砂粒の混入多い。
- 2層 黒褐色土層。As-Cと思われるパミスを霜降状に多量に含んだ層。
- 3層 暗褐色土層。混入物の少ない粘性土層。
- 4層 灰褐色砂層。川砂のほぼ純層。4'は黒褐色土との混合土。



第80図 1号溝

## 遺物の出土状態

第81図に遺物の出土位置ドットを示した。器形や土器型式による分布の差は認められないが、溝中央付近に出土が偏っていること、出土位置に多少の粗密のあることが判る。

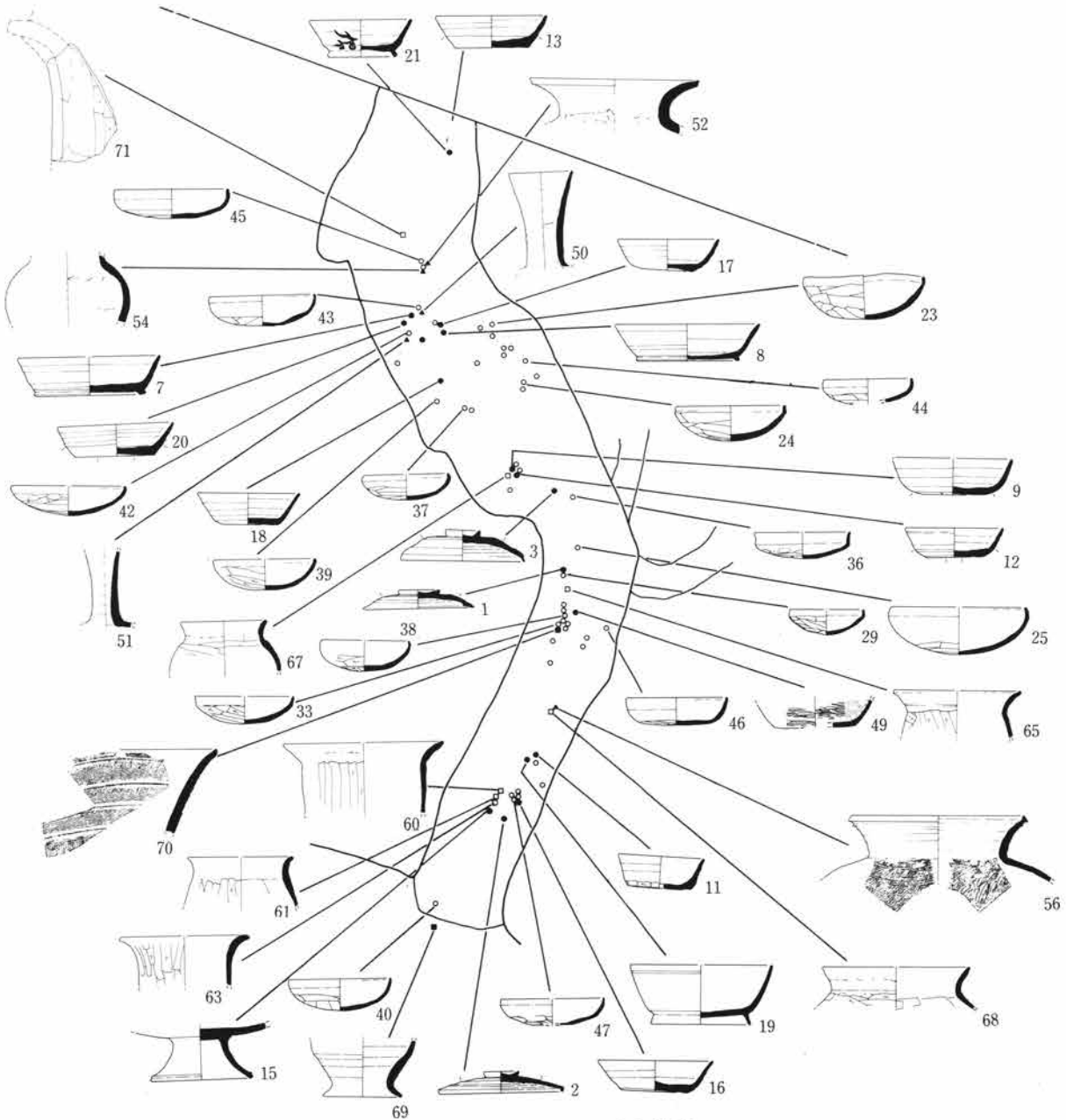
南隅のg-5杭付近は、2・11・15・16・19の須恵器、47・60・61・63の土師器がいずれも底面直上で集中して出土している。

h-3グリッド内も遺物が集中しているが、底面直上の1・25・33・38・49・70の他に、10cm以上浮

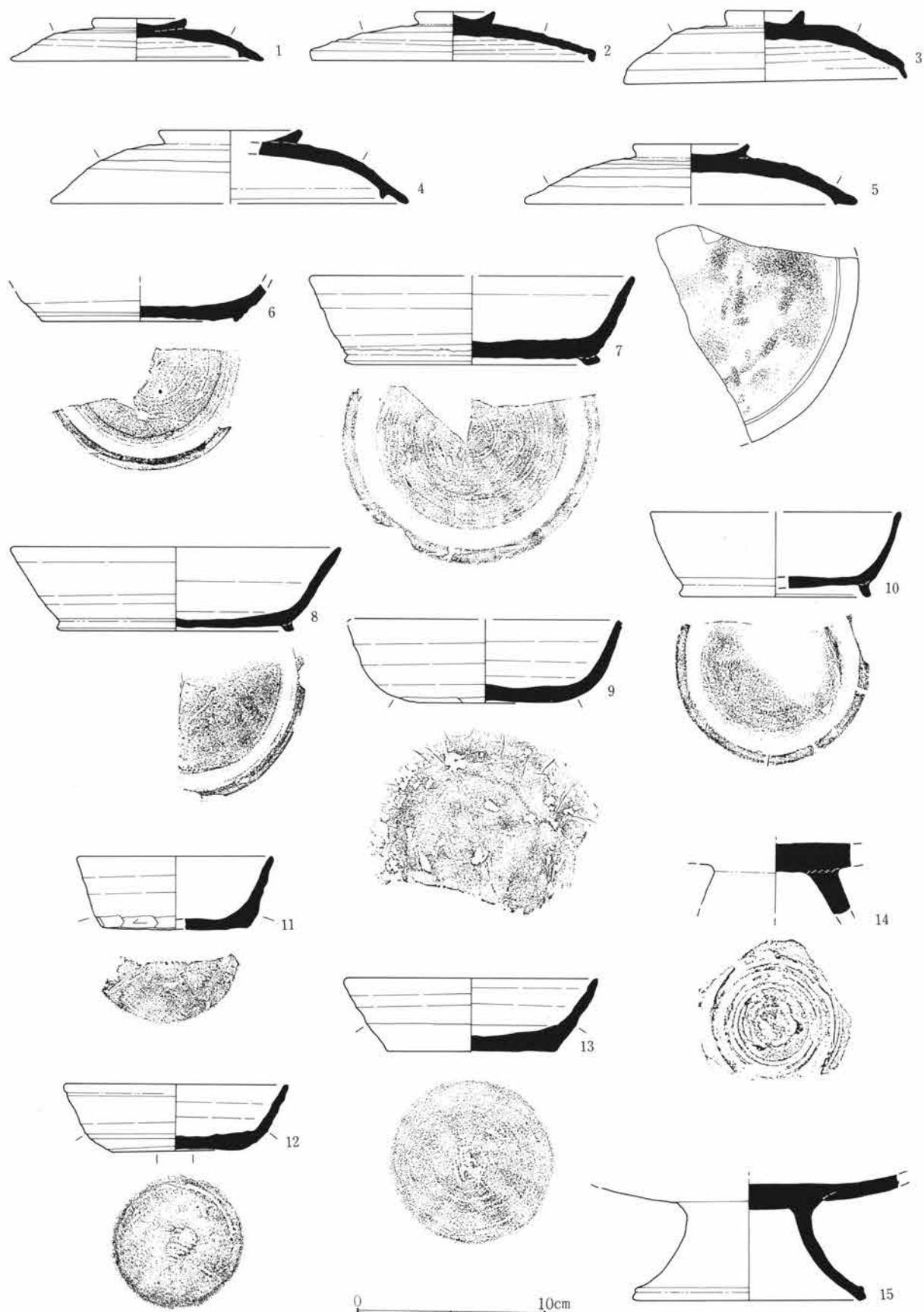
いた状態の29・46などが混在している。

f-1からg-2杭にかけての遺物は散在している。7・8・18・20・37・42・43・50・51が底面直上から出土し、42などが10cm以上浮いた状態でまじっている。

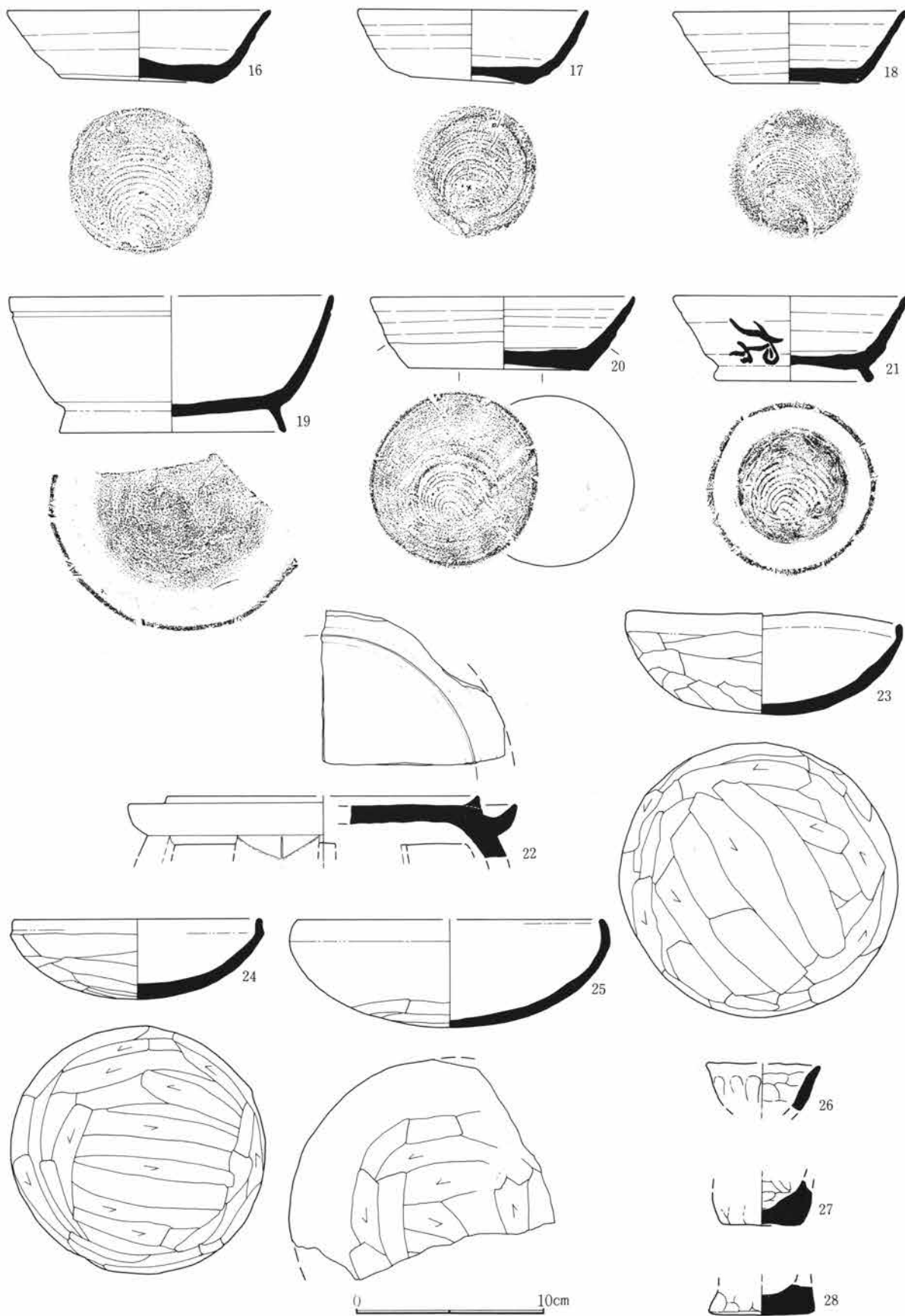
その他に3・9・45・52・56などが底面直上の出土である。21の墨書土器は底面から15cm以上浮いた埋没土内の遺物である。69の甑は宮川旧流路内の位置にあり、本遺構に伴うものかは疑問である。



第81図 1号溝遺物出土状態

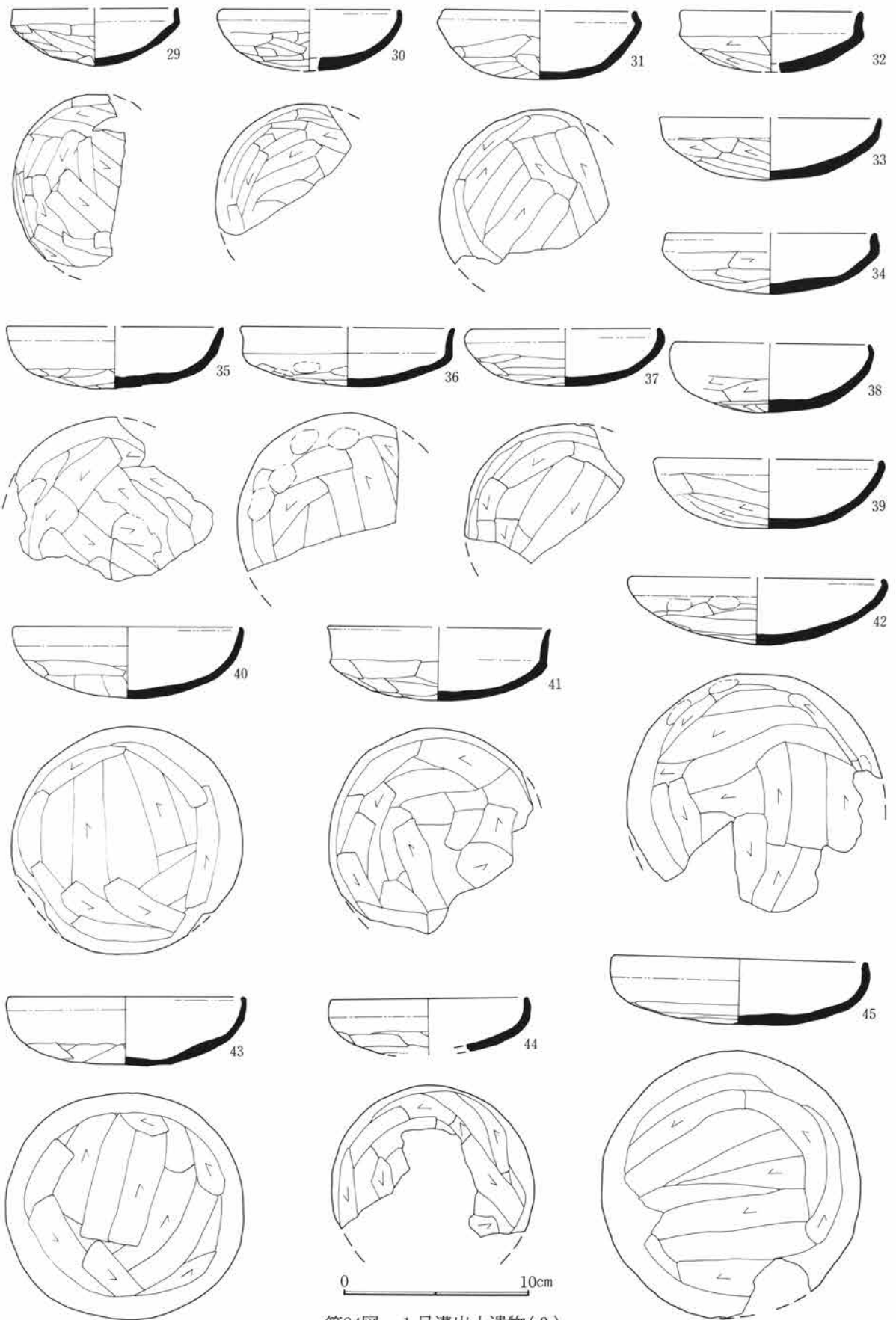


第82図 1号溝出土遺物(1)

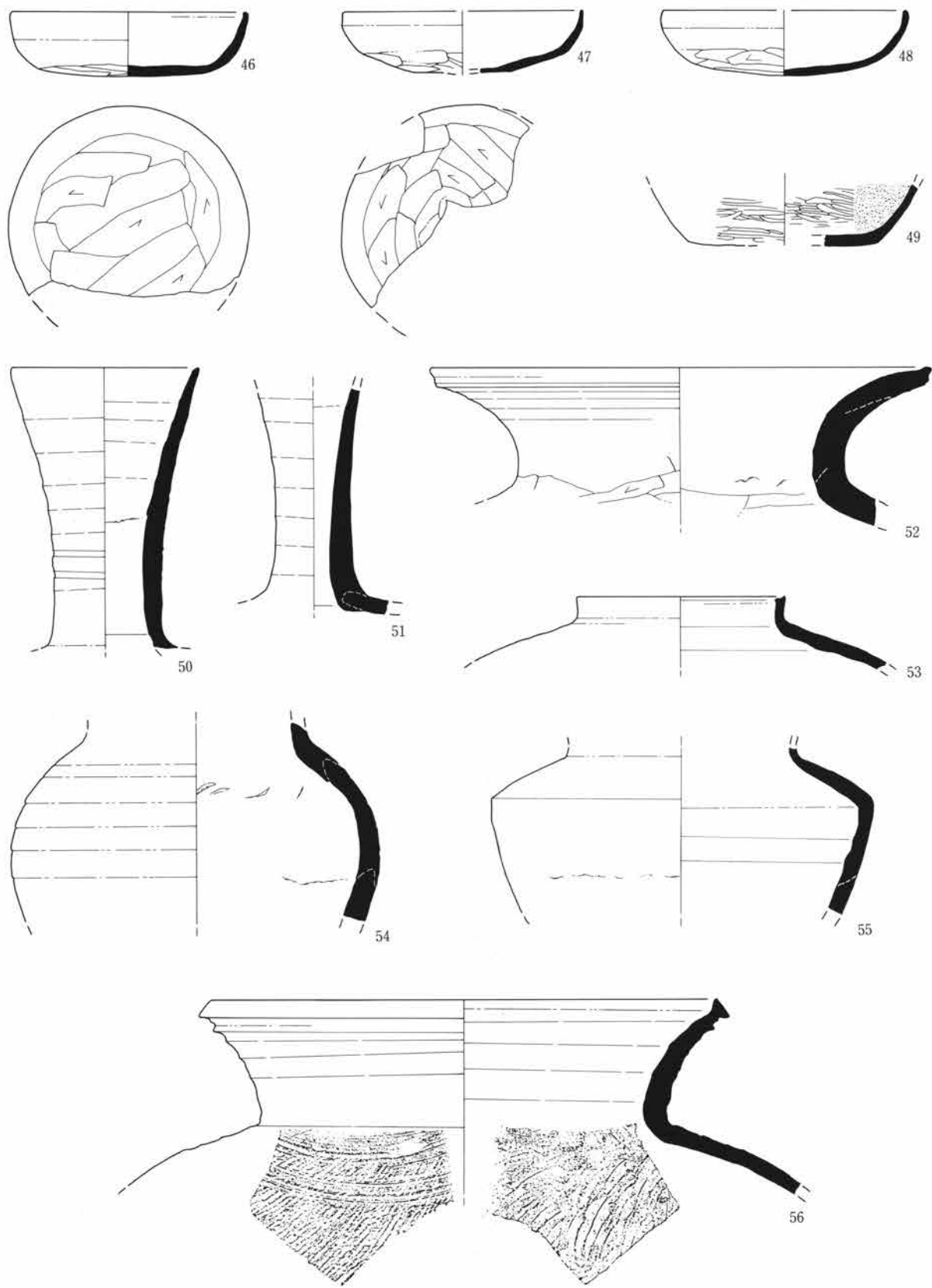


第83図 1号溝出土遺物(2)

第3章 検出した遺構と遺物

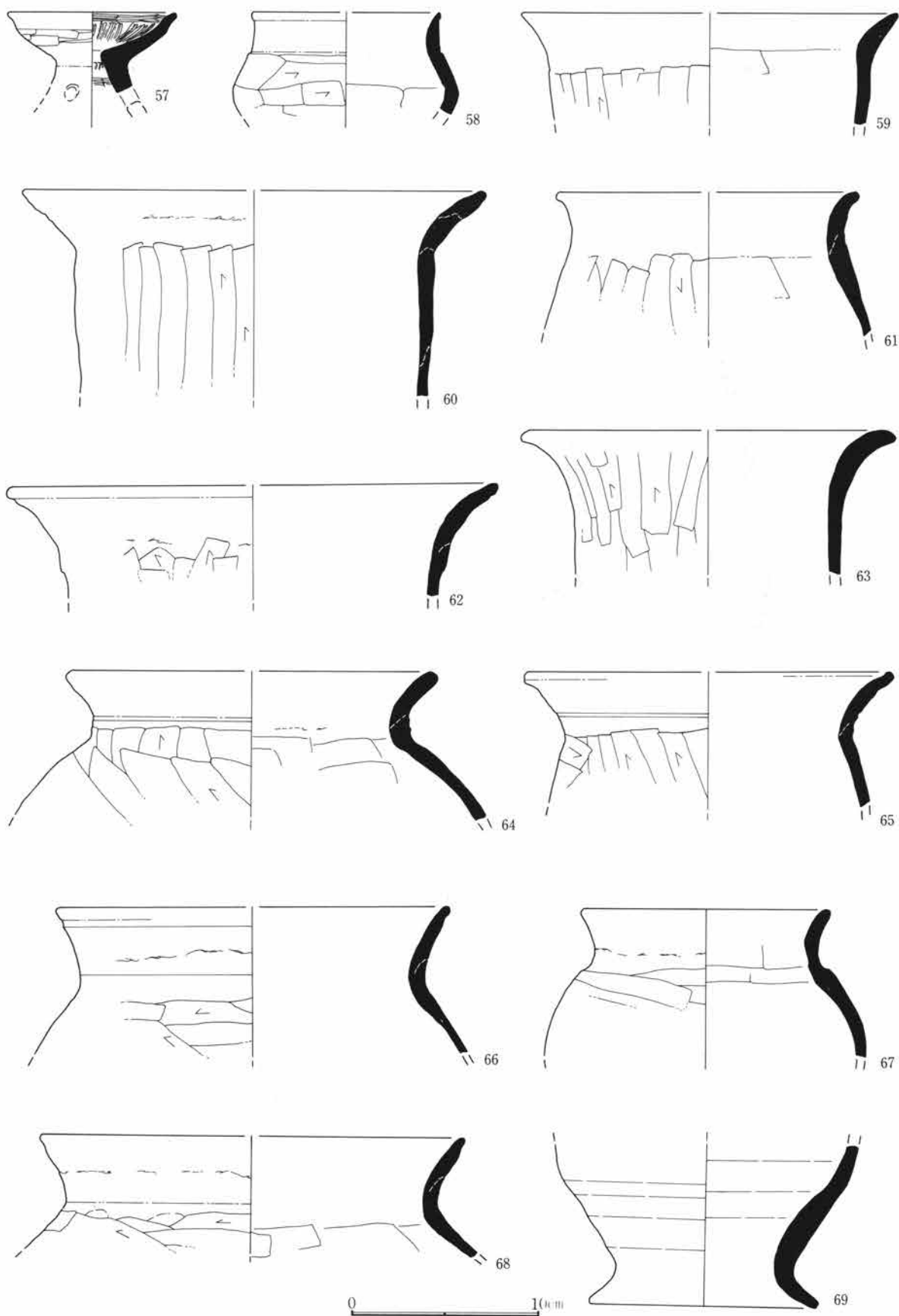


第84図 1号溝出土遺物(3)



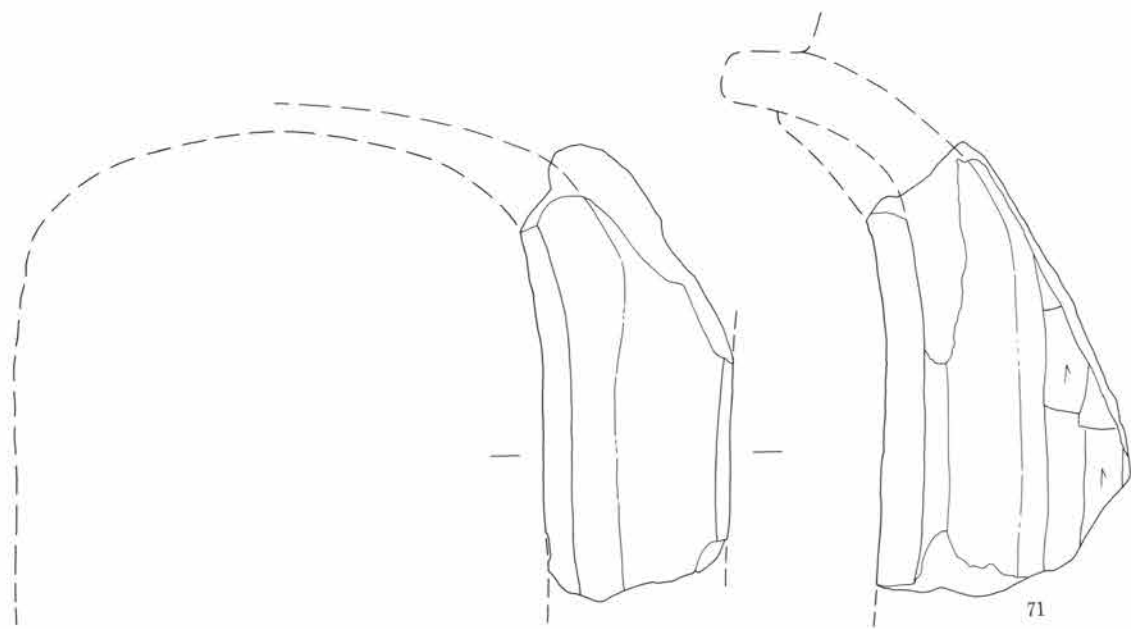
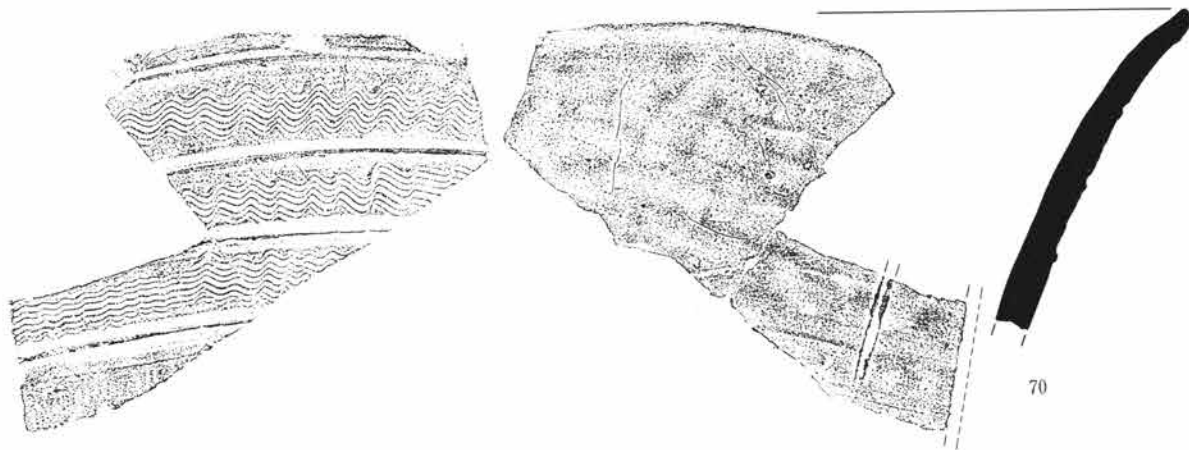
第85図 1号溝出土遺物(4)

第3章 検出した遺構と遺物



第86図 1号溝出土遺物(5)





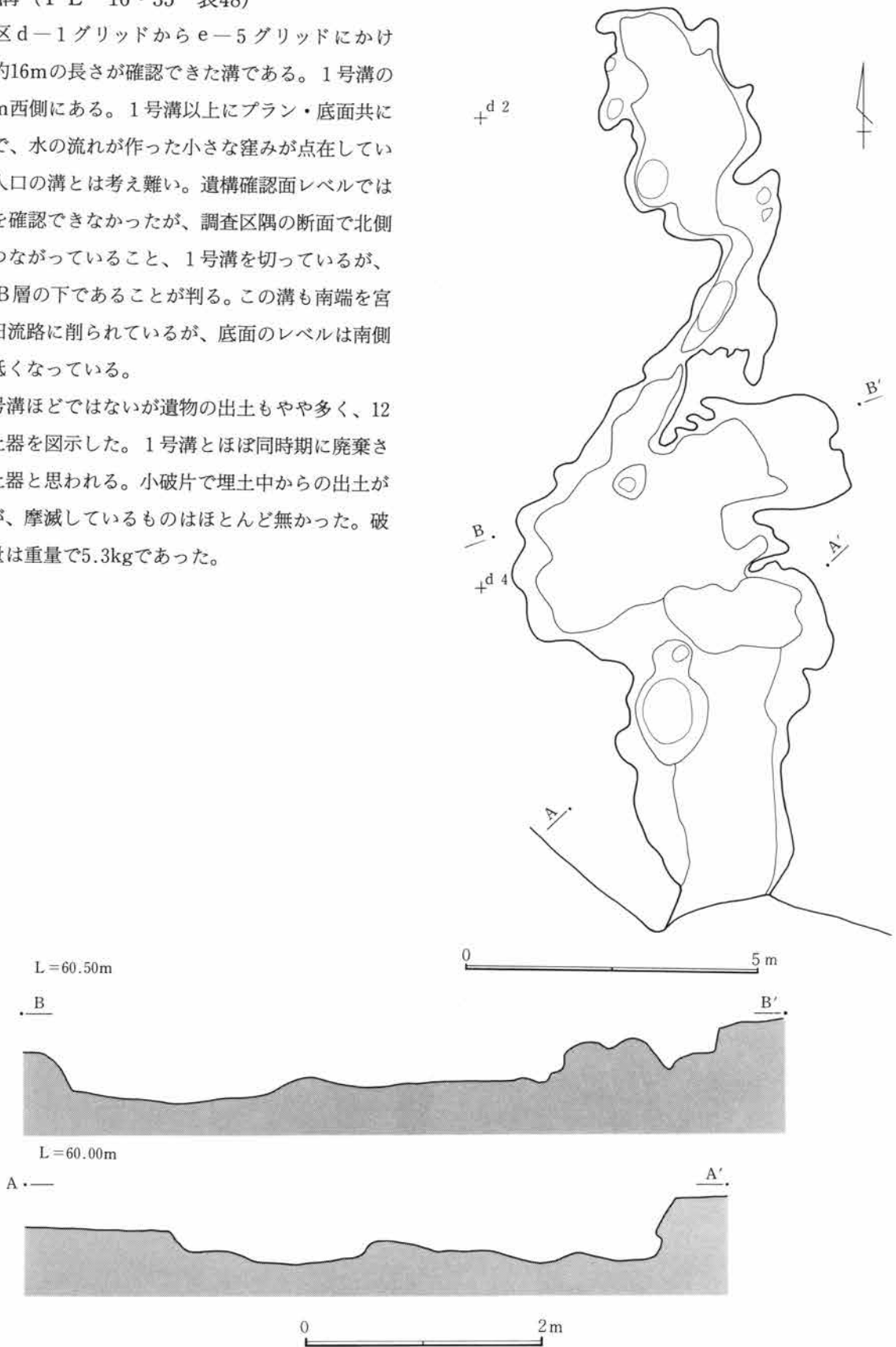
0 10cm

第87图 1号溝出土遺物(6)

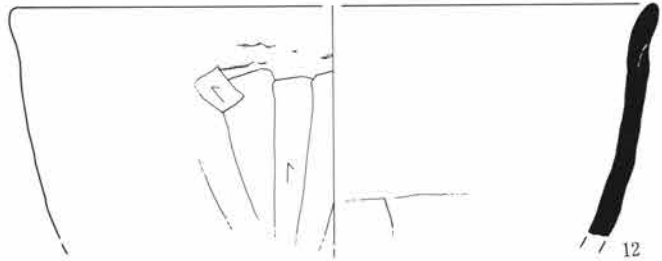
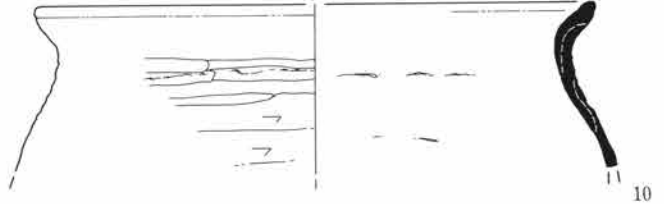
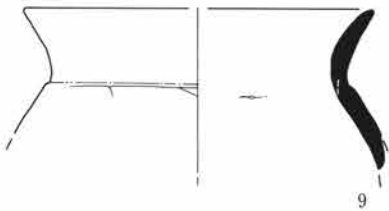
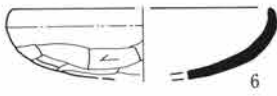
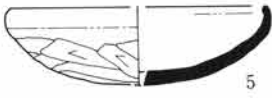
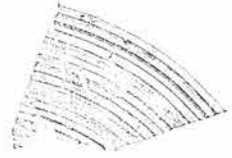
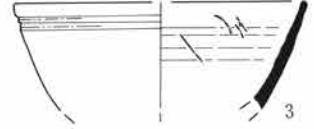
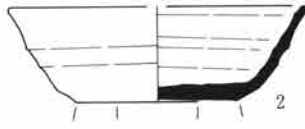
2号溝 (PL-16・35 表48)

C区d-1グリッドからe-5グリッドにかけて、約16mの長さが確認できた溝である。1号溝の約6m西側にある。1号溝以上にプラン・底面共に不整で、水の流れた小さな窪みが点在していた。入口の溝とは考え難い。遺構確認面レベルでは北隅を確認できなかったが、調査区隅の断面で北側までつながっていること、1号溝を切っているが、As-B層の下であることが判る。この溝も南端を宮川の旧流路に削られているが、底面のレベルは南側ほど低くなっている。

1号溝ほどではないが遺物の出土もやや多く、12点の土器を図示した。1号溝とほぼ同時期に廃棄された土器と思われる。小破片で埋土中からの出土が多いが、摩滅しているものはほとんど無かった。破片総量は重量で5.3kgであった。



第88図 2号溝



0 10cm

第89图 2号溝出土遺物

3・4・5号溝 (PL-16)

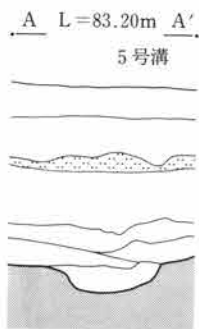
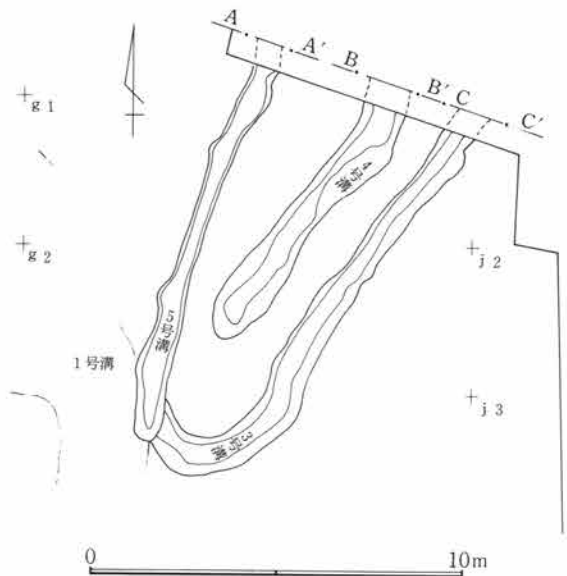
1号溝の東側、C区h-2グリッド付近で、As-B層下の2面の水田下での不明瞭な黒色の落ち込みとして確認した幅の狭い3本の溝である。この水田は旧宮川の左岸にあたり、西側に隣接する二之宮千足遺跡につながるものである。

3号溝の埋没土直上にFAと思われるパミスが見られ、この層の直下にある黒色土の下から各溝が共通して確認されている。3・4号溝は確認面からの深さが15~20cmで底面のレベルもほぼ等しい。5号溝は確認面からの深さが3~8cmの不明瞭なものであった。

3号溝と5号溝の新旧関係は確認できなかったが、3号溝の2層、4号溝の2層が5号溝の1層土に類似しており、5号溝が先行する可能性がある。

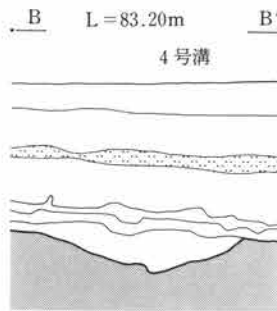
プラント・オパール分析の結果、これらの溝直上の土層面も稲作の可能性が指摘されており、古墳時代の水田耕作に関連した溝と考えられるが、水の流れた痕跡は認められない。

遺物はどの溝からも出土していない。



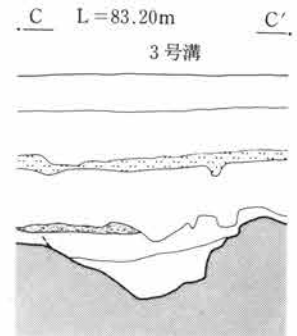
5号溝土層説明

- 1層 暗灰褐色土層。粘性土層。斑鉄が見られる。1'では明度高く砂質土を小ブロック状に混入している。
- 2層 暗褐色土層。砂質土を小ブロック状に含む以外、混入物の少ない粘性土層。



4号溝土層説明

- 1層 黒褐色土層。黒色有機質土と粘性土と暗褐色粘性土の中間的な層。
- 2層 暗(灰)褐色土層。粒子の細かな粘性土層。混入物少ない。



3号溝土層説明

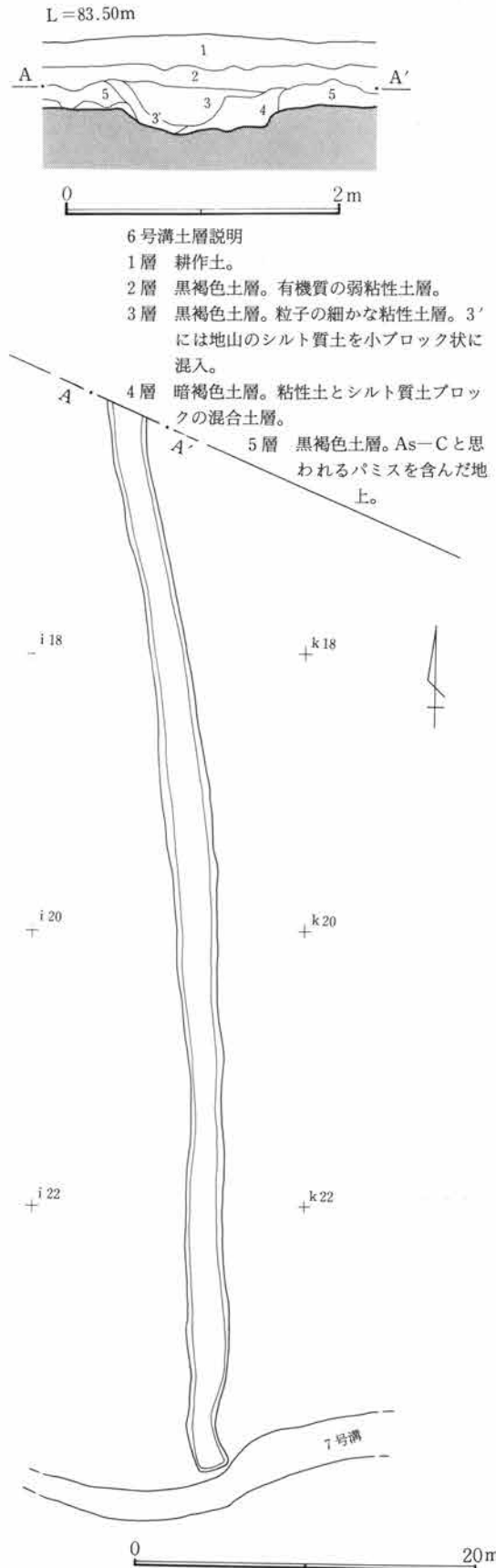
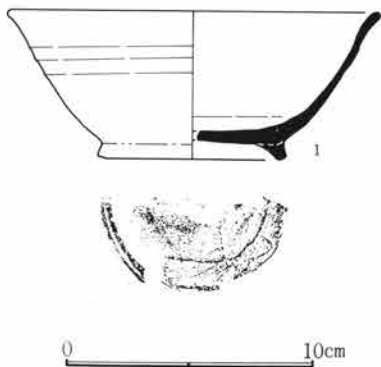
- 1層 黒褐色土層。やや有機質な非粘性土層。混入物少ない。
- 2層 暗(灰)褐色土層。粒子の細かな粘性土層。混入物少ない。

第90図 3・4・5号溝

6号溝 (PL-17 表49)

C区 i-16グリッドから j-23グリッドにかけて、住居群の中央を直線的に通る溝で、主軸方向は N-5°-W で磁北に近い値となる。7号溝と直交するような配置だが、交わる直前の30cm前で途切れている。延長約31mを調査した。As-B層との先後関係は不明である。確認面からの深さは8~20cmで、特に南側が深くなっている。底面は北側が高く、南へ向かって傾斜しており、両端で20cmの比高差があるが水の流れた痕跡は認められない。本溝の南側延長線上は掘立柱建物群の西正面に至る。集落内の区画の溝となる可能性もあろう。

遺物の出土は少なく、須恵器高台付き椀1点を図示したのみだが、底面直上の資料であり、時期決定を可能にする遺物と考えられる。



第91図 6号溝および出土遺物

第3章 検出した遺構と遺物

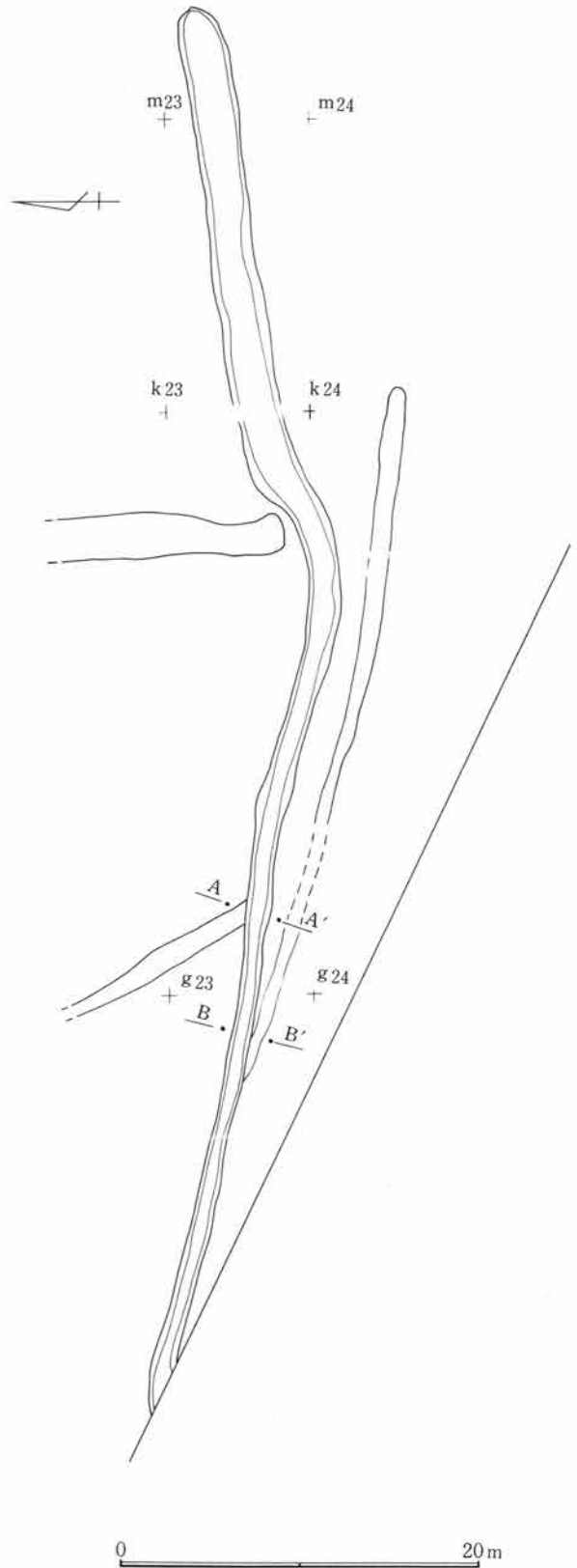
7号溝

B区 e-22グリッドから n-23グリッドにかけて、途中小さく屈曲している。東As-B層下と思われる東西走行の溝である。6号溝との重複を避けるように屈曲しており、同時存在の可能性もある。これより6号溝同様、集落内の区画溝的な性格も考えられるが、8号住居を切っている。

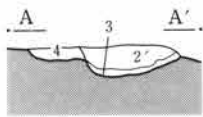
主軸方向は西側でN-78°-W、東側でN-75°-E、延長約39mである。

なお、流路跡の窪地の西側縁辺にはこの溝の続きの可能性のある溝状の窪みがみついている。

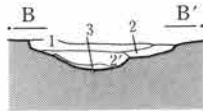
遺物の出土はない。先行する8号住居は9世紀代の遺跡である。



L = 83.20m



L = 83.20m



7号溝土層説明

- 1層 攪乱の入った砂質土層。
- 2層 黒(褐)色土層。粘性のやや強いしまりある層。1'には地山のシルト質土をブロック状に含む。
- 3層 黒色土層。やや有機質の弱粘性土層。混入物少ない。
- 4層 暗褐色土層。粒子の細かな弱粘性土層。パミス・シルト質土小ブロック等の混入物多い。



第92図 7号溝

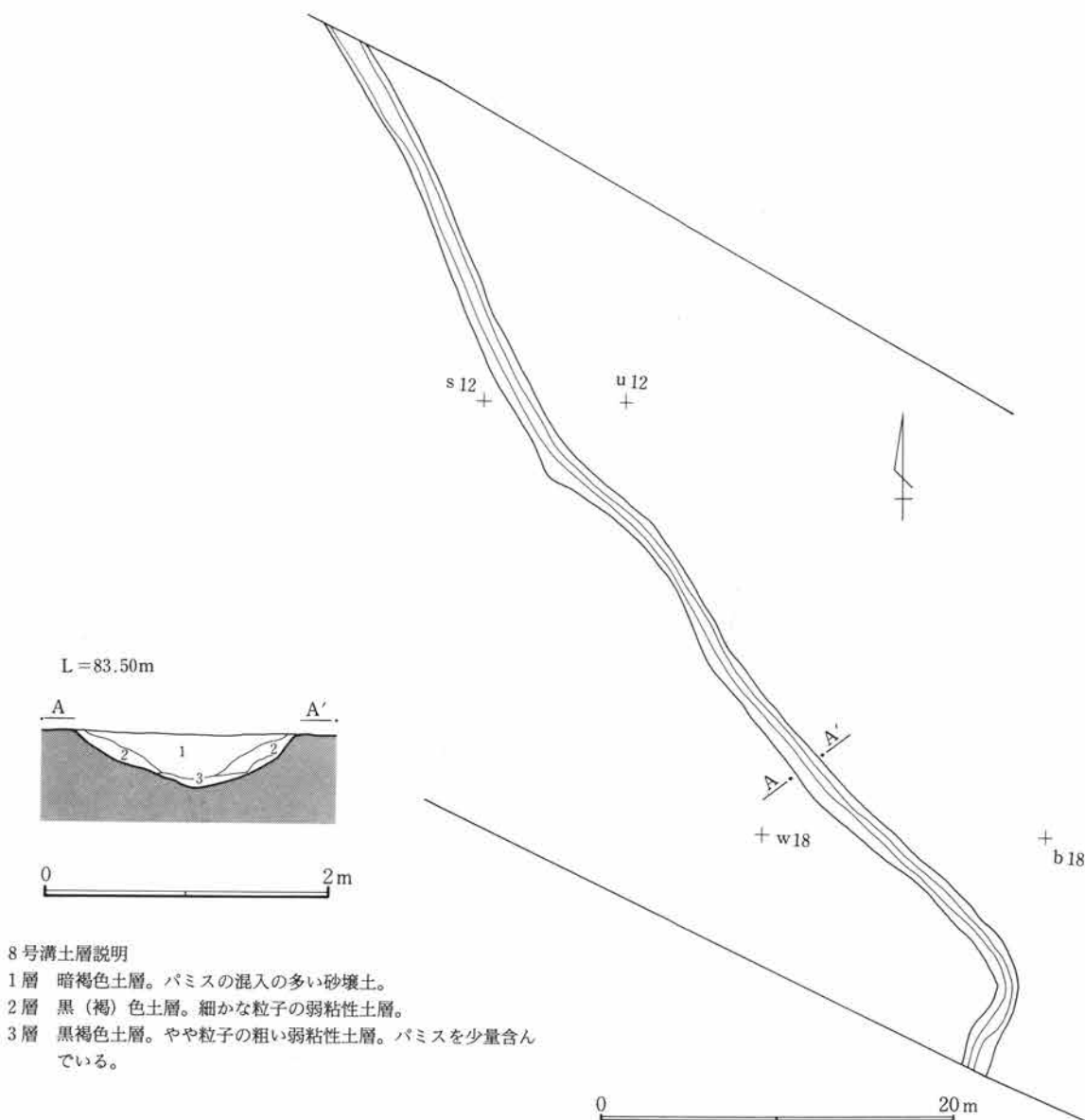
## 8号溝 (PL-17・35 表49)

As-B層上で確認された。

調査区西端のA区P-6グリッドから、南端のB区a-21グリッドまでつながる長い溝である。主軸方向は西半でN-27°-W、東半でN-41°-Wであり、やや蛇行した後、a-19グリッド付近で大きく南側へ屈曲している。屈曲後は、軸方向がN-24°-E近辺に変わる。

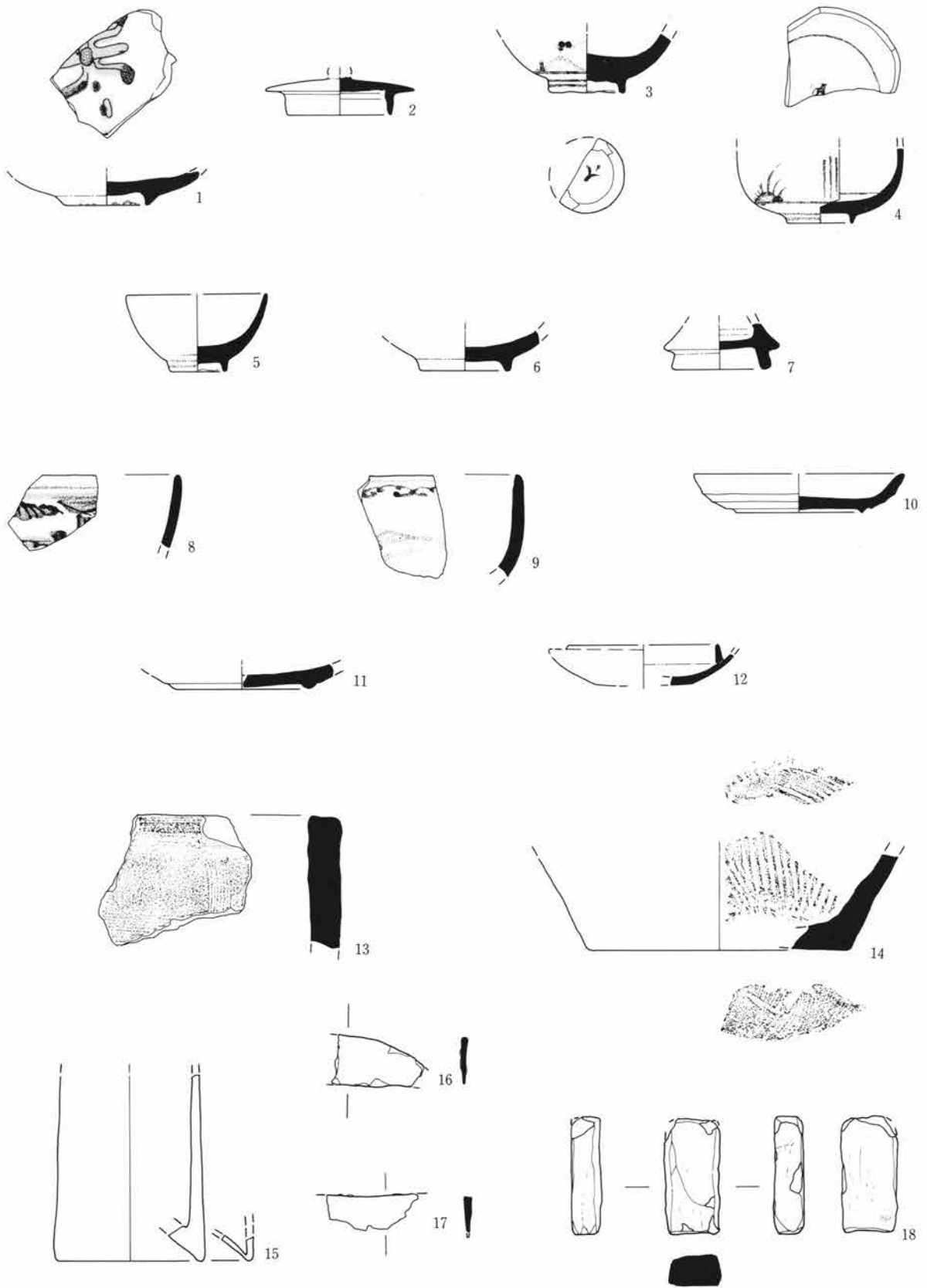
As-B層下まで掘り下げた後の平面図であり、本来はかなり幅太の溝である。底面は南東側に向かって低く傾斜しており、北西隅とコーナー付近では30cmの比高差がある。また10ラインより北側では10cmほどの幅で底中央が3~8cm高くなっており、二重底状になっていた。底面直上には砂粒が薄く堆積していた。

江戸時代後半の陶磁器破片が多数埋没土内から出土している。図示したのは13点だがこの他に約80点の小破片が出土している。在地製の摺鉢などが含まれるが、椀・皿類の比率が圧倒的に高い。



第93図 8号溝

第3章 検出した遺構と遺物



0 10cm

第94図 8号溝出土遺物



## 9号溝 (PL-17・35 表50)

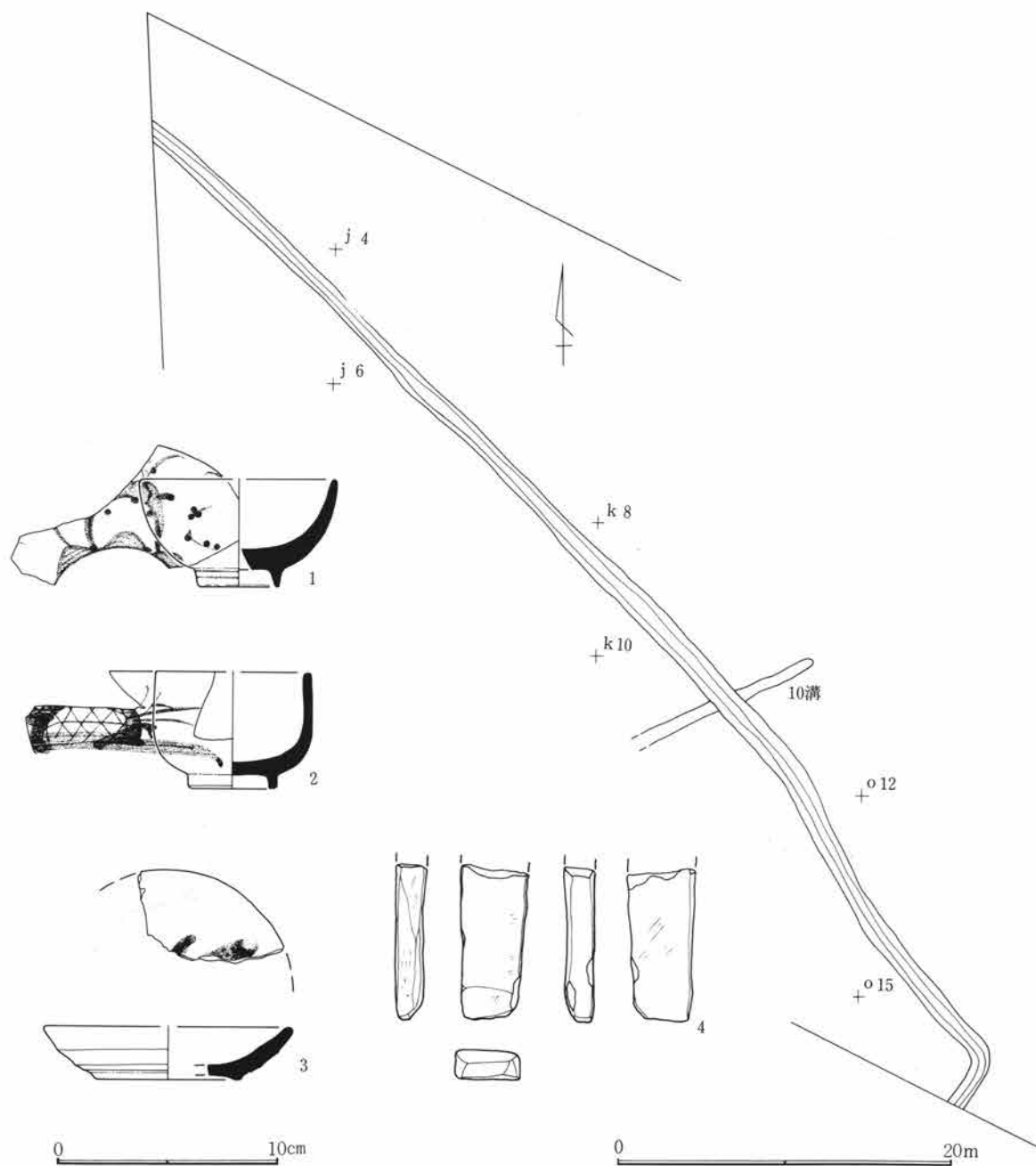
As-B層上で確認された。

調査区西端のA区d-2グリッドから、南端のP-16グリッドまでの長い溝である。直線的に続き、q-15グリッド付近で南側へ大きく屈曲している。直線部分の軸方向はN-50°-Wで、屈曲後はN-57°-Eに変わっている。8号溝に平行するように

南側18mの位置にあり、8号溝との共通点が多い。

この溝もAs-B層下で平面測量を行ったもので、本来よりかなり細い平面になっている。コーナー付近からは径20~30cm大の礫が多量に出土している。底面からは多少浮いた状態であった。この他に、全域から江戸時代後半の陶磁器が少量出土している。

**重複** 10号溝を切っている。



第95図 9号溝および出土遺物

第3章 検出した遺構と遺物

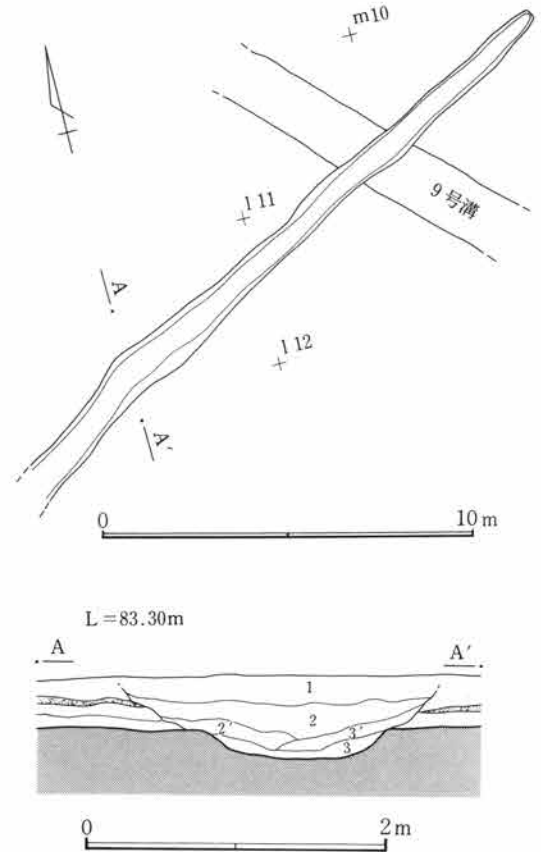
10号溝 (P L-17・35 表50)

As-B層下の水田層直下で確認できた直線的な溝である。FA層を切っていることが断面から確認できる。

B区n-10グリッドから南西方向へ延びているが、南西端は不明瞭である。確認できた総延長は約20mで、軸方向はN-59°-Eである。平面図は、FA下の粘性土まで掘り下げた時のもので、確認時に比べて幅は狭くなっている。底面は比較的凹凸が多いが、立ち上りは緩やかである。底面レベルはセクションポイントから北東側6mにかけての範囲が最も低く、北東隅より35cm深い。

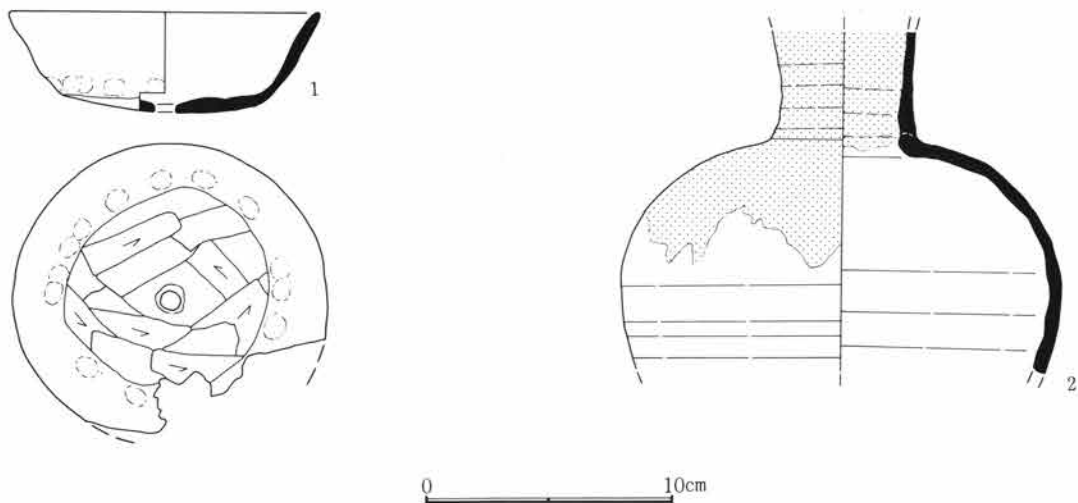
**重複** 9号溝に切られている。

遺物は平安時代のものである。出土量は少ないが、2点を図示した。灰釉陶器の出土は本遺跡では希な例である。



10号溝土層説明

- 1層 暗褐色土層。As-B層下の粘性、しまりとも強い層。As-Cと思われるパミスとシルト質土を霜降状に含んでいる。
  - 2層 黒褐色土層。ややしまり欠く粘性土層。混入物少ないが2'ではシルト質土を小ブロック状に含んでいる。
  - 3層 暗(黄)褐色土層。シルト質土をブロック状に含んだ粘性土層。3'では黒色土もブロック状に混入している。
- ※ 地山のトーン部分はFAを小ブロック状に含んでいる。



第96図 10号溝および出土遺物

5 土坑

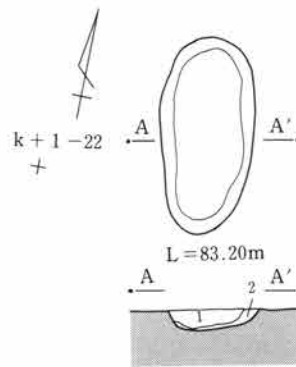
1号土坑 (PL-12)

位置 B区 k-21・22グリッド

主軸方向 N-5°-W

平面形態 長軸105cm、短軸48cmの長楕円形に近い不整形を呈した小型の土坑である。

その他 底面はわずかに皿底状で、中央は壁直下より3cmほど低くなっている。確認面からの深さは最大で14cmである。



- 1号土坑土層説明
- 1層 暗褐色土層。弱粘性の黒色土に多量のシルト質土が混入した土層。
  - 2層 黒色土層。混入物の少ない弱粘性土層。

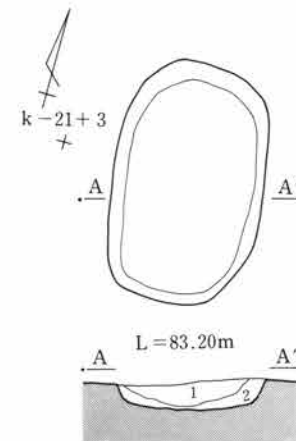
2号土坑 (PL-12)

位置 B区 k-21グリッド 1号土坑の50cm西北に主軸をほぼ同じにして並んでいる。

主軸方向 N-4°-W

平面形態 長軸127cm、短軸80cmのやや不整な隅丸長方形を呈している。

その他 底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは16cmである。



- 2号土坑土層説明
- 1層 黒色土層。As-Cと思われるパミスを霜降状に含んだ弱粘性土層。
  - 2層 黒色土層。As-Cと思われるパミス、シルト質土をわずかに含んだ土層。

3号土坑 (PL-12)

位置 B区 i-21・22グリッド

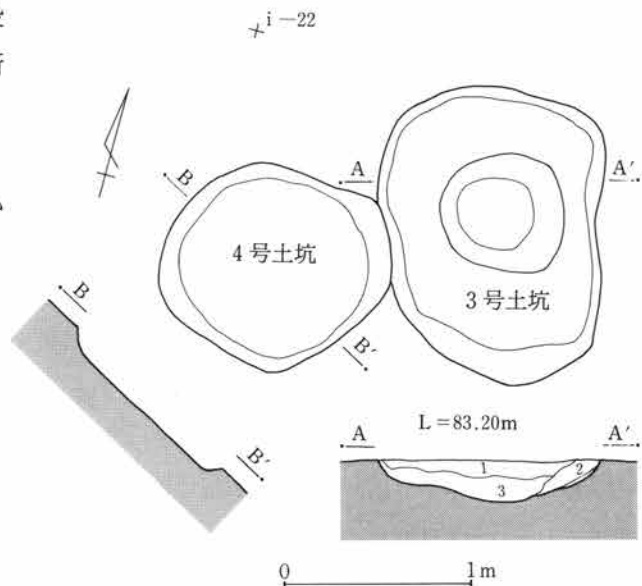
重複 4号土坑と重複しているが、切り合い部分が少なく新旧は不明である。ただし、3号土坑の埋没土のほうが明瞭で、調査中には3号土坑のほうが新しいと推定した。

主軸方向 N-14°-W

平面形態 長軸7.40m、短軸5.95mの長方形に近い不整形を呈している。

その他 底面は皿底状に窪んでいて、中央は確認面より25cm、壁直下より16cm深くなっている。

- 3号土坑土層説明
- 1層 黒色土層。As-Cと思われるパミスをわずかに含んだ土層。
  - 2層 暗褐色土層。弱粘性の黒色土に多量のシルト質土が混入した土層。
  - 3層 暗(灰黄)褐色土層。地山のシルト質土中心の弱粘性土層。



4号土坑 (PL-12)

位置 B区 h・i-22グリッド

重複 3号土坑と重複している。

平面形態 3号土坑との重複部分が歪んでいるが、平面形は円形に近い。

その他 底面には細かな凹凸が多い。確認面からの深さは10~13cmである。

第97図 1・2・3・4号土坑

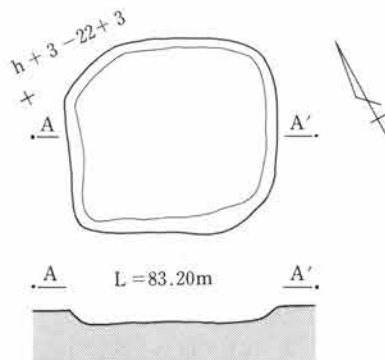
5号土坑 (PL-13)

位置 B区 h・i-22・23グリッド

主軸方向 N-65°-W

平面形態 長軸112cm、短軸105cmの、北側隅の歪んだ隅丸方形を呈している。

その他 壁や底面の掘り込みは鋭く、埋没土は耕作土に近い黒色土であった。近世以降の土坑であろうと調査段階で推定している。確認面からの深さは11cmであった。



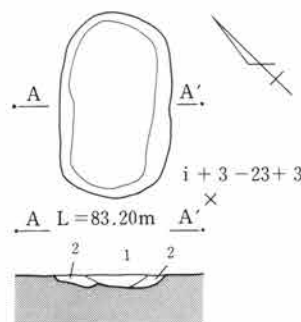
6号土坑 (PL-13)

位置 B区 i・j-23グリッド

主軸方向 N-50°-E

平面形態 長軸98cm、短軸57cmで、長軸方向の丸味の強い長方形を呈している。

その他 底面は凹凸が多い。壁直下より中央のほうが5~8cm低くなっている。



6号土坑土層説明

- 1層 黒褐色土層。As-Cと思われるパミスを不均等に含んだ土層。
- 2層 暗褐色土層。シルト質土を小ブロック状に少量含んだ土層。

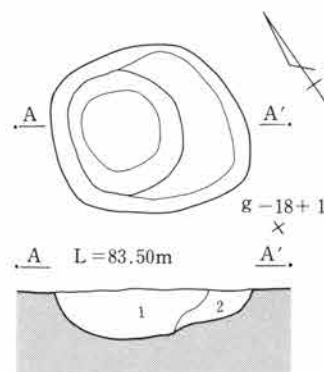
7号土坑 (PL-13)

位置 B区 f・g-17・18グリッド

主軸方向 N-58°-W

平面形態 長軸107cm、短軸90cmの楕円形に近い不整形を呈している。

その他 底面は二段になっていて、テラス状の中段と底面には8cmの差がある。



7号土坑土層説明

- 1層 暗褐色土層。シルト質土小ブロック、パミス、カーボン粒を少量含むやや有機質な土層。
- 2層 暗(灰)褐色土層。3cm大のシルト質土ブロックの混入する弱粘性土層。

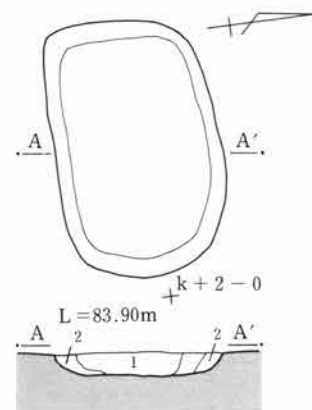
8号土坑 (PL-14)

位置 B区 k-24・0グリッド 掘立柱建物群の北西にある。

主軸方向 N-89°-E

平面形態 長軸136cm、短軸88cmで、南側の丸味の強い隅円長方形を呈している。

その他 底面は中央がわずかに低いほぼ平坦で、確認面からの深さは最大17cmである。



8号土坑土層説明

- 1層 暗褐色土層。シルト質土、パミスを少量含む、カーボン粒の混入のやや目立つ土層。1'ではシルト質土が小ブロック状に混入している。
- 2層 暗(黄)褐色土層。弱粘性の黒色土とブロック状のシルト質土との混合土層。

0 1m

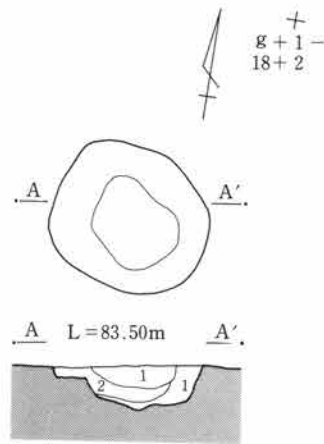
第98図 5・6・7・8号土坑

## 9号土坑 (P L-14)

**位置** B区g-18グリッド B区の21ライン以北には、径90cm前後で円形に近いプランの土坑(9・10・11号)が点在している。それらの中で本址はもっとも東側にある。

**平面形態** 長軸84cm、短軸77cmの不整な円形に近い形をしている。

**その他** 底面は中央が窪み、西側に段ができています。確認面からの深さは24cmである。



## 9号土坑土層説明

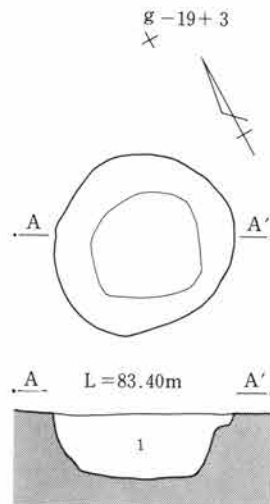
- 1層 暗(灰)褐色土層。弱粘性の黒色土に小ブロック状のシルト質土を多量に含んだ土層。
- 2層 暗褐色土層。As-Cと思われるパミスを霜降り状に含んだ土層。シルト質土を小ブロック状に混入している。

## 10号土坑 (P L-14)

**位置** B区f-19・20グリッド 4号と7号の2軒の竪穴住居の間にある。

**平面形態** 長軸98cm、短軸91cmの円形に近い形をしている。

**その他** 底面はわずかに皿底状で、確認からの深さは36cmあり、本遺跡の土坑の中では最も深い。東壁の一部が崩れている。



## 10号土坑土層説明

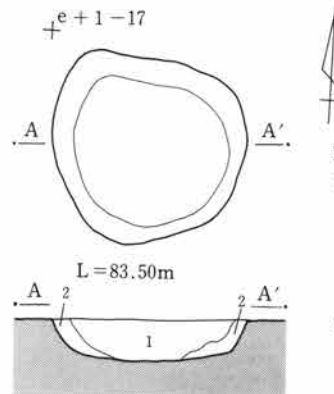
- 1層 暗褐色土層。As-Cと思われるパミスを霜降り状に含んだややしまり欠く土層。1~5cm大のシルト質土ブロックを不均等に含んでいる。

## 11号土坑 (P L-14)

**位置** B区e-17グリッド 6号住居の北西コーナーから北側へ80cmの位置に隣接している。

**平面形態** 直径103cmのやや円形に近い不整形をしている。

**その他** 底面は比較的平坦で、確認からの深さは25cmある。壁は緩やかに立ち上がっている。



## 11号土坑土層説明

- 1層 黒褐色土層。パミスを少量含み3cm大のシルト質土ブロックの混入やや多い粘性土層。
- 2層 黒色土層。混入物の少ない弱粘性土層。

0 1m

第99図 9・10・11号土坑

第3章 検出した遺構と遺物

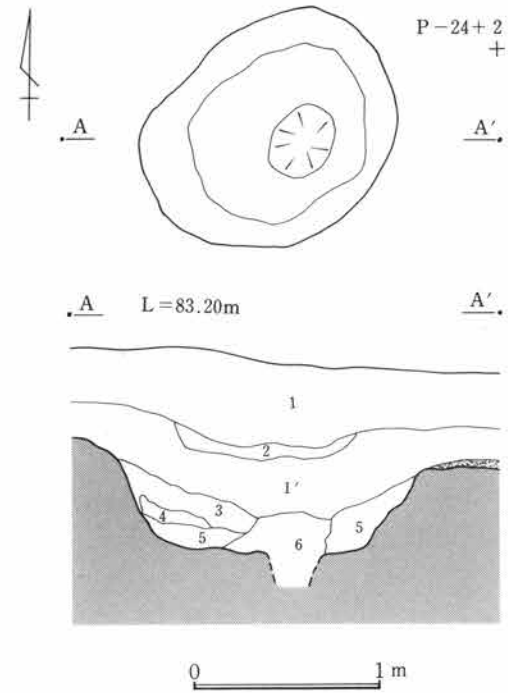
12号土坑 (P L-14・35 表51)

位置 B区P-24グリッド 旧流路の窪地の中にある。As-B層の下である。

平面形態 長軸133cm、短軸114cmの不整な楕円形を呈している。

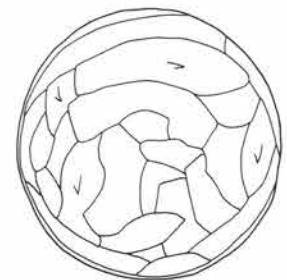
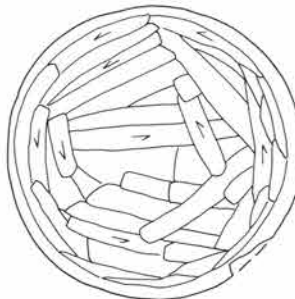
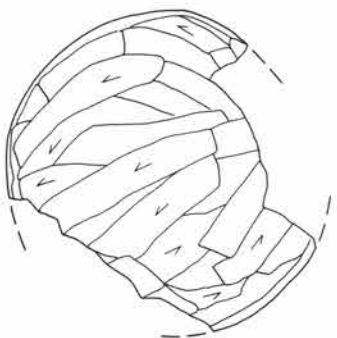
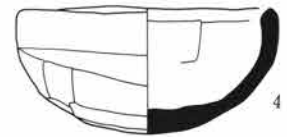
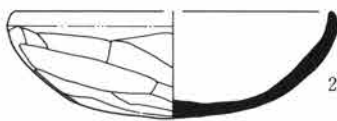
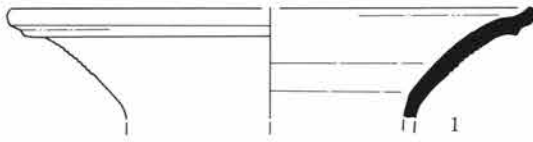
その他 旧河川の作ったピット状の窪みとの区別が難しい。底面中央やや南東寄りに性格不明の窪みがある。発掘調査時には木の根の攪乱であろうと推定していた。

出土遺物 遺物が底面近くから出土しており、4点を図化した。



12号土坑土層説明

- 1層 暗褐色土層。As-B層下のしまり、粘性ともに強い層。As-Cと思われるパミスを霜降状に含んでいる。1'ではパミス少なく、鉄分凝集の赤褐色ブロックを不均等に含んでいる。
  - 2層 黒褐色土層。混入物の少ないややしまりに欠ける有機質土層。
  - 3層 暗(灰)褐色土層。粒子の細かなややしまりの強い層。
  - 4層 灰黄褐色土層。シルト質土ブロック。
  - 5層 黒色土層。非粘性の有機質土層。混入物少ない。
  - 6層 シルト質土。黒色土のラミナ状堆積土層。
- ※ トーン部分はFAのほぼ純層。降下灰層か、二次的な堆積層かは区別できなかった。



0 10cm

第100図 12号土坑および出土遺物

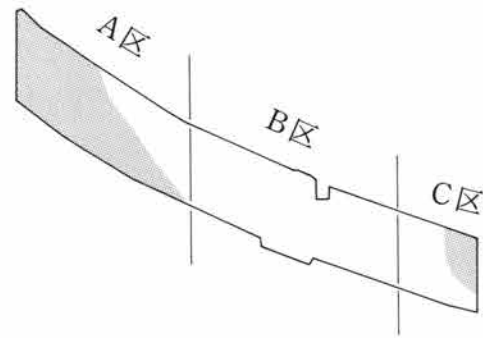
## 6 水田 (P L-18・19)

本遺跡では集落のある微高地を挟んで、調査範囲の両端にあたるA地点とC地点の沖積地からAs-B層下水田の一部を調査した。As-B層は比較的厚く堆積しており、水田面の遺存状態は良好であったが、どちらも主体となる部分は隣接する遺跡にあり、全容は明確ではない。

C区の西側は河川改修以前の宮川左岸にあたる。水田が発見されたのは、調査範囲の西隅で微高地部分に接する、水田の縁辺にあたる。As-B層直下の水田は、標高82mの高さにあり、二之宮千足遺跡1区の水田と連続するものである。この遺跡ではAs-B層下からAs-C層下まで4面の水田が発見されている。また古墳時代後半の溜井と祭祀跡があり、赤城山南麓の水田開発過程を追うことができる特徴的な遺跡の一つとなっている。

なお、ここでは二之宮千足遺跡と並行してプラント・オパール分析を行っている。

A区の東側の水田は、C区水田より1m以上高い面にある。南西側の台地縁辺付近は畦畔の残りも良好であったが、中央から東側の微高地に向かっては後世の耕作や暗渠排水の跡など攪乱が多く、きわめて不明瞭であった。ここは二之宮谷地遺跡の水田と連続するものである。この遺跡では水田の南側、東側の範囲がおさえられている。このことより、C区の水田は幅30mに満たない狭い沖積地に作られたことが分かる。奈良時代の遺物を共伴する特殊井戸が調査されている。灌漑用の溜井群が周辺に存在し、C区水田の用水確保しているものと思われる。



※トーン部分がAs-B層下水田

### 第3章 検出した遺構と遺物

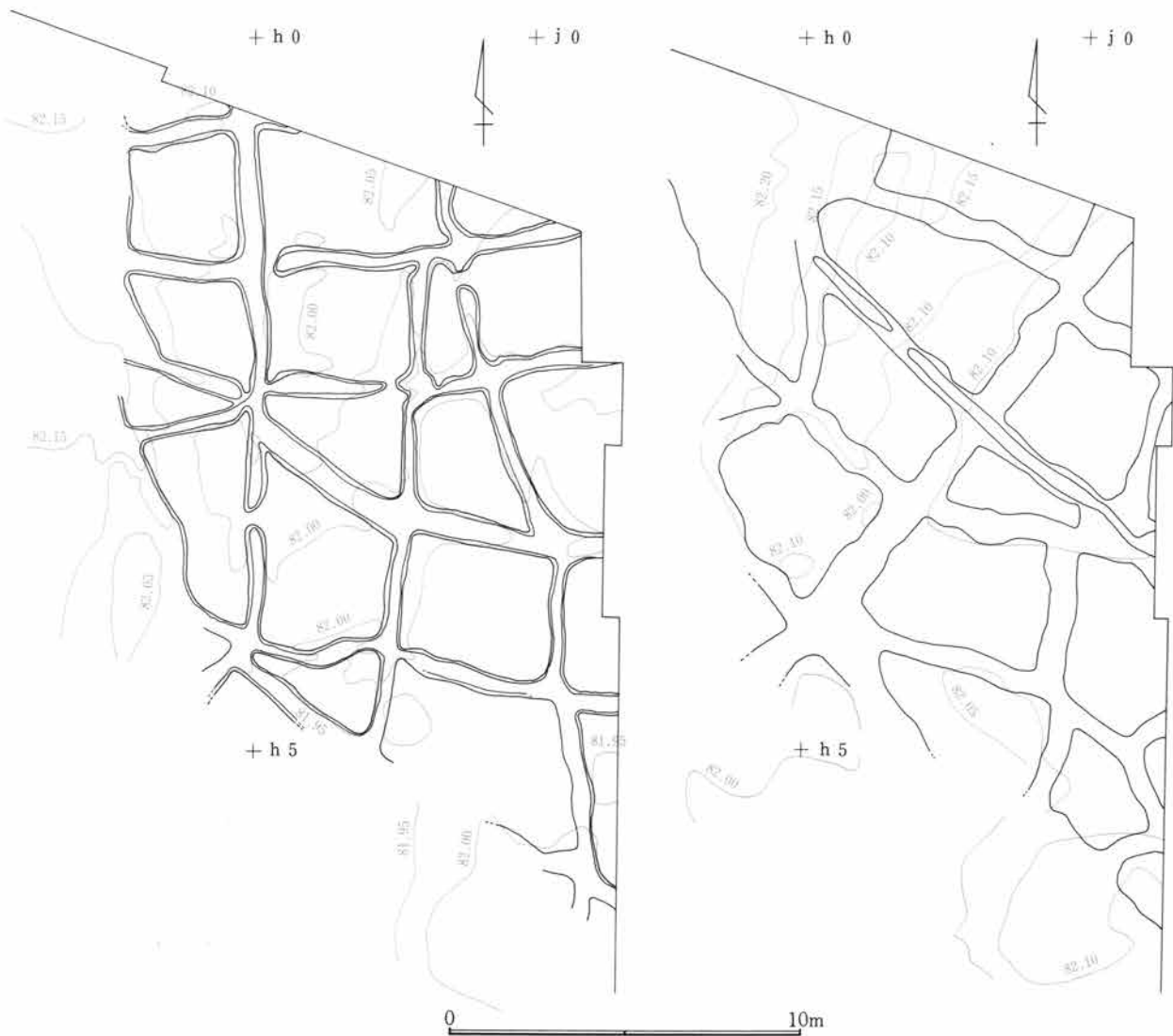
C区水田は昭和61年度に調査を行った。As—B層直下の第1面水田と、さらに約5cm下の第2面水田が確認された。畦畔はどちらもあまり明瞭なものではないが、南西側にある微高地の縁辺部分にある境界と、南西側の最初の畦畔は両方の水田に共通している。

第1面水田は微高地を巡るように畦畔が見られ、地形に則した水田となっている。これに対し第2面

水田では基本的に第1面と同じ畦畔と条里水田的な畦畔が共存しており、複数面の水田が表れた可能性がある。

この水田のさらに下層の粘性土を掘り込んだ、3条の溝状の掘り込み（3・4・5号溝）がみつかり、水田に関連した遺構と思われる。

遺物の出土はなかった。



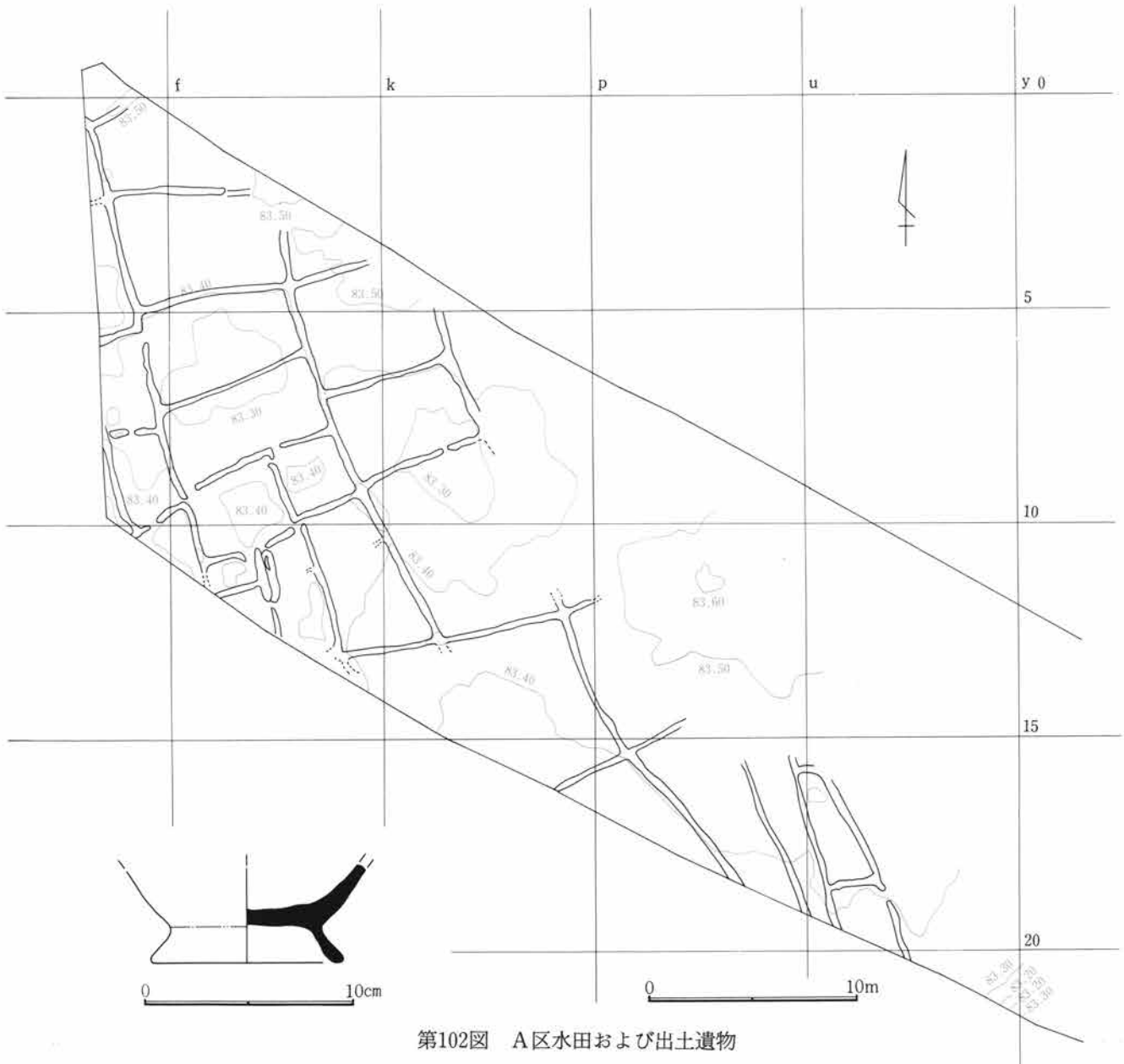
第101図 C区第1面水田(右)と第2面水田(左)



昭和62年度に調査したA区の水田はC区第1面水田に対応するもので、As-B層下から検出した。幅50cm前後、高さ3～5cmの比較的明瞭な畦畔が確認できた。確実な畦畔のみを図示したため、かなり大区画の水田になってしまったが、本来は南西隅で見られるような区画の部分がもっと多かったと思われる。

A9-17グリッドの水田面から須恵器の高台付椀が出土している。

C区の沖積地や、隣接する二之宮谷地遺跡では純層に近い状態のFA層が、部分的に見られた。畦畔は検出できなかったが、この層の前後にも水田の存在する可能性がある。



第102図 A区水田および出土遺物

7 縄文時代の遺構と遺物

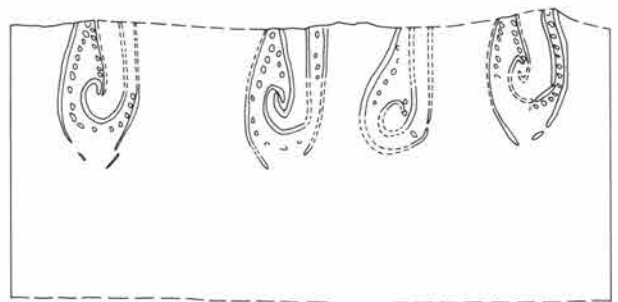
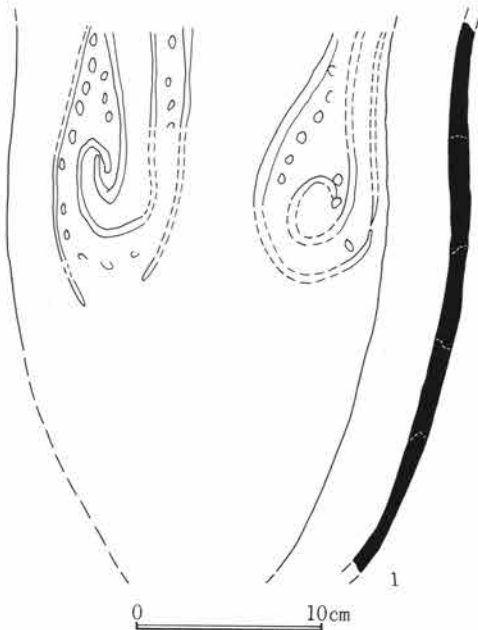
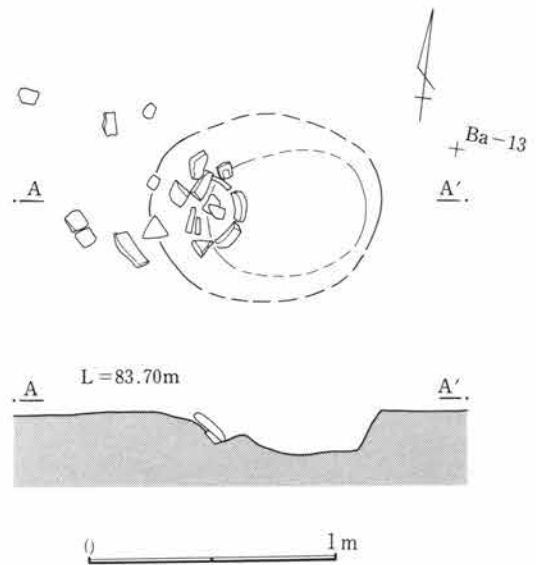
調査によって検出された縄文時代の遺構は、後期初頭の土坑が1基検出されたのみである。遺構外出土の遺物は、後期に属する土器片が9片、石器、剥片等が57点である。遺構、遺物の検出状況を見ると、

本遺跡では当該期のものはA区とB区に偏っているが、主体となるものではなく遺跡の中心から外れるものと思われる。

13号土坑（PL-35）

二之宮洗橋遺跡から検出された縄文時代の遺構は後期初頭の土坑1基のみである。この土坑の平面形は東西に長い楕円形を呈している。土坑の掘り込みは浅く、皿状に掘り込まれている。土器は、土坑の西側に伏せた状態で出土している。後世の攪乱によって、底部付近の土器片は土坑外に散乱していた。

出土した土器は、称名寺式の土器で深鉢の胴上部と底部が欠損している。胴部はほぼ全周して残っており、胴部の文様帯が復元できた。胴部文様帯は沈線による「J」の字文様が4単位に施文されている。「J」の字文様を（ ）状の沈線がかこみ、その間を丸棒状の工具で刺突を加えている。表面は良く磨かれていて保存状態は良い。

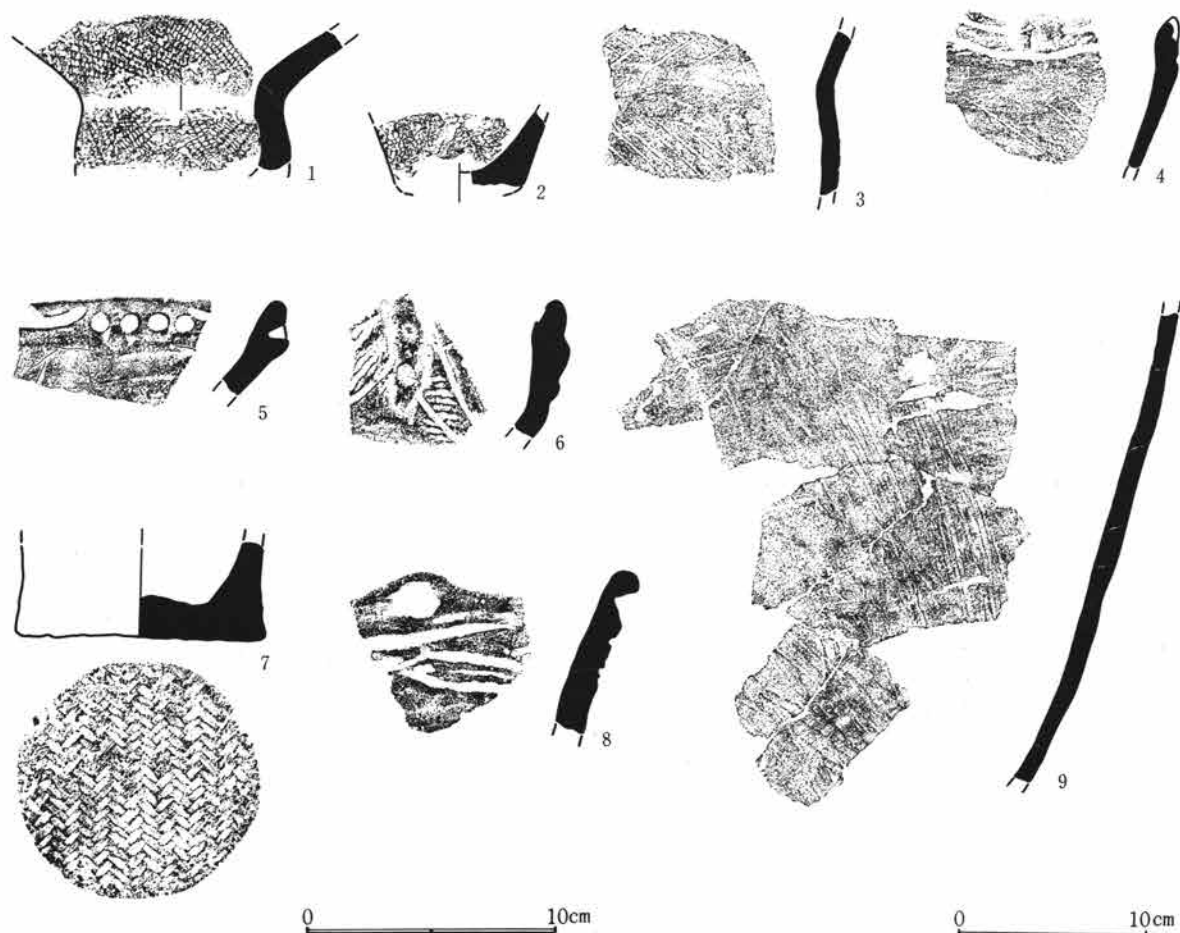


第103図 13号土坑と伏甕

## 遺構外の出土土器

1の土器は、縄文施文の土器で、単節RLとLRの羽状縄文を施文する。内面は良く磨かれており、煤状の物が付着している。胎土は細かい砂粒を含み、遺存状態は良くなく全体に摩滅している。2は底部破片で、外面に細い単節RLの斜行縄文が施文されている。胎土に細かい砂粒を含み、全体に摩滅している。3は細い沈線による斜線を矢羽根状に施文する。胎土に砂粒を含み、遺存状態はよい。4は、口縁部破片で、波状口縁を呈する。口縁に沿って二条の沈線が施される。波底部には、粘土瘤を持ちその下部に細い沈線が斜めに加えられる。胎土は、3と同様に砂粒を含み、遺存状態はよい。胎土と文様の特徴から3と同一個体と思われる。5は、緩やかな波状を呈する。口唇にそって太い沈線と四つの刺突

が加えられている。胎土に砂粒を含み、遺存状態は良いが全体に摩滅している。6は、波状口縁の波頂部破片で、波頂部から垂下するように粘土紐が張り付けられている。粘土紐の上には二ヶ所に押圧が見られる。胎土に砂粒を含み、遺存状態はよい。7は、深鉢の底部破片で、底面に網代痕を持つ。胎土に砂礫を含み、全体に摩滅している。8は、口縁部破片で口縁に小さい突起をもつ。口縁部には太い沈線が、横位に施文される。胎土の細かい砂粒を多く含み、遺存状態はよい。9は、大形の深鉢胴部破片で、器面全体に磨いたような擦痕を残す。胎土は砂粒を少量含み、全体に摩滅が見られる。1・5・9は後期前半の堀之内式に、その他は、後期中葉の加曾利B式土器に比定される。



第104図 遺構外出土の縄文土器

第3章 検出した遺構と遺物

遺構外の出土石器 (P L-35・36)

本遺跡から出土した石器は、石斧、石鏃、スクレーパー、その他使用痕のある剥片などである。石材や重量等の計測値は別に一覧表に掲載した。ここでは、石器の概要を記すことにする。1から5は石斧である。いずれも中間部に抉りがはいるものである。1は撥型に近い形態をする。その他の石斧は、分銅型をし、両端が刃部になる。6～8・14は側縁部に細かい調整痕を持ち、刃部を作るスクレーパーである。

9～13は側縁部に調整痕は認められないが小さな剝離痕が認められた。15～26・47は縦長になる剥片である。この中には石器製作過程で生じた剥片以外に、側縁に使用痕と思われる刃こぼれの認められるものがある (17～19・25・26)。27～42・50は横長になる剥片である。このうち、27～29・31～37は、下縁部に細かい調整痕や使用痕がある。43～46・48・49・51・52は剥片である。53～57は石鏃。53・55・56は有茎の石鏃、54・57は基部に抉りを持つ石鏃である。

第2表 出土石器一覧

挿図番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	石材
第105図-1	A f-3	打斧	113	57	138.51	黒頁
2	A P-7	打斧	106	59	100.90	黒頁
3	A f-7	打斧	124	67	176.96	細安
4	A e-4	打斧	145	91	465	黒頁
5	A m-6	打斧	73	85	125.88	細安
6	A区	削器	97	55	71.79	黒頁
7	A l-13	削器	143	76	310	黒頁
8	B h-18	削器	95	54	80.17	黒頁
9	A m-6	削器	37	58	11.35	黒頁
10	12号住	削器	57	28	19.93	黒頁
11	窪地3区	削器	50	28	7.60	黒頁
12	6号住	削器	39	17	2.84	黒頁
13	窪地4区	削器	43	40	18.25	黒頁
第106図-14	A o-8	削器	68	54	60.09	黒頁
15	A e-4	剥片	92	34	45.58	黒頁
16	窪地4区	剥片	60	36	16.29	黒頁
17	A o-10	剥片	90	70	84.33	黒頁
18	B区	剥片	88	70	106.56	黒頁
19	A i-6	剥片	70	79	78.81	黒頁
20	A r-9	剥片	80	53	61.20	ひん岩
21	A w-14	剥片	68	59	35.53	黒頁
22	A s-9	剥片	58	61	28.83	黒頁
23	A y-15	剥片	61	54	42.26	黒頁
24	3号溝	剥片	48	37	25.93	黒頁
25	A l-7	剥片	52	36	21.96	黒頁
26	10号住	剥片	50	54	17.62	黒頁
第107図-27	5号溝	剥片	64	87	89.50	黒頁
28	A x-17	剥片	52	80	74.70	黒頁
29	窪地	剥片	45	84	63.32	黒頁

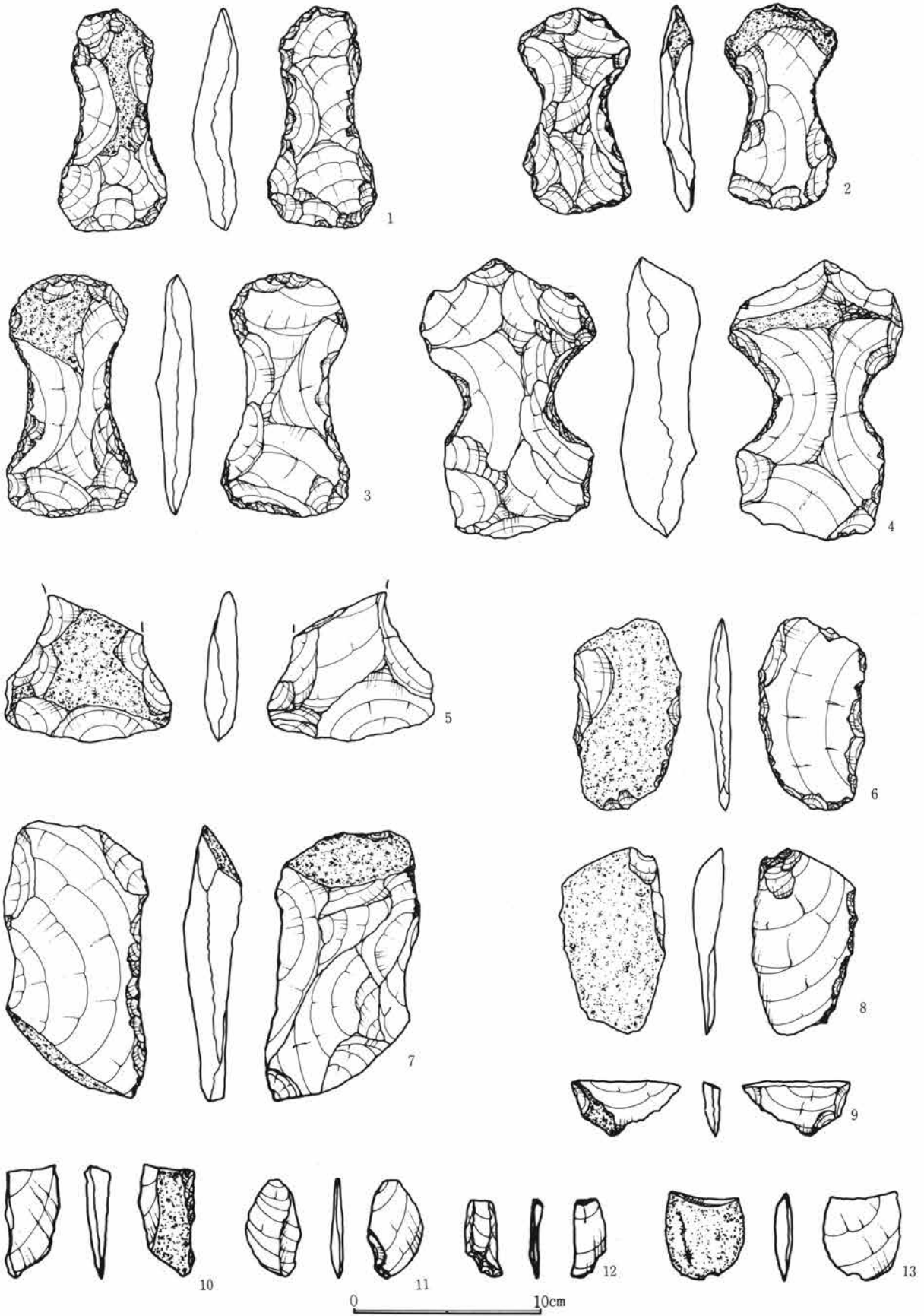
挿図番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	石材
第107図-30	B区	剥片	17	49	7.23	頁岩
31	A d-1	剥片	48	65	55.18	黒頁
32	A P-12	剥片	31	57	12.78	黒頁
33	A区	剥片	45	64	31.64	細安
34	3号溝	剥片	31	63	16.33	黒頁
35	A w-16	剥片	43	53	18.46	黒頁
36	B区	剥片	28	63	16.24	細安
37	A e-7	剥片	40	53	13.66	黒頁
38	A n-7	剥片	42	48	10.32	黒頁
39	A m-12	剥片	36	42	9.05	黒頁
40	A q-14	剥片	50	49	20.70	黒頁
41	A s-16	剥片	36	48	9.18	黒頁
42	A w-16	剥片	44	53	18.46	黒頁
第108図-43	A e-8	剥片	113	60	205.23	黒頁
44	A c-s	剥片	111	75	105.82	黒頁
45	A k-7	剥片	50	48	27.93	黒頁
46	A d-4	剥片	81	37	63.68	黒頁
47	B i-19	剥片	106	45	68.53	黒頁
48	A区	剥片	75	36	41.35	黒頁
49	A d-1	剥片	60	58	120.16	黒頁
50	A i-10	剥片	38	39	8.41	黒頁
51	3号溝	剥片	65	52	49.27	黒頁
52	A区	剥片	72	40	51.03	黒頁
53	A e-4	石鏃	43	22	4.54	チャート
54	A g-2	石鏃	40	21	2.45	黒安
55	窪地	石鏃	28	22	2.65	チャート
56	窪地B区	石鏃	25	15	0.94	黒頁
57	B s-21	石鏃	17	16	0.56	黒曜石

「器種」の欄の略号は次の事を示す。

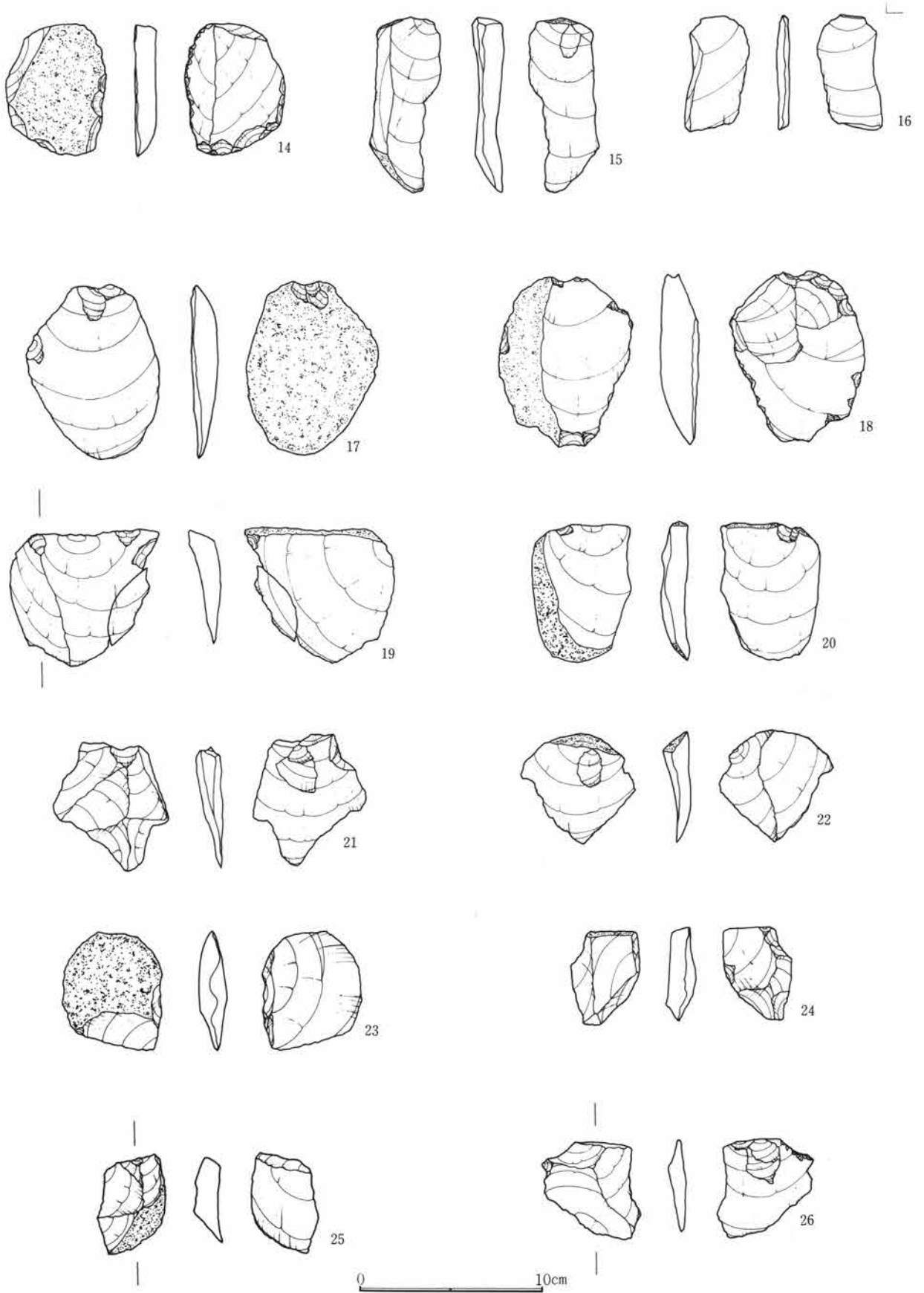
打斧：打製石斧

「石材」の欄の略号は次の事を示す。

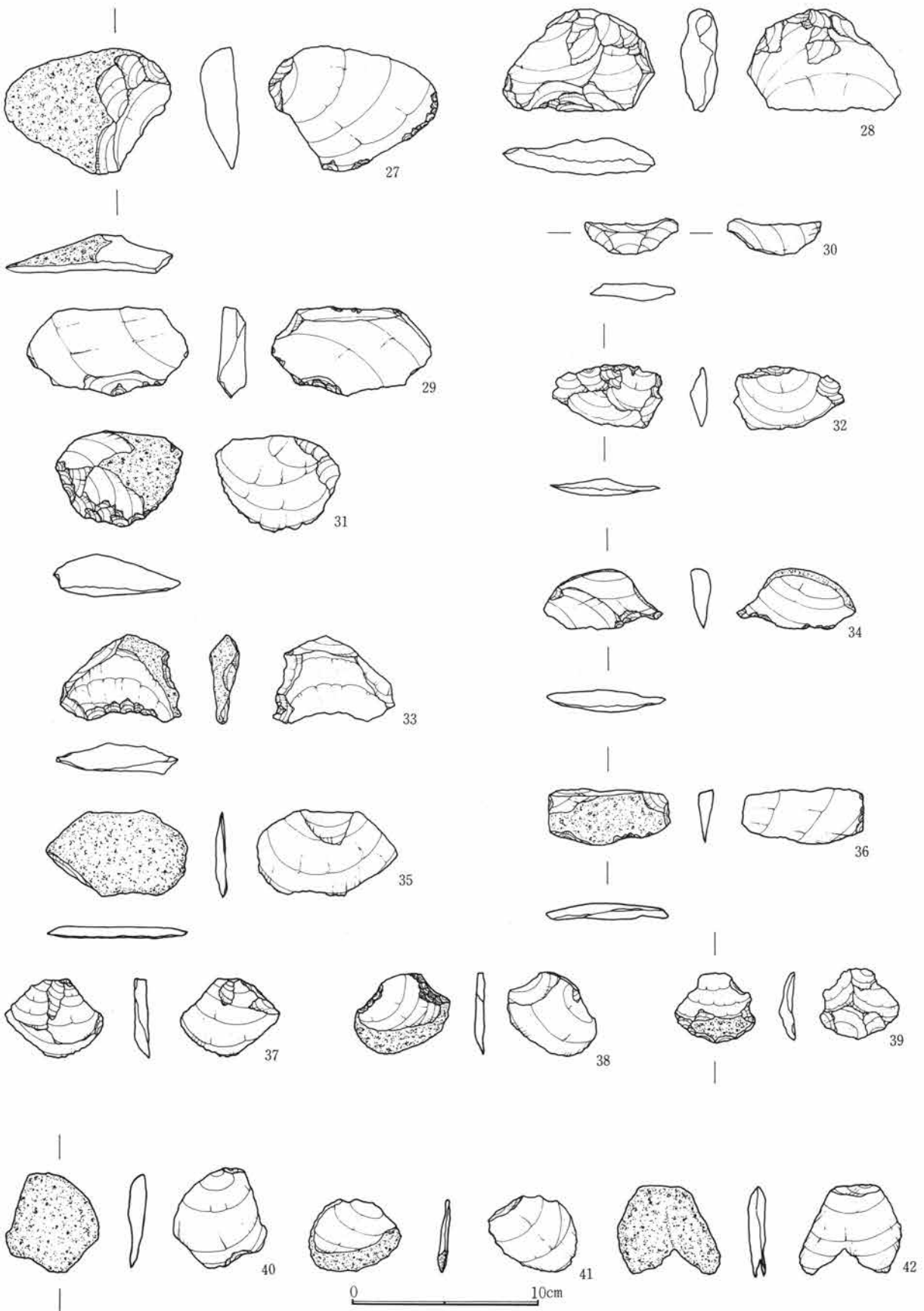
黒頁：黒色頁岩      黒安：黒色安山岩      細安：細粒安山岩



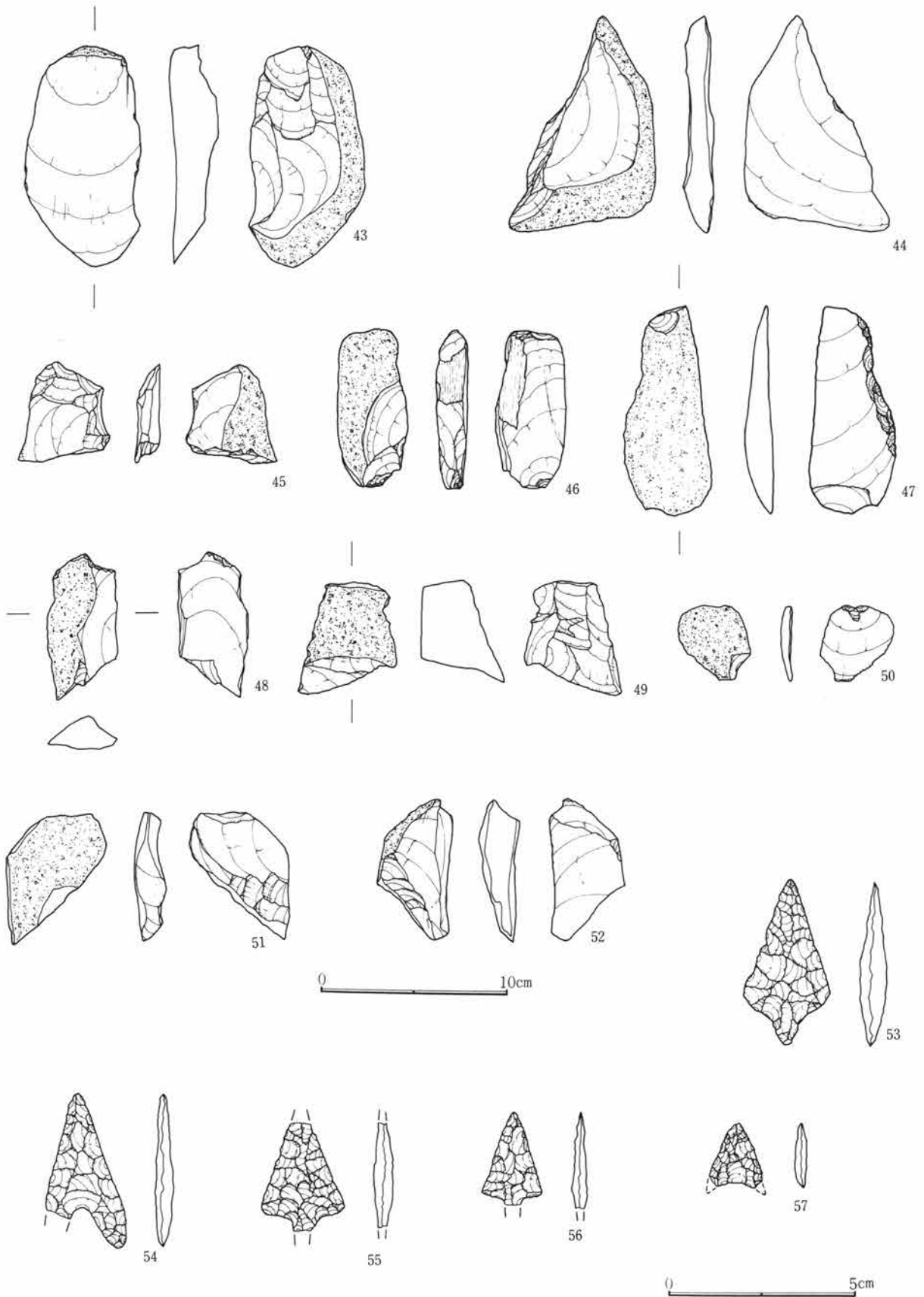
第105図 遺構外出土の石器(1)



第106図 遺構外出土の石器(2)



第107図 遺構外出土の石器(3)



第108図 遺構外出土の石器(4)



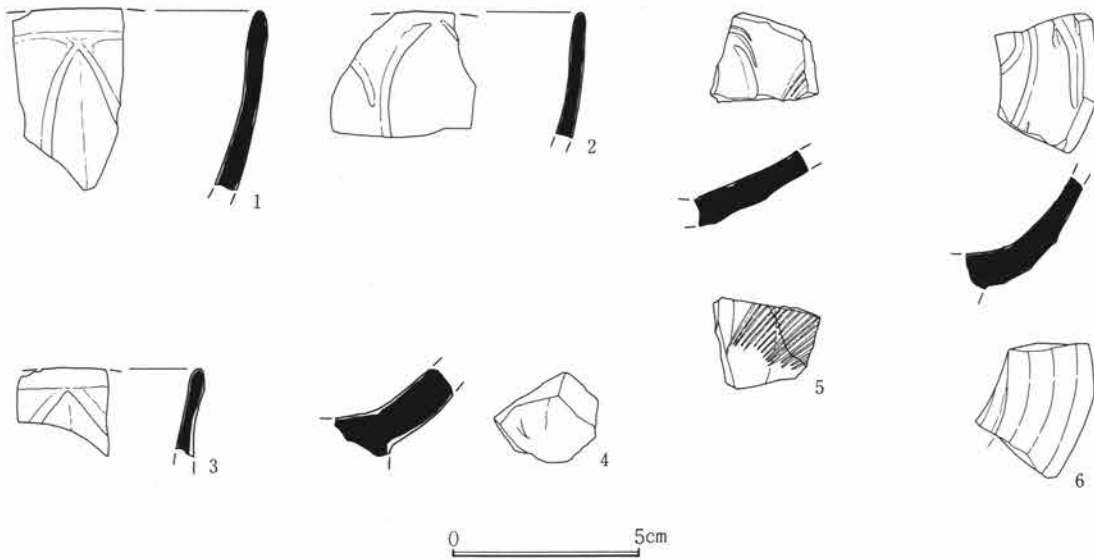
## 8 遺構外出土の遺物

標記の遺物についてはこの項で一括して扱う。

試掘調査で取り上げた遺物や、重機による掘削土にまじって発見した遺物、出土位置をプロットしたが遺構に結び付かなかった遺物のなかで、遺存状態の良いもの、特筆されるもの17点を図示した。また、紙面の都合で流路跡の窪地出土の木製品15点もこの項で扱った。

## 舶載磁器 (表51)

二之宮洗橋遺跡からは中国製の磁器が出土している。図示した6点以外にも5点の細片がある。いずれも碗小破片で表土層の出土である。1～4は龍泉窯系の青磁蓮弁碗で、3は砧手の美しい発色をしている。本遺跡にはこれらの遺物の時期の遺構はみつかっていない。



第109図 遺構外出土の舶載磁器

## 流路跡窪地出土の木製品 (P L-37 表52)

本遺跡の木製品はいずれも流路跡窪地の下層から出土したものである。遺存状態はあまりよくなく、製作痕は明瞭でない。1～8は曲物類の底板で、同一個体はないようである。14・15は杭の先端部分、

9・13は不明板状品である。10・11は不明棒状品で火を受けて一部炭化している。

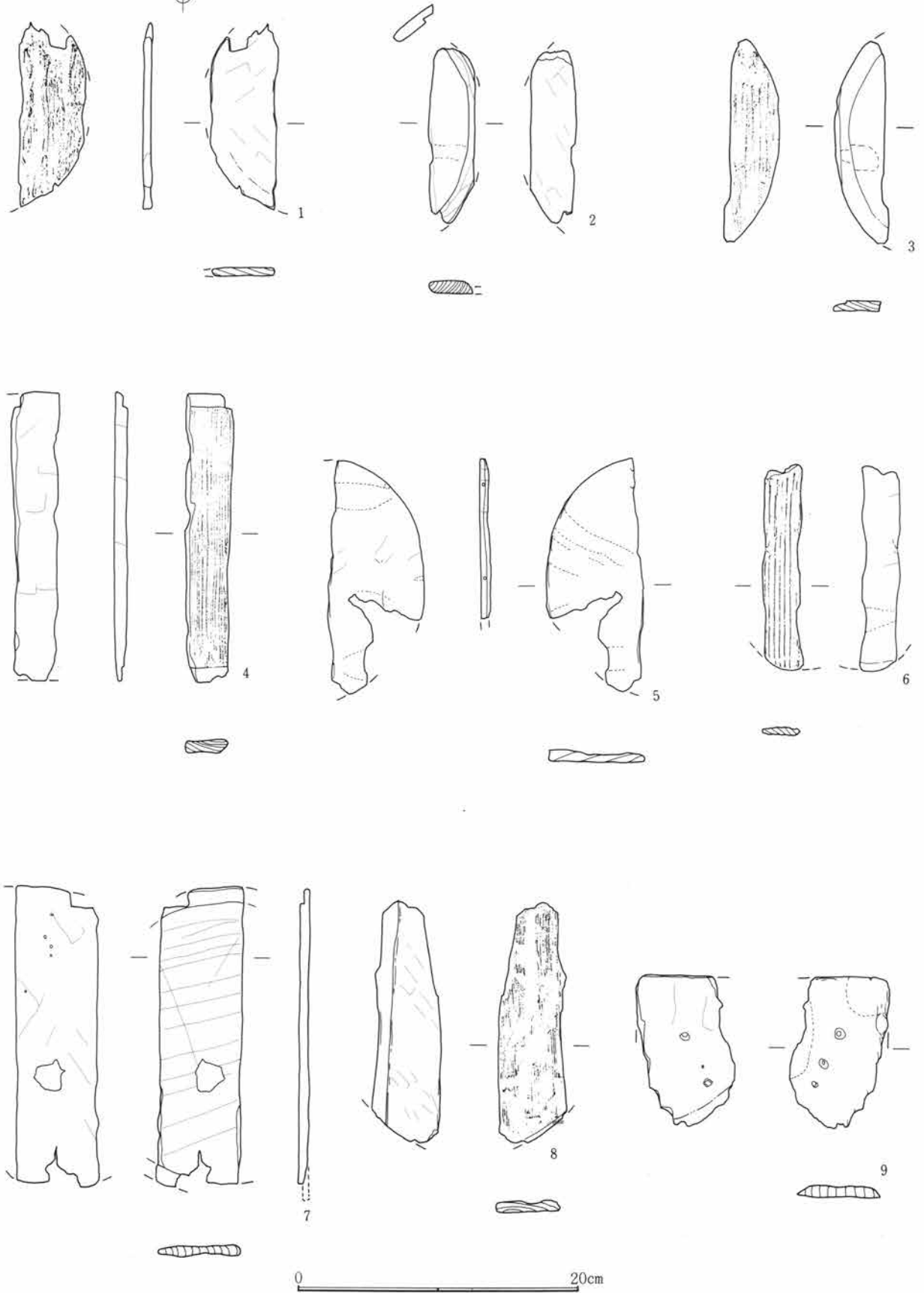
この外にも流路跡窪地からは自然木や桃の果核が若干出土している。

## その他の土器 (P L-37 表53)

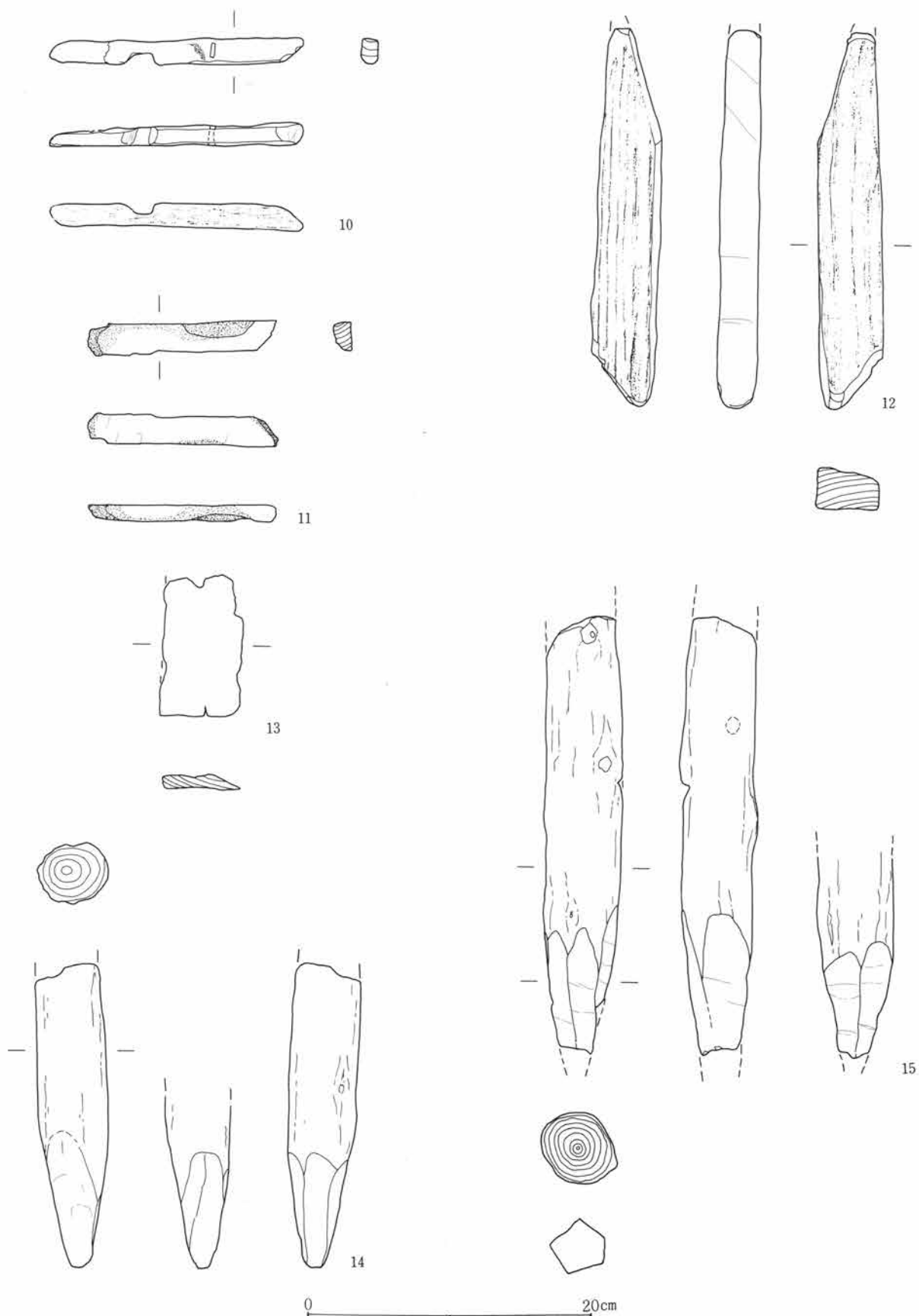
遺構外出土の土器のうち大破片11点を第112図に一括して掲載した。器面の摩滅や風化は少なく、割口も比較的新しいもので、集落内の遺物が土地改良

事業や島の耕作時に掘り出されたものと考えている。11の円面硯は1号溝出土の円面硯とは別個体のものである。

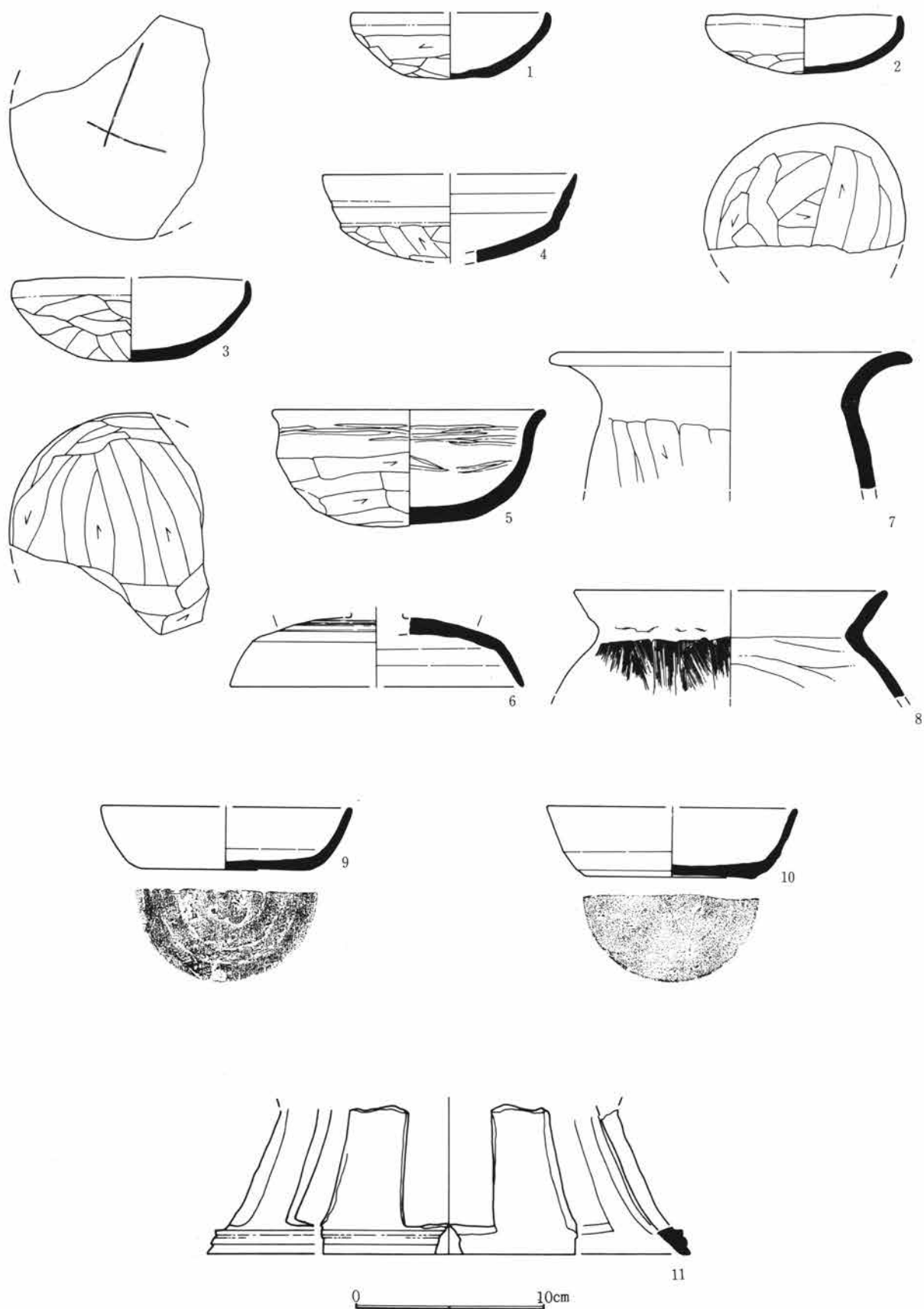
第3章 検出した遺構と遺物



第110図 遺構外出土の木製品(1)



第111図 遺構外出土の木製品(2)



第112図 遺構外出土遺物

## 第4章 分 析

### 1 プラント・オパール分析調査報告

(有)古環境研究所

#### 1. はじめに

二之宮洗橋遺跡C区では、浅間Bテフラの下層などから畦状遺構や水路が検出され、水田跡に伴う遺構と考えられていた。

今回の調査の目的は、プラント・オパール分析によって稲作跡の確認および探査を行い、考古学的調査の資料とすることである。

以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

#### 2. 試 料

現地調査は、昭和62年1月14日に行った。

試料採取地点は、C区j-1グリッド内である。層序区分は、遺跡調査員によって行われた。

試料は、土層壁面において各層ごとに5~10cmの間隔で採取した。採取にあたっては、容量50ccの彩土管ならびにポリ袋を用いた。採取した試料数は12点である。

#### 3. 分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

絶乾試料約1gにガラスビーズ混入(直径約40 $\mu$ m, 約30万個)、電気炉灰化法または過酸化水素水による脱有機物処理、超音波による分散、沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去、乾燥、オイキット中に分散、プレパラート作成、検鏡・計数。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行った。

計数はガラスビーズが300個以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率

をかけ、さらに仮比重をかけて単位体積あたりのプラント・オパール個数を求めた。

このようにしてイネのプラント・オパール密度を測定していくと、水田跡が埋蔵されている層にピークが現れるのが通例である。通常、イネのプラント・オパールが試料1ccあたり5,000個以上の場合に、水田跡の可能性があると判断している。

また、第3表の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重:藤原, 1979の第1表を一部改変)をかけて植物体量を算出した。これは実際の植生を定量的に把握するのに有用である。

第3表 各植物の換算係数(単位:10<sup>-5</sup>g)

植物名	葉身	全地上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
ヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

#### 4. 分析結果

イネ、キビ族(ヒエなど)、ヨシ属、タケ亜科(竹笹類)、ウシクサ族(ススキなど)について同定・定量を行い、数値データを表3に示した。上記以外については、検出数が少ないため割愛した。

第113図にイネのプラント・オパールの出現状況を示した。これは、水田跡の可能性を判断する際の資料となる。柱状図内のドットは、資料を採取した位置を示している。

第114図に、イネ、ヨシ属、タケ亜科の植物体生産量と変遷を示した。これは、稲作跡の可能性を判断したり、稲穀の生産総量や古環境を推定する際の資料となる。柱状図内のポイントは、最上面から1m深ごとの位置を示している。

#### 5. 考 察

同地点では、5層と7a層が水田跡と見られてい

第4章 分 析

た。なお、4層は浅間Bテフラの純層である。

6層、7a層上部、8a層では、イネのプラント・オパール密度は3,300~4,700個/ccとやや少ないものの、明らかなピークが認められた。このことから、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

5層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、500個/ccとごく少量である。また、同層ではヨシ属が卓越していることから、ここで稲作が行われたとは考えにくい。ここで検出されたイネのプラント・オパールは他所からの混入と考えられる。

9層以深では、イネのプラント・オパールは検出されなかった。9層、10a層では、ヨシ属が卓越していることから、当時ここはヨシの繁茂する湿地であったものと推定される。

以上のことから、同地点では8a層の時期に稲作が開始され、6層の時期まで続けられたが、その後、5層の時期に何らかの原因で廃棄されたものと推定される。

稲作が行われていた可能性が高いと判断された層位について、そこで生産された稲穀の総量を推定した。また、当時の年間収量を10aあたり100kgと仮定して稲作の行われた期間を推定した。これらの結果を第4表に示す。

第4表 稲穀の生産総量と稲作期間の推定

層位	生産総量	期間
	(t/10a)	(年間)
6	1.3	13
7a	4.0	40
8a	5.3	53

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行われ稲ワラがすべて水田内に残されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穀の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

引用文献

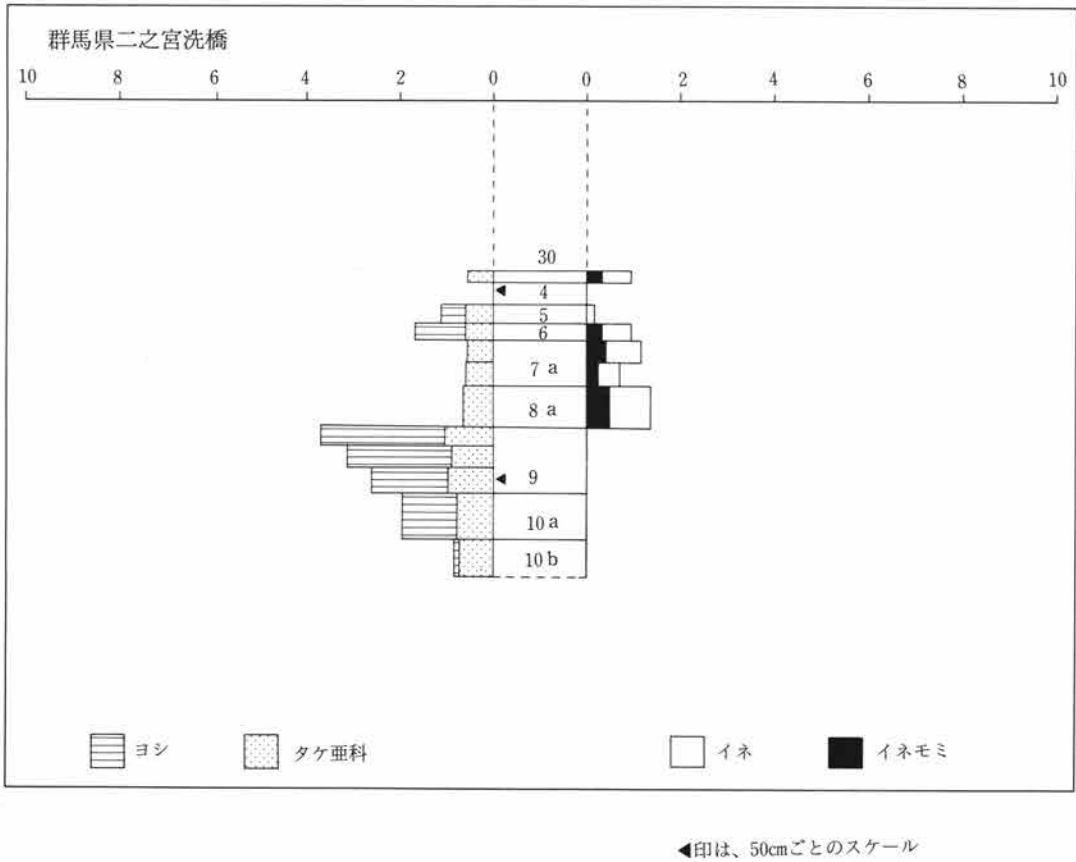
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学9:15-29
- 藤原宏志, 1979, プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) —福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—, 考古学と自然科学12:29-41
- 杉山真二・藤原宏志, 1984, プラント・オパール分析による水田址の探査, 那珂君休遺跡II, 福岡市埋蔵文化財調査報告書(福岡市教育委員会)第106集:11-15
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学17:73-85

第5表 プラント・オパール分析結果

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(稲穀総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
3c	45	3	1.10	3,000	0.99	0	10,000	0	0
4	48	6	1.00	0	0.00	0	0	0	0
5	54	5	0.56	900	0.21	2,900	22,200	900	0
6	59	4	0.80	4,000	1.32	3,000	15,200	0	0
7a-1	63	6	0.82	4,800	2.41	900	13,400	0	0
7a-2	69	6	0.80	2,900	1.42	0	15,600	0	0
8a	75	11	0.98	4,700	5.21	900	13,400	900	0
9-1	86	5	0.91	0	0.00	5,800	23,300	3,800	0
9-2	91	6	0.90	0	0.00	5,000	21,000	1,000	0
9-3	97	6	0.90	0	0.00	4,200	23,200	4,200	0
10a	103	12	0.93	0	0.00	3,000	17,200	1,000	0
10b	115	—	1.07	0	—	1,000	16,200	1,000	0



第113図 イネのプラント・オパールの検出状況



第114図 おもな植物の推定生産量と変遷

第4章 分 析

2 採取粘土と出土土器の蛍光X線分析

群馬県工業試験場

分析方法及び測定条件

試料 供試料を振動ミル粉砕機により10 $\mu$ m以下に粉砕し、5～10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

分析装置 理学電機(株)KG-4型

測定条件

分光結晶；Fe, Sr, RbにはLif(2d=4.028A)

Ca, K, Ti, AlにはEDDT(2d=8.808A)

MgにはADP(2d=10.648A)

検出器 ；Lifを使用したときS.C

EDDT, ADPを使用したときP.C

時定数 ；1

計数法 ；Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによる。Si, Al, Mgは定時計数法による。チャートの速さは4°/minとした。

波高分析器；積分方式

測定線 ；FeK $\beta$ , CaK $\alpha$ , KK $\alpha$ , TiK $\alpha$ ,

AlK $\alpha$ , MgK $\alpha$ , SrK $\alpha$ , RbK $\alpha$ の各一次線を使用した。

X線照射面積；20mm $\phi$

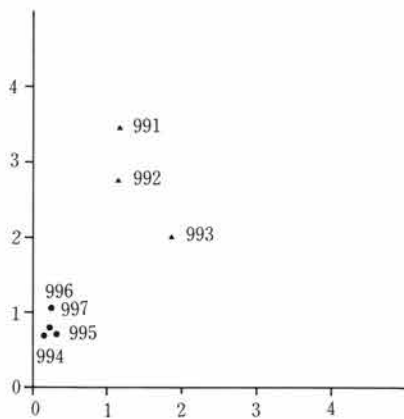
測定方法

検量線法；6点

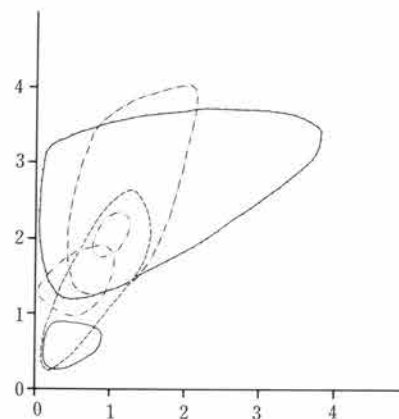
標準試料；群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器(295, 310, 336, 345, 360, 380)を湿式化学分析して、標準試料とした。

第6表 分析結果

試料	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MgO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	Sr/Rb	Ca/K	備 考
991	55.42	23.05	1.01	7.50	1.27	0.71	0.85	3.43	1.19	道上道下「へ」層粘土
992	62.25	21.12	1.28	6.00	1.26	0.90	1.03	2.75	1.14	道上道下「チ」層粘土
993	52.96	22.20	0.46	10.30	1.11	0.43	0.79	2.00	1.84	洗橋粘土
994	73.74	11.86	1.57	3.27	0.74	2.35	0.44	0.69	0.19	窪地344 横瓶
995	61.46	19.52	1.41	7.26	1.02	1.80	0.63	0.73	0.35	窪地343 横瓶
996	64.33	11.44	0.49	7.22	0.81	2.02	0.49	1.05	0.24	窪地324 壺
997	67.06	18.17	1.10	3.27	0.82	1.75	0.31	0.71	0.18	窪地349 大甕



第115図 Rb-SrとK-Caの対比グラフ



第116図 県内の主要窯跡



### 3 出土土器胎土分析鑑定報告

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

#### 1. 実験条件

##### 1-1 試料

分析に供した試料は第7表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

##### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製J D X-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40Kv,  
Current : 30mA, ステップ角度 : 0.02°, 計数時間 : 0.5SEC.。

##### 1-3 電子顕微鏡観察 (PL-39・40)

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35、350、750、1500、5000、の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

#### 2. 実験結果の取扱い

実験結果は第7表胎土性状表に示すとおりである。

第7表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

##### 2-1 組成分類

###### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第117図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb} * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第117図に示すとおりである。

###### 2) Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイアグラム

第118図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥岩(Ch)のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Chの2成分が含まれない。c) Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Ch} * 100$ と計算し、Mi、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1~7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち

## 第4章 分 析

3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第118図に示すとおりである。

### 2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行ったムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライトはムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第7表の右端の備考に理由を記した。

## 3. 分析結果

### 3-1 タイプ分類

二之宮洗橋遺跡の土器7個、道上道下遺跡出土の粘土2個、宮東遺跡の未焼成土器1個、洗橋遺跡の粘土1個の11個を分析した。また参考に、同時に分析を行った二之宮谷地遺跡の酸化焰焼成土器および土製品7点を加えた。分析した結果は第7表胎土性状表に示す通りである。第7表には三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Hの8タイプに分類された。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、中～粗粒のガラスが生成する焼成ランクIIは2個、中粒のガラスが生成する焼成ランクIIIは5個である。

#### Aタイプ…4

Mont、Mica、Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。

#### Bタイプ…5、宮東-8、谷地の土製品2点

Hb1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。個体数は2個である。

#### Cタイプ…道上道下-10

Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。[へ]層粘土。

#### Dタイプ…6、谷地の土製品1点

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。

#### Eタイプ…1

Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。

#### Fタイプ…3、谷地の土師器杯1点

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。組成的にはDタイプと類似するが検出強度が異なるために、位置分類が違っている。

#### Gタイプ…道上道下-9

Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。[チ]層粘土。

#### Hタイプ…7、粘土-11、谷地土師器杯・甕各1点

Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。7は4成分を含まず、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ （アルミナゲル）で構成される。

以上の結果から明らかなように、胎土は多岐にわたり、統一性に欠けるように見受けられる。これは分析した土器や粘土などの種類が多いことと一致するものである。

遺跡より採取した粘土のうち11の粘土はHタイプで、このタイプに属する土器は3個該当している。道上道下遺跡の〔チ〕と〔へ〕の粘土に該当する土器は検出されていない。

### 3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな係わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第119図Qt-P相関図に示すように、土器はI・IIのグループと“その他、”に分類された。

Iグループ… 3、7

3は土師の杯でFタイプ、7は土師の甕でHタイプと器種、組成とも異なる。

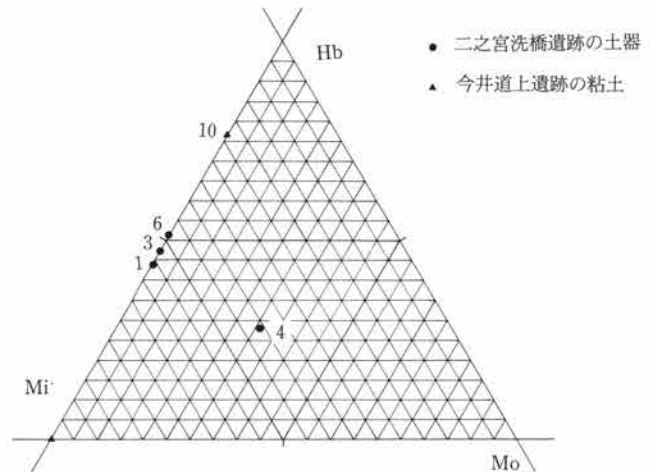
IIグループ… 1、2、4、5、道上道下-9

1は土師の杯でEタイプ、2は土師の杯で、Bタイプ、4は土師の甕でAタイプ、5は土師の甕でBタイプの胎土に構成される。

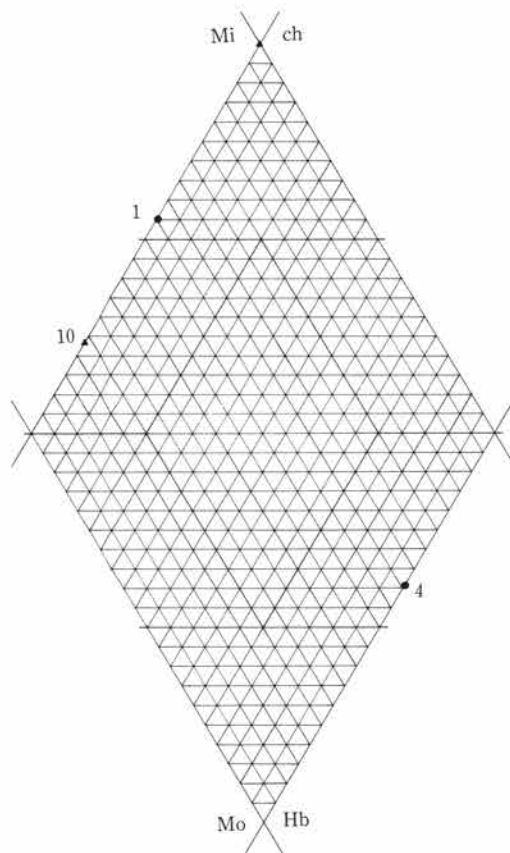
“その他、”… 6、道上道下-10、洗橋-11

6は土師の甕で、Dタイプの胎土である。斜長石の強度が幾分高く、どのグループにも属さない。

以上の結果から明らかなように、洗橋遺跡の土器は2つのグループに集中し、谷地遺跡の土器とは異なるグループを形成し、両者の間に差があるように見受けられる。



第117図 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

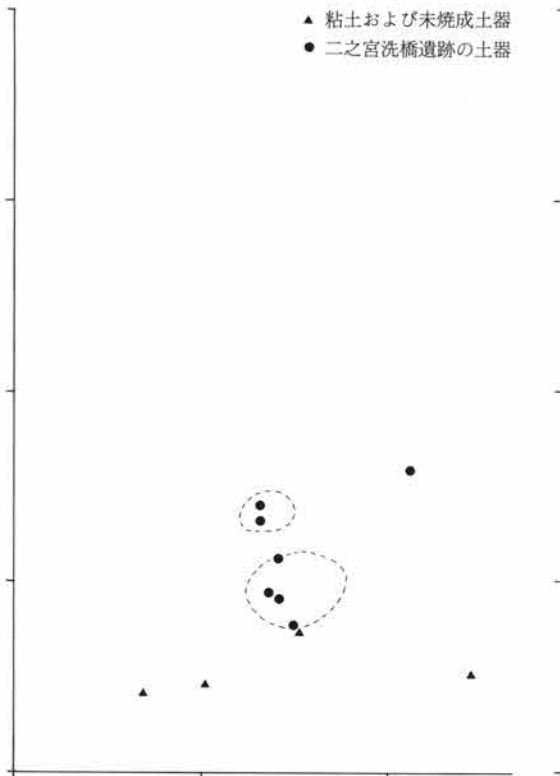


第118図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

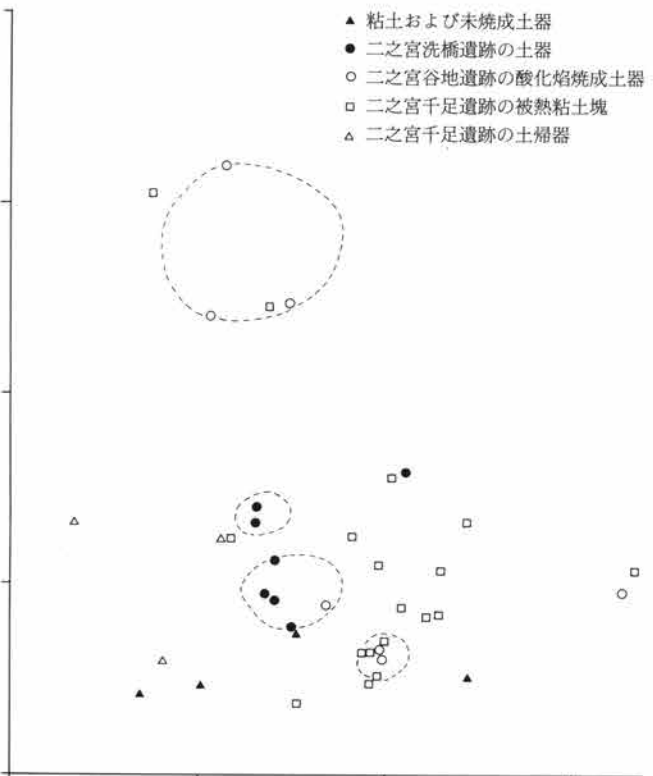
第7表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物								ガラス	備 考
			Mo-Mi -Hb	MoCh, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch (Fe)	Halloy	Qt	Pl	Cr		
洗橋 1	E	III	7	9		157	123	178		1413	456	128	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
2	B	III	5	20			93			1401	559	168	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
3	F	II	7	20			121	105		1326	699	145	中～粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
4	A	III	1	16	123	163	104			1491	385		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
5	B	II	5	20			77			1355	471	139	中～粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
6	D	III	6	20		134	146			2131	789	167	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
7	H	III	14	20				167		1306	653	196	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
宮東 8	B		5	20			171		116	1022	232			
道上 9	G		8	8		154		184		1524	367			
道上 10	C		6	10		125	413	158		2445	250			
洗橋 11	H		14	20					129	691	207			
谷地(2)	E	III	7	9		169	87	205		3276	475		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
谷地(4)	F	III	7	20		121	115			1680	444	114	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
谷地(5)	H	III	14	20						1139	1600	345	中粒	細粒砂を混入した碎屑性粘土
谷地(6)	B	III	5	20			517			1994	301	238	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
谷地(7)	D	III	6	20		131	1266			1477	1236	204	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
谷地(8)	B	III	5	20			347			1970	321		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
谷地(13)	H	III	14	20				191		1065	1203		中粒	中粒砂を混入した碎屑性粘土

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V  
 Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナ  
 Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリストパライト Mu: ムライト  
 K-fels, Ch(Mg), Pyrite, Mu は検出されなかったので表から除外した。

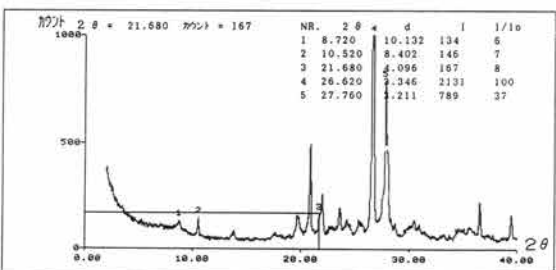
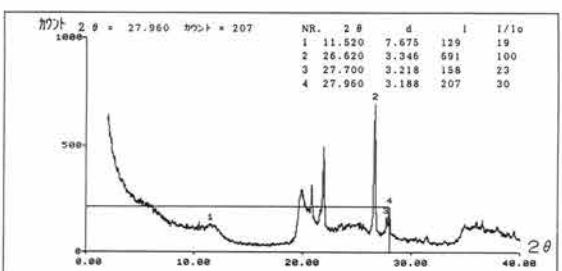
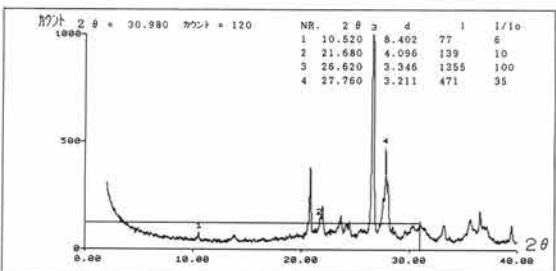
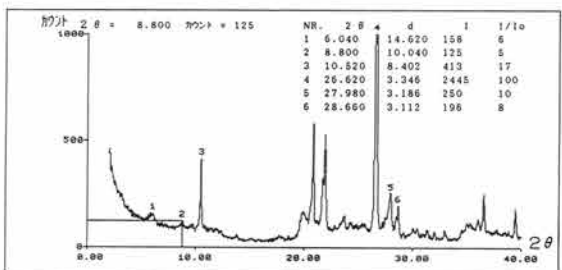
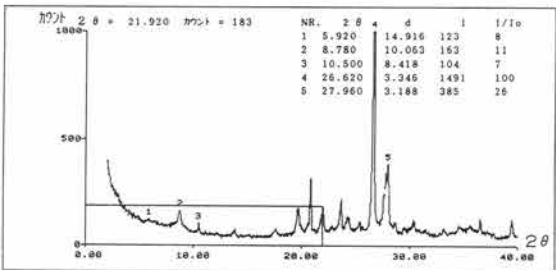
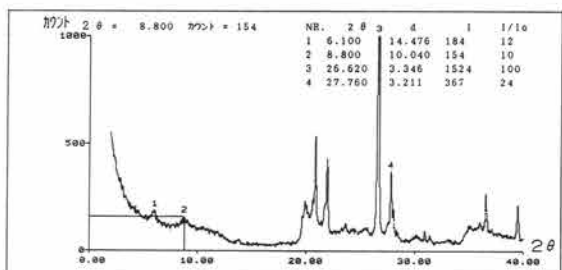
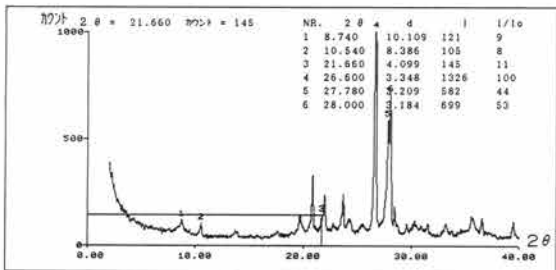
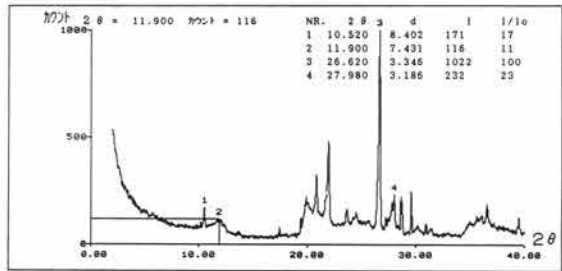
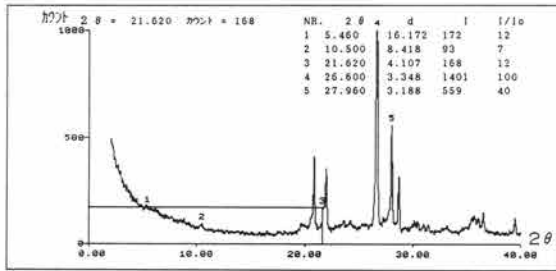
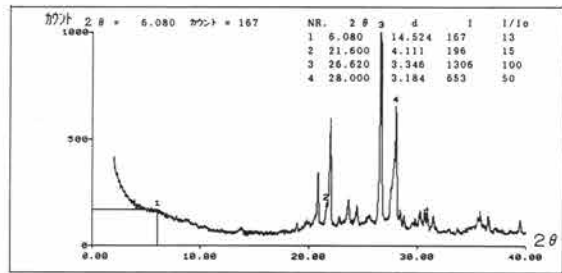
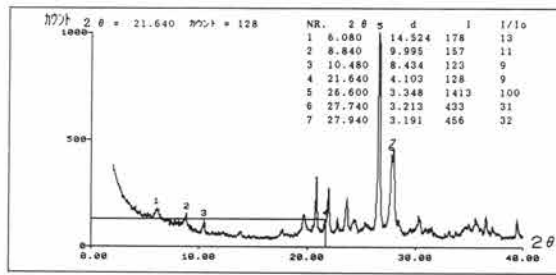


第119図 二之宮洗橋遺跡のQt-P1相関グラフ



第120図 周辺遺跡のQt-P1相関グラフ

3 出土土器胎土分析鑑定報告



第121図 X線回折試験チャート

#### 4 二之宮洗橋遺跡出土の樹種同定

(株)パレオ・ラボ 藤根 久

##### 1. はじめに

二之宮洗橋遺跡は、前橋市二之宮地内に所在する低地遺跡である。この地域は、赤城山の南麓裾であり、赤城山麓に端を発する宮川がつくる沖積地である。この遺跡からは、奈良・平安時代の遺物集積層から、曲物や底板あるいは角柱状の木製品15点ほど出土している。

ここでは、これら木製品の樹種について検討する。

##### 2. 木材の樹種同定

ここで樹種の検討を行った試料は、明らかな木製品15点と自然木の1点である。これら木製品類は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で10~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。第8表にその結果を示す。なお、プレパラートは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。以下に、同定された各分類群の代表的な標本についての記載あるいは同定根拠について述べる。

マツ属単維管束亜属 *Pinus* (Haploxyton)

マツ科 PL-41 1a~1c

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は平滑である(放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1~23細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属単維管束亜属の材と同定される。マツ属単維管束亜属は、五葉松類で北海道から九州にかけて広く見られるヒメコマツ(*P. parviflora*)とチョウセンゴヨウ(*P. koraiensis*)がある。いずれも樹高は約30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 PL-41 2a~2c

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早

材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で扁平でかつ狭い(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で2~17細胞高である(接線断面)。その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する(放射断面)。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ(*A. veichii*)やオオシラビソ(*A. mariesii*)、暖帯から温帯にかけて分布するモミ(*A. firma*)などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

PL-41 3a~3c

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への遺構は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、ヒノキ型で、1分野に1~2個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、2~9細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ(*C. obtusa*)とサワラ(*C. pisifera*)があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

PL-42 4a~4c

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~70細胞高からなり、大型の結晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキ材と同

定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科

PL-42 5a~5c

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材で、また木部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~33細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

モモ *Prunus persica*バラ科 PL-42 6a~6c

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~3列ほど並び、そこから径を減じた小管孔が2~4個放射方向あるいはやや斜めに複合して散在する環孔性散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には明瞭ならせん肥厚が認められる(接線・放射断面)。放射組織は異性で、1~4細胞幅、4~20細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科サクラ属のモモの材と同定される。モモは中国北部原産であるが、日本には有史以前に渡来し、鑑賞用あるいは果樹として栽培され、一部野生状態で生えている。本種が日本に自生するという考えもある。

### 3. 考 察

樹種を検討した木製品は、いずれも奈良・平安時代のものである。このうち曲物あるいはその底板は、ヒノキ属が大半で、他の1点はマツ属単維管束亜属である。このように曲物類は、樹種の選択性が明瞭に表れているが、東側に隣接する二之宮千足遺跡においても、曲物類はヒノキ属が最も多く(14点)、他にスギとツガ属(各1点)は利用されている(藤根、

1992)。板状や角柱状木製品は、ヒノキ属2点、ケヤキ1点、マツ属単維管束亜属1点およびモミ属1点である。さらに杭は、ヤマグワとモモが各1点ずつである。

ここで検出されるヒノキ属をはじめ大半の樹木は、当時遺跡周辺において量的には多くないが生育している樹木と考える。ただし、杭などは身近で適当な大きさの樹木を利用していると思われるが、ヒノキ属の樹木からなる曲物類は、職人によって作られ、持ち込まれているものとする。

### 引用文献

藤根 久(1992)：二之宮千足遺跡の古環境解析。二之宮千足遺跡(自然科学・分析編)、建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、P30-49。

第8表 出土木製品とその樹種

報告No.	製品名	樹種
1	曲物底板	ヒノキ属
2	底 板	〃
3	曲物底板	〃
4	底 板	〃
5	曲物底板	〃
6	〃	マツ属単維管束亜属
7	底 板	ヒノキ属
8	〃	〃
9	不明(板状品)	ケヤキ
10	不明(角柱状製品)小型	ヒノキ属
11	不明(角柱状品)小型	マツ属単維管束亜属
12	不明(角柱状品)大型	モミ属
13	不明(板状品)	ヒノキ属
14	杭	ヤマグワ
15	杭	モモ
16	自然木	ヒノキ属

### 5 土器底部に付着した漆様物質の顕微鏡観察

(財)京都市埋蔵文化財研究所 岡田文男

8点の土器の底部に黒色ないし黒褐色の漆様の物質が付着していた。漆様の物質は土器底部に均一に広がっており、その様子は現代の漆塗料と酷似していた。そこで、土器の表面から漆様物質の小破片を採取して樹脂に包埋し、研磨して反射光ならびに透過光による断面の顕微鏡観察をおこない漆の可能性について検討した。

#### 観察結果

##### 試料1 (土器1底部)

PL-2 写真1・2 PL-38 漆1

落射光による黒色物質の断面の色調は土器表面に近い側がやや褐色で、断面上部ほど濃茶褐色になる。断面の諸所に大きさの不均一な粒状の物質を認める。透過光では落射光で茶褐色に見えた部分は透明感のある黄褐色に観察される。土器表面に近い側には光を吸収して黒色の微粒子が部分的に集中する。断面の上部にはこの黒色微粒子はほとんど見られず、この黒色物質の比重が重く下層に沈殿した結果であることがわかる。

##### 試料2 (土器3底部)

PL-2 写真3・4 PL-38 漆2

落射光による断面の色調は試料1に近似する。試料1同様に断面中にやや大形の粒状物質を諸所に認める。透過光による観察結果は試料1とほぼ同様であるが、黒色物質はやや分散している。

##### 試料3 (土器4底部)

PL-2 写真5・6 PL-38 漆2'

落射光による断面の色調は試料1・2に近似する。土器表面に近い側はやや黄褐色で、表面ほど濃い茶褐色になる。断面中に試料1・2同様の黒色の微粒子の集中を認める。透過光による観察結果は試料1に近似する。

##### 試料4 (土器6底部)

PL-2 写真7・8 PL-38 漆4

落射光による断面の色調は土器表面近い断面下部

と断面上部が黄白色になっている。断面中央付近に水平に褐色の層が見られる。断面の黄白色部分を拡大すると全体に泡状になっていることがわかる。薄片による透過光観察では、この泡状部分は大小の空隙となっている。中央に水平に見られた茶色部分は黄褐色で、この色調は試料1・2・3の断面上部の色調に近似する。表面観察によるとこの泡状部分は膜の表面の一部が消失して空洞化した結果であることがわかる。

##### 試料5 (土器7底部)

PL-2 写真9・10 PL-38 漆5

落射光による観察では褐色・茶褐色・黄褐色・黒褐色等の微妙に異なる層が幾重にも重なっている。その結果、断面が大変厚い。各層とも上面は緩やかな曲線になっている。透過光では落射光に対応した層が透明な黄褐色として観察される。各層とも一つの層の下部に不透明物質が沈殿し、上部が透明である。さらに、落射光と透過光観察を比較すると、落射光で黄褐色に見えた層ほど透過光では不純物を多く含む、茶褐色に見えた層は透明である。不純物を多く含む層と透明度の高い層の重なりは写真に見るように無秩序である。

##### 試料6 (土器8底部)

PL-2 写真11・12 PL-38 漆6

落射光による断面の色調は土器表面に近い下半部分がやや茶褐色が濃く、中央から上半部分はやや黄褐色である。断面全体に泡状粒子がひろがっているのが観察される。透過光では試料4と同様に断面の上半分で泡状の状態を認める。土器に近い下半部よりも上半部の方が空隙が多く、表面から膜を構成した物質の消失が進行していることがわかる。

##### 試料7 (土器9底部)

PL-2 写真13・14 PL-38 漆7

落射光による断面は黒色で、厚さが比較的均一である。透過光による観察では薄片を非常に薄くしてもなお他の試料よりも茶褐色で色が濃い。これはなんらかの黒色顔料が添加された可能性がある。断面下部に黒色の微粒子が点在するがその形状は他の試



5 土器底部に付着した漆様物質の顕微鏡観察

料で見られるものよりやや大きく鮮明で、成分が異なるものと推定される。

試料8 (土器10底部)

PL-2 写真15・16 PL-38 漆8

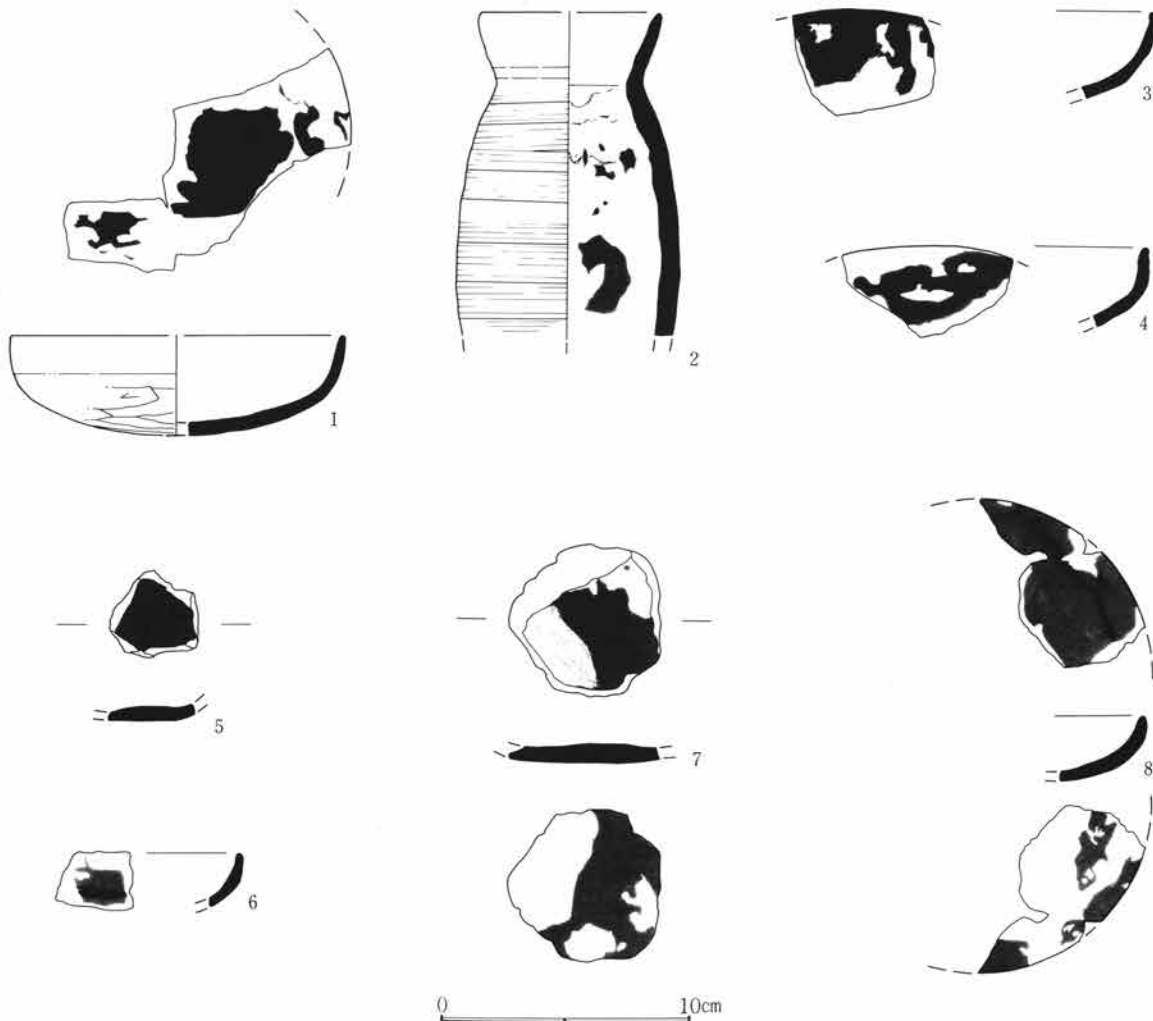
落射光による観察では褐色・茶褐色・黄褐色の層が幾重にも重なっている。その結果、試料5 (土器7)と同様断面が大変厚い。透過光によると試料5同様に黄褐色の層が幾層にも重なっているのがわかる。不純物を多く含む層と、透明度の高い層が無秩序に重なっている。

考 察

8点の土器付着の漆様物質の断面構造を観察した結果、表面的には一様に黒色にみえた物質が顕微鏡下では不純物の状態・構造から以下の4種類に分類できた。すなわち、

- (1) 成分の一部が消失して表面が泡状になった膜 (試料4、6)
- (2) 不純物が下部に沈澱し、上部は透明度の高い単層の膜 (試料1、2、3)
- (3) (1)および(2)を含む層が幾層も重なる膜 (試料5、8)
- (4) 黒色を呈し、不純物が少ない単層の膜 (試料7)である。

この分類結果は現代の漆製品の製作工程で行われる漆樹液の取扱われかたと共通点が見られる。すなわち(1)は漆の樹木から採取された漆液、(2)はくろめ工程の漆、(3)は繰り返し漆をいれたパレット、(4)は黒色顔料を入れた漆に対応しよう。この結果により調査地付近に漆製品の生産工場のあったことが推定される。



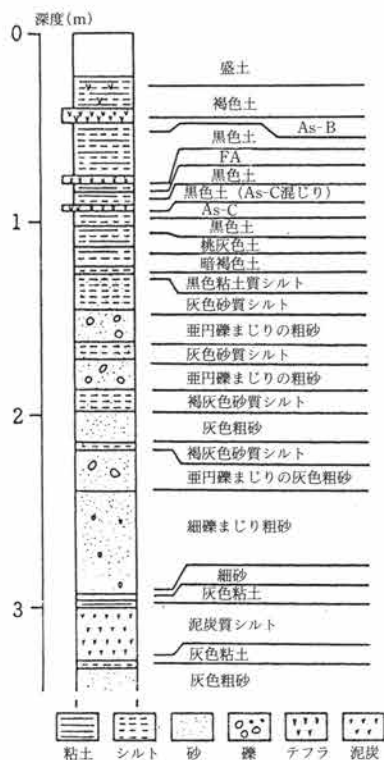
第122図 旧流路跡の窪地出土漆付着土器

6 二之宮洗橋遺跡の花粉・珪藻分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

1. 二之宮洗橋遺跡における層序および調査目的  
 二之宮洗橋遺跡北壁における模式柱状図を第123図に示した。おおまかな層相は、深度約3.2mに灰色粗砂が堆積する。その上位に泥炭質シルト層が堆積せる。泥炭質シルト層の層厚は南側に行く程厚くなり、下部にシルト・砂などの碎屑物の混入が認められる。泥炭質シルト層の上位には砂礫層と砂質シルト層が交互に厚く(約1.7m)堆積し、下位の細礫まじりの粗砂の層理は大きく傾斜し、その上位から深度1.9mの褐灰色シルト層まではゆるく傾斜する。さらにその上位では水平に堆積する。層相より明らかに洪水性の堆積物と判断される。洪水性の堆積層の直上で層相は黒色粘質土シルト層に急変する。それ以上では、ほぼ同様な土質を示し黒褐色土、黒色土を堆積し、深度0.94mに浅間C軽石(As-C)、0.80mに榛名二ツ岳火山灰(FA)、0.48mに浅間Bテフラ(As-B)の3枚のテフラを夾在する。

今回の調査では、洪水性の堆積層直下に認められる泥炭質シルト層堆積時の古植生および堆積環境な



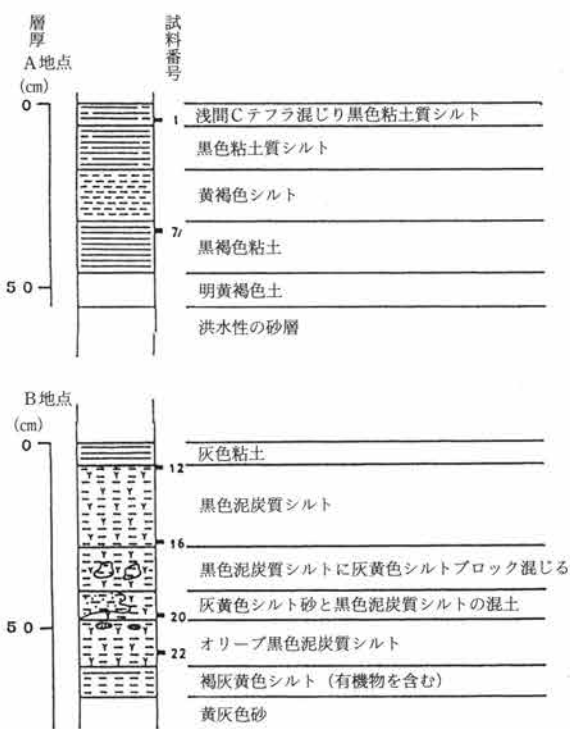
第123図 北壁における模式柱状図

どの古環境を明らかにすることを目的とし、珪藻・花粉の両分析を行った。

また、洪水層堆積後の古環境についても検討し、環境の変遷について考察した。

2. 試料

試料は、泥炭質シルト層とその上位の洪水層とAs-Cの間の黒色土である。試料採取は、泥炭質シルト層が厚く堆積する南側の地点で行ったが、泥炭質シルト層と黒色土が連続した断面で認められる地点がなく、距離的に少し離れた2地点で採取した。黒色土を採取した地点をA地点、泥炭質シルト層の採取地点をB地点とする。試料は柱状ブロックで採取し、室内で土質観察、分析用の試料の採取を行った。両地点の堆積層の層相は第124図に示した。



第124図 分析試料採取地点土層模式柱状図

3. 珪藻分析 (PL-43)

3-1 分析方法

珪藻化石の抽出は、以下に示す方法で行った。

1) 試料の秤量 (500cc用のツールビーカー使用)

①岩質により秤り取る量を定める(泥炭1~2g:シルト、粘土7~10g:砂、砂質シルト、細砂15~30g)。当地点では、0.9~2.5g秤量した。

2) 過酸化水素水 (H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>) 処理 (効果: 試料の泥化、有機物の分解と漂白)

①試料が浸る程度に蒸留水を加えてから28% H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>溶液を10cc加え、ホットプレート上で加熱処理する。

- ②反応が弱まったら再度28% H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>溶液を10cc加え①と同様に処理する。
- ③試料が灰白色になったら処理を中止する。
- 3) 粘土分の除去
  - ①過酸化水素水処理済み試料に蒸留水を加え全量を500ccにする。良く攪はんした後、7時間以上放置し、粘土分と珪藻殻を含む砂分とを分離する。
  - ②放置後、真空ポンプで上澄み液を吸い取り浮遊した粘土分を除去する。
  - ③分散剤(ピロリン酸ナトリウム)を加え、①、②の操作を上澄み液が透明になるまで繰り返す。
- 4) L字形管分離(効果: 細砂分と珪藻殻とを分離し珪藻殻の濃縮を行う)
  - ①蒸留水を約7~8割満たしたL字形管の中に水洗を終了した試料を静かに流し込む(ビーカの底に沈殿した砂は入れない)。そのまま1~2分放置する。
  - ②L字形管の末端にあるピンチコックを開けて、懸濁液をビーカに約半分流し込み、そのまま1~2分放置する。
  - ③ビーカの懸濁液をL字形管の中に静かに流し込む(ビーカの底に沈殿した砂は入れない)。L字形管の末端にあるピンチコックを開けて、懸濁液をビーカに約半分流し込み、そのまま1~2分放置する。
  - ④③の操作を4~5回繰り返し細砂分を除去する。
- 5) 散布
  - ①検鏡し易い濃度に希釈した懸濁液をピペットで0.5cc秤り取り、18×18mmのカバーガラス上に静かに滴下する。そのまま自然乾燥するまで放置する(パラフィン伸展器を用いて対流の起こらない温度40~50°Cで乾燥しても良い)。1試料につき2枚のプレパラートを作製する。
- 6) 封入
  - ①乾燥したカバーガラス上にブリュラックス1滴を滴下し、パラフィン伸展器で加熱し、溶剤のエタノールをとばす。

②スライドガラスに貼りつけ、ホットプレート上で加熱しながら完全にエタノールをとばし、気泡が残らないように有柄針を用いてカバーガラス全体を押しつけ、永久プレパラートを作製する。

7) 検鏡

- ①珪藻殻の算定は、メカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ、任意に出現する珪藻が200個体以上になるまで行う(珪藻殻数の非常に少ない試料はこの限りでない)。
- ②珪藻殻が半部以上破損したもや溶解したものは1個体として数えなかった。また、細長い針状形の珪藻は、先端2個体をもって1個体として数えた。

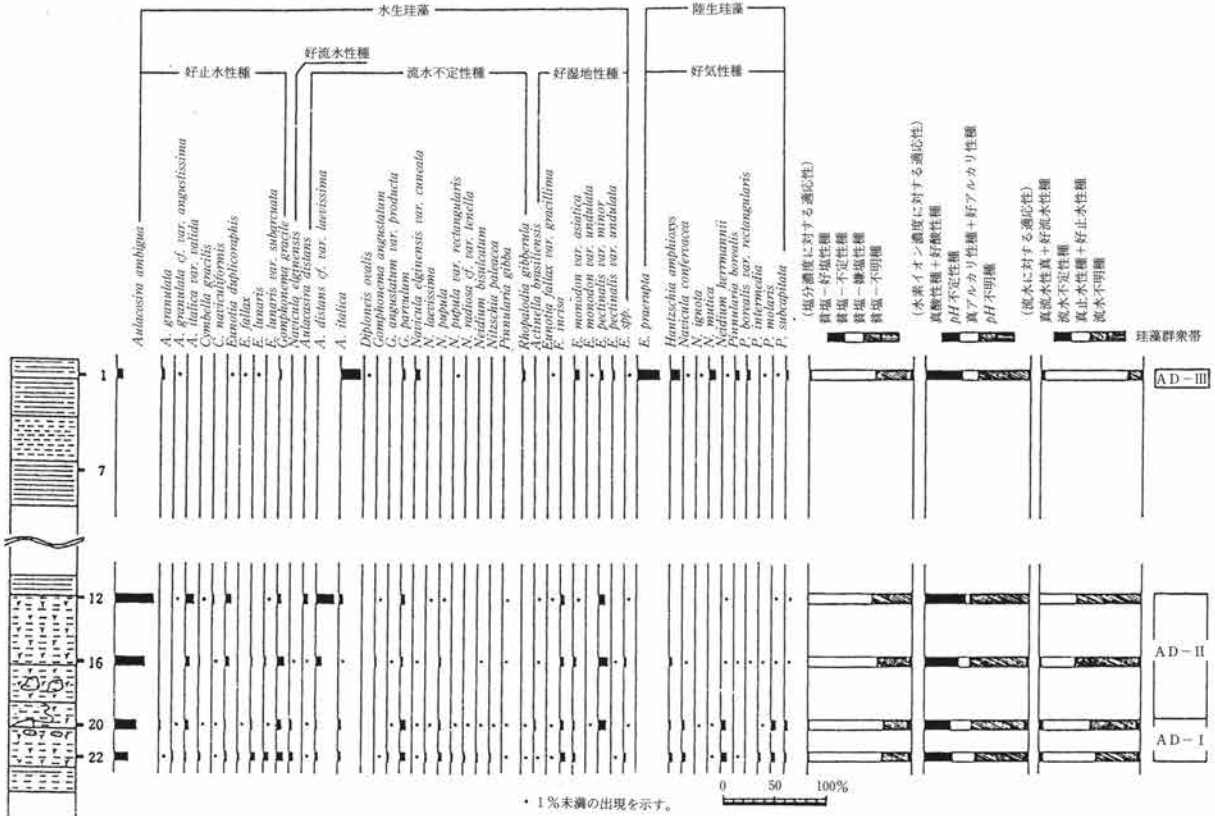
3-2 結果

珪藻分析の結果、19属、119分類群(80種、32変種、3品種、未同定4)の珪藻化石が検出された。珪藻群集の特徴からAD-I~III帯に分帯される(第125図)。

●AD-I帯(試料番号20、22)

貧塩性種の各生態性に対する適応性は、塩分濃度500mg/l以下であれば多少の塩分があってもこれに耐えることの出来る貧塩不定性種が約70%と多くを占め、これに次いで少量の塩分にも耐えることの出来ない貧塩嫌塩性種が約25%検出された。水素イオン濃度(pH)に対する適応性では、pH7.0以上で最も良く生育する好アルカリ性種が約45%、pH7.0以下で最も良く生育する好酸性種が約25%、残りの約20%はpH7.0付近で最も良く生育するpH不定性種である。水の流動に対する適応性では、流水にも止水にも普通に出現する流水不定性種と、止水に特徴的に出現する好止水性種とがほぼ同率検出され、流水に出現するものは少なかった。

優占種は、タルケイソウ属の *Aulacosira ambigua* である。当種は、好止水性種で池沼等から一般的に検出される。これに次いで、クサビケイソウ属の *Gomphonema gracile*、イチモンジケイソウ属の *Eunotia lunaris*、*E. lunaris* var. *subarcuata* 等を伴う。これらの珪藻は、好止水性種であるが、イチモンジケイソウ属の各種は泥炭地に形成された沼などの有機酸性の止水を好む種である。このこ



第125図 二之宮洗橋遺跡試料珪藻化石群集変遷図

## 第4章 分 析

とは、好湿地性種とされるイチモンジケイソウ属の *E. pectinalis* var. *mi-nor* を伴う点で調和的である。

流水不定性種としては、クサビケイソウ属の *Gomphonema parvulum* フナガタケイソウ属の *Navicula pupula* 等が検出された。これに対して好流水性種は、フナガタケイソウ属の *Navicula elginensis* が僅かに検出された程度である。さらに、当帯の特徴としては、比較的乾燥した湿岩上、苔の表面、土壤表層中などの常に待機に触れている好気的環境に適応して生育する好気性種も多く検出されたことである。これらの種としては、コムミケイソウ属の *Hantzschia amphioxys*、フナガタケイソウ属の *Navicula konfervacea*、ハネケイソウ属の *Pinnularia intermedia*、*P. subcapitata* 等を伴う。これらの特殊な環境に適応して生育する珪藻の一群を小杉 (1986) は陸生珪藻、一般的な水域に生育する珪藻を水生珪藻として区分した。今回の報告もこの区分に従った。

### ●AD-II帯 (試料番号12、16)

前帯と比較して、真・好酸性種と真・好止水性種が増加する。

優占種は、前帯と同じタルケイソウ属の *Aulacosira ambigua* で変わらないが、陸生珪藻の種類が減少する他、出現種も1%未満に減少することが当帯の特徴である。

主要種は、好止水性ではタルケイソウ属の *Aulacosira italica* var. *valida*、イチモンジケイソウ属の *Eunotia duplicoraphis*、クサビケイソウ属の *Gomphonema gracile*、流水不定性ではタルケイソウ属の *Aulacosira distans* cf. var. *laevissima*、好湿地性ではイチモンジケイソウ属の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*E. monodon* var. *asiatica* 等が検出された。このなかで、*A. distans* cf. var. *laevissima* は高層湿原の溜り水などに普通に見出される種とされる (田中 et al. 1980)。また、*E. monodon* var. *asiatica* は、小林・原口 (1969) は川越近郊の湧泉池からの報告がある。

### ●AD-III帯 (試料番号1)

当帯から検出される珪藻は、壊れて破片状になったものが非常に多く、陸生珪藻が多産することによって特徴付けられる。

陸生珪藻の主な種としては、イチモンジケイソウ属の *Eunotia praerupta*、コムミケイソウ属の *Hantzschia amphioxys*、フナガタケイソウ属の *Navicula mutica*、ハネケイソウ属の *Pinnularia borealis*、*P. borealis* var. *rectangularis*、*P. subcapitata* があげられる。また、これらの陸生珪藻に伴って好湿地性の *Eunotia monodon* var. *asiatica*、*E. pectinalis* var. *minor*、*E. pectinalis* var. *undulata*、流水不定性の *Aulacosira italica*、*Navicula elginensis* var. *cuneata* 等が検出された。

とくに、壊れた珪藻は水生珪藻に属するものが多い。

## 3-3 考 察

AD-I帯が認められる泥炭質シルト層下部では、砂、シルトの混入があり、不安定堆積環境が示される。珪藻分析では、基本的には池沼的な環境が示されるが、陸生珪藻、好湿地性種、好流水性種も伴うことから一部水域が浅くなり、湿地的環境になったことも考えられる。また、流水の影響も一時的ではあれ推定される。

AD-II帯が認められる黒色泥炭質シルト層上部では、碎屑物の混入は認められない。珪藻分析では、池沼の環境が安定化したことが考えられ、とくに泥炭を形成するような有機酸性水域に多く認められる

種が多産することから、泥炭地内に形成された池沼のような環境であったと考えられる。

### AD-III帯 (試料番号1)

当試料は、別の地点で得られた試料であるが、距離的にあまり離れておらず、洪水性の堆積物を挟んでその上部に形成された浅間Cテフラ混じり黒色粘土質シルトである。

当帯で得られた珪藻群集は、陸生珪藻を主体としていることから、好気的環境下で形成された堆積物であると考えられる。また、陸生珪藻以外の水生珪藻は壊れた状態で検出されるものが多量に含まれており、二次的な化石と考えられる。このことは、千葉県小櫃川下流域の現生干潟において、珪藻の異地性遺骸の運搬・堆積パターンを、殻の保存度の点から検討すると、運搬距離に応じて保存度が低下する (註1) ことから裏付けられる。よって、当試料の堆積は風成であるか、あるいは一時的に堆積した後、地下水位が低下し陸生珪藻が生育したとも解釈される。

今回、珪藻のほとんど検出されなかった試料番号7は、黒褐色粘土であり、堆積環境についてはよく解らないが、珪藻が検出されないことを考慮すると風成堆積の可能性もある。

## 4. 花粉分析 (PL-43)

### 4-1 分析方法

花粉・孢子化石の抽出方法は、次に示す物理化学処理を順に行った。

試料5gを秤量し、HF(フッ化水素)処理を行い試料中の珪酸質の溶解と、試料の泥化を行う。次に重液(ZnBr<sub>2</sub>比重2.2)を用いて有機物残渣について、アセトリシス処理を行い、植物遺体中のセルロースを加水分解する。最後にKOH処理を行い、残渣中の腐植酸を溶解する。分析後の残渣は、マイクロピペットで花粉・孢子数を調整し、グリセリンで封入し検鏡した。検鏡においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類(Taxa)とその数を計数した。

計数の結果、樹木花粉が100個体以上検出された試

料について、花粉化石群集の変遷図を作成した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総花粉・孢子数から不明花粉を除いた数を基数とした百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が明確でないものである。また、他のシダ類孢子とした種類は、シダ類孢子的外膜が溶けていて細かな形態分類が行えなかったものである。

4-2 結果

浅間C軽石層と洪水層の間の黒色粘質土シルト層と黒褐色粘土層（A地点）では、花粉化石はほとんど検出されず、孢子化石が黒色粘土質シルト層で多産する。また、検出された化石は全てが外膜が壊れていた。これは、堆積時あるいは堆積後の経年変化による分解を意味するもので、微生物による分解や酸化分解などが原因としてあげられる。したがって、これらの試料については統計学的な処理を行うことは控えた。

洪水層の直下に発達する泥炭質シルト層（B地点）では、花粉・孢子化石は多産し、保存状態も良く外膜が壊れている物は少なかった。4試料を通じて樹木花粉23種類、草本花粉18種類、シダ類孢子3種類が検出された。花粉化石群集の変遷は、本層中で急激な変化は認められず、ほぼ同様な組成を示す（第

126図）。このことから、本層で認められた群集は1局地花粉化石群集帯（NAP-I帯）として考えた。

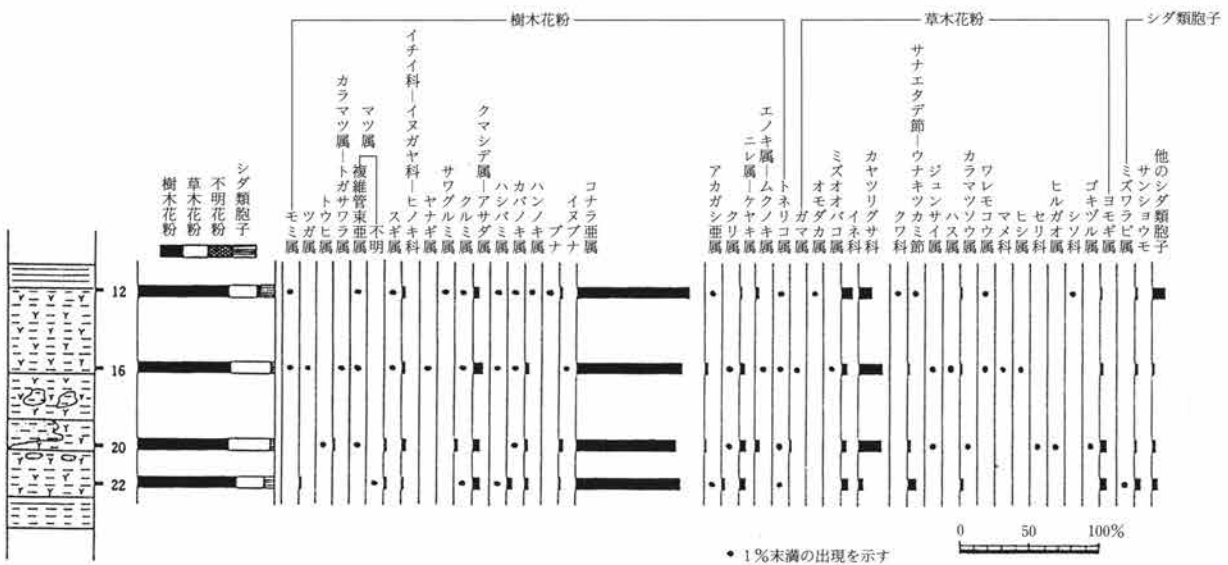
●NAP-I帯

樹木・草本花粉・シダ類孢子的構成比は、樹木花粉が60%以上を占める。樹木花粉では、コナラ亜属が60%前後の高率出現をしを優占する。他に、クマシデ属—アサダ・ニレ属—ケヤキ属・ハンノキ属・イヌブナなどを伴う。また、低率ではあるがアカガシ亜属が連続して出現する。針葉樹花粉の出現率は低率でスギ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科・ツガ属などが僅かに出現する。

草本花粉・シダ類孢子では、カヤツリグサ科が10%前後の出現率を示し、イネ科・サナエタデ節—ウナギツカミ節・ヨモギ属・カラマツソウ属などを伴う。また、抽水植物のガマ属・ミズオオバコ属・ミズワラビ属・ハズ属・浮葉植物のヒシ属・ジュンサイ属などが低率に出現し、浮水植物のサンショウモの孢子的集合体（massula）が連続して多産する。

4-3 考察

NAP-I帯が認められる泥炭質シルト層が堆積した後、周辺の台地から赤城山麓には、ナラ類を種とする落葉広葉樹林が隆盛を極めていたと考えられる。その林にはシデ類やニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹も成育していたであろう。常緑樹のアカガ



第126図 (B地点)洪水層下泥炭質シルト層における花粉化石群集の変遷

シ亜属の花粉が連続して出現するが、出現率は低率であり、本地点より南方からの飛来花粉、あるいは周辺に成育していたとしても僅かであったと推定される。関東平野の最終氷期以降の花粉分析でアカガシ亜属が出現開始するのは、川崎市の沿岸部のボーリングコアでは14C年代測定値で約7,000年B.P.である(註2)。また、大宮台地西縁の小支谷(仮称 北本低地)では、アカホヤ火山灰層の層準以降である(註3)。本地点でのアカガシ亜属の分布は、これらの地点より遅れたことが北方に位置することから想定される。従って、泥炭質シルト層の堆積時期は、本地点でのアカガシ亜属が遠方からの飛来花粉だとしても、約7,000年前を溯らない可能性がある。今後、14C年代測定結果が判明すれば、詳細に検討されるであろう(註4)。

ナラ類を主とする落葉広葉樹林は、前橋台地では早くとも1万3千年前に気候的な湿潤・温暖化によりチョウセンゴヨウ・バラキシ節・カラマツ属などの針葉樹林から変遷し分布拡大した(註5)。また、武蔵野台地や大宮台地、北部の関東中央部では縄文海進の温暖期になっても、ナラ林が存続していた(註6)としている。このことから、本遺跡周辺の台地などにおいても同様な植生変遷があった可能性が高く、少なくとも泥炭質シルト層堆積時までは急激な森林変遷はなく落葉広葉樹林が存続していたのではなかろうか。今後、周辺でのデータの蓄積により明らかにされるであろう。

低地は、ガマ属・オモダカ属・ミズオオバコ属・ハス属・ミズワラビ属などの抽水植物の他、浮葉植物のヒシ属・ジュンサイ属などが成育する湿地～池沼的環境であったと考えられる。これらの植物は、主に抽水植物が台地よりの水深の浅い水域に、浮葉植物がそれより水深のある水域に成育していたことが予想される。また、イネ科やカヤツリグサ科の植物なども抽水植物などが生育する浅い水域から台地縁辺にかけて成育していたであろう。一方、先述した落葉樹林は、低地近くまでせまっていた可能性が総花粉・孢子に対する樹木花粉の比率が高いことから示唆される。

ら示唆される。

洪水層より上位での低地の植生は、現状では不明であるが、花粉の保存状態から泥炭質シルト層堆積時の様な環境ではなく、むしろ乾燥していた可能性が考えられる。

#### 5. 珪藻化石と花粉化石から推定される

##### 低地の環境変遷

谷地形の中に発達した泥炭質シルト層は、ガマ属・オモダカ属などの抽水植物やヒシ属・ジュンサイ属などの浮葉植物が生育する比較的水深のある池沼～湿地適環境のもとで堆積したと考えられる。ただし、下～中部が堆積した当時は、堆積層中にシルト・砂などの碎屑物の混入が認められ、珪藻群集で陸生珪藻、流水性種などを伴うことより、低地の環境は不安定であったと考えられる。すなわち、碎屑物などは洪水に伴った堆積物である可能性がある。また、陸生珪藻の出現は水位の変動を意味し、池沼的環境が水位の低下により一時的あるいは一部湿地化したことを示唆させる。

上部の泥炭質シルトが堆積するようになると池沼的環境が安定したものになり、流水の影響もほとんど受けなくなったと考えられる。

その後、洪水の影響を受け砂層が厚く堆積し、低地の景観は一変したであろう。池沼的環境を示していた当地は陸化したことが推定される。As-C直下の黒色シルト質粘土層では、陸生珪藻が大半を占め、花粉化石が酸化分解を受けていることより常時低温であったとは考え難く、むしろ乾燥した時期が長かったと判断される。また、本堆積物中には保存状態のよい陸生珪藻に伴って水生珪藻の破片が多量に検出されることから、風成層の可能性が示唆される。

註1：小杉，1986 植生史研究，vol.1.

註2：パリオ・サーヴェイ株式会社，1986 川崎市内各遺跡における花粉及び材・種子道程報告。

註3：伊藤ほか，1986 日本第四紀学会講演要旨集，16.

註4：Gak-13503 5890±110 3940B.C.

Gak-13504 6170±150 4220B.C.

註5：辻ほか，1985 第四紀研究，第23巻，第4号。

註6：辻，1983 アーバンクボタ，No.21，

## 第5章 成果と問題点

### 1 製作技法上特筆される土器

#### ◎須恵器

流路跡の窪地と周辺から出土した須恵器の中に、製作技法上特殊な杯が見られる。杯底部や口縁部下端に回転ヘラ削り整形を加える作業は、ロクロ（回転台）上に杯を倒置して行うと考えられているが、この場合ロクロの回転方向が別方向になってしまう一群がある。すなわち窪地71・83・89墨書2・3・14・16・18・19、1溝13の杯は右回転で成形され、左回転の台上で整形されたことになる。特に、墨書21・62、1溝12は回転糸切り痕の上に整形痕が見られ、逆回転の台上で倒置して整形を加える技法の裏付けとなろう。

製作過程で異なる回転を利用した土器が多量に出土することは、土器製作段階で分業があったことを想定する資料となるものであろう。これらの土器が同巧でなく、多少時間幅のあることから、一時期一生産地に限ったものでもなさそうである。今まで注意されることの少なかったもので、今後、産地や流通範囲を想定する資料となろう。

#### ◎土師器

外面にナデの痕跡がなく、型造り成形の土器と思われる杯の一群がある。特に窪地257～259、墨109・152には外底に型の痕跡らしい細かな凹凸が明瞭に残り、上げ底状になっており、型造り整形以外には考えにくい土器である。外底に砂粒の付着するものはなかった。

また、内面底部に葉脈状の木葉痕のある土器（窪地336～342）も注目されよう。これらの土器には外面に強い圧痕や、補修痕状の粘土のツギがある。

### 2 墨書土器について

#### ◎出土墨書の概観

本遺跡から出土した墨書土器は総数で241個体ある（墨書の可能性のある汚れのついた土器破片はそ

の他に約30点ある）。次頁の第127・128図一覧表に集めた。

241個体のうち土器の内外面に墨書された土器が16個体あり、墨書の点数では257点となる。このうち住居から出土したものは1個体、1号溝から出土したものが3個体（いずれも一面）で、残りの237個体253点が流路跡の窪地から出土した。墨書点数の多さのみでなく、重要な釈文の発見があった。

ただ、数の多さに比べて記された文字の種類は限られている。複数の文字が記されているものに「芳郷」「田人」「大掾」「舟人」「得万」「子□」があり、1文字では「郷」「大」「中」「舟」「十」「芳」「厨」「三」などがある。

墨書土器の種類は土師器と須恵器で、須恵器は58個体（24.1%）で、蓋が5個体（2.1%）杯類が53個体（22.0%）である。土師器は183個体（75.9%）ですべて杯類である。釈文のできるものや推定できるものは151点で、このうち須恵器が44点（29.1%）となり、須恵器の比率が高くなる。

釈文別の傾向を見ると、「郷」の文字（芳郷を含む）が63点（41.7%）で最も多い。次いで「大」の文字（大掾を含む）が29点（19.2%）、「舟」の文字（舟人を含む）が21点（13.9%）、「中」の文字が18点（11.9%）となる。この4文字で釈文の可能な文字の86.8%を占めている。

土器の種類と釈文との対比では、須恵器で目立つのが「芳郷」「郷」で、須恵器の中の過半数（25点、56.8%）を占めている。「大」は土師器特有の文字となっており、「大掾」の1例を除けば全て土師器に記されている。

年代の上でも差異があり、須恵器杯の場合「郷」が外底全面ヘラ削りののであるのに対し、「中」「舟」はすべて回転糸切り無調整である。

#### ◎注目される文字について

第9表 墨書土器一覧

No	器種	器形	积文	部位	位置	備考
1	須恵	杯	芳郷	内底	中央上寄り	
2	須恵	杯	芳郷	内底	中央上方	
3	須恵	杯	芳郷	内底	中央上寄り	1に同筆
4	土師	杯	芳か	外底		
5	土師	杯	芳か	外底	中央か	
6	土師	杯	芳か	内底	中	
7	土師	杯	芳か	外底	中央か	
8	須恵	蓋	郷	外面	右端	
9	須恵	蓋	郷	外面	右上	
10	須恵	蓋	郷	内面	左端	
11	須恵	蓋	郷か	外面	右上寄り	
12	須恵	杯	郷	外面		
13	須恵	杯	郷	外口	左開く	
14	須恵	杯	郷	内底	中央左寄り	
15	須恵	杯	郷	内底	中央	
16	須恵	杯	郷	外底	中央左寄り	
17	須恵	杯	郷	外口	右開く	
18	須恵	杯	郷	外口	右開く	
19	須恵	杯	郷	外底	右端	
20	須恵	杯	郷	外底	右端	
21	須恵	杯	郷	内底	中央上寄り	
22	須恵	杯	郷	外口	左開く	
23	須恵	杯	郷	外口	左開く	
24	須恵	杯	郷	外口	右開く	
25	土師	杯	郷	内底	中央上方	
26	土師	杯	郷	内底	中央上寄り	
27	土師	杯	郷か	内底	中央上方	
28	土師	杯	郷	内底	左方上寄り	
29	土師	杯	郷	内底	中央左上方	
30	土師	杯	郷	内底	左上方	
31	土師	杯	郷	内底	中央上方	
32	土師	杯	郷	内底	中央右方	
33	土師	杯	郷	内底	中央上方	
34	土師	杯	郷	内底	中央寄りか	
35	土師	杯	郷	内底	上方左寄り	
36	土師	杯	郷	内底	中央左寄り	
37	土師	杯	郷	内底	左方上寄り	
38	土師	杯	郷	内底	中央上方	
39	土師	杯	郷	内底	上方左寄り	
40	土師	杯	郷	内底	上方	
41	土師	杯	郷	内底	左上方	
42	土師	杯	郷	内底	中央左寄り	
43	土師	杯	郷か	内底	中央上方	
44	土師	杯	郷か	内底	中央	
45	土師	杯	郷	内底	中央	
46	土師	杯	郷か	内底	中央左寄り	
47	土師	杯	郷か	内底	左方上寄り	
48	土師	杯	不明	内底	中央か	郷の可能性
49	土師	杯	郷	外底	上	
50	土師	杯	郷	外底	中央	
51	土師	杯	郷か	外底	中央左寄り	
52	土師	杯	不明	外底	中央	郷の可能性
53	土師	杯	郷	外底	中央上寄り	
54	土師	杯	郷か	外底	左上方か	53に同筆
55	土師	杯	郷か	外底	中央	
56	土師	杯	不明	外底	中央	郷の可能性
57	土師	杯	郷	外底	上方	
58	須恵	杯	厨	外底	上方	
59	須恵	杯	田人	外底	中央	
60	須恵	脚付盤	十か	脚部		
61	須恵	台付杯	十	外底	中央上寄り	
62	須恵	杯	十か	外底	中央下寄り	
63	須恵	杯	中	外底	中央上寄り	
64	須恵	杯	中	外底	中央右寄り	
65	須恵	杯	中	外底	中央	
66	須恵	杯	中	外底	中央上方	

No	器種	器形	积文	部位	位置	備考
67	須恵	杯	中	外底	中央左寄り	
68	土師	杯	中か	外底	中央	暗文あり
69	土師	杯	中	外底	中央	暗文あり
70	土師	杯	中	外底	中央	内外面墨書
			中	内底	中央	
71	土師	杯	中	内底	中央	
72	土師	杯	中か	内底	中央か	
73	土師	杯	中	外底	中央か	
74	土師	杯	中か	外底	中央か	
75	土師	杯	中□	外底	天地不明	二文字の可能性
76	土師	杯	中	外底	中央左寄り	
77	土師	杯	中	外底	中央	
78	土師	杯	中か	外底	上方	
79	土師	杯	中か	外底	左下	
80	土師	杯	大	内底	左端	内外面墨書
			大	内底	中央	
81	土師	杯	大	内底	左端	内外面墨書
			大	外底	中央	
82	土師	杯	大	内底	中央上方	
83	土師	杯	大	内底	中央	
84	土師	杯	大	内底	中央	
85	土師	杯	大	内底	左端	
86	土師	杯	大	内底	中央上寄り	内外面墨書
			不明	外底	中央	
87	土師	杯	大	内底	中央	
88	土師	杯	大	内底	中央	
89	土師	杯	大	内底	中央	
90	土師	杯	大	内底	中央左寄り	
91	土師	杯	大	内底	中央左寄り	
92	土師	杯	大	内底	左方	
93	土師	杯	大	内底	中央付近	
94	土師	杯	大	外底	中央	暗文あり
95	土師	杯	大	外底	中央付近	
96	土師	杯	大か	外底	中央付近	
97	土師	杯	大	外底	上方	
98	土師	杯	大か	外底	右方	
99	土師	杯	大	外底	中央	
100	土師	杯	大	外底		
101	土師	杯	大か	外底		
102	須恵	杯	舟か	内口	上開く	
103	須恵	台付皿	舟	内口	上開く	
104	須恵	杯	舟	外口	上開く	
105	須恵	杯	舟人	外口	上開く	
106	土師	杯	舟	外口	上開く	内外面墨書
			不明	内底	中央左上方	舟人の可能性
107	土師	杯	舟人	内底	中央上寄り	
108	土師	杯	舟か	内口	上開く?	
109	土師	杯	舟	内底	中央	
110	土師	杯	□人	内底	中央上寄り	□は舟の可能性
111	土師	杯	舟人か	外口	上開く	
112	土師	杯	舟	内口	上開く	
113	土師	杯	舟か	内口	上開く	
114	土師	杯	舟	外口	上開く	
115	土師	杯	□	外口		舟の可能性
116	土師	杯	舟□	内底	中央上寄り	舟人の可能性
117	土師	杯	舟□	内底	中央上寄り	舟人の可能性
118	土師	杯	□□	内底	中央	舟人の可能性
119	土師	杯	□□	内底	中央	舟人の可能性
120	土師	杯	舟人か	内底	中央左寄り	
121	土師	杯	舟人	内底	中央	もう一文字ある可能性
122	須恵	杯	子□	内底	右端	
123	須恵	杯	大椽	外底	左端	
124	須恵	杯	□	外口	不明	
125	須恵	杯	□	外底	上方	十または土の可能性
126	須恵	蓋	□	外面	縁部	郷の可能性



1 製作技法上特筆される土器

No	器種	器形	积文	部位	位置	備考
127	須恵	杯	□	外底	端部	内外面墨書
128	須恵	杯	□	内面	端部	二文字か
129	須恵	台付椀	□	内底	中央右端?	郷の可能性
130	須恵	杯	□	外口	天地不明	
131	須恵	杯	□	内口	天地不明	
132	須恵	杯	□	外口	天地不明	
133	須恵	杯	□	外口	天地不明	
134	須恵	杯	□	外口	天地不明	
135	須恵	杯	□	外底	上方	千の可能性
136	須恵	杯	□	内口	天地不明	
137	須恵	杯	□	内口	天地不明	
138	須恵	杯	得万	外口	右開く	
139	須恵	杯	□	外口	右開くか	
140	須恵	杯	□	外底	中央付近	郷の可能性
141	須恵	杯	□	外底	中央付近	
142	須恵	台付椀	□	内外口	天地不明	
143	須恵	杯	□	外口	天地不明	
144	土師	杯	□	内底	中央付近	积文不明 暗文
145	土師	杯	□	内底	縁部	
146	土師	杯	□	内底	中央付近	
147	土師	杯	□	内底	縁部	郷の可能性
148	土師	杯	□	内底	縁部	郷の可能性
149	土師	杯	□	内底	中央付近	
150	土師	杯	□	内底	中央付近	
151	土師	杯	□	内底	中央	山の可能性
152	土師	杯	□	内底	上方	
153	土師	杯	□	内底	縁部	
154	土師	杯	□	外底	上方	
155	土師	杯	□	外底	中央	
156	土師	杯	□	内底	縁部	
157	土師	杯	□	外底	中央付近	内外面墨書
158	土師	杯	□郷	内底		□は芳か
			□	外底		墨書か否か不明
159	土師	杯	□	内外底	中央付近	内外面墨書
160	土師	杯	□	内外底	縁部	内外面墨書
161	土師	杯	□	内底	中央付近	本か奉の可能性
			□	外底		同一文字の可能性
162	土師	杯	□	外底	中央付近	
			□	内底		墨書か否か不明
163	土師	杯	□	内外底	縁部	内外面墨書
164	土師	杯	□	内外底	縁部	内外面墨書
165	土師	杯	□	内底	中央付近	
166	土師	杯	郷	内底	中央右寄り	
167	土師	杯	□	内底	中央付近	
168	土師	杯	□	内底	縁部	
169	土師	杯	□	内底	縁部	
170	土師	杯	□	内底	中央付近	
171	土師	杯	□	内底	中央付近	
172	土師	杯	□	内底	中央付近	
173	土師	杯	□	内底	中央付近	
174	土師	杯	郷か	内底	中央付近	
175	土師	杯	□	内底	中央付近	
176	土師	杯	□	内底	中央	
177	土師	杯	□	内底	中央付近	
178	土師	杯	□	内底	中央付近	
179	土師	杯	□	内底	中央付近	
180	土師	杯	□	内底	中央付近	
181	土師	杯	三	内底	中央左寄り	
182	土師	杯	□	内底	中央	文字か否か不明
183	土師	杯	□	内底	縁部	二文字の可能性
184	土師	杯	□	内底	中央付近	
185	土師	杯	□	内底	縁部	
186	土師	杯	□	内底	中央付近	
187	土師	杯	□	内底	中央付近	
188	土師	杯	□	内底	中央付近	大の可能性
189	土師	杯	□	内底	中央付近	

No	器種	器形	积文	部位	位置	備考
190	土師	杯	□	内底	中央付近	
191	土師	杯	□	内底	中央付近	大の可能性
192	土師	杯	□	内底	左端	大の可能性
193	土師	杯	□	内底	縁部	
194	土師	杯	□	内底	中央付近	墨書か否か不明
195	土師	杯	□	内底	中央付近	
196	土師	杯	□	内底	中央付近	
197	土師	杯	□	内底	中央付近	
198	土師	杯	□	内底	中央付近	
199	土師	杯	□	内底	中央付近	
200	土師	杯	□	内底	中央付近	
201	土師	杯	□	内底	縁部	
202	土師	杯	□	内底	中央付近	
203	土師	杯	□	内底	中央付近	
204	土師	杯	□	内底	中央付近	墨書か否か不明
205	土師	杯	□	外口	天地不明	
206	土師	杯	□	外底	縁部	
207	土師	杯	□	外口	天地不明	
208	土師	杯	□	外底	縁部	
209	土師	杯	□	外底	縁部	
210	土師	杯	□	外底	縁部	
211	土師	杯	□	外口	天地不明	
212	土師	杯	□	外口	天地不明	
213	土師	杯	□	外底	縁部	
214	土師	杯	□	外底	縁部	
215	土師	杯	□	外底	左縁	全の可能性
216	土師	杯	□	外底		
217	土師	杯	□	外底	縁部	郷の可能性
218	土師	杯	□	外底	縁部	
219	土師	杯	□	外底		
220	土師	杯	□	外底	縁部	
221	土師	杯	□	外底	中央付近	
222	土師	杯	□	外底	中央付近	
223	土師	杯	□	外底	中央付近	二文字の可能性
224	土師	杯	□	外底	縁部	
225	土師	杯	□	外底	中央付近	
226	土師	杯	□	外底	中央付近	二文字の可能性
227	土師	杯	□	外底	縁部	
228	土師	杯	□	外底	中央付近	
229	土師	杯	□	外底	中央付近	
230	土師	杯	□	外底		
231	土師	杯	□	外底		
232	土師	杯	□	外底	中央付近	大の可能性
233	土師	杯	□	外底	中央	
234	土師	杯	□	外底	中央付近	
235	土師	杯	□	外底		
236	土師	杯	□	外底		
237	土師	杯	墨痕	外底	縁部	文字にならない

「芳郷」は3点でいずれも須恵器杯の内底に書かれている。この杯はいずれも外底全面に丁寧なヘラ削り(おそらく回転利用)を施しており土器のシルエットも類似する一群であり、同一時期のもの(8世紀前半)である。墨書の書体も似ている。しかし、胎土や色調はわずかに異なり、同一産地、同巧の土器であるかは確定できない。この他に「芳郷」となる可能性のある土師器杯(□郷 158)があるが、やはり内底への墨書である。

土師器杯には「芳」と思われる墨書の小破片が4点出土している。3点は外底、1点が内底に記されているが、いずれも釈文は明確でない。

「厨」は1点のみの出土で、この土器も「芳郷」同様に外底全面にヘラ削りを施した須恵器杯であるが、墨書は外底に書かれている。1993年に当事業団で調査した前橋市元総社寺田遺跡で「厨」「国厨」などの墨書土器が出土している。元総社寺田遺跡は上野国府域内にある。

「大掾」も1点のみである。掾は国の四等官の名称の1つであるが、群馬県内の類例は二之宮洗橋遺跡と同じ勢多郡内の上西原遺跡にある。国の役職名のつけられた墨書土器が、2点とも国衙を離れた郡域で出土したことになる。判官にあたる掾が大少の2つに別れるのは大国のみのことであり、上野国内での出土は矛盾しない。

#### ◎墨書の位置について

墨書の記される位置についても、文字によって傾向のあることが看取できる。「大」と「中」はすべて底部にのみ見られる墨書である。特に「中」は外底に記される場合が多い。「郷」も土師器ではすべて底部に記されており、ここでは内底の例が多い。「舟人」「舟」も規則的で、釈文が明瞭なものは、底部に書かれる場合は内面、口縁部に書かれる場合は開口部を上方としており、位置だけでなく文字の方向にも例外がない。

文字の位置では19・104のように黒斑部分をさけて書くのが一般であるが、103のように、灰色の外面でなく、あえて黒ずんだ内面縁部に記す例もある。こ

れより、この土器が托として使用されていたと推定したが、次に述べるように内面への制約があったことも考えられる。

#### ◎まとめ

皿のような口縁が外側に直線的に伸びる器形を除けば、内面へ墨書することは外面に比べ難しく、墨書位置に指示があったと推定できる。「芳郷」の墨書が内底にしか見られないのは、須恵器杯を重ねて発送する際、送り主または宛て先を再上段の土器内底に墨書して区分けしたと想定できないだろうか。瓦に送り主の郷名を刻印する例は佐波郡境町の十三宝塚遺跡など群馬県内にもあるが、この場合、目的地の寺院では数種類の郷名が混在することになる。本遺跡では宛て先を記された土器と考えることが妥当であろう。同様に「舟人」「舟」が土師器杯の底部に墨書される例が全て内面であることも、発送・仕分けに関連する際の便宜と想定してみよう。「舟人」「舟」が人名であれば、個人宛に大量の土器を発送したことになる。ただ、この文字例の場合は土師器であるという相違点の他に、口縁部への墨書も多く、外底が不整で墨書しにくい土器で、年代もやや新しいものであり、「芳郷」の須恵器と同一には扱えない。

なを、里制が霊亀元年(715年)に郷に改名されたことより、「郷」と墨書された土器の年代上限を確定する資料としても重要であろう。

### 3 「芳賀」について

本遺跡出土の「芳郷」については、和名類聚抄(以下和名抄と訳す)によれば上野国内に「芳」の字のつく郷名は勢多郡芳賀郷しか存在しない。遺跡のある前橋市二之宮地区は勢多郡内にあると考えられており「芳郷」墨書が芳賀郷を示すこと、遺跡が芳賀郷内にあることを推測するのに有力な資料を提出したものと考えている。

ただこれまで、この郷の所在を推定する資料はなく、旧郷名から推定して付けられた前橋市芳賀町は、遺跡から北西約8キロ離れた地にある。

「和名抄」に記載されている芳賀の地名は全国で5

カ所みられる。上野国勢多郡芳賀郷のほか、下野国芳賀郡芳賀郷・常陸国那賀郡芳賀郷・陸奥国安積郡芳賀郷・出羽（羽前）国最上郡芳賀郷で、北関東以北に限られている。吉田東伍は「大日本地名辞典」の中で、下野で芳賀の地名由来を「はか=墓」とし、出羽などで「墓」もしくは上野や下野からの移入者のつけた郷名の可能性を指摘している。二之宮洗橋遺跡周辺でも6世紀の三二子古墳に代表されるように、古墳の多い地域であり、この可能性は同様で興味深い指摘である。ただし、上野国のように古墳の密集する国内で、この一地区だけを「墓」と呼ぶには、解決しなくてはならない問題点が多い。

#### 4 遺跡の性格について

二之宮洗橋遺跡の遺構の特異点は、1カ所に4回建て替えられた掘立柱建物と膨大な量の遺物を出土した流路跡の窪地、遺物では多量の墨書土器・円面硯・漆付着の土器があげられる。

本遺跡から出土した墨書土器は集落の規模と比べて極めて多い。そして北側に隣接する荒砥洗橋遺跡の「大郷長」以外、東側に隣接する二之宮千足遺跡、西側に隣接する二之宮谷地遺跡などの墨書と全く異なった文字である。流路跡の一画に集中して廃棄された土器群であり、これらを使用した特殊な遺構が付近に存在したはずである。特殊な遺構には掘立柱建物があてられよう。「郷」の墨書からは郷に関連した施設が想定される。この土器は、須恵器では底部に調整を加えるものに限られ、土師器も8世紀代が中心となる。郷に関連した建物として郷倉が想定される。本遺跡の建物は倉庫とは異なるうえ、郷倉の設置される平安時代初頭との間に齟齬が生じる。また、百姓の中から選ばれ、官人の列にも加われない郷長の職に、このような多量の土器が支給されたのであろうか。「舟人」「舟」の文字が人名を表すなら、郷内の職務につく個人がこのように多量の土器を必要としたのだろうか。

このような状況は、むしろ、郡規模の内容と思われる。今井道上道下遺跡の堀で囲まれた9世紀代の

方一丁と推定される区画、二之宮谷地遺跡の瓦塔などの出土品からも、郡衙・郡寺のような施設が存在が想定でき、二之宮洗橋遺跡はこれに関連する先行施設の一部と考えることもできる。勢多郡衙は前述の上西原遺跡周辺も有力な候補地であるが、二之宮洗橋遺跡周辺の状況も劣らない内容がある。両者とも年代を違えて存在した勢多郡衙関連の遺跡と推定しても、齟齬は生じないのではなかろうか。圧倒的な量の「郷」の墨書であり、これを「芳賀郷」と推定できるが、郷単独の施設と限定して本遺跡を位置付けなくてもよいと考える。

古代の郷の実態は文献面からも考古学的にも不明瞭な部分が多い。二之宮洗橋遺跡は「和名抄」に記載された勢多郡芳賀郷の一画と推定できたが、また、ここでは一時期、漆製品の製作あるいは修理にも携わっていた。

#### 参考文献

- 池邊 彌 「和名類聚抄郷名考證」  
吉田東伍 「増補 大日本地名辞書」第六巻・第七巻

## 報告書抄録

フリガナ	ニノミヤ アライバシ イセキ
書名	二之宮洗橋遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第166集
編著者名	飯田 陽一
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	西暦1994年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ニノミヤ アライバシ 二之宮洗橋	マエバシシ ニノミヤマチ 前橋市二之宮町	10201		362145	1390945	19861104—	1,700	道路建設
		—6				1225		
						19870402—	9,300	
						1130		

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
居住	古墳後期 ～平安	竪穴住居	12 墨書土器 漆付着の土器	墨書土器積文には 「芳郷」「厨」「舟」 「舟人」「大」「中」 「得万」等あり
		掘立柱建物	3 円面硯 土製置き竈	
		溝	8 曲物底板・杭等の木製品	
		土坑	12 砥石	
		土器集積の窪地		
生産	平安	水田	2	
その他	縄文	土坑	1	
	江戸	溝	2	



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第166集

二之宮洗橋遺跡《本文編》

一般国道17号(上武道路)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月15日 印刷

平成6年3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橘村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社